

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

現在、県内においては、山陰自動車道の整備が着々と進められているところではありますが、当センターは、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

そのうち、琴浦町にある南原千軒遺跡では、平安時代後期の鍛冶工房など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年1月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取 島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道9号（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成17年度は、「梅田萱峯遺跡」、「笹津乳母ヶ谷第2遺跡」、「南原千軒遺跡」の3遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「南原千軒遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成19年1月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫




例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成17年度に行った南原千軒遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。なお、平成16年度に財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが実施した調査を第1次調査とする。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地および調査面積は以下の通りである。
南原千軒遺跡：東伯郡琴浦町大字光字大加布毛63ほか（3区） 調査面積1,100m²
3. 本報告書で示す標高は、2級基準点H10 - 2 - 8（X：- 54339.6299、Y：- 64737.1473）、3級基準点H10 - 3 - 12（X：- 54292.8911、Y：- 64996.5283）を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第 系（注）の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」を使用した。
5. 本報告にあたり、出土石製品の石材鑑定を赤木 三郎氏に、鍛冶関連遺構の調査指導および出土鉄滓・鉄製品の整理指導をたたら研究会 穴澤 義功氏に依頼した。また、SD 7・8の花粉分析について奈良教育大学金原 正明氏に玉稿を賜った。明記して深謝いたします。
6. 本報告にあたり 調査前・調査後航空写真撮影、基準点測量、鉄関連遺物の金属学的学析を業者委託した。
7. 本報告書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、埋蔵文化財センターおよび東伯調査事務所で行い、調査担当者が作成したものを整理作業員が浄書した。なお、一部の石器の実測・浄書を業者に委託した。
8. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当者が撮影した。
9. 本報告書の執筆は湯村 功、小口 英一郎が分担し、目次に文責を記した。
10. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 現地調査および報告書作成にあたっては、下記の方々・機関に御指導・御協力いただいた。記して深謝します。（敬称略）
赤木 三郎、穴澤 義功、大澤 正己、角田 徳幸、金原 正明、君嶋 俊行、佐伯 純也、東山 信治、古谷 渉、松之舎文雄、琴浦町教育委員会

凡 例

1. 遺物の註記における遺跡名には「ナンハラ」を略号として用いた。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SD：溝 SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 P：柱穴・ピット
3. 本報告書で用いた遺物の略号は以下の通りである。
S：石器、丸数字：鉄製品・鉄関連遺物（第111～123図 鉄関連遺物構成 に対応）
記号のないものは土器・土製品・陶磁器
4. 遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下の通りである。
竪穴住居跡・掘立柱建物跡：1/60 土坑：1/20、1/40、柱穴・ピット：1/20
溝：1/80、1/100
土器：1/4、1/6 石器・石製品：2/3、1/2、1/4
鉄製品・鉄滓：1/4
5. 遺構図・遺物図にもちいたスクリーントーンおよび記号は、特に説明がない限り以下の通りである。また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のは白抜きで示した。

 地山  貼床・被熱範囲  焼土面  炭化物層  磨面・砥面・赤色顔料付着範囲

S：石器・石製品 ：土器 ：石器・石製品 ：鉄滓・鉄製品

6. 遺物観察表は出土遺構・層位ごとに掲載した。表については以下の通りである。

法量記載における  は推定復元値，  は現存値を示す。

鍛冶関連遺物の法量は最大長、最大幅、最大厚を計測した。計測値は、鉄滓・鉄塊系遺物・羽口の場合、正位置の図の左右の長さ、上下を幅、横方向に展開したときの左右（縦方向に展開したときの上下）を厚さとし、鉄製品については錆部分を除いた長軸長を長さ、短軸長を幅としている。なお、本文・観察表の記述における遺物の各面の呼び方は右頁の凡例図のとおりである。

磁着度は鉄滓分類用の「標準磁石」(TOKINフェライト磁石SR-3 寸法30×17×5mm)を用いて資料との反応を、6mmを1単位として数字で表現したもので、数値が大きいほど磁着度が強い。

メタル度は小型金属探知機(TAJIMA PUP-M)によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、基準感度は次のとおりである。なお、対象物中に、かつて金属鉄が内包されていた資料で錆化してしまったものは、錆化()と表示する。

H()：Hは最高感度で小さな金属鉄(1～2.5mm)が残留することを示す。

M()：Mは標準感度でHの倍以上の大きさの金属鉄(4～5mm)が残留することを示す。

L()：Lは低感度でMの倍以上の金属鉄(10～12mm)が残留することを示す。

特L()：特Lは低感度でLの倍以上の大きな金属鉄(20mm以上)が残留することを示す。

なし：元から金属鉄が無かったもの。

椀形鍛冶滓の分類は以下の通りである。

特大：2000 g 以下

大：1000 g 以下

中：500 g 以下

小：250 g 以下

極小：125 g 以下

穴澤 義功 2005 「() 鉄関連遺物の発掘調査から遺物整理・分析資料抽出への指針案」

天辰正義・穴澤義功・平井昭司・藤尾慎一郎編『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』

日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史 その技術と文化」フォーラム

鉄関連遺物の分析評価研究グループ

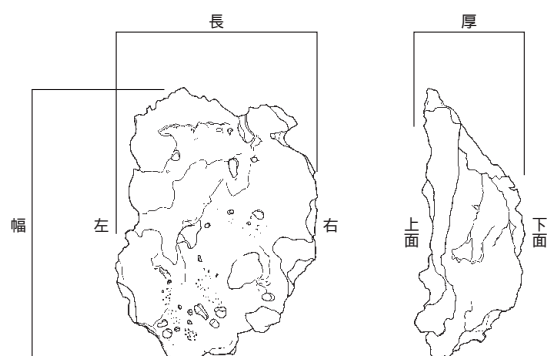
7. 本報告における遺構・遺物の年代観は以下の文献を参照とした。

清水 真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄 編
木耳社

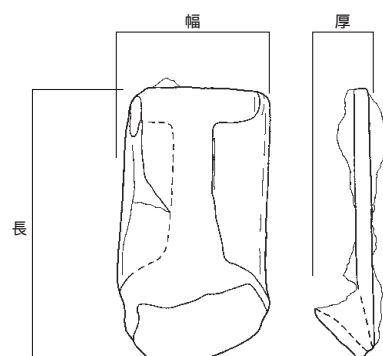
巽 淳一郎 1979 「2 土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会

玉木 秀幸 2006 「伯耆の土器様相」『第5回 山陰中世土器検討会資料集 山陰における中世前期の諸
様相 伯耆・出雲を中心として』

中森 祥 2006 「中世前期の遺物について」『鳥取県教育文化財団調査報告書105 門前上屋敷遺跡』
財団法人鳥取県教育文化財団



鉄滓・鉄塊系遺物例



鉄製品例

製鉄・鍛冶関連遺物の計測値は、炉壁・鉄滓・鉄塊系遺物の場合、正位置の図の左右を長さ、上下を幅、横方向に開したときの左右(縦方向に展開したときの上下)を厚とし、鉄製品については鑄部分を除いた長軸長を長さ、軸長を幅としている。なお、本文・観察表の記述における遺物の各面の呼び方は左の凡例図のとおりである。

目 次

序
序文
例言
凡例

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯.....(湯村)	1
第2節 調査の経過と方法.....(湯村)	2
第3節 調査体制.....(湯村)	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境.....(湯村)	5
第2節 歴史的環境.....(湯村・浅田)	5

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の立地と層序.....(湯村)	11
第2節 縄文時代の調査成果.....(小口)	13
第3節 弥生時代の調査成果.....	14
(1) 概要.....(湯村)	14
(2) 溝.....(湯村)	14
(3) 土坑.....(湯村)	31
(4) 遺構外出土遺物.....(湯村)	42
第4節 古墳時代の調査成果.....	47
(1) 概要.....(湯村)	47
(2) 竪穴住居跡.....(湯村)	48
(3) 溝.....(湯村)	49
(4) 土坑.....(湯村)	50
(5) 遺構外出土遺物.....(湯村)	51
第5節 古代・中世の調査成果.....	53
(1) 概要.....(小口)	53
(2) 掘立柱建物跡.....(小口)	53
(3) 溝.....(小口)	54
(4) 土坑.....(湯村・小口)	72
(5) 遺構外出土遺物.....(小口)	81
第6節 時期不明遺構の調査成果.....	81
(1) 概要.....(湯村)	81
(2) 土坑.....(湯村)	81
第7節 鍛冶関連遺構の調査成果.....	88
(1) 概要.....(小口)	88
(2) 調査の経過と方法.....(小口)	88
(3) 鍛冶炉.....(小口)	89
(4) 鍛冶関連ピット.....(小口)	91
(5) 土坑.....(小口)	98
(6) 鍛冶関連遺物.....(小口)	105
第8節 鍛冶関連遺物分析資料の考古学的観察.....(小口)	133

第4章 自然科学分析の成果

第1節 南原千軒遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査...(文化財調査コンサルタント株式会社)	150
第2節 南原千軒遺跡における環境考古学分析.....(奈良教育大学 金原 正明)	207

第5章 総 括

第1節 時代別に見た南原千軒遺跡の様相.....(湯村・小口)	220
第2節 南原千軒遺跡における鉄・鉄器生産の様相.....(小口)	222

挿図目次

第1図	東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図	1	第60図	S D 1	62
第2図	調査地位置図	3	第61図	S D 1 出土遺物	62
第3図	遺跡位置図	5	第62図	S D 2	64
第4図	琴浦町の主要遺跡分布図	7	第63図	S D 2 出土遺物	65
第5図	南原千軒遺跡3区遺構配置図	10	第64図	S D 8	66
第6図	調査区周辺の小字名	11	第65図	S D 8 土層断面図	67
第7図	調査区南壁土層断面図	12	第66図	S D 8 出土遺物(1)	68
第8図	遺構外出土遺物	13	第67図	S D 8 出土遺物(2)	69
第9図	弥生時代遺構配置図	14	第68図	S D 10	71
第10図	S D 3	15	第69図	S D 10 出土遺物	71
第11図	S D 3 出土遺物(1)	15	第70図	S D 11	72
第12図	S D 3 出土遺物(2)	16	第71図	S D 11 出土遺物	73
第13図	S D 4	17	第72図	S K 1・2	74
第14図	S D 4 出土遺物(1)	17	第73図	S K 1 出土遺物	74
第15図	S D 4 出土遺物(2)	18	第74図	S K 3	75
第16図	S D 5・6	19	第75図	S K 3 出土遺物	75
第17図	S D 5 出土遺物(1)	20	第76図	S K 4	76
第18図	S D 5 出土遺物(2)	21	第77図	S K 4 出土遺物	76
第19図	S D 5 出土遺物(3)	22	第78図	S K 13・16・17	77
第20図	S D 5 出土遺物(4)	23	第79図	S K 13 出土遺物	77
第21図	S D 6 出土遺物(1)	25	第80図	S K 18	78
第22図	S D 6 出土遺物(2)	26	第81図	S K 18 出土遺物(1)	79
第23図	S D 12	27	第82図	S K 18 出土遺物(2)	79
第24図	S D 13	27	第83図	遺構外出土遺物	80
第25図	S D 13 出土遺物	28	第84図	S K 6・7	82
第26図	S K 8	29	第85図	S K 6・7 出土遺物	82
第27図	S K 8 出土遺物	29	第86図	S K 10・19・20・22・23・24	83
第28図	S K 9	30	第87図	S K 15	84
第29図	S K 9 出土遺物	32	第88図	S K 28	85
第30図	S K 11	33	第89図	S K 28 出土遺物	85
第31図	S K 11 出土遺物	34	第90図	S K 25・26・29・30・31・32	86
第32図	S K 12	35	第91図	鍛冶関連遺構配置図	88
第33図	S K 12 出土遺物(1)	36	第92図	鍛冶炉1	89
第34図	S K 12 出土遺物(2)	37	第93図	鍛冶炉2	89
第35図	S K 27	38	第94図	鍛冶炉3	90
第36図	S K 27 出土遺物(1)	39	第95図	P 1	90
第37図	S K 27 出土遺物(2)	40	第96図	P 3	90
第38図	遺構外出土遺物(1)	42	第97図	P 4	91
第39図	遺構外出土遺物(2)	43	第98図	P 5	91
第40図	遺構外出土遺物(3)	44	第99図	P 7	92
第41図	古墳時代遺構配置図	47	第100図	P 8	92
第42図	S I 1	47	第101図	P 9	92
第43図	S I 1 出土遺物	47	第102図	P 10	93
第44図	S I 2	48	第103図	P 12	93
第45図	S I 2 出土遺物	49	第104図	P 13・14・15	93
第46図	S D 9	50	第105図	P 16・17・18・19・20・21	94
第47図	S D 9 出土遺物	50	第106図	P 22・23・24	95
第48図	S K 21	50	第107図	P 25・26・27・28・29・30・31・32	96
第49図	S K 21 出土遺物(1)	50	第108図	S K 5	97
第50図	S K 21 出土遺物(2)	51	第109図	S K 5 遺物出土状況(1)	98
第51図	遺構外出土遺物	52	第110図	S K 5 出土遺物(1)	98
第52図	古代・中世遺構配置図	53	第111図	S K 5 遺物出土状況(2)	99
第53図	S B 1	54	第112図	S K 5 出土遺物(2)	99
第54図	S D 7(折込み)	55・56	第113図	S K 14	101
第55図	S D 7 土層断面図	57	第114図	S K 14 出土遺物	103
第56図	S D 7 出土遺物(1)	58	第115図	S K 5・14 土壌サンプリングメッシュ 模式図	104
第57図	S D 7 出土遺物(2)	59	第116図	鉄関連遺物分類模式図	105
第58図	S D 7 出土遺物(3)	60	第117図	鉄関連遺物構成図(1)	106
第59図	S D 7 出土遺物(4)	61			

第118図	鉄関連遺物構成図(2)	107	第134図	出土鉄滓類の全鉄(T・Fe)量と造滓 成分量との関係図	167
第119図	鉄関連遺物構成図(3)	108	第135図	出土鉄滓類の全鉄(T・Fe)量とチタ ニア(TiO ₂)量との関係図	167
第120図	鉄関連遺物構成図(4)	109	第136図	椀形鍛冶滓の全鉄(T、Fe)量と造滓 成分量との関係図	168
第121図	鍛冶関連遺物(1)	111	第137図	椀形鍛冶滓の全鉄(T、Fe)量とチタ ニア(TiO ₂)量との関係図	168
第122図	鍛冶関連遺物(2)	112	第138図	南原千軒遺跡のSD8における花粉 ダイアグラム	212
第123図	鍛冶関連遺物(3)	113	第139図	南原千軒遺跡のSD7における主要 珪藻ダイアグラム	213
第124図	鍛冶関連遺物(4)	114	第140図	南原千軒遺跡のSD8における主要 珪藻ダイアグラム	214
第125図	鍛冶関連遺物(5)	115	第141図	南原千軒遺跡2・3区遺構全体図	221
第126図	鍛冶関連遺物(6)	116	第142図	鉄関連遺物の組成	225
第127図	鍛冶関連遺物(7)	117			
第128図	鍛冶関連遺物(8)	118			
第129図	鍛冶関連遺物(9)	119			
第130図	鍛冶関連遺物(10)	121			
第131図	鍛冶関連遺物(11)	122			
第132図	鍛冶関連遺物(12)	123			
第133図	鍛造剥片3層分離型模式図	166			

挿表目次

表1	東伯中山道路関係の調査一覧	2	表43	SK3出土土器観察表	75
表2	遺構外出土土器観察表	13	表44	SK4出土土器観察表	76
表3	SD3出土土器観察表	16	表45	SK4出土石器観察表	76
表4	SD3出土石器観察表	16	表46	SK13出土土器観察表	77
表5	SD4出土土器観察表	18	表47	SK18出土土器観察表	79
表6	SD4出土石器観察表	18	表48	SK18出土石器観察表	79
表7	SD5出土土器観察表	24	表49	遺構外出土土器観察表	80
表8	SD5出土石器観察表(1)	24	表50	SK6・7出土石器観察表	83
表9	SD5出土石器観察表(2)	25	表51	SK28出土土器観察表	85
表10	SD6出土土器観察表	25	表52	SK28出土石器観察表	85
表11	SD6出土石器観察表	26	表53	SK5鍛冶関連微細遺物地点別一覧表	100
表12	SD13出土土器観察表	28	表54	SK5出土土器観察表	100
表13	SD13出土石器観察表	28	表55	SK14鍛冶関連微細遺物地点別重量一覧表	102
表14	SK8出土土器観察表	30	表56	SK14出土土器観察表	103
表15	SK9出土土器観察表	33	表57	鍛冶関連遺物観察表(1)	124
表16	SK9出土石器観察表	33	表58	鍛冶関連遺物観察表(2)	125
表17	SK11出土土器観察表	34	表59	鍛冶関連遺物観察表(3)	126
表18	SK12出土土器観察表	37	表60	鍛冶関連遺物観察表(4)	127
表19	SK12出土石器観察表	37	表61	鍛冶関連遺物観察表(5)	128
表20	SK27出土土器観察表	41	表62	鍛冶関連遺物観察表(6)	129
表21	SK27出土石器観察表	41	表63	鍛冶関連遺物集計表	130
表22	遺構外出土土器観察表	45	表64	非掲載鉄関連遺物集計表	131
表23	遺構外出土石器観察表	45	表65	遺構別微細遺物集計表	132
表24	SI1出土遺物観察表	48	表66	鍛冶関連遺物分析資料一覧表	134
表25	SI2出土遺物観察表	49	表67	分析資料番号1	135
表26	SD9出土土器観察表	51	表68	分析資料番号2	135
表27	SD9出土石器観察表	51	表69	分析資料番号3	136
表28	SK21出土土器観察表	51	表70	分析資料番号4	136
表29	SK21出土石器観察表	51	表71	分析資料番号5	137
表30	遺構外出土土器観察表	52	表72	分析資料番号6	137
表31	SD7出土土器観察表	60	表73	分析資料番号7	138
表32	SD7出土石器観察表	61	表74	分析資料番号8	138
表33	SD1出土土器観察表	63	表75	分析資料番号9	139
表34	SD1出土石器観察表	63	表76	分析資料番号10	139
表35	SD2出土土器観察表	66	表77	分析資料番号11	140
表36	SD2出土石器観察表	66	表78	分析資料番号12	140
表37	SD8出土土器観察表	70	表79	分析資料番号13	141
表38	SD8出土石器観察表	70	表80	分析資料番号14	141
表39	SD10出土土器観察表	74	表81	分析資料番号15	142
表40	SD11出土土器観察表	74	表82	分析資料番号16	142
表41	SD11出土石器観察表	74	表83	分析資料番号17	143
表42	SK1出土石器観察表	74			

表84	分析資料番号18	143	表97	南原千軒遺跡3区鉄関連遺物の調査内容	169
表85	分析資料番号19	144	表98	鉄関連遺物調査試料の肉眼観察結果	170
表86	分析資料番号20	144	表99	ミクロ組織(顕微鏡観察)硬度(硬さ)測定による組織同定	171
表87	分析資料番号21	145	表100	鉄関連遺物調査結果のまとめ	172
表88	分析資料番号22	145	表101	鍛冶滓および鉄塊系遺物の鉍物相E P M A定量分析結果	173
表89	分析資料番号23	146	表102	鍛冶滓、羽口の化学分析結果	173
表90	分析資料番号24	146	表103	鉄塊系遺物の化学分析結果	173
表91	分析資料番号25	147	表104	南原千軒遺跡における花粉分析結果	215
表92	分析資料番号26	147	表105	南原千軒遺跡における珪藻分析結果	216
表93	分析資料番号27	148	表106	鍛冶関連遺物主要要素一覧表	226
表94	分析資料番号28	148			
表95	分析資料番号29	149			
表96	分析資料番号30	149			

文中写真目次

写真1	現地説明会	9	写真28	粒状滓(No.17 イ1、No.17 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	183
写真2	調査を終えて	9	写真29	粒状滓(No.17 イ2、No.17 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	184
写真3	S K 9 遺物出土状況	30	写真30	粒状滓(No.17 イ3、No.17 ロ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	184
写真4	環境考古学分析現地指導	61	写真31	鍛造剥片(No.3 イ1、No.3 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	185
写真5	S D 7 掘り下げ状況	61	写真32	鍛造剥片(No.3 イ2、No.3 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	185
写真6	S D 8 土層断面(東から)	70	写真33	鍛造剥片(No.3 イ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	186
写真7	S D 8 鍛冶関連遺物出土状況(北から)	70	写真34	鍛造剥片(No.5 イ1、No.5 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	186
写真8	鍛冶工房域土壌サンプリング実施状況	87	写真35	鍛造剥片(No.5 イ2、No.5 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	187
写真9	鍛冶関連遺物整理作業	105	写真36	鍛造剥片(No.5 イ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	187
写真10	鍛冶滓(No.1)の外観写真、ミクロ組織	174	写真37	鍛造剥片(No.18 イ1、No.18 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	188
写真11	鍛冶滓(No.6)の外観写真、ミクロ組織	174	写真38	鍛造剥片(No.18 イ2、No.18 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	188
写真12	鍛冶滓(No.7)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	175	写真39	鍛造剥片(No.18 イ3、No.18 ロ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	189
写真13	鍛冶滓(No.10)の外観写真、ミクロ組織	175	写真40	鍛造剥片(No.21 イ1、No.21 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	189
写真14	鍛冶滓(No.14)の外観写真、ミクロ組織	176	写真41	鍛造剥片(No.21 イ2、No.21 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	190
写真15	鍛冶滓(No.15)の外観写真、ミクロ組織	176	写真42	鍛造剥片(No.21 イ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	190
写真16	鍛冶滓(No.19)の外観写真、ミクロ組織	177	写真43	鉄製品(No.8)の外観写真、ミクロ組織	191
写真17	鍛冶滓(No.20)の外観写真、ミクロ組織	177	写真44	鉄製品(No.12)の外観写真、ミクロ組織	191
写真18	鍛冶滓(No.22)の外観写真、ミクロ組織	178	写真45	鉄製品(No.30)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	192
写真19	鍛冶滓(No.23)の外観写真、ミクロ組織	178	写真46	鉄塊系遺物(No.9)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	193
写真20	鍛冶滓(No.24)の外観写真、ミクロ組織	179	写真47	鉄塊系遺物(No.11)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	193
写真21	鍛冶滓(No.25)の外観写真、ミクロ組織	179	写真48	鉄塊系遺物(No.16)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	194
写真22	鍛冶滓(No.28)の外観写真、ミクロ組織	180	写真49	鉄塊系遺物(No.26)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	194
写真23	粒状滓(No.2 イ1、No.2 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	181	写真50	鉄塊系遺物(No.29)の外観写真、	
写真24	粒状滓(No.2 イ2、No.2 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	181			
写真25	粒状滓(No.4 イ1、No.4 ロ1)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	182			
写真26	粒状滓(No.4 イ2、No.4 ロ2)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	182			
写真27	粒状滓(No.4 イ3、No.4 ロ3)の外観写真、マクロ、ミクロ組織	183			

写真51	マクロ、ミクロ組織 羽口 (No.13) の外観写真、ミクロ組織	195	写真65	測定結果 鉄製品 (No.12) のミクロ組織と硬さ 測定結果	201
写真52	羽口 (No.27) の外観写真、ミクロ組織	196	写真66	鉄製品 (No. 8) のミクロ組織と硬さ 測定結果	202
写真53	鍛冶滓 (No. 1) のミクロ組織と硬さ 測定結果	196	写真67	鉄製品 (No.30) のミクロ組織と硬さ 測定結果	202
写真54	鍛冶滓 (No. 6) のミクロ組織と硬さ 測定結果	197	写真68	鉄塊系遺物 (No. 9) のミクロ組織と 硬さ測定結果	202
写真55	鍛冶滓 (No.10) のミクロ組織と硬さ 測定結果	197	写真69	鉄塊系遺物 (No.11) のミクロ組織と 硬さ測定結果	203
写真56	鍛冶滓 (No.14) のミクロ組織と硬さ 測定結果	197	写真70	鉄塊系遺物 (No.16) のミクロ組織と 硬さ測定結果	203
写真57	鍛冶滓 (No.15) のミクロ組織と硬さ 測定結果	198	写真71	鉄塊系遺物 (No.26) のミクロ組織と 硬さ測定結果	204
写真58	鍛冶滓 (No.19) のミクロ組織と硬さ 測定結果	198	写真72	鉄塊系遺物 (No.29) のミクロ組織と 硬さ測定結果	204
写真59	鍛冶滓 (No.20) のミクロ組織と硬さ 測定結果	199	写真73	椀形鍛冶滓 (No. 1) 鉍物相のE P M A 調査結果	204
写真60	鍛冶滓 (No.23) のミクロ組織と硬さ 測定結果	199	写真74	鉄塊系遺物 (No.16) 鉍物相のE P M A 調査結果	205
写真61	鍛冶滓 (No.22) のミクロ組織と硬さ 測定結果	199	写真75	椀形鍛冶滓 (No.22) 鉍物相のE P M A 調査結果	205
写真62	鍛冶滓 (No.24) のミクロ組織と硬さ 測定結果	200	写真76	鉄塊系遺物 (No.26) 鉍物相のE P M A 調査結果	206
写真63	鍛冶滓 (No.28) のミクロ組織と硬さ 測定結果	201	写真77	南原千軒遺跡の花粉・孢子	206
写真64	鍛冶滓 (No.25) のミクロ組織と硬さ	201	写真78	南原千軒遺跡の珪藻	217
			写真79	南原千軒遺跡の珪藻	218
					219

図版目次

巻頭図版 1	調査地遠景 (南東から) 調査地遠景 (北から)	P L . 8	S D 12 (南から) / S D 12土層断面 (南 から) / S D 13 (東から) / S D 13土 層断面 (西から)
巻頭図版 2	S K 5 鍛冶関連遺物出土状況 (北東から) 鍛冶炉 1 (南から)	P L . 9	S K 8 (北から) / S K 8 出土遺物 S K 9 (北から) / S K 9 遺物出土状 況 (西から)
巻頭図版 3	S K 5 鍛冶関連遺物	P L . 10	S K 9 遺物出土状況 (北から) S K 9 出土遺物 / S K 11 出土遺物 / S K 11 (西から)
巻頭図版 4	S D 7・8 (西から)	P L . 11	S K 11 遺物出土状況 (西から) S K 12 (北から) / S K 12 遺物出土状 況 (北から)
巻頭図版 5	S K 27 遺物出土状況 (北から) S K 27 出土土器	P L . 12	S K 12 碧玉出土状況 (東から)
巻頭図版 6	S D 5 遺物出土状況 (北から)	P L . 13	S K 12 出土遺物 (1) ~ (3) S K 27 (北から) / S K 27 遺物出土状 況 (南東から) / S K 27 遺物出土状況 (北 から)
P L . 1	遺跡周辺の地形 (西上空から) 完掘状況全景	P L . 14	S K 27 出土遺物 (1) ~ (3)
P L . 2	S D 3 (西から) / S D 3 遺物出土状 況 (西から)	P L . 15	S K 27 出土遺物 (4) ~ (9)
P L . 3	S D 4・5・6 検出状況 (北から) / S D 4 (北から)	P L . 16	S K 27 出土遺物 (10) ~ (11) / 磨製 石斧 / 敲石 / 柱状片刃石斧 / 石錘
P L . 4	S D 4 遺物出土状況 (北から) / S D 4 遺物出土状況 (西から) / S D 3 土 層断面 (東から)	P L . 17	縄文土器 / 遺構外出土遺物 (2)
P L . 5	S D 5 遺物出土状況 (北から) / S D 5 遺物出土状況 (北から) / S D 4 土 層断面 (南から)	P L . 18	石鍬
P L . 6	S D 5 土層断面 (南から) / S D 6 遺 物出土状況 (北から) / S D 6 (北から) / S D 6 遺物出土状況 (北から)	P L . 19	管玉製作関連資料
P L . 7	S D 4 出土遺物 (1) ~ (3) / S D 5 出土遺物 / S D 6 出土遺物 / 遺構外 出土遺物 (1)	P L . 20	小型剥片石器
P L . 8	S D 3・9・10・11・13 出土遺物 / S D 4・ 6 出土遺物	P L . 21	S I 1 (北から) / S I 1 遺物出土状 況 (北から) / S I 2 (東から)
P L . 9	S D 6 出土遺物	P L . 22	S I 1・2 出土遺物 / S I 2 出土遺物 (1)・(2) S K 21 (東から) / S K 21 遺物出土状 況 (北から)

P L . 23	S K 21出土遺物(砥石) / 砥石 / 遺構外出土遺物(3)	P L . 42	13・18出土遺物 遺構外出土遺物(5) / S B 1(北から) / 石皿(S 123) / 中世土師器
P L . 24	S D 7検出状況(西から) / S D 7(西から)	P L . 43	S K 5遺物出土状況(1)(南から)(2)(北東から)
P L . 25	S D 7土層断面(1)・(2)(東から・西から) / S D 7(東から)	P L . 44	S K 5遺物出土状況(3)(北東から) / S K 5土層断面(北西から) / S K 5土層断面(北東から) / S K 5土層断面(南東から) / S K 5土層断面(南西から) / S K 5(南から) / S K 5出土遺物(2) / 赤色顔料付着石器
P L . 26	S D 7遺物出土状況(1)・(2)(東から) / S D 7土師器(123)出土状況(北東から) / S D 7須恵器(136)出土状況(南から) / S D 7鉄床石(84)出土状況(南から) / S D 7礫出土状況(北から) / S D 7・8(西から)	P L . 45	S K 14遺物出土状況(東から) / S K 14土層断面(東から) / S K 14土層断面(南から) / S K 14(東から)
P L . 27	S D 7出土遺物(1)~(8)	P L . 46	S K 14出土遺物 / 白磁
P L . 28	S D 1(北から) / S D 1土層断面(北から) / S D 2(北から) / S D 2土層断面(北から) / S D 2遺物出土状況(北から)	P L . 47	鍛冶関連遺構全景(東から)
P L . 29	S D 1・2出土遺物 / S D 8上面礫出土状況(西から) / S D 8遺物出土状況	P L . 48	鍛冶炉1・P 1・2(東から) / 鍛冶炉1(南から) / P 1・鍛冶炉1土層断面(南から) / 鍛冶炉1土層断面(南から) / 鍛冶炉2(南から) / 鍛冶炉2土層断面(南から) / 鍛冶炉3(南から)
P L . 30	S D 8(西から) / S D 8土師器(157)出土状況(南東から) / S D 8軽石製品(S 134)出土状況(南西から) / S D 8鉄関連遺物出土状況(西から)	P L . 49	鍛冶炉3土層断面(南から) / P 1鉄製品出土状況(南から) / P 3鉄滓出土状況(南から) / P 5(南から) / P 5鉄滓・鉄床石破片出土状況(南から) / P 7鉄滓出土状況(南から) / P 9(南から) / P 9鉄床石破片出土状況(南から)
P L . 31	S D 8土層断面(1)・(2)(東から)	P L . 50	P 10(南から) / P 10鉄滓出土状況(南から) / P 12(南から) / P 13(南から) / P 14(南から) / P 15(南から) / P 16(南から) / P 21鉄床石破片出土状況(南から)
P L . 32	S D 8出土遺物(1)~(3)	P L . 51	鉄製品
P L . 33	S D 8出土遺物(4) / S D 9(北西から) / S D 9土層断面(南東から) / S D 10(北から) / S D 10土層断面(北から) / S D 11(北から)	P L . 52	鉄製品X線写真(1) / 鉄製品X線写真(2)
P L . 34	S D 11遺物出土状況(北から) / S D 11土層断面(南から) / S D 11石鍬出土状況(東から) / S K 1(南から) / S K 2(南から) / S K 3遺物出土状況(北から)	P L . 53	鉄滓(1)
P L . 35	S K 4遺物出土状況(北東から) / S K 6(東から) / S K 6土層断面(東から) / S K 7土層断面(南東から) / S K 7土層断面(東から) / S K 1出土遺物(砥石) / S K 4出土遺物	P L . 54	鉄滓X線写真(1) / 鉄滓X線写真(2)
P L . 36	S K 10(東から) / S K 10土層断面(東から) / S K 13(西から) / S K 13土層断面(南東から)	P L . 55	鉄滓(2)
P L . 37	S K 15(西から) / S K 16(北西から) / S K 16土層断面(南西から) / S K 17(東から) / S K 17土層断面(東から)	P L . 56	鉄滓X線写真(3) / 鉄滓X線写真(4)
P L . 38	S K 18(東から) / S K 18土層断面(1)(北西から)・(2)(北から)・(3)(南から)	P L . 57	鉄滓(3)
P L . 39	S K 18礫出土状況(南東から) / S K 19(西から) / S K 20(西から) / S K 22(東から) / S K 23(西から) / S K 24(東から) / S K 25(北東から) / S K 26(南東から)	P L . 58	鉄滓X線写真(5) / 鉄滓X線写真(6)
P L . 40	S K 28(北西から) / S K 29(東から) / S K 30(南から) / S K 31土層断面(南から) / S K 31(南東から) / S K 32(東から) / 遺構外出土遺物(3)・(4)	P L . 59	鉄滓(4)
P L . 41	S K 3・5・21・28出土遺物 / S K	P L . 60	鉄滓X線写真(7) / 鉄滓X線写真(8)
		P L . 61	鉄滓(5)
		P L . 62	鉄滓X線写真(9) / 鉄滓X線写真(10)
		P L . 63	羽口 / 砥石
		P L . 64	鉄床石(1) / 鉄床石(2)
		P L . 65	石鍬・被熱石 / S D 7出土鉄床石
		P L . 66	S D 8出土砥石・鉄床石 / 滓付着礫
		P L . 67	S K 5出土鍛冶具 / S K 14出土鉄床石 / P 1出土鍛造剥片
		P L . 68	椀形鍛冶滓(No. 1) 鋳物相の特性X線像
		P L . 69	鉄塊系遺物(No.16) 鋳物相の特性X線像
		P L . 70	椀形鍛冶滓(No.22) 鋳物相の特性X線像
		P L . 71	鍛冶滓(No.26) 鋳物相の特性X線像

第1章 調査の経緯

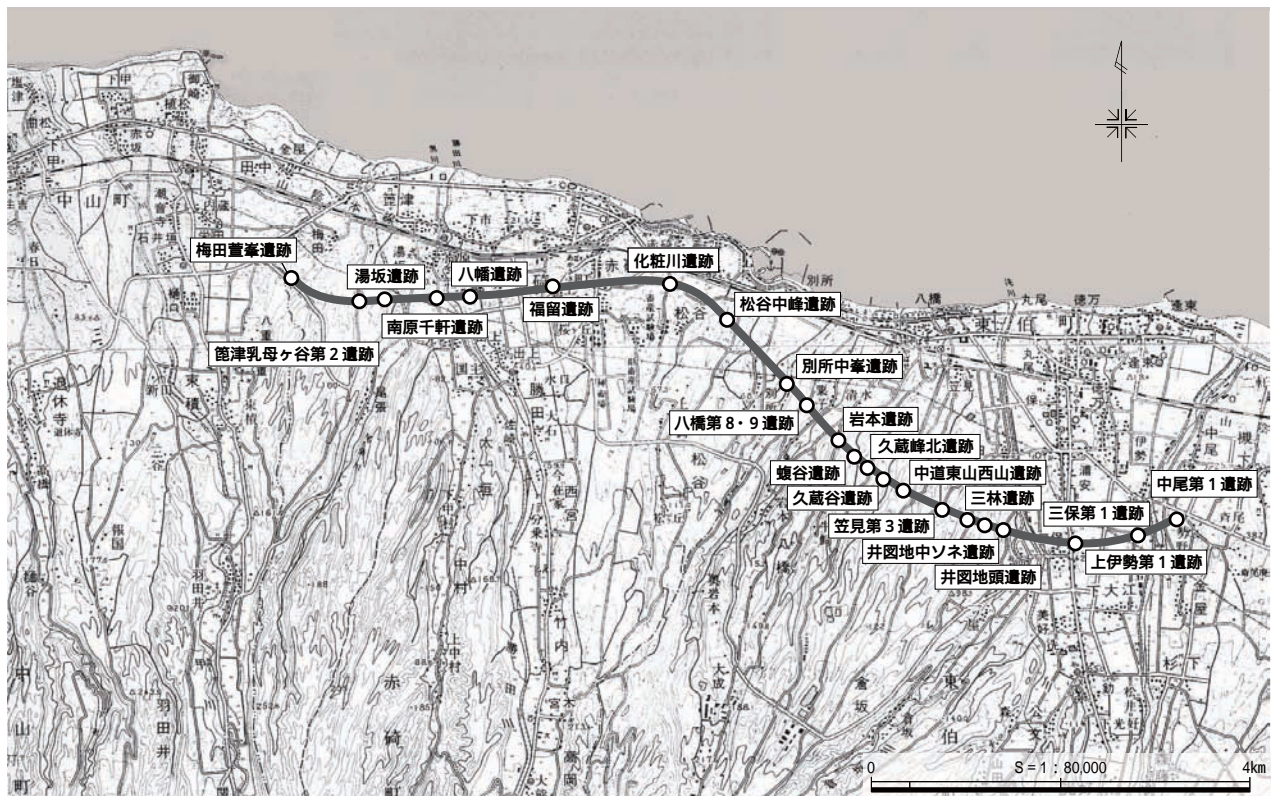
第1節 調査に至る経緯

山陰地方を東西に貫く国道9号線は、交通混雑の緩和を図ることに加え、将来の国土幹線道路としての役割を果たすべく、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画され、一部供用開始された区間もある。

このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、平成11年度からの地元教育委員会による試掘調査を経て、平成14年度から本格的な発掘調査が行われている。遺跡数は24箇所におよび、その延べ面積は平成17年度末現在で約180,000m²となっている（第1図、表1）。

南原千軒遺跡に関しては、周知の遺跡として登録されているもので、平成15年度に試掘調査が行われた（註1）。遺跡の現況は畑地であるが、地表面に土器片や石器の散布が認められ、試掘調査でも溝状遺構や土坑が確認されたほか、弥生土器、須恵器、中世土師器等が出土し、遺跡の存在は明らかであった。また、鉄滓の存在から、「周辺に鉄に関わる遺構がある可能性」が指摘されており、平成16年度から行われた発掘調査により明らかとなった中世鉄生産遺跡としての性格が、試掘調査の段階で予測されていた。

この結果を受けて、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成16年度は財団法人鳥取県教育文化財団が、平成17年度に鳥取県埋蔵文化財センターがそれぞれ発掘調査を行った。以下、平成16年度調査を第1次、平成17年度調査を第2次調査と呼称する。第2次調査面積は1,100m²である。



第1図 東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図

表1 東伯中山道路関係の調査一覧

調査年度	遺跡名	所在地	調査面積
平成14年度	井図地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	6,000㎡
	井図地中ソネ遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字井図地中ソネ	12,000㎡
	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	16,206㎡
笠見3号墳	東伯郡琴浦町大字田越字岩屋峯		
平成15年度	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	6,900㎡
	八橋第8・9遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字西二本松	11,732㎡
	井図地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	288㎡
	三林遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字新三林	8,408㎡
	久蔵峰北遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字龍王頭	11,831㎡
	蝮谷遺跡	東伯郡琴浦町字蝮谷	3,705㎡
	岩本遺跡	東伯郡琴浦町字岩本	458㎡
	中尾第1遺跡	東伯郡琴浦町大字中尾字荒木田ほか	28,696㎡
	別所中峯遺跡	東伯郡琴浦町大字別所字中峯	3,175㎡
	松谷中峰遺跡	東伯郡琴浦町大字松谷字中峰	7,473㎡
	平成16年度	上伊勢第1遺跡	東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山
三保第1遺跡		東伯郡琴浦町大字三保字一本木	1,071㎡
久蔵谷遺跡		東伯郡琴浦町大字笠見字加杖阪	3,245㎡
化粧川遺跡		東伯郡琴浦町大字赤碕字小谷堤ノ上	6,672㎡
八幡遺跡		東伯郡琴浦町大字八幡字八幡ノ後口ほか	11,929㎡
南原千軒遺跡		東伯郡琴浦町大字光字壱本松ほか	2,917㎡
中道東山西山遺跡		東伯郡琴浦町大字笠見字中道東山上	13,244㎡
福留遺跡		東伯郡琴浦町大字赤碕字畑ノ東	4,030㎡
湯坂遺跡		東伯郡琴浦町大字湯坂字ヒイガ谷東平	4,895㎡
平成17年度		梅田萱峯遺跡	東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯
	笹津乳母ヶ谷第2遺跡	東伯郡琴浦町大字笹津字赤坂谷平ほか	4,500㎡
	南原千軒遺跡	東伯郡琴浦町大字光字大加布毛ほか	1,500㎡
	計		184,748㎡

第2節 調査の経過と方法

(1) 調査区の名称と調査方法

南原千軒遺跡の調査対象地は東西に長い長方形であり、このうち未用買地を除いた部分(1区・2区)については平成16年度に発掘調査が終了している(第2図、註2)。平成17年度調査地は未用買であった部分で、ここを3区と命名した。

平成16年度の調査結果から、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明していたが、遺構の埋土と地山が非常に似通った黒褐色土であることなど、困難な調査になるであろうことが予想された。

遺跡を覆う表土は重機により除去し、遺構や遺物包含層などの掘り下げは人力で行った。調査により生じた排土は前年度調査地である北側隣接地に仮置きした。

調査はグリッド法により行い、基準杭を公共座標第1系に基づき10m間隔で設定した。平成16年度同様、基準杭には南北軸にアルファベットを北から、東西軸には算用数字を東からそれぞれ付し、「A1杭」のように呼称した。また、これらの杭によって10m四方に区画された地区は、その北東隅の杭をもって区画名とした。

検出した遺構や遺物は、原則として光波トランシットにより記録した。出土遺物は時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。調査地での写真撮影は35mm判と6×7判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラにより補足した。

(2) 調査の経過

平成17年6月17日に表土剥ぎにかかる重機の賃貸借契約を締結し、調査を開始した。6月21日から24日にかけて表土剥ぎを行い、7月4日から5日に委託業者による現地での基準点測量及び方眼測量を行った。年度当初から調査を行った梅田萱峯遺跡3区の調査員と作業員が南原千軒遺跡の調査にあ

たることとなり、休憩テントの設置など周辺整備を行った後、7月6日から本格的な遺構検出作業に入った。

調査前に予想していたとおり、埋土の見極めが難しく遺構の検出には困難が伴った。そのため平面的に検出した後、サブトレンチを多く設定して遺構の広がりを確認する必要があった。また平成16年度に検出されていた深さ2mもの平安時代の区画溝の続きが、およそ50mの延長で調査区を横断しており、掘り下げる土量もかなりの量に達した。

調査では遺物を大量に含む弥生時代の溝や、古墳時代の住居跡、鍛冶炉や廃棄土坑など平安時代の鍛冶関連遺構が発見されたため、10月22日に現地説明会を開催した。当日はみぞれ交じりの雨が降る天候であったが、約60名の方々の参加があった。10月27日に委託業者による調査地の航空写真撮影を行い、11月11日に掘り下げ作業を終了した。この後、11月29日まで遺構の測量作業を行い、11月30日に現地から撤収した。

調査成果は埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また7月27日から29日までは赤碓中学2年生が職場体験のため発掘調査を体験したほか、東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、5月から琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、7月から琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載するなど、地元への普及啓発活動を行った。

発掘調査報告書作成に伴う遺物の整理作業は、埋蔵文化財センター及び調査第一係（東伯調査事務所）で行った。

註2) 君嶋 俊行編 2005『南原千軒遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団



第2図 調査地位置図

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所	長	田中 弘道
次	長	戸井 歩（兼総務係長）
総務係		
副	主 幹	福田 高之

発掘事業室

室	長	加藤 隆昭（兼調整係長）
調整係		
文化財主事		八峠 興
調査第一係		
係	長	湯村 功
文化財主事		小口英一郎

調査日誌（抄）

6月21日	重機による表土剥ぎ開始	9月30日	SK14土壌サンプル採取開始、SD9完掘
7月4日	基準点測量・方眼測量・杭打設（業者委託）	10月3日	SD4・5・6検出、SK14完掘
7月6日	調査開始・遺構検出作業	10月7日	SI2検出、SD10完掘
7月20日	SK12検出・掘り下げ	10月13日	SD4完掘
7月22日	SD8上面礫層検出	10月14日	SK18完掘
7月27日	赤碕中2年生発掘体験（～29日）	10月17日	SD11検出
8月4日	SI1検出、SK3・4完掘	10月18日	SD8完掘
8月5日	SD1完掘	10月21日	SI2完掘・SD6完掘
8月9日	SK5鍛冶関連遺物廃棄土坑調査開始、SK8検出	10月22日	現地説明会開催（約60名参加）
8月25日	SI1・SD7検出	10月26日	SK21検出・SD5完掘
8月29日	SD3完掘	10月27日	航空写真撮影（業者委託）
8月31日	奈良教育大学金原正明・金原正子氏現地指導	11月2日	奈良教育大学金原正明氏現地指導
9月8日	SD2・SK9完掘	11月3日	たたら研究会穴澤義功氏現地指導
9月9日	SK14鉄床石出土	11月8日	SD7完掘
9月12日	SD8掘り下げ開始・鉄関連遺物多数出土	11月10日	鍛冶工房域土壌サンプル採取
9月16日	SD7大型礫多数出土・鉄床石出土	11月11日	SK5・SK27完掘、掘り下げ作業終了・一部現場機材撤収
9月27日	鍛冶炉1検出・鍛冶工房域調査開始	11月12日	補足遺構測量調査
9月28日	SK16・17完掘、SK18調査開始	11月30日	遺構測量調査終了・機材撤収完了

第2章 遺跡の位置と環境

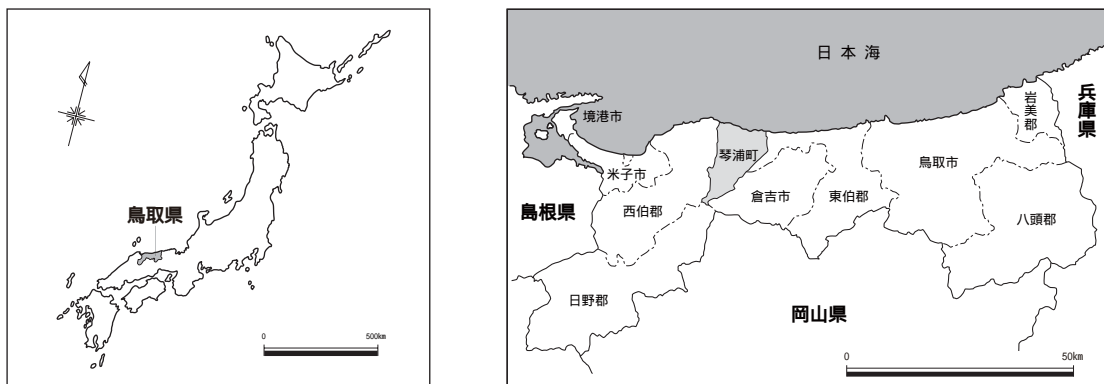
第1節 地理的環境

南原千軒遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置する。平成16年9月1日に東伯町と赤碕町が合併して新町として誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60km、県西部の商都米子市からは東に約35km離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町と、南は江府町と、北は日本海と接する。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測る。平成17年10月末時点の人口は、20,416人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道9号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

南原千軒遺跡は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。日本海までは直線距離で1.5kmである。勝田川により開折された沖積平野内の扇状地に立地し、周囲の畑地の標高は約25mを測る。



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

ここでは琴浦町内における遺跡の概要を述べる。

旧石器・縄文時代 鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡と梅田萱峯遺跡でナイフ形石器の可能性のある資料が、笠見第3遺跡(7)で細石核の可能性のある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されている(註1)。住吉第2遺跡(99)では草創期まで遡る可能性のあるものとして、有舌尖頭器と考えられる石器が出土している。近年、隣接する大山町門前第2遺跡でAT下位から小型ナイフ形石器を主体とするブロックが出土し

ており、良好な火山灰堆積が見られる当町域でも、今後層位的な出土例が期待される。

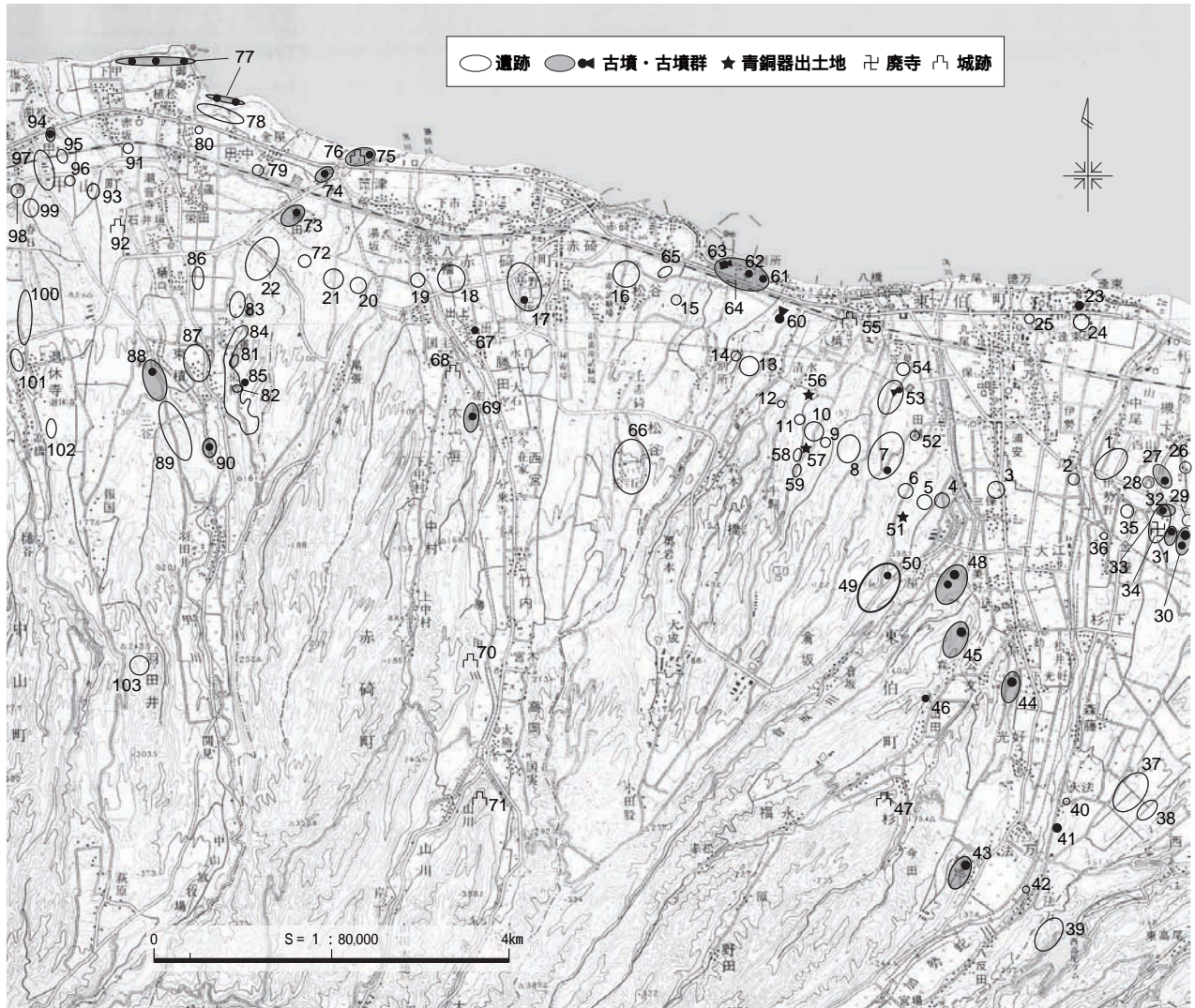
縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後口山遺跡(93) 退休寺飛渡り遺跡(101) 上伊勢第1遺跡(2)があり、押型文土器が検出されている。中期以前では、松ヶ丘遺跡(66) 森藤第1・第2遺跡(37) 井岡地中ソネ遺跡(5) 井岡地頭遺跡(4)などで土器が出土している。後期段階では森藤第2遺跡と南原千軒遺跡(19)で石囲い炉をもつ竪穴住居跡が検出されている。森藤第2遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。南原千軒遺跡でも遺構に伴わないが土偶が出土しており、今朝平タイプの可能性が考えられている。仮にそうであれば、同タイプの日本海側における分布の西限例となりうる。大山町御崎第2遺跡(80)では中津式に比定される土器片や晩期の浅鉢や深鉢が出土している。住吉第2遺跡では落とし穴が確認されている。この他に後期～晩期のものでは八重第1遺跡(81) 八重第3遺跡(83) 小松谷遺跡(97) 下甲抜堤遺跡(96)がある。

弥生時代 当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半の土器は丘陵上の遺跡で散見されることはあるが、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第1遺跡(2)では前期の竪穴住居跡が3棟確認され、中尾第1遺跡(1)と三保第1遺跡(3)では同時期の配石墓や土壇墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。樋口第1遺跡(86) 三谷遺跡(89)では前期の土器片が出土している。南原千軒遺跡(19)は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第1遺跡は中期中葉の集落でもある。

中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第1遺跡(37) 水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡(38) 井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡(49) 笠見第3遺跡、三林遺跡(6) 中道東山西山遺跡(8) 久蔵峰北遺跡(10) 福留遺跡(17)など枚挙に暇がない。中期後葉の集落としては退休寺遺跡(100)があり、竪穴住居をはじめ掘立柱建物跡や土坑墓が確認されている。また、住居内からミニチュア分銅形土製品が出土し、柱を抜き取った柱穴内から甕が出土していることから廃棄時の祭祀的行為が想定されている。八重第1遺跡(81) 八重第3遺跡(83) 住吉第2遺跡では後期の住居跡が確認され、後期～終末期の住居跡が退休寺第1遺跡(102)で確認されている。このように多数の住居跡が調査された例から見ると、後期半ばから後半にかけて住居等が激増する様子が窺える。

各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。また軟質な石材を用いて板状素材から施溝分割する「西川津技法」と同様なものがある点も注目される。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第3遺跡では後期前半に属する管玉素材のひとつに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていたことがわかる例もあった。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。

墳墓では墓ノ上遺跡(65) 別所女夫岩峯遺跡(61)で中期の木棺墓が見つかった。湯坂遺跡(20)では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井岡地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壇墓群が検出されている。



1. 中尾第1遺跡、2. 上伊勢第1遺跡、3. 三保第1遺跡、4. 井岡地頭遺跡、5. 井岡地中ソネ遺跡、6. 三林遺跡、7. 笠見第3遺跡、8. 中道東山西山遺跡、9. 久蔵谷遺跡、10. 久蔵峰北遺跡、11. 鯉谷遺跡、12. 岩本遺跡、13. 八橋第8・9遺跡、14. 別所中峯遺跡、15. 松谷中峰遺跡、16. 化粧川遺跡、17. 福留遺跡、18. 八幡遺跡、19. 中原千軒遺跡、20. 湯坂遺跡、21. 笹津乳母ヶ谷第2遺跡、22. 梅田堂峯遺跡、23. 達束双子塚古墳、24. 達束遺跡、25. 達束第2遺跡、26. 槻下豪族居館跡、27. 槻下古墳群、28. 下高尾2号遺跡、29. 大高野遺跡、30. 大高野古墳群、31. 塚本古墳群、32. 斎尾古墳群、33. 下高尾1号遺跡、34. 斎尾廃寺、35. 伊勢野遺跡、36. 金屋経塚、37. 森藤第1・2遺跡、38. 大峰遺跡、39. 西高尾谷奥遺跡、40. 大法古瓦出土地、41. 大法3号墳、42. 上法万経塚、43. 杉地古墳群、44. 下光好古墳群、45. 公文古墳群、46. 山田1号墳、47. 妙見山城跡、48. 竜ヶ崎古墳群、49. 三保遺跡、50. 三保6号墳、51. 田越銅剣出土地、52. 田越第4遺跡、53. 笠見第2遺跡・笠見1号墳、54. 笠見第1遺跡、55. 八橋城跡、56. 八橋銅鐸出土地、57. 久蔵峰銅矛出土地、58. 三保第2遺跡、59. 八橋第4遺跡、60. 八橋狐塚古墳、61. 別所男女岩峯遺跡、62. 別所2号墳、63. 別所1号墳(笠取塚古墳)、64. 別所古墳群、65. 墓ノ上遺跡、66. 松ヶ丘遺跡、67. 出上岩屋古墳、68. 條山城跡、69. 太一垣古墳群、70. 大仏山城跡、71. 山川城跡、72. 梅田所在遺跡、73. 梅田(栄田)古墳群、74. 坂ノ上古墳群、75. 笹津古墳群、76. 笹津城跡、77. 御崎古墳群、78. 御崎第1遺跡、79. 田中川上遺跡、80. 御崎第2遺跡、81. 八重第1遺跡、82. 八重第2遺跡、83. 八重第3遺跡、84. 八重第4遺跡、85. 岩屋平ル古墳、86. 樋口第1遺跡、87. 樋口第2遺跡、88. 三谷古墳群、89. 三谷遺跡、90. 束積古墳群、91. 赤坂大五輪塔、92. 岩井垣城跡、93. 赤坂後口山遺跡、94. 曲松古墳群、95. 林之峯遺跡、96. 下甲坂堤遺跡、97. 小松谷遺跡、98. 住吉第1遺跡、99. 住吉第2遺跡、100. 退休寺遺跡、101. 退休寺飛渡り遺跡、102. 退休寺第1遺跡

第4図 琴浦町の主要遺跡分布図

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋では扁平鈕式銅鐸のほか、同一丘陵で銅矛も見つかっている。また田越では円墳の箱式石棺下30cmの位置から中細形銅剣が4本出土している。

古墳時代 町内には4基の前方後円墳がある。別所1号墳(笠取塚古墳、53m×63)、八橋狐塚古墳(町史跡、62m)(60)、大塚古墳(34m)、竜ヶ崎3号墳(21m)(48)で、このうち前期に属すると思われるのは別所1号墳である。

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群、塚本古墳群(31)、斎尾古墳群(32)、公文古墳群(45)、竜ヶ崎古墳群(40)、別所古墳群(64)、笹津古墳群(75)、坂ノ上古墳群(74)、梅田古墳群(73)などである。大高野3号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。大山町では、中期後半の高塚古墳がある。現在は消滅しているが、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土

している。後期以降採用される横穴式石室には、大法3号墳、三保6号墳などのように竪穴系横口石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。大山町では緩丘陵上に三谷古墳群(88)、束積古墳群(90)やなどの円墳や岩屋平ル古墳(85)が見られる。海岸部にある御崎古墳群(77)では埋葬主体部に板状割石ではなく、海岸石をそのまま用いて造るという箱式石棺が確認されている。終末期に属すると思われる切石積石室は山田1号墳(町史跡)(46)、出上岩屋古墳(県史跡)(67)に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第1遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡(前期から後期)(11)、三林遺跡、久蔵峰北遺跡(前期から中期)、中尾第1遺跡、三保第1遺跡、松谷中峰遺跡(中期)(15)、井岡地中ソネ遺跡(中期から後期)、別所中峯遺跡(前期と後期)(14)などがある。大山町では前期の八重第3遺跡があり、住吉第2遺跡では中～後期の竪穴住居や柵列が確認されている。また、林ノ峰遺跡(95)、三谷遺跡は散布地である。集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは八幡第8・9遺跡である。ここでは6世紀から7世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓や流動滓も出土しており、報告では遺跡内での土器編年に基づき、集落動態の解明に取り組んでいる。

南原千軒遺跡においても古墳時代後期の竪穴住居跡4棟が検出され、この時期に集落が営まれていたことがわかる。

古 代 町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡や伊勢野遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第1・第2遺跡、大法古瓦出土地がある。このほか、旧笹津郷に位置する八幡遺跡では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。南原千軒遺跡でも墨書された土師器や須恵器が出土している。大山町田中川上遺跡(79)では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師皿などが集中して投棄された状態が検出されており、河川の畔での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第3遺跡と三林遺跡で火葬墓が見ついている。笠見第3遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋と上法万では経塚が見つかり、金屋では銅経筒が納められていた。御崎24号墳では墳丘斜面において銅銭160枚以上が検出された土葬墓が確認されている。

生産関係では、上伊勢第1遺跡で9世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では9世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中 世 南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井岡地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礎があり、居館跡の可能性がある。槻下館跡(町史跡)は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが

詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡（国史跡）がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔（県保護文化財）があることでも知られている。大山町赤坂集落には、赤坂大五輪塔（91）がある。元弘3（1333）年、後醍醐天皇を迎えて鎌倉幕府方と戦った船上山合戦の際に、名和軍に加勢したといわれる土豪赤坂掃部助幸清の墓と伝えられる。赤坂掃部助幸清は1336年に京都で没している。

中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯耆の経営拠点となった八橋城跡（町史跡）（55）、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡（47）、土塁と堀が残る町史跡の笹津城（檣城）（76）跡のほか、條山城跡（68）、大仏山城跡（70）、山川城跡（71）がある。大山町では、岩井垣城（92）がある。丘陵の南北を分断する空堀や土塁、石段がよく残されている。延文年間（1356～1360）に国人領主であった、笹津豊後守敦忠の居城として伝わる。また、笹津豊後守敦忠は1357（延文2）年に曹洞宗の金龍山退休寺を開基したとされており、金龍山退休寺は近世に至って曹洞宗の大寺院として隆盛を極めた。当時の汗入群方面と八橋群方面の参詣道があり、現在はその一部が町道として痕跡を留めている。

註1）水溜は槻下、松谷は松ヶ丘と呼ばれることもあるが、下記文献に基づき名称を統一した。

根鈴 輝雄1991「鳥取県の旧石器研究」『島根考古学会誌』第8集

【参考文献】

- 1999 西伯郡中山町教育委員会 『御崎第1遺跡・御崎2遺跡』
- 1999 西伯郡中山町教育委員会 『住吉第2遺跡』
- 2002 西伯郡中山町教育委員会 『町内遺跡発掘調査報告書 田中川上遺跡・退休寺飛渡り遺跡』
- 2005 西伯郡中山町教育委員会 『退休寺遺跡・退休寺飛渡り遺跡』



写真1 現地説明会



写真2 調査を終えて



第5図 南原千軒遺跡3区遺構配置図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の立地と層序

今回の調査地は平成16年度調査地の東南部に隣接し、調査前は畑地であった。この一帯は勝田川と黒川によって形成された扇状地であり、調査地の土層が基本的にシルト質または砂質であることや、下位に礫層が認められたことも、土層が堆積するうえで水の影響が大きかったことを教えてくれる。調査地の土層は平成16年度調査地と基本的に同じである。したがって、表土（耕作土）を 層、遺物包含層を 層とする1次調査報告を踏襲した。以下、概要を記す。

層：表土（耕作土）である。おおむね10～20cmの厚さで全面を覆う。開墾のためか、しまりが非常に弱く、中・近世を中心とした遺物を含んでいる。

層：遺物包含層の総称である。壁面観察により、色調や混入物、しまりなどから細分したが、その違いは微妙なものであり、掘り下げ段階では一括して 層としている。今回は 層を4枚に細分したが、5枚に細分された平成16年度調査時のものと対応しない。

全体として調査地の西側に厚く堆積し、東側は薄い。1区の調査では遺構も遺物も検出されていないので、調査地は遺跡の東限付近と考えられる。 1層と 3層は西側にのみ認められた。

1層と 2層は中世から近世の遺物を、 3層、 4層は縄文時代から中世の遺物をそれぞれ包含する。

上記より下位の土層について1次調査報告では次のように記述している。

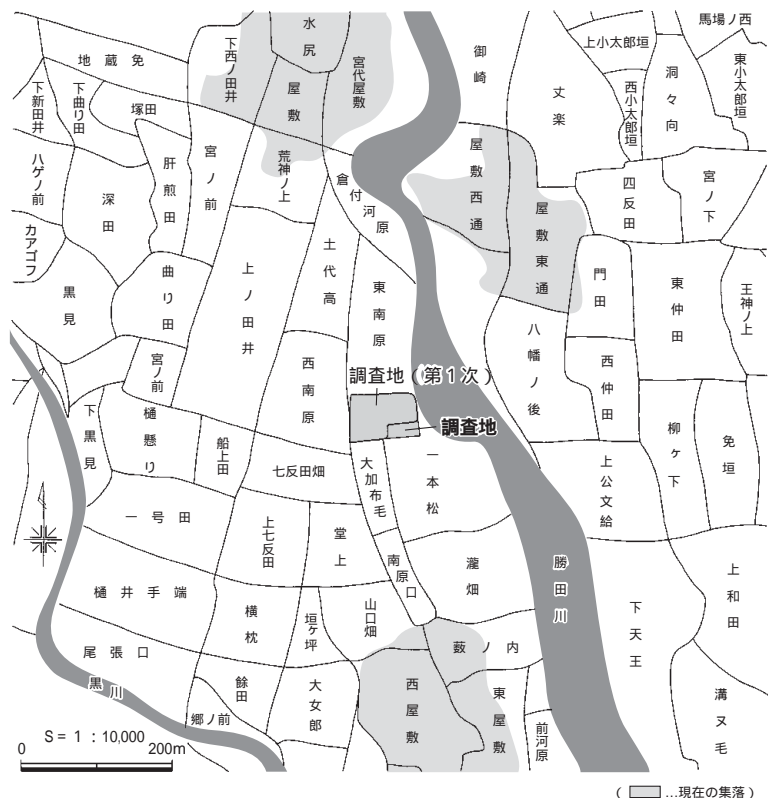
層：黒褐色～暗灰褐色を基調とするシルト層

層：しまりの強い黒褐色のシルト層

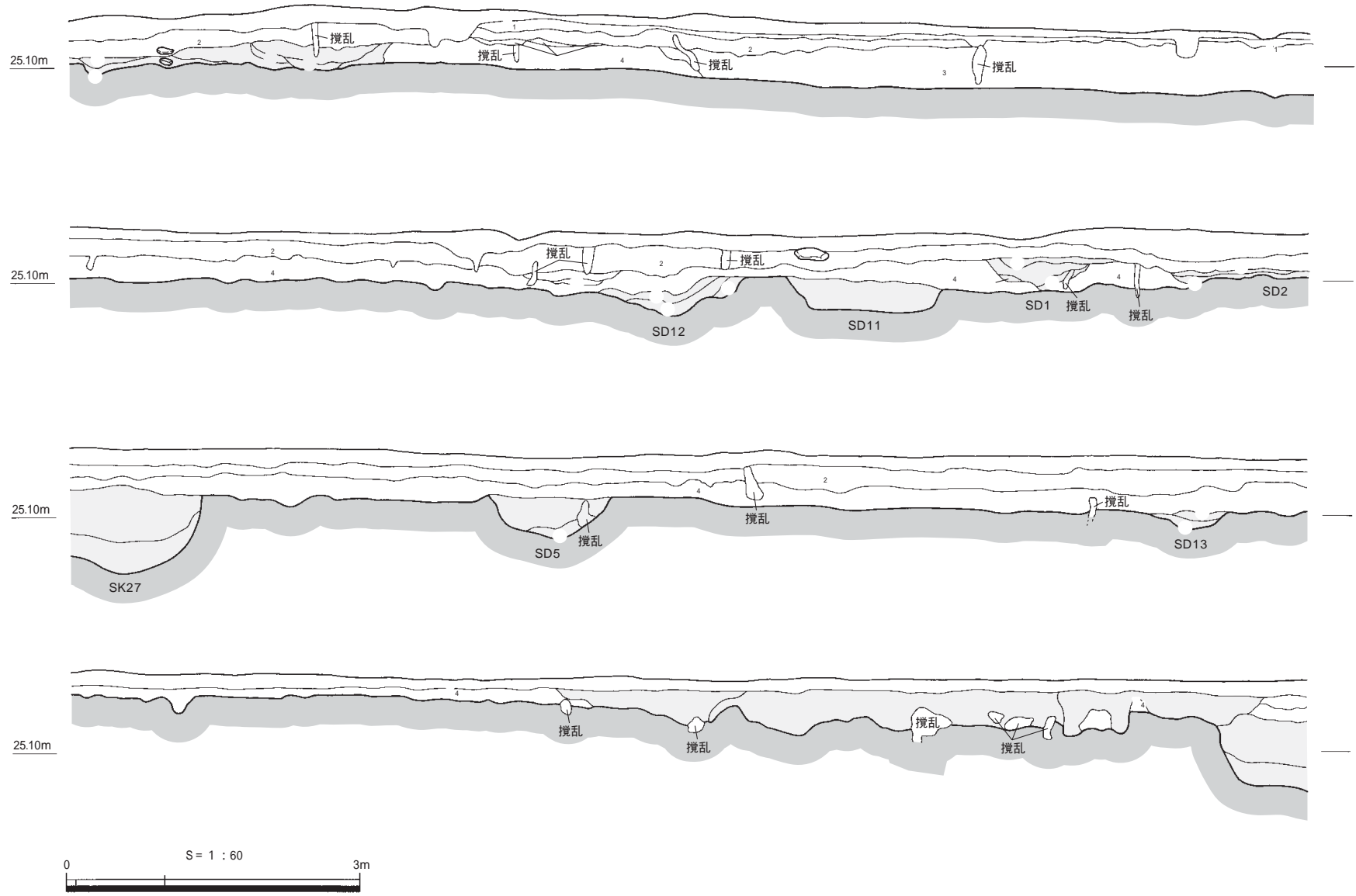
層：暗褐色のシルト層

層：黄灰色の砂層

トレンチや遺構断面での観察所見では今回の調査地についても同様な土層堆積であった。



第6図 調査区周辺の小字名



第7図 調査区南壁土層断面図

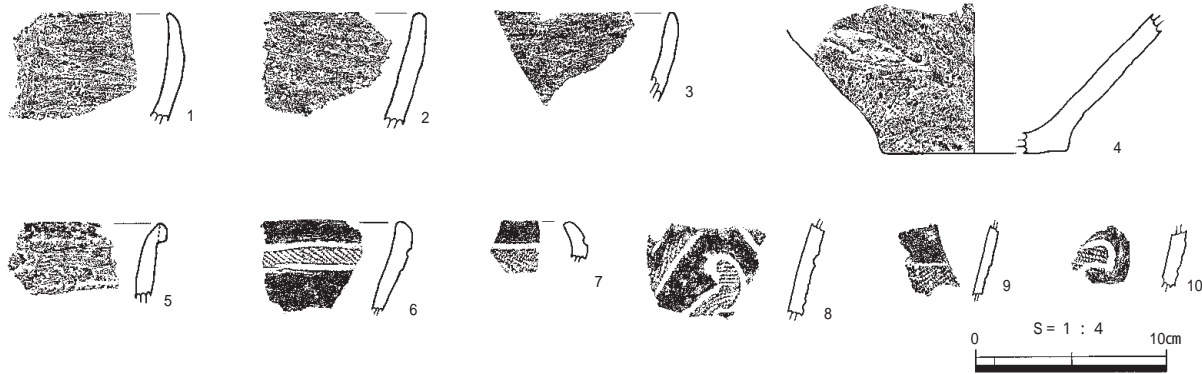
第2節 縄文時代の調査成果

(1) 概要 (第8図、表2、PL. 17)

縄文時代に帰属する遺構は検出されていない。遺構外の層中およびSD 5・7から後期前葉を主体とした土器が出土しているが、ここでは、遺構外出土土器を取り上げる(第8図)。

1～5は表面に粗いナデもしくはケズリ調整を残す一群であり、胎土中に径1～2mmの砂粒を多く含んでいることが特徴である。1はやや内湾し、口縁端部が細身を帯びる深鉢の口縁部である。内面はナデ調整。2は直線的に外反する深鉢の口縁部破片であり、端部は丸みを帯びている。内外面とも粗いヨコナデ調整である。3はやや内湾ぎみの深鉢口縁部であり、1と同様口縁端部が細身を帯びている。内外面ともケズリ後、粗いナデ調整である。4は深鉢の底部破片であり、体部に向かう開きが大きい。内外面と底面は粗いナデ調整を行っている。5は口縁端部に突帯が貼り付けられた深鉢口縁部であり、内外面ともケズリ調整が施される。

6～10は磨消縄文を有する一群である。6は口縁端部が肥厚し、体部に向かって細身を帯びる深鉢の口縁部破片である。外面は、2本の平行沈線が横走り、その間にRL縄文が充填される。沈線外および内面は丁寧なミガキ調整である。7は内湾する鉢の口縁部であり、口縁直下に沈線がめぐり、RL縄文が施文されている。内外面ともナデ調整である。8は深鉢の体部破片で、2本1組の比較的太い沈線によって逆J字文が描出され、RL縄文が充填されている。磨消し部はミガキが施される。同じく深鉢の体部破片である9は、浅い沈線下にLR縄文が施文される。磨消し部はミガキ、内面はナデ調整。10は鉢もしくは深鉢の体部破片で、J字文の先端部が認められる。沈線間にはRL縄文が充填され、その他はナデ消されている。以上の6～10は、後期前葉中津式の精製土器に比定され、5を除いた1～4はそれに伴う粗製土器と考えられる。



第8図 遺構外出土遺物

表2 遺構外出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
1	E6層	縄文土器 深鉢	5.6	口縁部 破片	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	良好		372
2	E7層	縄文土器 深鉢	5.8	口縁部 破片	外面：ケズリ ヨコナデ 内面：ケズリ 粗いヨコナデ	径3mm以下の白・赤色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好		3941
3	E6層	縄文土器 深鉢	4.7	口縁部 破片	外面：ケズリ 粗いナデ 内面：ケズリ 粗いナデ	径1mm以下の白・灰色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		207
4	E6層	縄文土器 深鉢	9.7(底径) 6.9	体-底部 破片	外面：体-底部粗いナデ 内面：体部-底部ケズリ ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：褐灰色	良好		731
5	E7層	縄文土器 深鉢	4.0	口縁部 破片	外面：ケズリ 内面：ケズリ	径4mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	口縁部突帯	3927
6	E7層	縄文土器 深鉢	4.7	口縁部 破片	外面：ミガキ、沈線間RL縄文充填 内面：ヨコナデ	径5mm以下の白・灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	充填縄文	737
7	F2層	縄文土器 深鉢	2.0	口縁部 破片	外面：ミガキ、沈線間RL縄文充填 内面：ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐灰色 内面：褐灰色	良好	充填縄文	57
8	G3層	縄文土器 深鉢	5.1	体部 破片	外面：J字状沈線間に縄文充填 内面：ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	充填縄文	3064
9	E5層	縄文土器 深鉢	3.6	体部 破片	外面：LR縄文 内面：ヨコナデ	径0.5mm大の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	充填縄文	5246
10	E7層	縄文土器 深鉢	3.2	体部 破片	外面：J字状沈線間に縄文充填 内面：ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	充填縄文	5177

第3節 弥生時代の調査成果

(1) 概要

弥生時代の遺構としては、溝6条、土坑5基を検出した。

SD4・5・6は平成16年度調査のSD2・3と一連のものと思われる。埋土は砂質土もしくは砂層であることや、底面近くに礫が認められたことも共通しており自然流路と考えられる。弥生時代中期前葉と後期の土器を中心に、管玉製作関連資料や石鏃など多くの遺物を含む。

土坑はすべて弥生時代中期前葉に位置づけられる。SK12・27のように複数個体の土器を伴うものがある。

(2) 溝

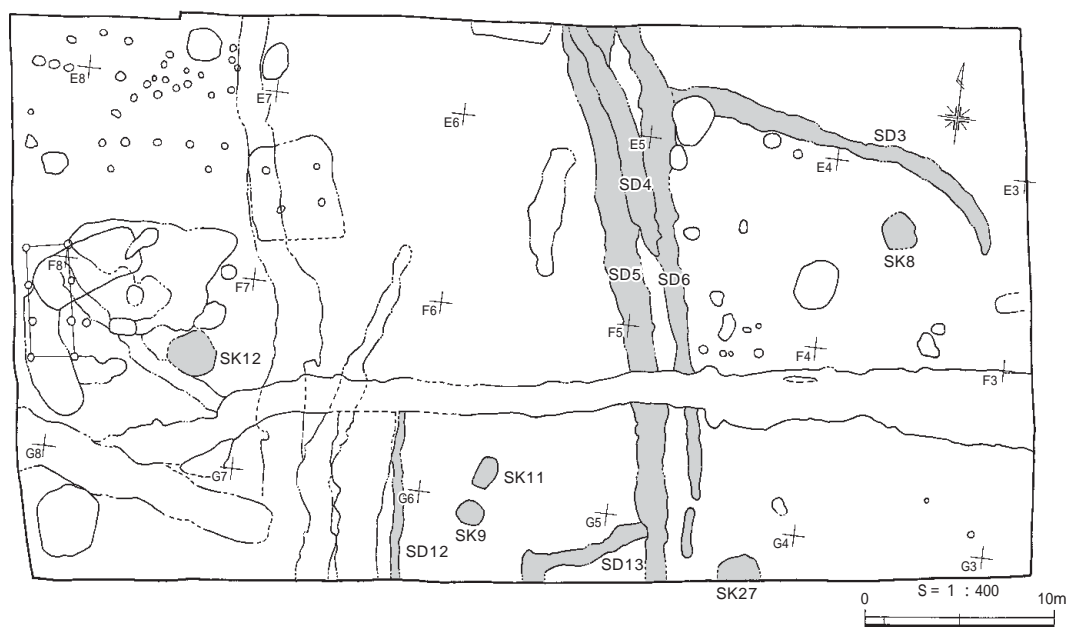
SD3 (第10・11・12図、表3・4、PL. 2・6・16・23)

E3杭からE5杭を結ぶラインに斜交して検出された。東端はE3グリッドで弧を描くようにして終わり、西端はSD6と切り合う。検出した長さは約19mである。西側が広く最大で1.6mを測る。深さは最大で約0.3mほどで、東へ行くほど浅くなり、東端ではおよそ0.1mほどである。底面の標高は東端が約25.1m、西端が約24.9mとなり、西方向への流れが窺える。

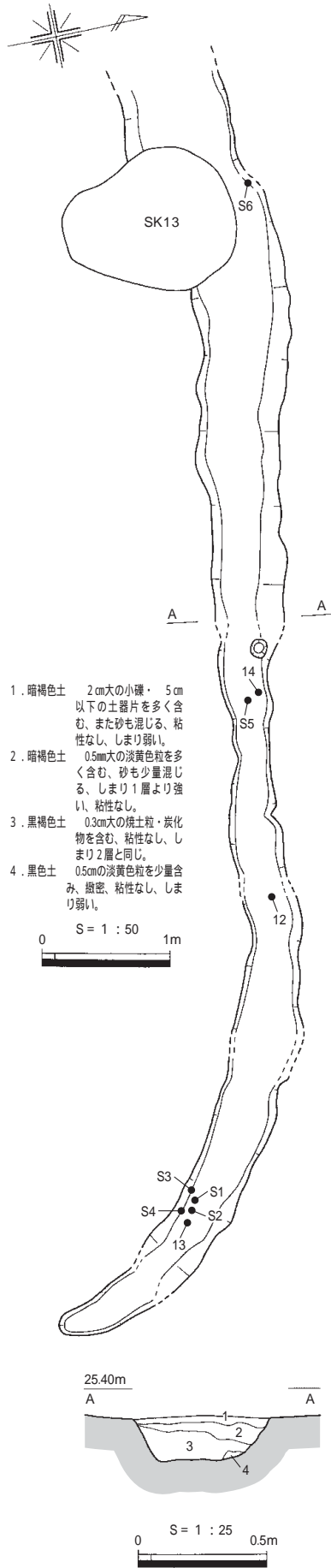
埋土は地山とよく似た暗褐色から黒褐色の砂質土で、炭化物や黄色粘土粒の存在を手がかりに地山と区別できた。上層には砂粒や小礫の堆積が部分的に認められた。

遺物は上層から多く出土しており、帯状に出土する遺物から遺構の存在が認識できたほどである。土器は縄文時代のものもあるが、大部分は弥生時代であった。小片が多く、完全な形を保っていたものはない。11は縄文時代後期前葉の深鉢。波状口縁を呈するものである。12は無頸壺で体部外面はハケメ、内面はハケメ後ヘラミガキで調整する。13と14は弥生時代中期前葉の壺と甕で、無文の15も同時期と思われる。

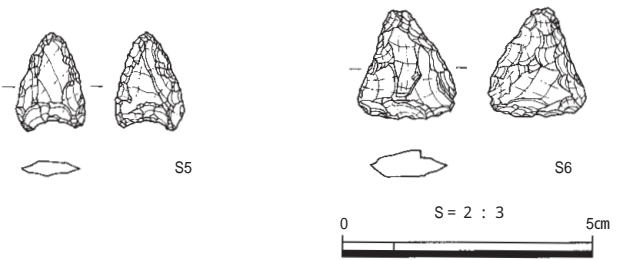
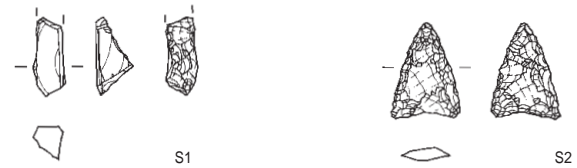
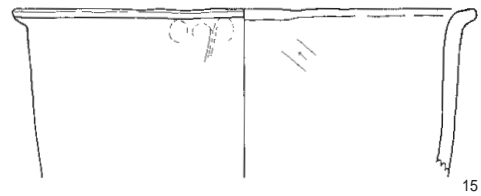
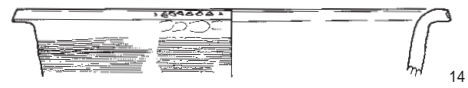
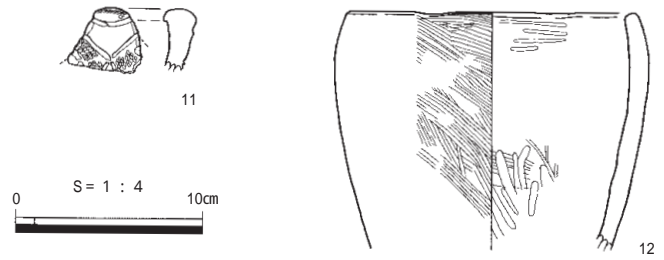
石器は礫石器もあるが、石鏃、剥片、碎片といった剥片石器が多い。剥片石器93点のうちサヌカイ



第9図 弥生時代遺構配置図

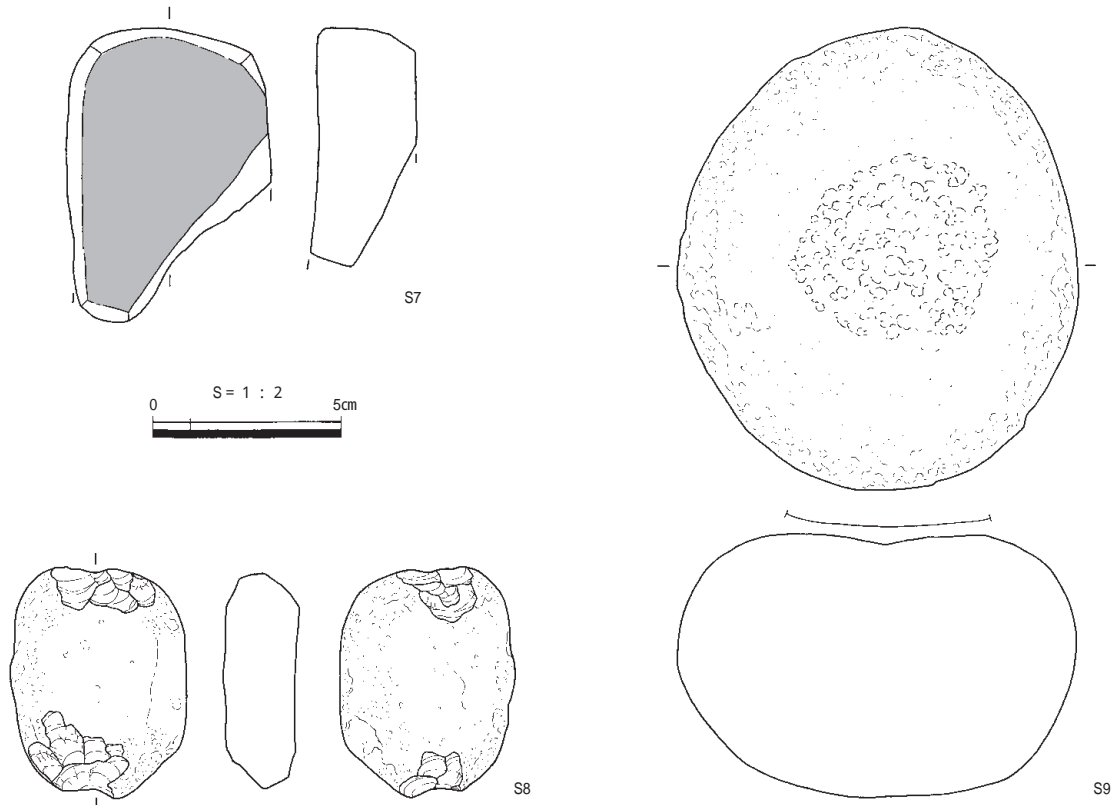


第10図 SD3



第11図 SD3出土遺物(1)

第3章 調査の成果



第12図 SD3 出土遺物(2)

表3 SD3 出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
11	SD3 埋土	縄文土器 鉢	3.2	口縁部 破片	外面：波頂部LR縄文、口縁部柳状沈線内、LR縄文 内面：粗いナデ	径3mm以下の白・灰色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1077
12	SD3 埋土	弥生土器 無頸壺?	15.3 12.4	口縁～体部 1/6	外面：口縁～体部ハケ 内面：口縁～体部ハケ ミガキ	径5mm以下の白・灰色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1331・1332
13	SD3 埋土	弥生土器 壺	28.5 5.0	口縁～体部 破片	外面：口縁部X字状刻目、頸部ハケ ナデ 内面：口縁部ハケ ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：橙色	良好		1350
14	SD3 埋土	弥生土器 甕	30.6 3.4	口縁～頸部 破片	外面：口縁部三角刺突文、頸部櫛描平行線 内面：ヨコナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙色	良好		1283
15	SD3 埋土	弥生土器 甕	24.3 8.8	口縁～体部 破片	外面：口縁部ナデ、頸部指オサエ、体部ハケ ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部～体部ケズリ ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：明褐色	良好		1242

表4 SD3 出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S1	第11図 PL.19	SD3	角柱状素材	碧玉	1.59	0.65	0.69	0.8	1368
S2	第11図 PL.20	SD3	石鏃	サヌカイト	1.92	1.38	0.22	0.5	1372
S3	第11図 PL.20	SD3	石鏃	サヌカイト	2.4	1.56	0.27	1.0	1362
S4	第11図 PL.20	SD3	石鏃	サヌカイト	1.88	1.65	0.38	1.1	1374
S5	第11図 PL.20	SD3	石鏃未成品	サヌカイト	1.99	1.36	0.3	0.7	1284
S6	第11図 PL.20	SD3	石鏃	サヌカイト	2.18	2.0	0.54	2.2	3117
S7	第12図 PL.23	SD3	砥石	アブライト	7.75	5.4	2.6	160.0	1271
S8	第12図 PL.16	SD3	石錘	安山岩	6.1	4.65	1.9	80.5	1380
S9	第12図 PL.16	SD3	敲石	角閃石安山岩	12.15	10.6	6.8	1,130.0	1354

ト製が77点(82.8%)と圧倒的に多く、その他は黒曜石製9点(9.7%)、瑪瑙・玉髓製7点(7.5%)に過ぎない(註1)。管玉製作に関する資料もわずかに見られ、硬質緑色凝灰岩製の角柱状素材や破片、石鋸破片が出土している(註2)。S1は施溝分割した角柱状素材に細かな打撃を加えて整形しようとしている。S2からS6は石鏃。すべてサヌカイト製である。器面中央に素材面を残した凹基式が多い。S7は砥石。S8は上下両端に剥離痕が認められ、打ち欠き石錘とした。S9は円礫の片面中央に敲打痕が認められる。こうした場合、これをハンマーとして使用したか作業台として使用したかの判断は難しい。SD5から出土したS62のように器体中央に加え側縁にも敲打痕が認められるものがあるため、本書では敲石としておくが、作業台として使われた可能性もある。

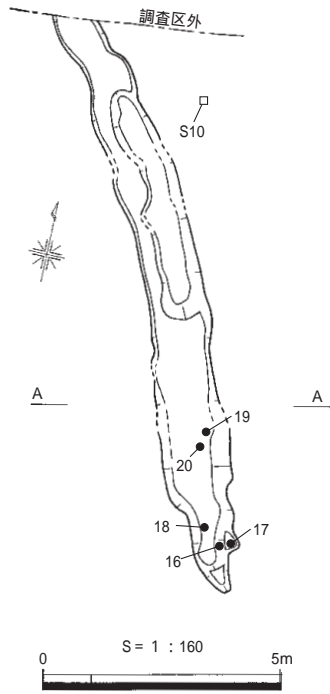
SD4 (第13～15図、表5・6、PL. 2・3・5・6・16・23)

調査区中央よりやや東のE5杭からG5杭を結ぶライン付近で南北に検出された3本の溝のひとつである。わずかに弧を描く直線状で、検出した長さは約7.8m、幅0.9m、深さ0.25mを測る。土層断面の観察からSD5・6を切っていることがわかる。

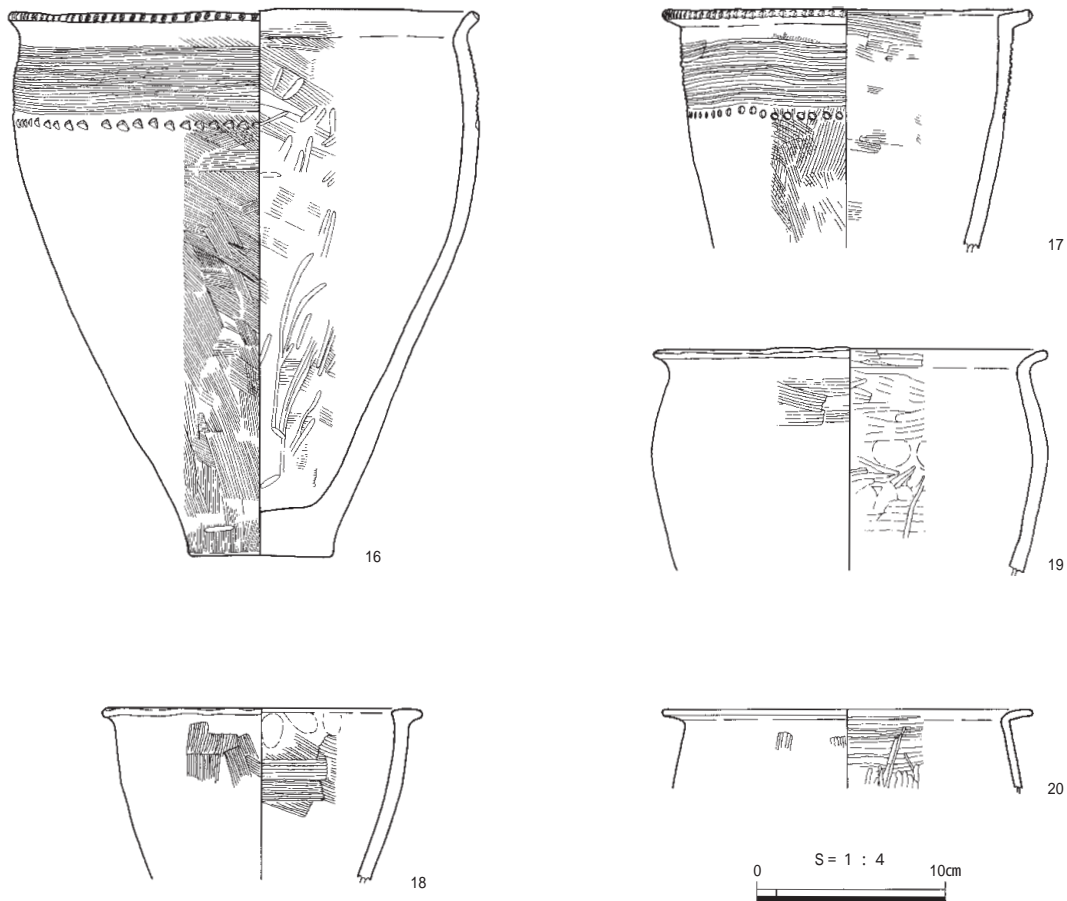
SD5・6が大量の遺物を伴っていたのに対して、本遺構は少ない。土器は弥生時代中期前葉から弥生時代終末期まで認められた。口縁部に限定してカウントした結果は、中期前葉6点、中期前葉と思われる無文のもの10点、中期中葉1点、後期3点、終末期1点であった(註3)。

16と17は弥生時代中期前葉の甕で、ともに口縁端部にキザミ、体部上半に櫛描き沈線文と刺突文をもつ。16はほぼ完形に復元できた。18と19は無文の甕で、弥生時代中期前葉に属するものだろう。17と18は逆L字状口縁となる。20は弥生時代中期中葉の甕である。

石器は2点図示した。S10は砥石、S11は両面中央にそれぞれ敲打痕をもつ敲石である。このほかにサヌカイトの剥片2点、石材不明の

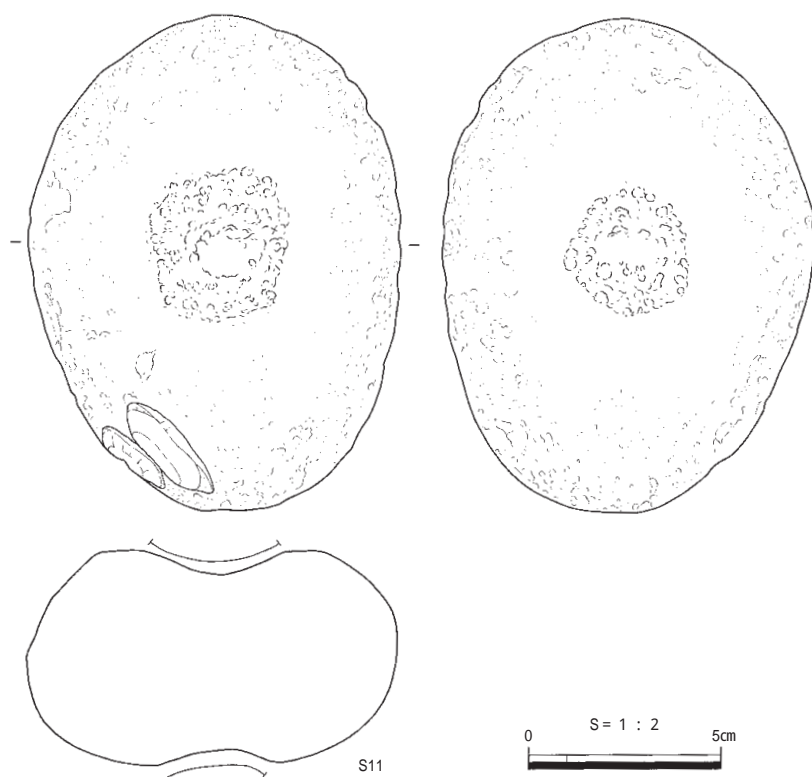
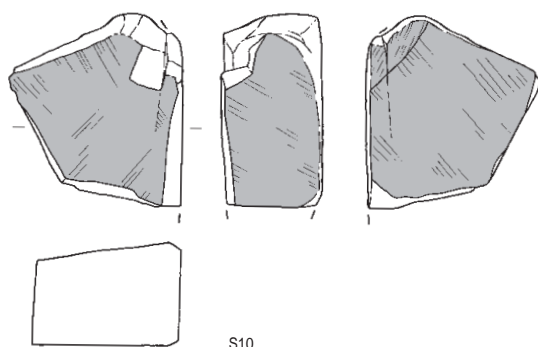


第13図 SD4



第14図 SD4出土遺物(1)

第3章 調査の成果



第15図 SD4出土遺物(2)

剥片1点、台石1点が出土している。

SD5(第16~20図、表7~9、PL.2~5・16・18~20)

SD4と一部重なりながら直線的に南北に延びている。南北ともに調査区外へ続いており、北側延長部は平成16年度にSD2として調査された。したがって検出した総延長は50mを超える。幅は北端が1.7mと広いほかは、おおむね1.0m程度である。深さは最大で0.6mを測る。底面の標高は北端が24.5m、南端が24.9mとなる。北方向への流れは平成16年度調査のSD2と矛盾はない。

埋土下層は砂礫層で大量の遺物を含む。土器は縄文時代後期から古墳時代前期初頭まで認められた。弥生時代から古墳時代初頭までの口縁部の集計では弥生時代中期前葉13点、中期前葉と思われる無文のもの15点、中期中葉1点、後期初頭8点、後期前葉7点、後期中葉90点、後期後葉2点、終末期4点、古墳時代前期初頭3点を

数えた。第17図に代表的な土器を掲載している。

石器は剥片石器、礫石器ともに認められた。剥片石器は礫石器の破片を除いて329点出土した。石材内訳はサヌカイト製が269点(81.8%)、黒曜石製が46点(14.0%)、瑪瑙・玉髓製が14点(4.3%)で

表5 SD4出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
16	SD4埋土	弥生土器 甕	24.4 29.0	口縁~底部 1/1	外面：口縁部刻目、頸部櫛描平行線・三角刺突文、ハケ 内面：口縁部ハケ、体部ハケ ミガキ	径4mm以下の白・赤色砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好	外面スス付着	3280・3281・3300・5226・5228
17	SD4埋土	弥生土器 甕	19.2 12.5	口縁~体部 1/4	外面：口縁部刻目、頸部櫛描平行線・円形刺突文、ハケ 内面：口縁部ハケ、体部ハケ・ナデ	径5mm以下の白・灰色砂粒	外面：浅黄橙~にぶい褐色 内面：浅黄橙色	良好		3280・3281・3282・5219・5230・5242
18	SD4埋土	弥生土器 甕	15.0 9.0	口縁~体部 1/3	外面：体部ハケ 内面：口縁部指オサエ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		3302・3306
19	SD4埋土	弥生土器 甕	20.4 11.6	口縁~体部 1/4	外面：口縁部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ハケ、体部ハケ ミガキ、一部指オサエ	径3mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐~暗褐色 内面：にぶい黄橙~灰黄褐色	良好		3249
20	SD4埋土	弥生土器 甕	19.0 4.1	口縁~体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ ナデ消し 内面：口縁部ミガキ、体部ミガキ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：橙色	良好		3310

表6 SD4出土石器観察表

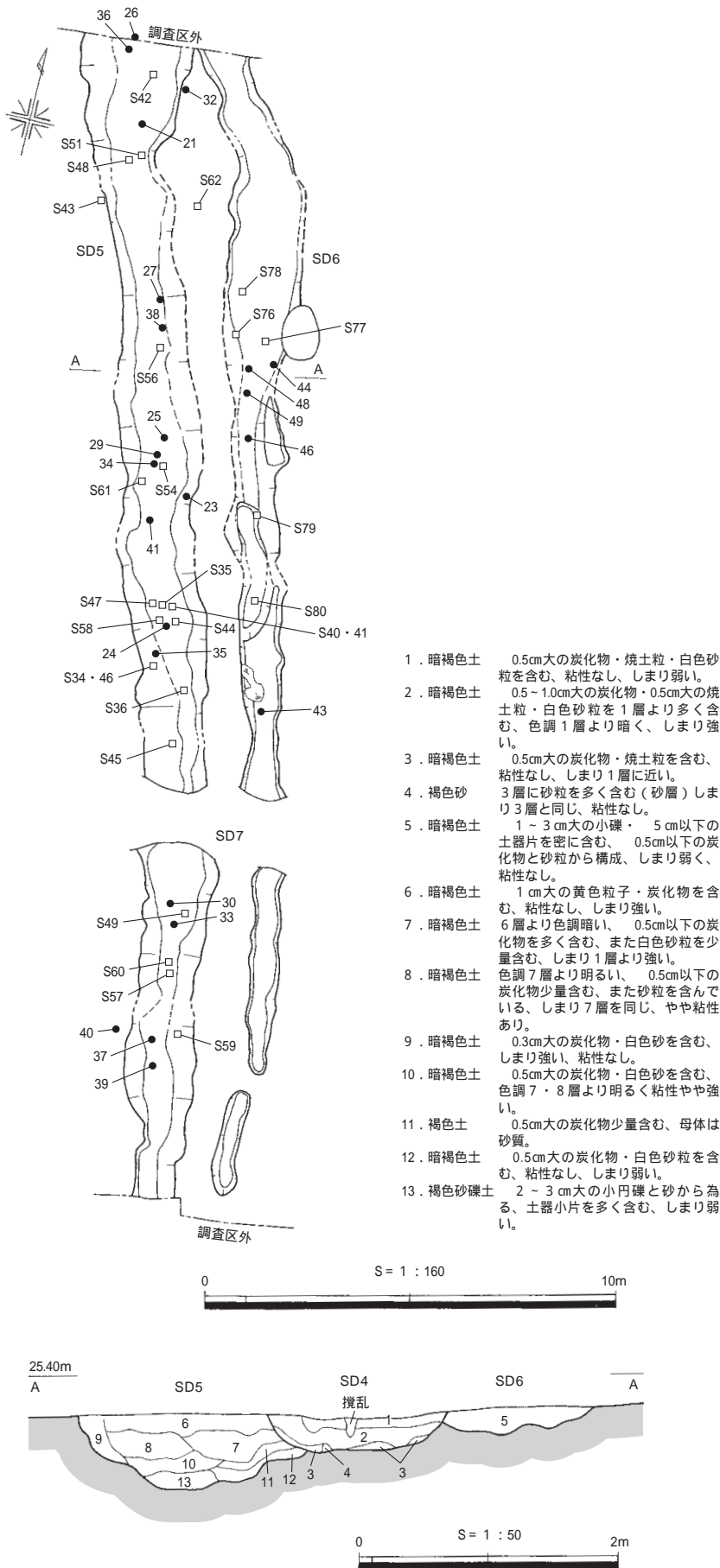
No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S10	第15図 PL.23	SD4	砥石	アブライト	5.1	4.6	2.7	94.5	5205
S11	第15図 PL.16	SD4	敲石	安山岩	13.0	9.9	5.2	890.0	5244

ある。器種は石鏃や石錐などを除く大部分が剥片、碎片である。このほか管玉製作関連資料として、硬質緑色凝灰岩製の直方体素材や角柱状素材などが29点、軟質緑色凝灰岩製の板状素材などが9点、片岩製の石鋸が12点認められた。

S12からS29は石鏃である。基本的にサヌカイト製の素材面を残した凹基式である。未製品も含まれることから近傍で製作されていたことがわかる。黒曜石製のS29は形態が異なり、茎をもつ。S30からS32は石錐。S31は先端部が磨耗している。S33はサヌカイト製の石匙である。

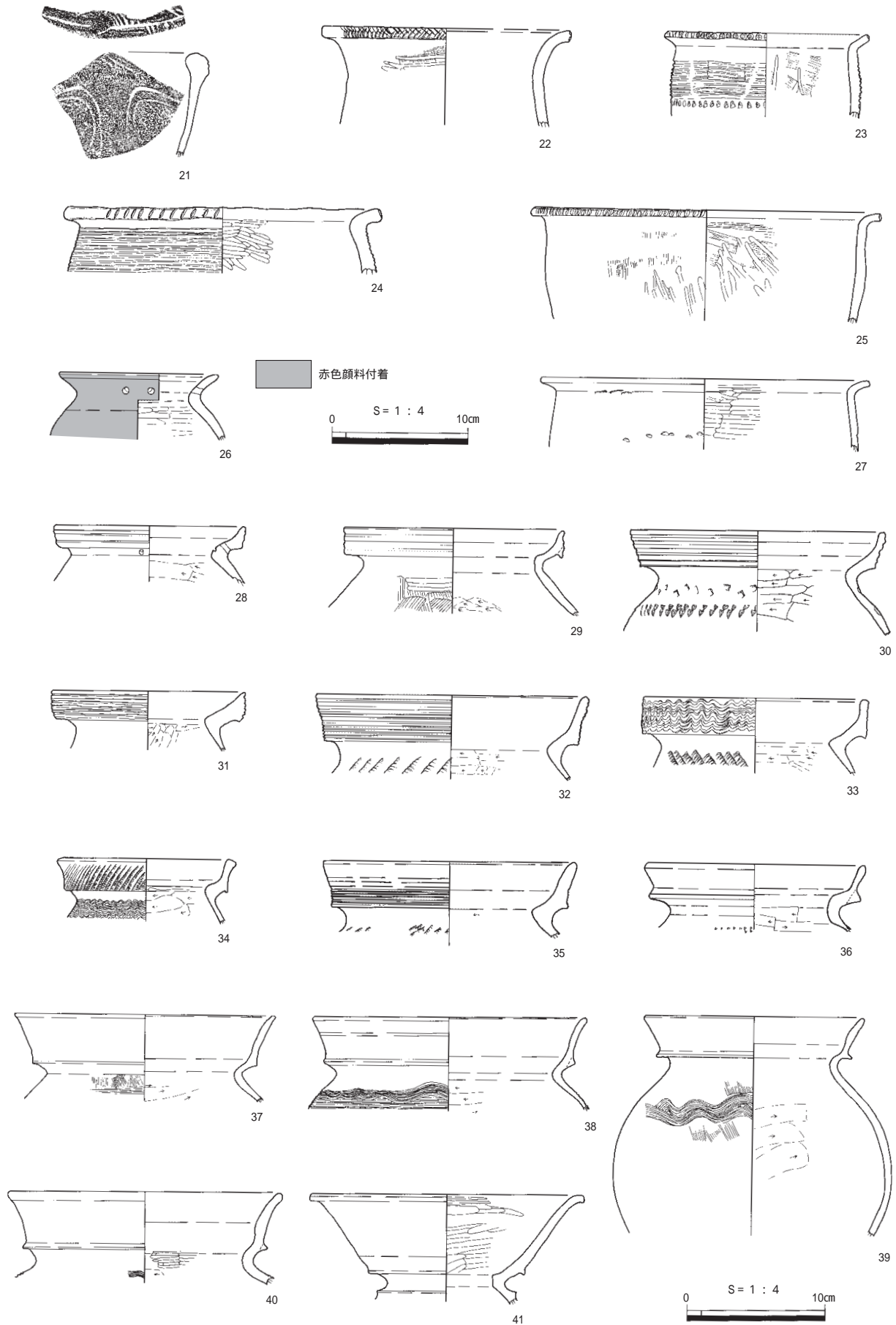
第19図には管玉製作関連資料を掲載した。S34からS44が硬質緑色凝灰岩製の直方体素材から施溝分割によって角柱状素材を生産する工程が窺える。S45からS49は軟質緑色凝灰岩の板状素材である。打撃により分割された剥片を研磨し板状素材として、施溝分割する工程が復元できる。S50とS51は玉髓製の石針。S50は未製品と考えた。S52からS57は片岩製の石鋸である。

第20図は礫石器、その他である。S58は石鏃、S60は砥石。S59の伐採石斧は残存している範囲では各面とも丁寧に研磨され、整形時の敲打痕を残さない。S61とS62は敲石。S62は円礫の表裏両面に加え、側縁部にも敲打痕が認められる。これ以外に大型石庖丁と思われるもの1点、砥石3点、敲石3点、磨石1点、台石が可能

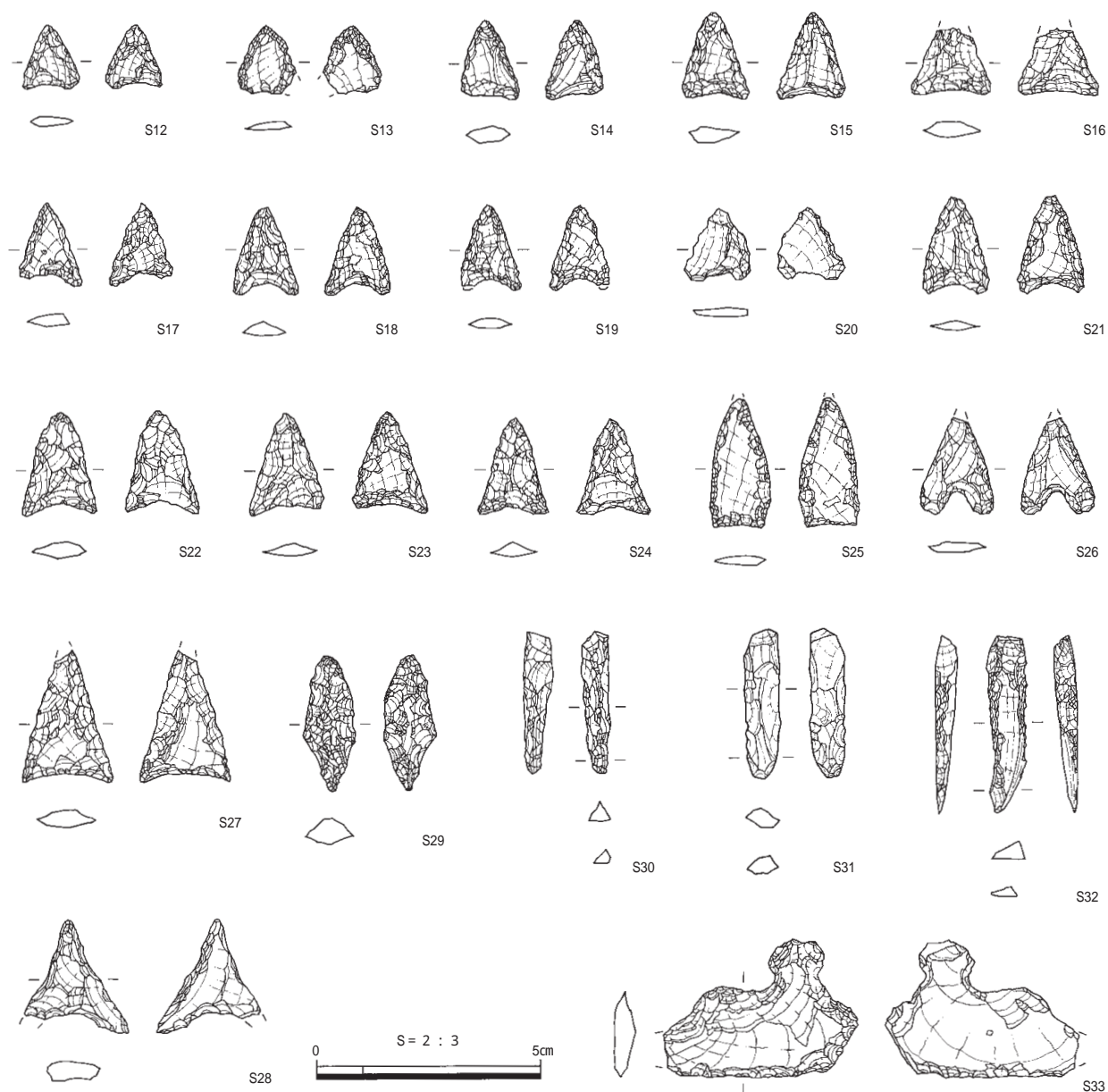


第16図 SD5・6

第3章 調査の成果



第17図 SD5 出土遺物(1)



第18図 SD 5 出土遺物 (2)

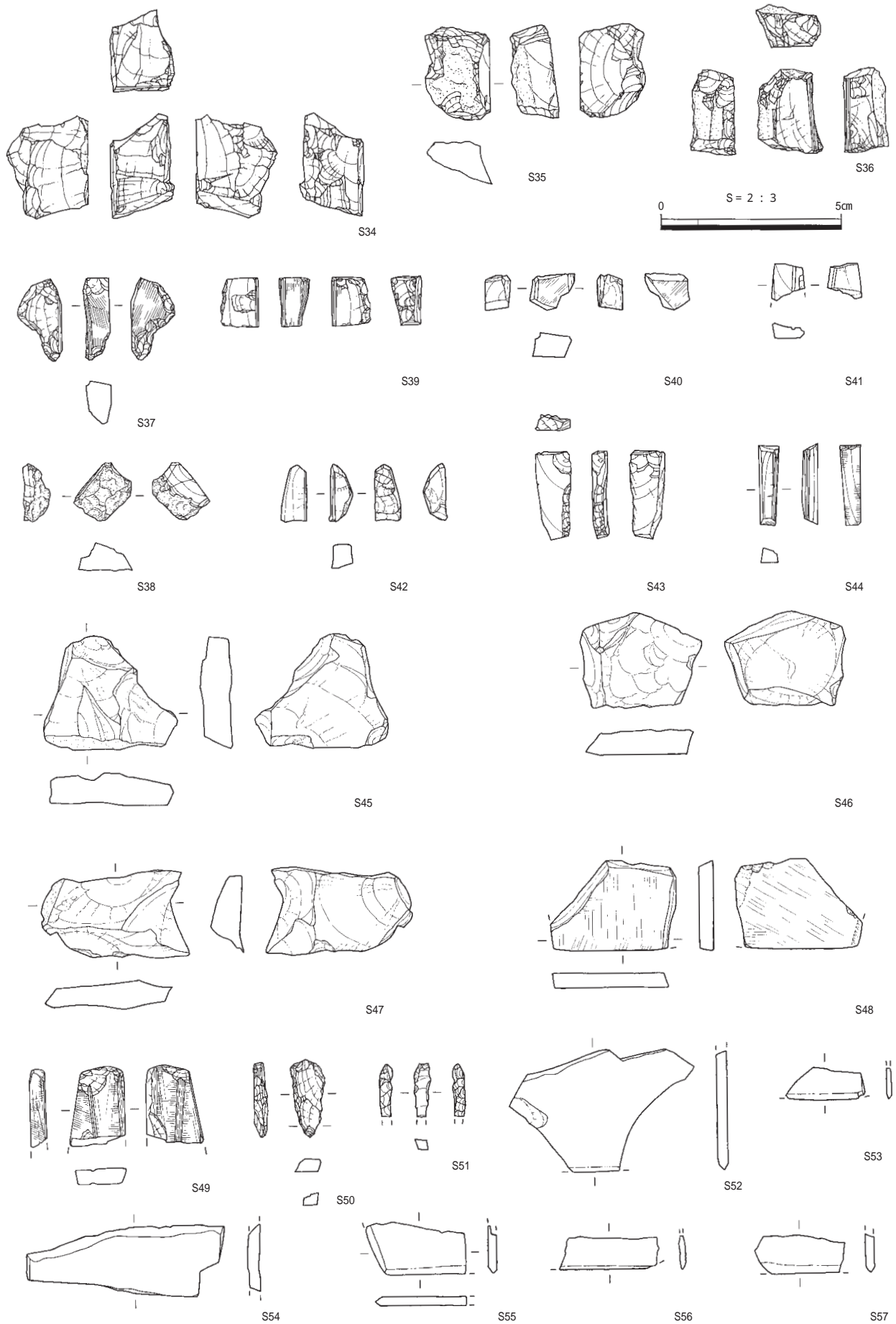
性のあるものを含め 3 点、器種は明らかでないが礫石器の破片が 3 点が出土している。

SD 6 (第16・21・22図、表10・11、PL. 4 ~ 7・19・20)

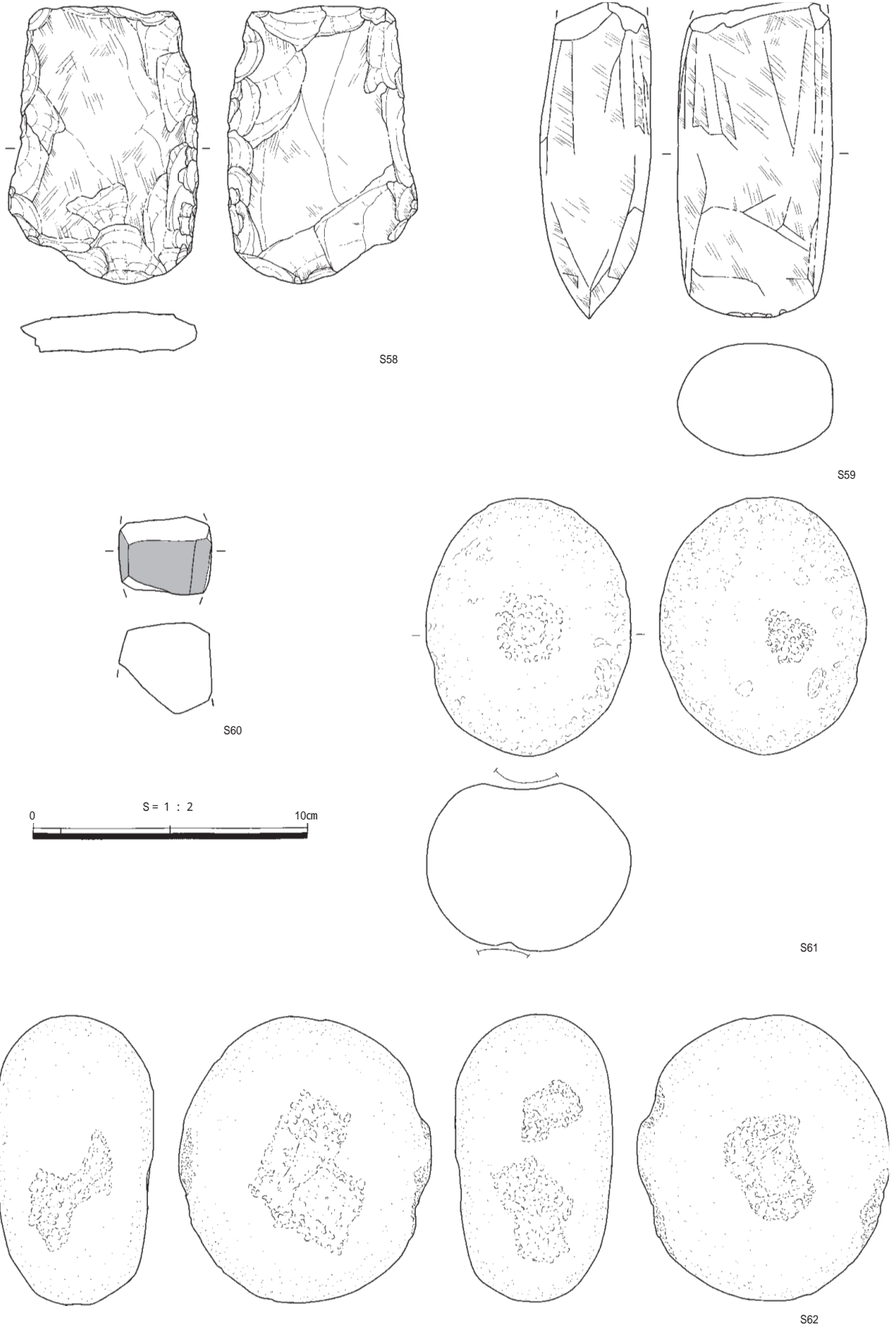
SD 5 の東側を並行して延びる溝である。北側は調査区外に続く。その延長方向にある平成16年度調査のSD 3 につながる可能性もあるが、土層断面の観察ではSD 6 はSD 5 を切っており、SD 5 と平成16年度調査のSD 2 が同一遺構だとすれば切り合い関係が矛盾する。調査区の南北方向のほぼいっばいで検出できたが、南にいくほど狭く浅くなり、また途中で途切れていたことから、南側の調査区外へ長く延びることはないと思われる。幅は最大で1.0m、深さは0.3mを測る。SD 4・5 に比べ埋土の砂質度が強く流水していたと考えられる。底面のレベルは北端が24.9m、南端が25.2mとなり、北方向への流れが窺える。

遺物は大量に出土した。土器は弥生時代中期前葉から終末期まで認められる。口縁部の集計では弥生時代中期前葉33点、中期前葉と思われる無文のもの33点、中期中葉 3 点、内訳が示せないが後期全体では44点であった。SD 5 で主体を占めた後期中葉が基本的になく、後期初頭から前葉が多い。終

第3章 調査の成果



第19図 SD5 出土遺物 (3)



第20図 SD5 出土遺物(4)

第3章 調査の成果

表7 SD5出土土器観察表

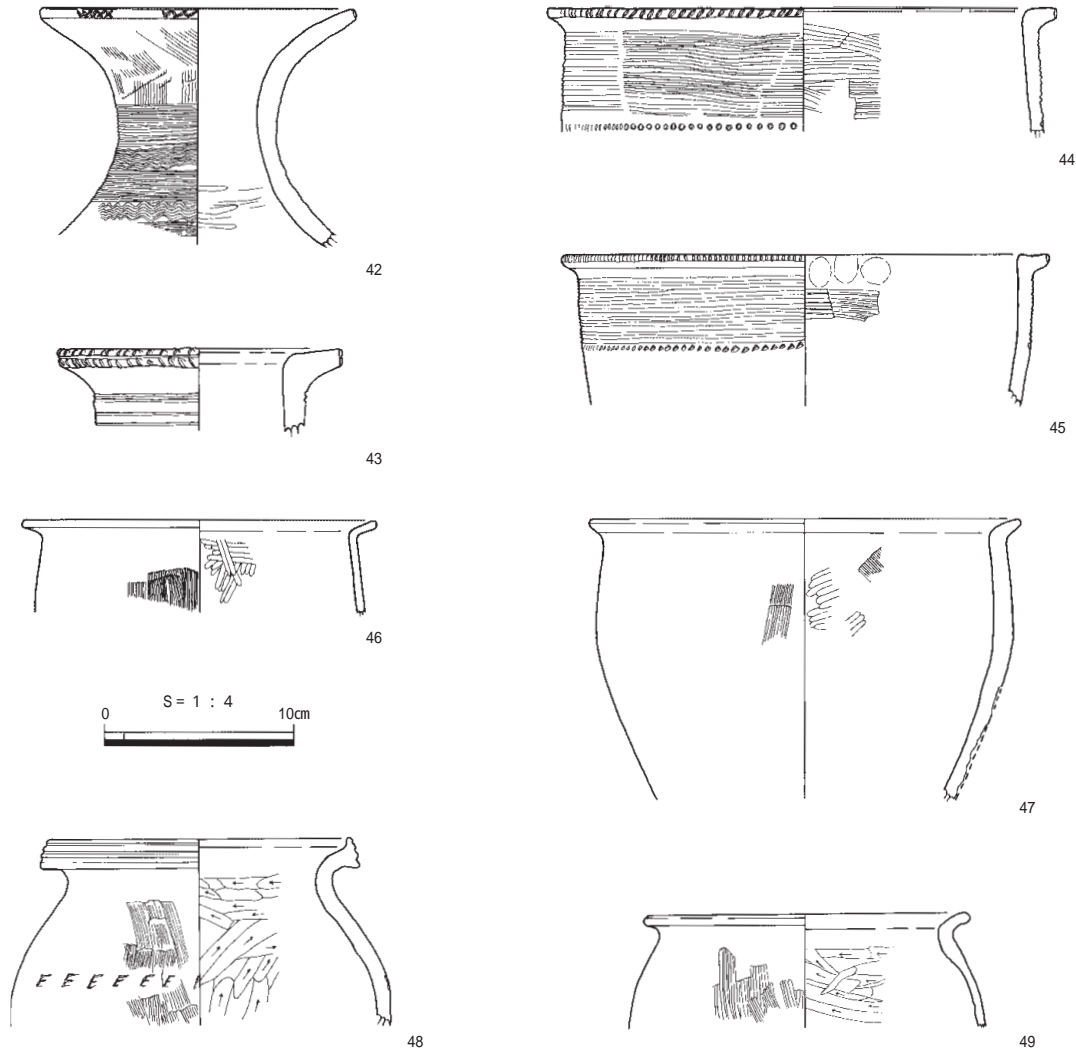
遺物 No.	遺構 層位	器 種	口径 (cm) 器高 (cm)	部 位 残存率	調整・文様	胎 土	色 調	焼成	備 考	取り上げNo.
21	SD5 埋土	縄文土器 深	7.3	口縁部 破片	外面：口縁端部沈線・刻目、楕円状区画内にRL縄文充填？ 内面：ナデ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		4781
22	SD5 埋土	弥生土器 壺	18.0 6.4	口縁-頸部 破片	外面：口縁部矢羽状刻目、頸部八ヶ ミガキ 内面：ナデ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	良好		4347
23	SD5 埋土	弥生土器 甕	14.6 6.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部刻目、頸部楕圓平行線・刺突文 内面：口縁部ナデ、体部八ヶ ミガキ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好		4064
24	SD5 埋土	弥生土器 甕	21.4 4.6	口縁-体部 破片	外面：口縁部刻目、頸部楕圓平行線 内面：口縁部ナデ、体部ミガキ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		4298
25	SD5 埋土	弥生土器 甕	25.0 8.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部刻目、体部八ヶ ミガキ・ナデ 内面：口縁部八ヶ、体部八ヶ ミガキ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		4048
26	SD5 埋土	弥生土器 壺	11.5 4.7	口縁-体部 1/4	外面：口縁部-体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	頸部2単位 の穿孔、外 面赤色塗彩	3249
27	SD5 埋土	弥生土器 甕	23.0 5.1	口縁-体部 破片	外面：口縁部ナデ、体部八ヶ ヨコナデ 内面：口縁部-体部ミガキ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐-橙色	良好		4166
28	SD5 埋土	弥生土器 甕	13.4 4.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条の多条平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径1mm以下の 砂粒	外面：にぶい黄色 内面：灰黄色	良好		1110
29	SD5 埋土	弥生土器 甕	16.0 6.1	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条の多条平行沈線、頸部ナデ、体部八ヶ ミガキ 内面：口縁部-頸部ヨコナデ、体部ケズリ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：橙-にぶい赤褐色 内面：橙色	良好		4261
30	SD5 埋土	弥生土器 甕	18.4 7.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部5条の多条平行沈線、頸部・肩部刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径3mm以下の 灰色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		4485
31	SD5 埋土	弥生土器 甕	14.0 4.2	口縁-体部 破片	外面：口縁部6条の多条平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1.5mm以下 の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙-明黄褐色	良好		4518
32	SD5 埋土	弥生土器 甕	19.4 6.0	口縁-体部 1/4	外面：口縁部11条の多条平行沈線、肩部板状工具による 押引文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径2mm以下の 砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好		4734
33	SD5 埋土	弥生土器 甕	15.8 5.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁11条の波状文、頸部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径1mm大の砂 粒	外面：橙-浅黄褐色 内面：明黄褐-橙色	良好		4382
34	SD5 埋土	弥生土器 甕	10.4 4.3	口縁-体部 1/5	外面：口縁部板状工具による押引文、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ、体部ヘラケズリ	径2mm以下の 砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		4056
35	SD5 埋土	弥生土器 甕	18.2 5.1	口縁-体部 1/4	外面：口縁部多条平行沈線、肩部板状工具による押引文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径2mm以下の 白・灰色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	内外面風化	4097
36	SD5 埋土	弥生土器 甕	15.4 4.6	口縁-体部 1/4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部板状工具による押引文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		4742
37	SD5 埋土	弥生土器 甕	19.0 6.1	口縁-体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、体部八ヶ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	良好		4398
38	SD5 埋土	弥生土器 甕	19.4 6.5	口縁-体部 1/8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・楕圓平行線 内面：口縁-頸部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄色 内面：浅黄色	良好	4169・4458・ 4538・4539	
39	SD5 埋土	弥生土器 甕	14.6 15.6	口縁-体部 1/4	外面：口縁-頸部ヨコナデ、体部八ヶ 波状文 内面：口縁-頸部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白・灰色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	4402・4408・ 4409・4410	
40	SD5 埋土	弥生土器 甕	19.4 6.1	口縁-頸部 1/4	外面：口縁-頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白・灰色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	4479・4809・ 4533	
41	SD5 埋土	弥生土器 鼓形器台	18.8 7.8	口縁-脚部 1/6	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ミガキ、頸部ミガキ、脚部ケズリ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：灰-橙色 内面：浅黄褐色	良好		4072

表8 SD5出土石器観察表(1)

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げ
S12	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.91	1.36	0.22	0.5	4543
S13	第18図 PL.20	SD5	石鏃未成品	サヌカイト	1.5	1.27	0.19	0.4	1112
S14	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.71	1.28	0.32	0.8	4434
S15	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.9	1.55	0.35	1.0	4495
S16	第18図 PL.20	SD5	石鏃未成品	サヌカイト	1.61	1.5	0.2	0.6	4532
S17	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.85	1.4	0.26	0.6	1102
S18	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.93	1.45	0.32	0.8	4135
S19	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.41	1.26	0.22	0.4	4543
S20	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	1.48	1.78	0.36	0.8	4532
S21	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.17	1.5	0.22	0.8	4429
S22	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.29	1.7	0.35	1.0	4136
S23	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.25	1.7	0.3	0.9	4507
S24	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.25	1.62	0.35	0.9	4271
S25	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.89	1.38	0.2	0.9	3235
S26	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.15	1.62	0.22	0.8	4195
S27	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.94	2.01	0.38	1.6	4499
S28	第18図 PL.20	SD5	石鏃未成品	サヌカイト	2.5	2.45	0.45	1.7	3228
S29	第18図 PL.20	SD5	石鏃	黒曜石	3.02	1.18	0.61	1.7	4348
S30	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	3.19	0.67	0.5	1.5	4276
S31	第18図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	3.3	0.8	0.45	1.7	4705
S32	第18図 PL.20	SD5	石鏃未製品	サヌカイト	4.0	0.9	0.4	2.1	4184
S33	第18図 PL.20	SD5	石匙	サヌカイト	3.08	4.32	0.48	6.3	1105
S34	第19図 PL.19	SD5	直方体素材	碧玉	2.87	1.75	2.2	12.8	3227
S35	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.55	1.8	0.98	7.2	4236
S36	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.38	1.79	1.18	5.9	4342
S37	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.25	0.71	1.1	2.4	4156
S38	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	1.6	1.6	0.73	1.6	1103
S39	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	1.35	0.82	1.05	1.8	1111
S40	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	1.0	1.25	1.2	1.2	4350
S41	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	1.0	0.9	0.45	0.5	4350
S42	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	1.55	0.6	0.65	0.9	4842
S43	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.42	0.99	0.44	1.4	4159
S44	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.22	0.59	0.46	0.9	4278
S45	第19図 PL.19	SD5	板状素材	碧玉	3.15	3.7	0.85	11.4	4155
S46	第19図 PL.19	SD5	板状素材	碧玉	2.6	3.35	0.7	8.3	3227
S47	第19図 PL.19	SD5	板状素材	碧玉	4.05	2.4	0.8	8.5	4238
S48	第19図 PL.19	SD5	板状素材	碧玉	2.5	3.5	0.4	5.9	4716
S49	第19図 PL.19	SD5	角柱状素材	碧玉	2.2	1.55	0.46	2.6	4505
S50	第19図 PL.20	SD5	石鏃	サヌカイト	2.16	0.94	0.35	1.0	4543

表9 SD5出土石器観察表(2)

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げ
S51	第19図 PL.19	SD5	石錐	玉髓	1.45	0.45	0.3	0.3	4848
S52	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	5.15	3.35	0.3	7.2	4531
S53	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	2.15	0.9	0.15	0.5	1105
S54	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	5.5	1.95	0.35	5.9	4431
S55	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	2.8	1.45	0.25	1.5	1105
S56	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	2.75	0.95	0.2	0.7	4256
S57	第19図 PL.19	SD5	石鋸	結晶片岩	2.5	1.1	0.25	1.4	4501
S58	第20図 PL.18	SD5	石鋸	安山岩	10.15	6.9	1.45	150.0	4509
S59	第20図 PL.16	SD5	石斧	閃緑岩	11.5	5.7	4.1	490.0	4480
S60	第20図 PL.23	SD5	砥石		2.85	3.4	3.3	37.8	4476
S61	第20図 PL.16	SD5	敲石	安山岩	9.4	7.6	6.0	550.0	4140
S62	第20図 PL.16	SD5	敲石	安山岩	10.5	9.3	5.3	670.0	4131

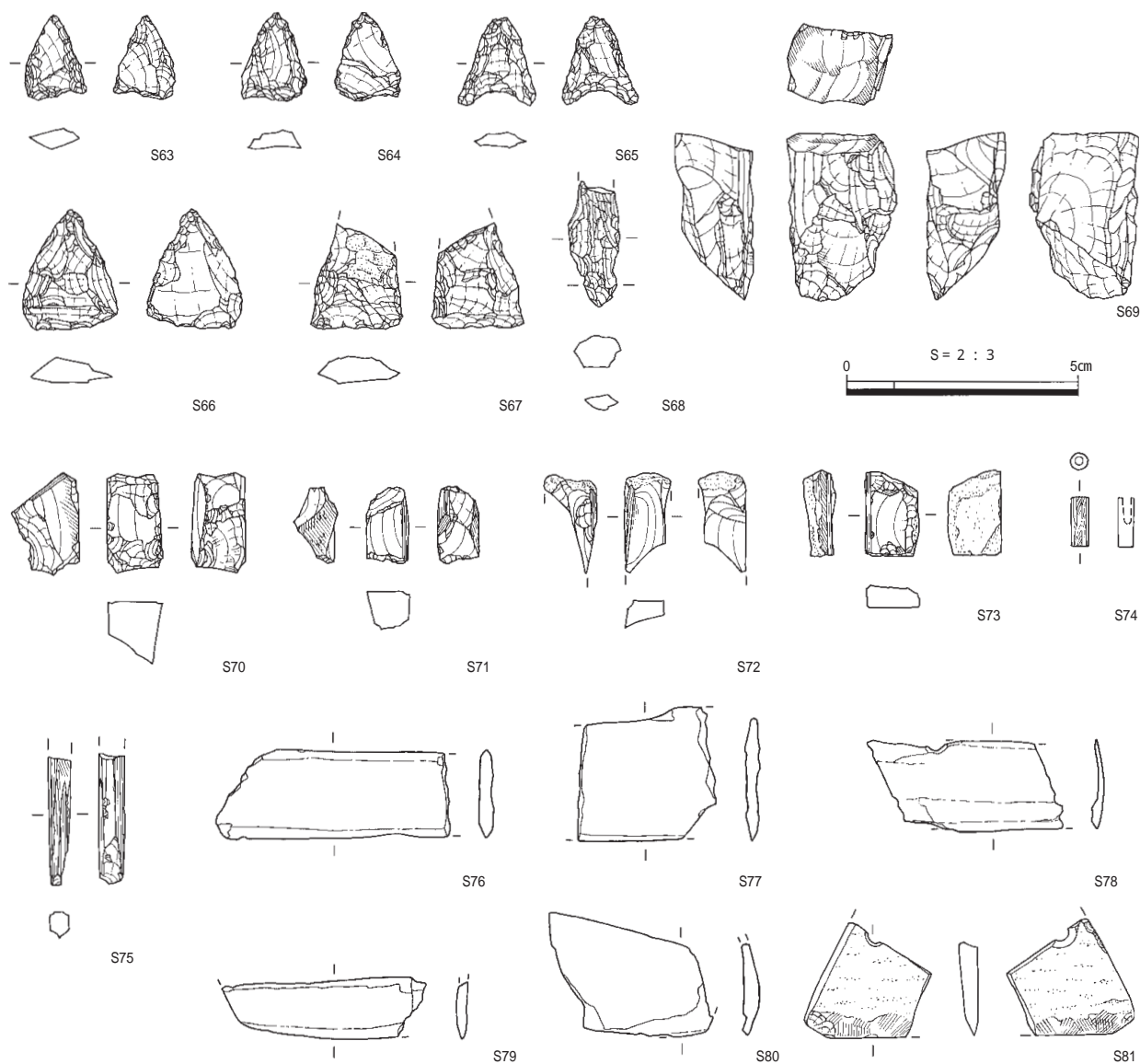


第21図 SD6出土遺物(1)

表10 SD6出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
42	SD6埋土	弥生土器壺	16.0 9.8	口縁-体部 1/6	外面:口縁部3条の多条平行沈線、頸部ナデ、体部ハケ、板状工具による刺突文 内面:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径5mm以下の砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		3571・3755
43	SD6埋土	弥生土器壺	15.0 4.3	口縁-頸部 破片	外面:口縁部矢羽状刻目、頸部平行沈線 内面:口縁部ヨコナデ	径2mm以下の砂粒	外面:浅黄-にぶい黄色 内面:浅黄色	良好		3732
44	SD6埋土	弥生土器甕	26.6 6.5	口縁-頸部 破片	外面:口縁部刻目、頸部櫛描平行線・刺突文 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	径5mm以下の砂粒	外面:橙色 内面:橙色	良好		3514・3769
45	SD6埋土	弥生土器甕	22.8 7.8	口縁-頸部 破片	外面:口縁部刻目、頸部櫛描平行線・刺突文 内面:口縁部ヨコナデ、指オサエ、頸部ハケ	径4mm以下の砂粒	外面:淡黄-黄灰色 内面:にぶい黄褐色	良好		3627
46	SD6埋土	弥生土器甕	18.4 4.8	口縁-頸部 破片	外面:口縁部ナデ、頸部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ	径0.5mm以下の砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:灰黄褐-橙色	良好		3577
47	SD6埋土	弥生土器甕	22.0 14.6	口縁-体部 1/6	外面:口縁部ナデ、体部ハケ、ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径3mm以下の砂粒	外面:灰黄褐色 内面:にぶい黄褐-褐色 灰色	良好	SD6(3813) と接合	3273・3281・3307・ 3813(SD6)
48	SD6埋土	弥生土器甕	16.0 9.8	口縁-体部 1/6	外面:口縁部3条の多条平行沈線、頸部ナデ、体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面:にぶい橙-にぶい黄褐色 内面:明赤褐-褐灰色	良好		3520
49	SD6埋土	弥生土器甕	17.0 6.0	口縁-体部 破片	外面:口縁-頸部ヨコナデ、体部ハケ 内面:口縁-頸部ヨコナデ、体部ケズリ	径1.5mm以下の砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		3567

第3章 調査の成果

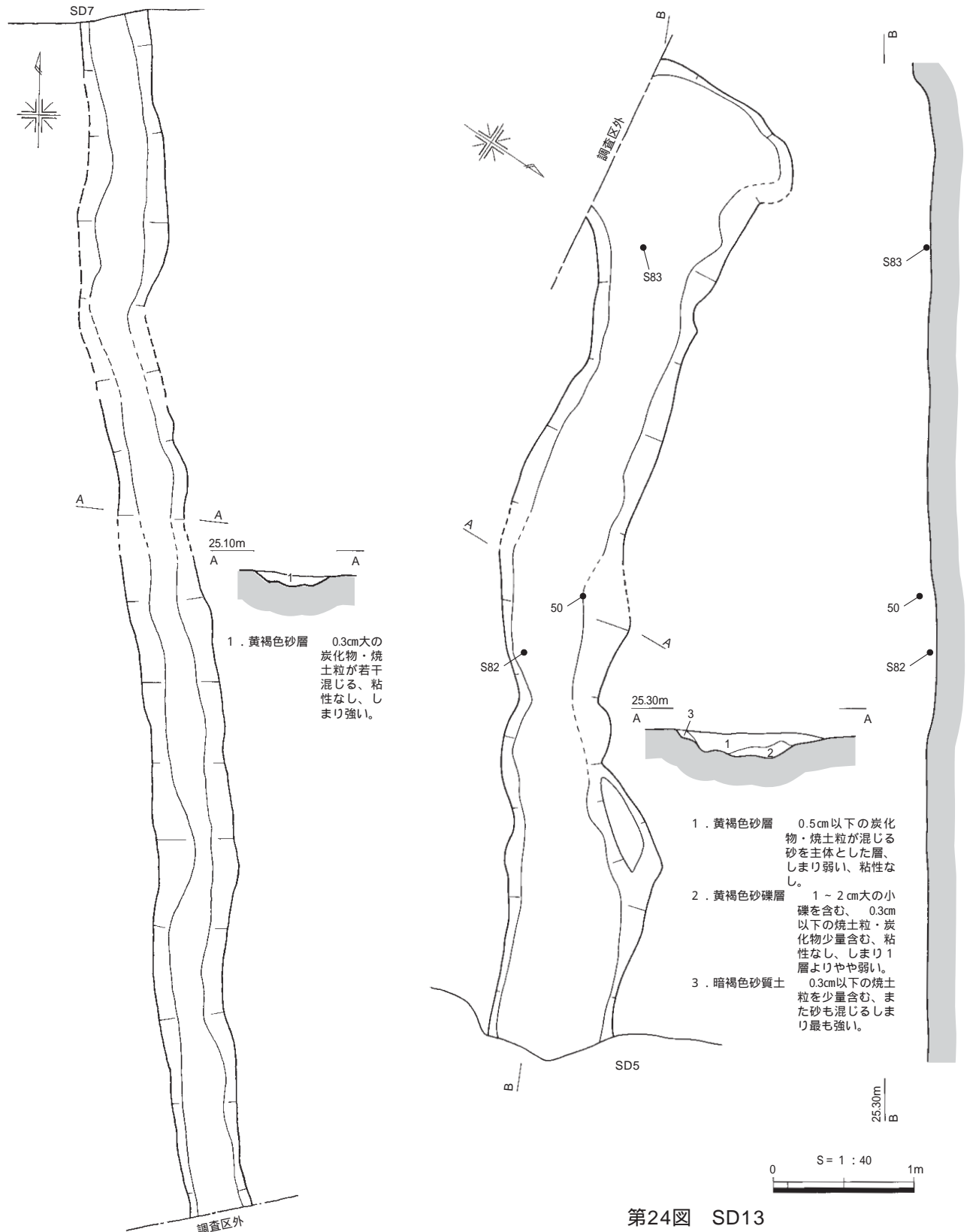


第22図 SD6出土遺物(2)

表11 SD6出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S63	第22図 PL.20	SD6	石鏃未成品	サヌカイト	1.8	1.32	0.39	0.8	3687
S64	第22図 PL.20	SD6	石鏃未成品	サヌカイト	1.94	1.41	0.38	1.1	3659
S65	第22図 PL.20	SD6	石鏃	サヌカイト	1.9	1.69	0.3	0.8	3217
S66	第22図 PL.20	SD6	石鏃未成品	サヌカイト	2.6	2.05	0.52	2.4	3754
S67	第22図 PL.20	SD6	石鏃未成品	サヌカイト	2.25	2.0	0.58	2.7	3794
S68	第22図 PL.20	SD6	石鏃未製品	サヌカイト	2.72	1.1	0.69	2.5	3223
S69	第22図 PL.19	SD6	角柱状素材	碧玉	3.6	3.4	1.6	16.6	1700
S70	第22図 PL.19	SD6	角柱状素材	碧玉	2.18	1.2	1.32	4.3	3684
S71	第22図 PL.19	SD6	角柱状素材	碧玉	1.67	0.9	0.8	1.8	3500
S72	第22図 PL.19	SD6	角柱状素材	碧玉	2.16	1.0	0.5	1.5	3679
S73	第22図 PL.19	SD6	角柱状素材	碧玉	1.81	1.12	0.5	1.9	3752
S74	第22図 PL.19	SD6	管玉未製品	碧玉	1.09	0.39	0.39	0.3	3848
S75	第22図 PL.19	SD6	管玉未製品	碧玉	2.74	0.5	0.59	1.0	3850
S76	第22図 PL.19	SD6	石鏃	結晶片岩	5.05	1.9	0.35	5.3	3800
S77	第22図 PL.19	SD6	石鏃	結晶片岩	3.0	2.9	0.35	4.6	3550
S78	第22図 PL.19	SD6	石鏃	結晶片岩	4.2	1.95	0.25	2.7	3692
S79	第22図 PL.19	SD6	石鏃	結晶片岩	4.4	1.35	0.3	2.4	3846
S80	第22図 PL.19	SD6	石鏃	結晶片岩	3.55	2.35	0.35	5.0	3688
S81	第22図 PL.19	SD6	石庖丁		2.51	2.72	0.39	2.8	1700

末期は1点であった。第21図に土器を掲げた。42と43は中期前葉の壺。42は広口壺で口縁部には斜格子文、頸部には直線及び波状の櫛描き沈線文を施す。43は厚手の口縁部が逆L字状に屈曲し、外面には有軸羽状文を施す。44と45は中期前葉の甕で、口縁端部にはキザミ、体部上半には櫛描き沈線文と刺突文が見られる。47は無文だが中期前葉のものであろう。46は中期中葉の甕。48の甕は口縁部外面



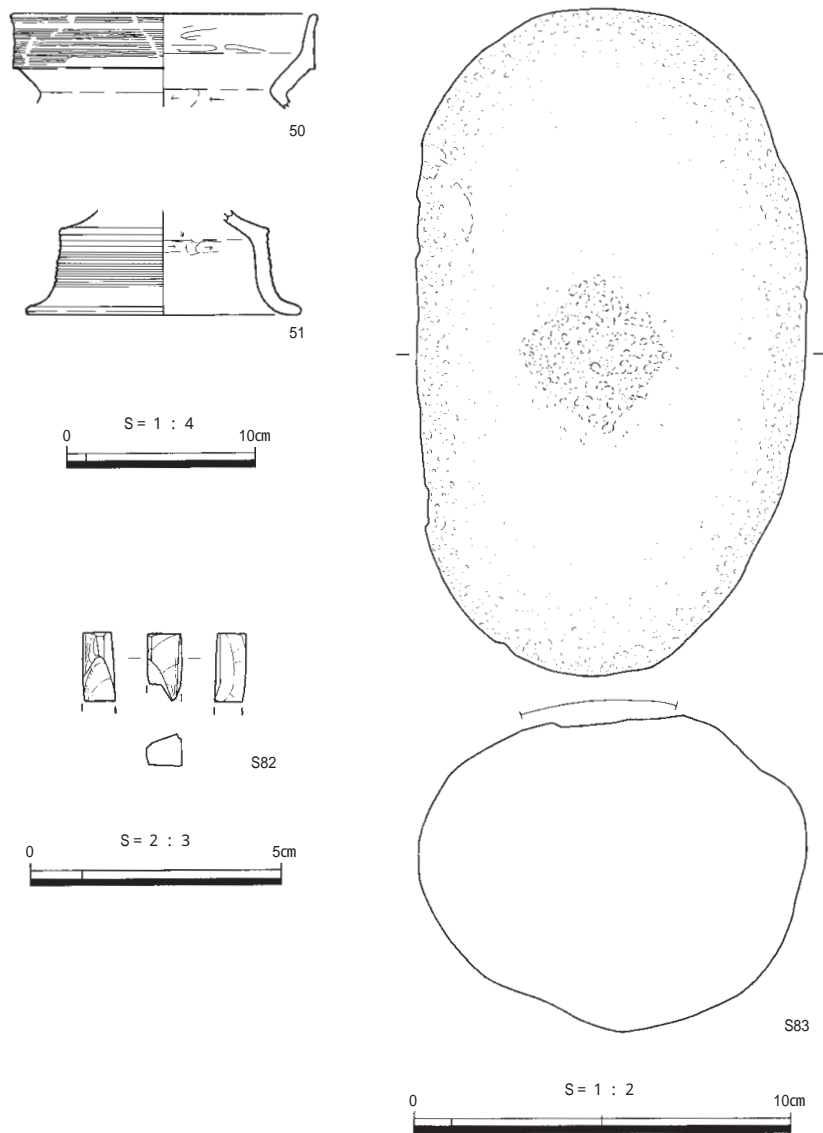
第24図 SD13

は凹線文だが、内面のケズリが頸部に達しており後期初頭に位置づけておく。49は単純口縁の甕。

第23図 SD12

剥片石器は礫石器の破片を除いて267点出土した。石材内訳はサヌカイト製が221点(82.8%)、黒曜石製が37点(13.9%)、瑪瑙・玉髓製が9点(3.4%)である。器種はSD5と同様、剥片や破片が多

第3章 調査の成果



第25図 SD13出土遺物

緑色凝灰岩を用いたものよりも長い管玉素材を生産していたことがわかる。S76からS80は片岩製の石鋸で、S76とS78は上下の縁辺を使用している。S81は石庖丁の破片。

礫石器は図示していないが、敲石が2点、砥石が1点、台石と思われるものが1点出土している。

SD4・5・6は切り合い関係から、SD5、SD6、SD4の順に新しい遺構である。それぞれに主体的に含まれる土器の時期にはズレがあるが、いずれも弥生時代終末から古墳時代前期初頭の土器を少量ながら伴っており、この時期の短い時間幅の中で連続して流れた自然流路であろう。

SD12 (第23図、PL. 8)

F6グリッドからG6グリッドにかけて、ほぼ南北方向に延びる溝である。南は調査区外へと延び、

表12 SD13出土土器観察表

遺物 No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
50	SD13埋土	弥生土器 甕	16.0 9.8	口縁部 破片	外面：口縁部7条の多条平行沈線、頸部ナデ 内面：口縁部ミガキ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	良好		5066
51	SD13埋土	弥生土器 台	17.0 6.0	脚部 1/6	外面：脚部5条の多条平行沈線、裾部ヨコナデ 内面：ケズリ、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好		5295

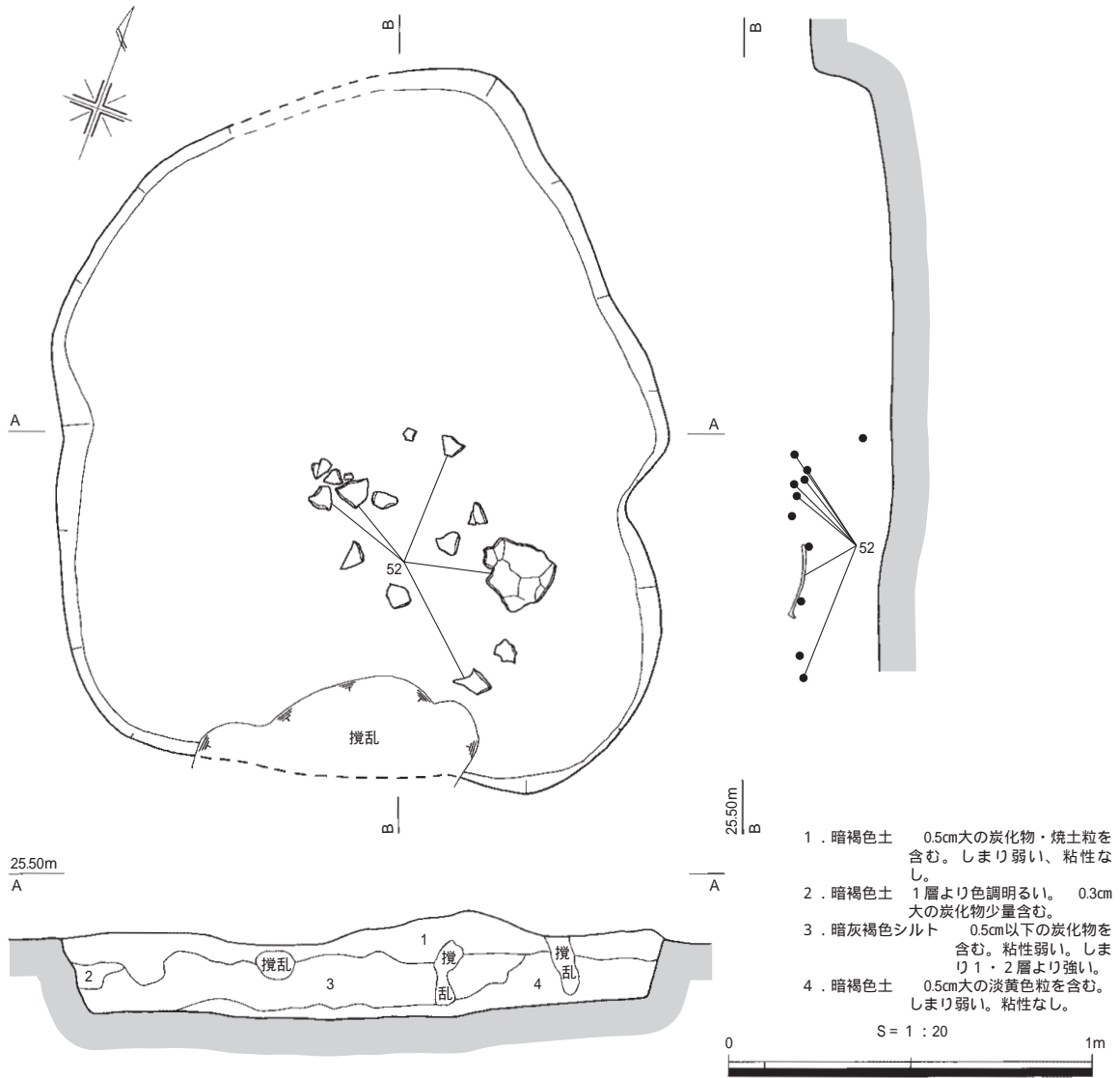
表13 SD13出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S82	第25図 PL.19	SD13	角柱状素材	碧玉	1.35	0.7	0.6	0.8	5065
S83	第25図 PL.16	SD13	敲石	安山岩	17.6	10.2	8.2	1,990.0	5182

数を占める。このほか管玉製作関連資料として、硬質緑色凝灰岩製の直方体素材や角柱状素材などが22点、軟質緑色凝灰岩製の板状素材などが3点、片岩製の石鋸が11点認められた。

S63からS67は石鏃で、未製品も含めて考えればSD5と同じくサヌカイト製の凹基式が多い。S68はサヌカイト製の石錐。加工が粗く、分厚いので未製品もしくは製作途中で破損したもののだろう。

S69からS74は硬質緑色凝灰岩製の管玉製作関連資料。直方体素材から施溝分割によって角柱状素材を生産し、管玉を作る工程が窺える。S74は半分程度まで穿孔した管玉の未製品である。S75は軟質緑色凝灰岩の角柱状素材である。硬質



第26図 SK8

北はSD7に切られ検出できていない。この間約8.5mを測る。幅は0.4mから0.5m、深さは0.1m程度と浅い。

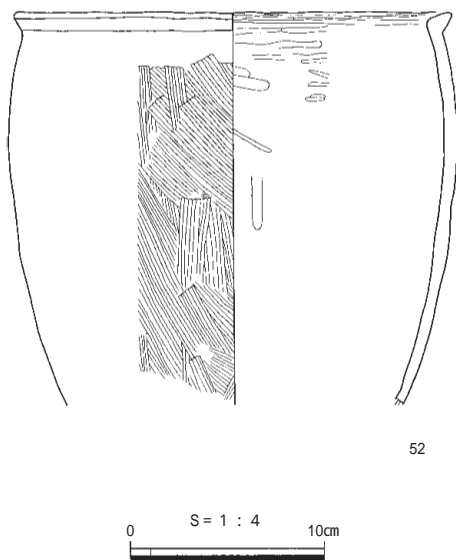
埋土は、炭化物や焼土粒が混じる黄褐色砂層で、地山との区別は明瞭である。

時期を特定する遺物を伴っていないが、調査区南壁の土層断面の観察で、層に覆われていることから弥生時代の遺構と判断した。

SD13 (第24・25図、表12・13、PL. 6・8・16・19)

調査区の中央寄り、南壁に近い位置で検出した。西側は調査区外へと延び、東はSD5と重なり、それ以上確認できていない。およそ7mを検出している。幅は0.6mから0.8m、深さは0.15m程度である。底面のレベルは東側が若干高い。

埋土は黄褐色砂層で、下層は2.0cm以下の小礫を含む砂礫層である。



第27図 SK8出土遺物

表14 SK8出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
52	SK8埋土	弥生土器 甕	22.5 20.5	口縁~体部 1/5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面：口縁部ミガキ、体部ナデ：≡ 方キ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：明褐色 内面：明褐色	良好	外面スス 付着	1136・1138・1143・ 1146・1153

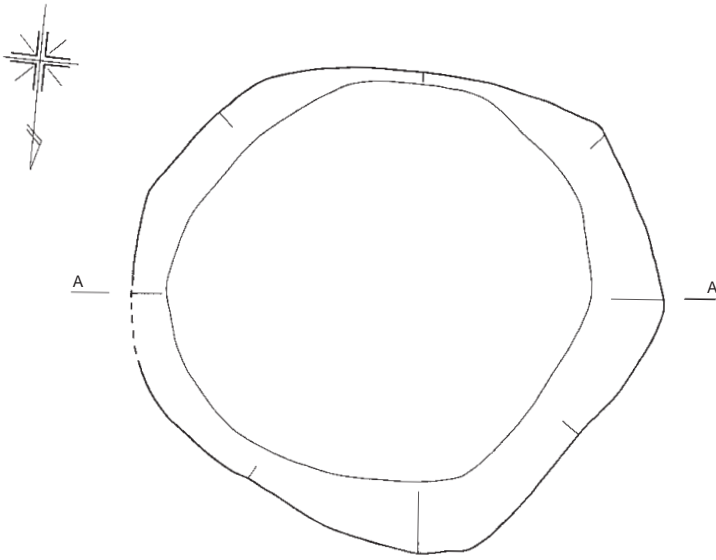
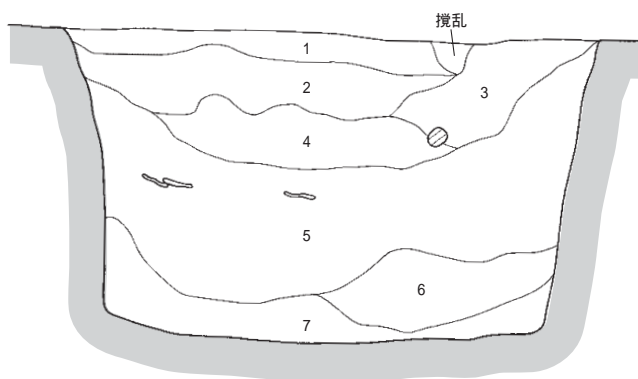
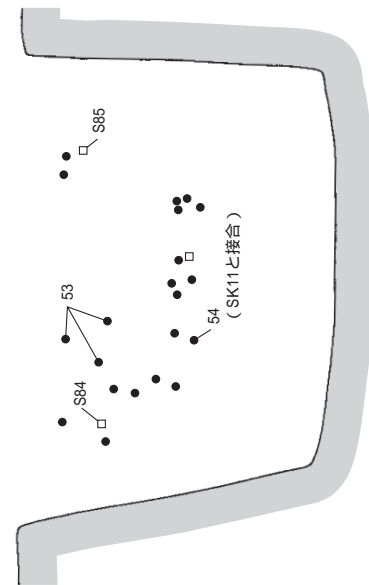
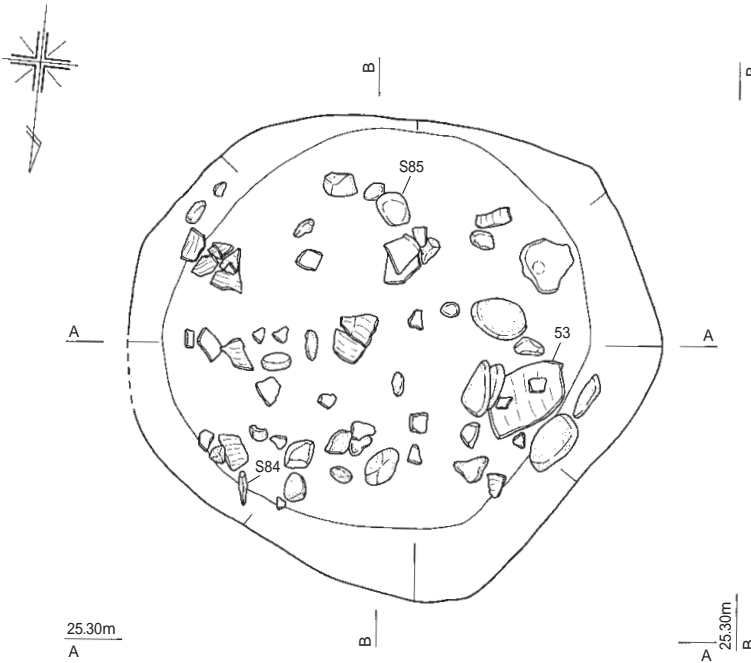
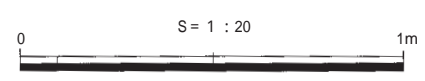


写真3 SK9遺物出土状況



1. 黒褐色土 2cm以下の炭化物を多く含む、0.3cm以下の焼土粒・黄色粒を含む、粘性なし、しまり弱い。
2. 黒褐色土 0.3cm以下の炭化物・焼土粒を少量含む、緻密、粘性なし、しまり1層より強い。
3. 暗灰褐色土 1.0～0.5cm大の淡黄色粒を斑状に含む、また0.5cm以下の炭化物少量含む、粘性なし、しまり2層より強い。
4. 暗灰褐色土 0.5cm以下の淡黄色粒・炭化物を含む、しまり3層より強い。
5. 黒褐色土 0.3cm以下の黄色粒・炭化物少量含む、粘性なし、しまり強い。



第28図 SK9

50は外面に多条平行沈線を巡らせる甕の口縁部。外反せずに直立気味に立ち上がる。51は鼓形器台の脚裾部。外面には多条平行沈線を巡らせ、内面にはケズリが認められる。高い立ち上がりであり、同じように深い器受部と細い筒部を有するものであろう。S82は硬質緑色凝灰岩製の角柱状素材である。両側縁に平行する溝を設け、施溝分割により作られたものとわかる。S83は敲石。厚みのある礫の一面に敲打痕が見られる。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられるが、SD5を完掘した後であったので両者の切り合い関係は不明である。

(3) 土坑

SK8 (第26・27図、表14、PL. 8)

E3グリッドの中央付近に位置する。一部攪乱により不明な部分もあるが、長軸2.0m、短軸1.7mを測る不整円形を呈する。壁面はしっかり立ち上がり、検出した深さは約0.2mであった。

埋土は大きく3枚に分かれる。上位(1層)と下位(4層)は粘性もしまりもない暗褐色の砂質土である。その間にある3層は、粘性は弱いがしまりのあるシルト質土層である。いずれも炭化物や黄褐色粘土粒などを含んでいる。

遺物は遺構内の東寄りにまとまっていた。底面直上のものはなく、埋土の上位から中位にかけて出土した。図示した52の甕破片が中心で、他の個体もあるようだが、いずれも小片で図示しえなかった。52は短く開く口縁部と張りのない体部をもつ。そのほかサヌカイトの剥片、破片が若干出土している。

出土遺物から弥生時代中期前葉に位置づけられる。

SK9 (第28・29図、表15・16、PL. 9・10・16・18)

G5グリッドの北寄りに位置する。ややいびつながら、径約1.4mの円形を呈する土坑である。

埋土は上位の1、2層が炭化物や焼土粒を含む黒褐色土で、SK9が掘り込まれていたあたりは地山の色調が明るく、平面検出は比較的容易であった。その下は暗灰褐色土(4層)をはさんで再び黒褐色土(5層)となる。遺物はこの5層から出土した。埋土下層の6、7層は地山との区別がつきにくく、底面の検出には手間取った。

遺物は土器や石器のほかに礫も多く見られた。土器破片はまとまって出土したかに見えたが、取り上げた土器の個体識別、接合作業を行ってみると、53はほぼ全体の形状が図上復元できたものの、それ以外は図示できるものはなかった。

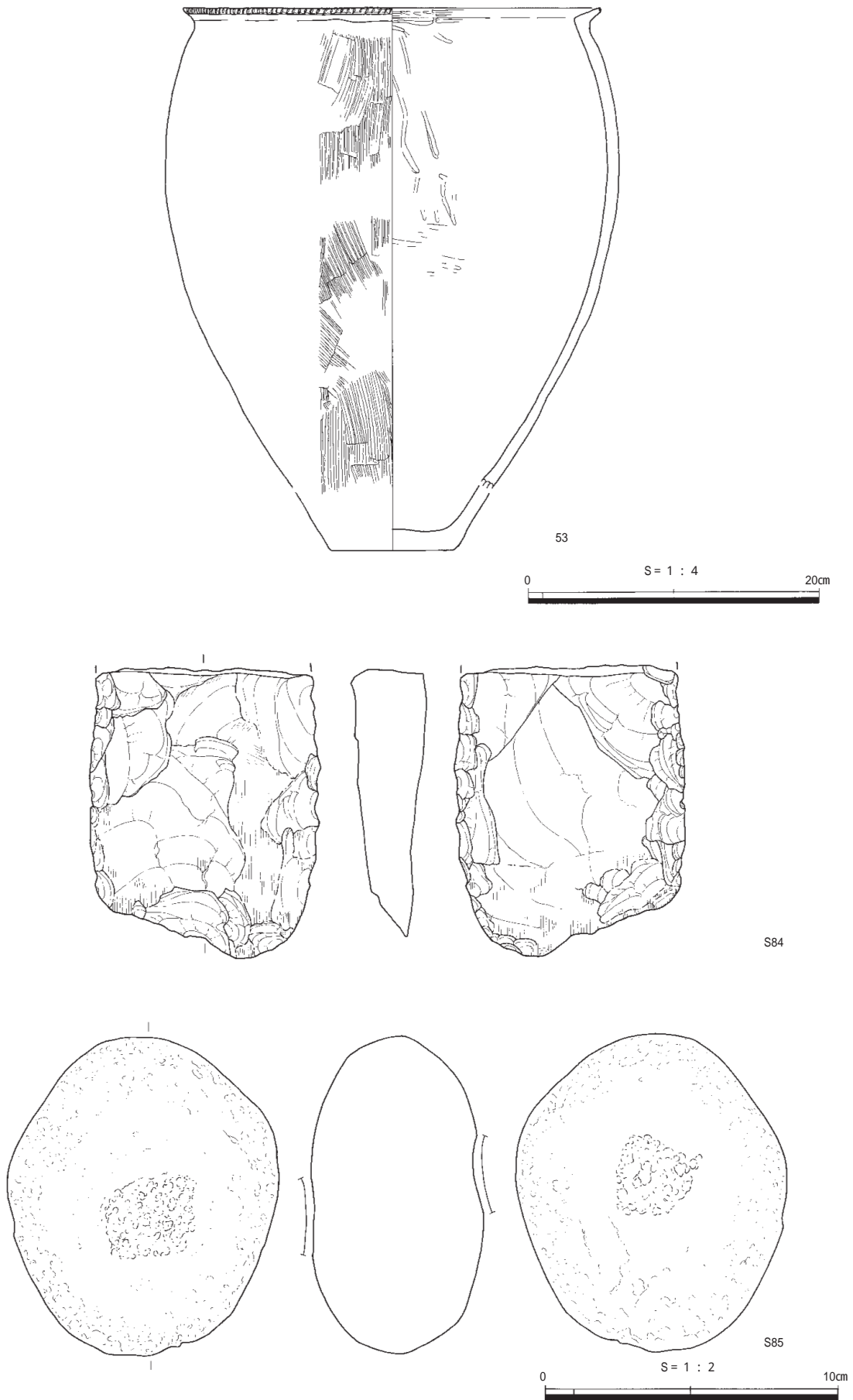
53は短く外反する口縁端部にキザミを施し、やや張り出す体部をもつ。底部は推定復元しているが、図のようにすぼまるものであろう。体部外面はハケメ調整。口縁部内面と体部内面はヘラミガキを施している。

石器は石鍬1点と敲石2点が出土している。S84は板状に割れる軟質の石材を用いた石鍬。周縁から加工を加え形を整えている。裏面には広く素材面を残す。刃部付近を中心に、使用によると思われる摩滅が著しい。基部側を欠損している。敲石は1点のみ図示した。S85は握り拳大の円礫を用いたもの。表裏両面の中央付近に敲打痕が見られる。

SK9は、出土した土器から弥生時代中期前葉に位置づけられる。

SK11 (第30・31図、表17、PL. 10)

SK9の北に近接する。長軸1.7m、短軸1.1mの不整形である。壁面はしっかりと立ち上がり、検出した深さは0.2mを測る。



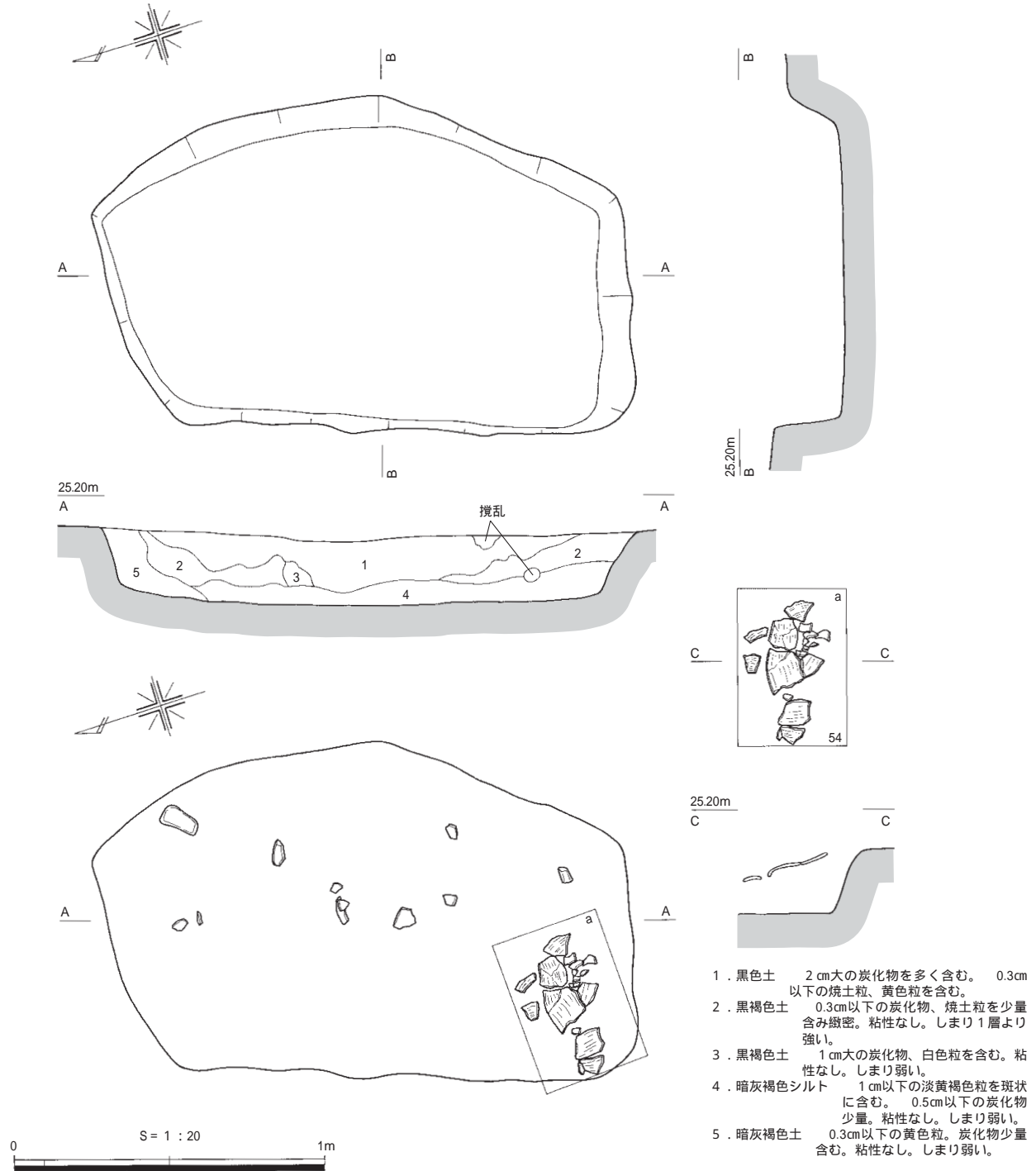
第29図 SK 9 出土遺物

表15 SK9出土石器観察表

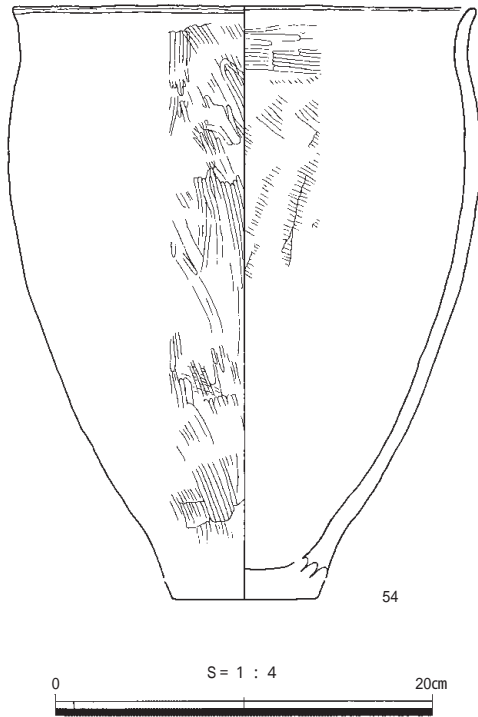
遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
53	SK9埋土	弥生土器甕	28.4 36.8	口縁~体部 1/4	外面：口縁部刻目、頸部ヨコネデ、体部ハケ 内面：口縁部ミガキ、体部ナデ・ミガキ	径5mm以下の砂粒	外面：橙~明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	外面スス付着	1212・1213・1214・ 1219・1427

表16 SK9出土石器観察表

	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S84	第29図 PL.18	SK9	石鍬	安山岩	9.9	7.9	2.6	260.0	1225
S85	第29図 PL.16	SK9	敲石	安山岩	10.8	9.35	6.0	680.0	1226



埋土の状況を見ると、遺構中央に向かって堆積していった様子が見られ、周縁から徐々に埋もれていったようである。埋土上位は黒色または黒褐色の砂質土で、下位は暗灰褐色土となる。ともに炭化



第31図 SK11出土遺物

物や黄色粘土粒を含む。全体としてSK9の埋土とよく似ている。

遺物は西側隅に1個体分の土器片がまとまっていたが、それ以外は散漫であった。出土レベルは埋土の上位から中位を主体とする。若干底面に近い位置で出土したものもあるが、土層図と照らし合わせてみると、もともと底面にあったというよりは、埋没の過程で残されたものと考えられる。

図示できるものは、西側隅でまとまって出土した54のみである。口径が体部最大径とほぼ同じで、頸部の屈曲度、口縁部の外反度ともに弱く、外形は口縁部から体部へ緩やかに移行する。底部は認められなかったが、器壁の厚みなどからかなり近い部分まで残っていると思われる。図のように復元した。調整は、体部外面がハケメ後ヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、体部がハケメである。

SK11も出土した土器から弥生時代中期前葉に位置づけられる。近接するSK9とは出土した土器の状況などが似ているが、ともに性格は不明である。

表17 SK11出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
54	SK11埋土	弥生土器 甕	23.8 12.4	口縁-体部 1/6	外面：口縁部ナデ、頸-体部ハケミガキ 内面：口縁部ミガキ、体部ハケミガキ	径5mm以下の 白・灰色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面スス 付着	1135・1197・ 1438 (SK9)

SK12 (第32～34図、表18・19、PL. 11・12・19)

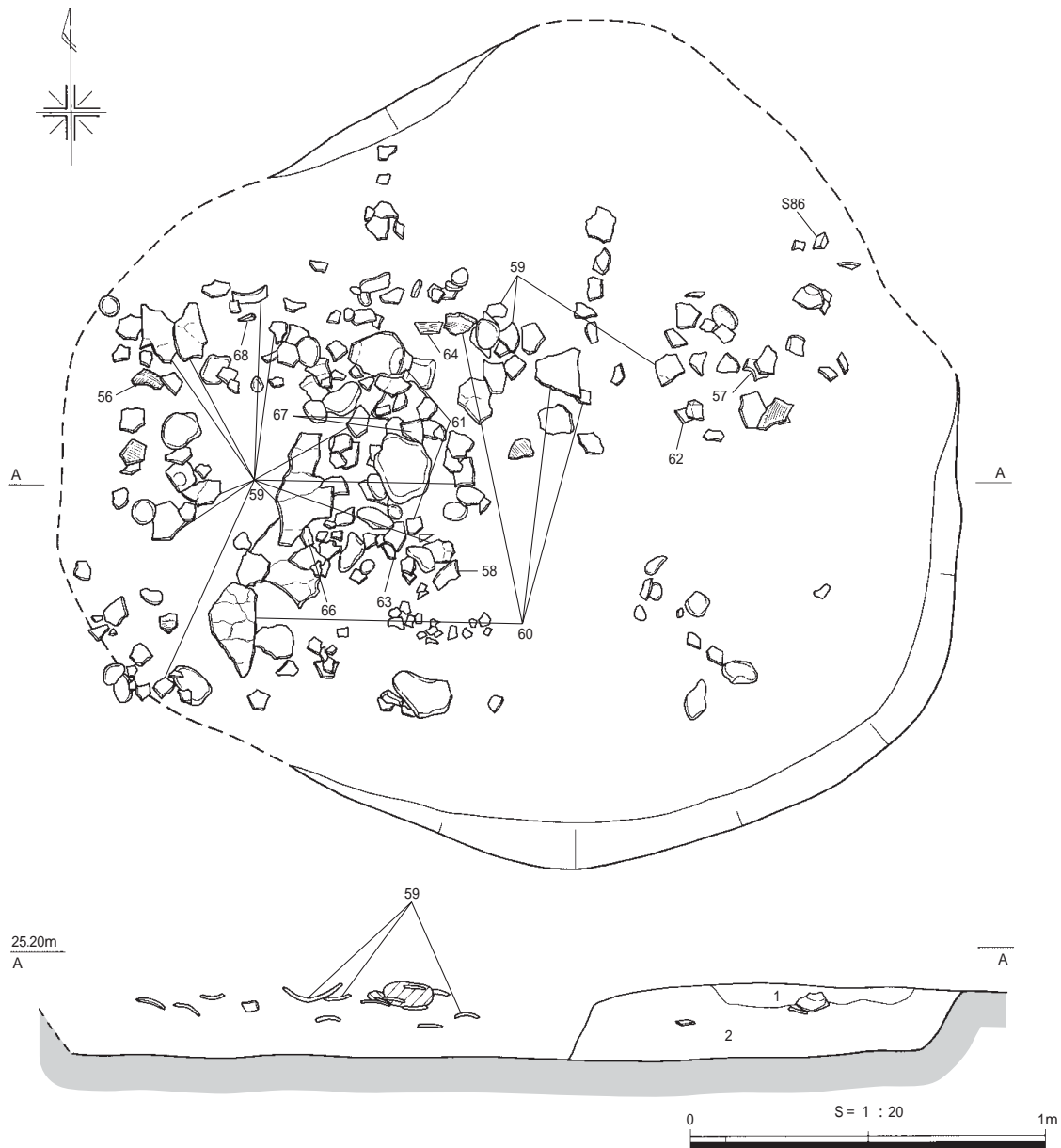
調査区の西側、中世等の遺構が密集して検出されたF7グリッドに位置する。調査開始間もないころから弥生土器が多数出土し、遺構の存在は明らかであったが、埋土と地山の区別が極めて困難で、掘り込みの東側から南側にかけてと、北側の一部が検出できたに過ぎない。推定であるが、径2.5m程度の不整形の土坑と思われる。確認できた深さは0.2mである。検出した部分で見ると、壁面の立ち上がりはしっかりしている。

先述のとおり、埋土は認識が困難であったが、検出した範囲で2層に分けた。1層は部分的に鉄分が沈着しており、この鉄分は土器にも付着している。2層は地山とよく似た黒褐色土で、炭化物、黄色粘土粒を含むかどうかの違いだけである。

土器は破片の状態、礫などと共にまとまって出土した。特に掘り込みの西側に集中している。出土レベルは埋土の上位から中位で、底面から出土したものはない。

第33図に土器を掲げた。すべて弥生時代中期前葉のものである。

55から61が壺である。55は口縁端部に三角形の刺突文を加え、頸部外面には櫛状工具による多条沈線文を施す。56は口縁部外面にキザミ、頸部外面に櫛状工具による多条沈線文をそれぞれ施すほか、口縁部内面にタテ及びヨコ方向の沈線を加える。57、58は頸部以下を欠失している。59は口縁端部に斜格子文を、頸部外面から肩部にかけて櫛状工具による多条沈線文と刺突文を施し、さらに円形浮文を貼り付ける。体部の張りは弱い。60は口縁端部のキザミが上端、下端と分けて施される。頸部外面



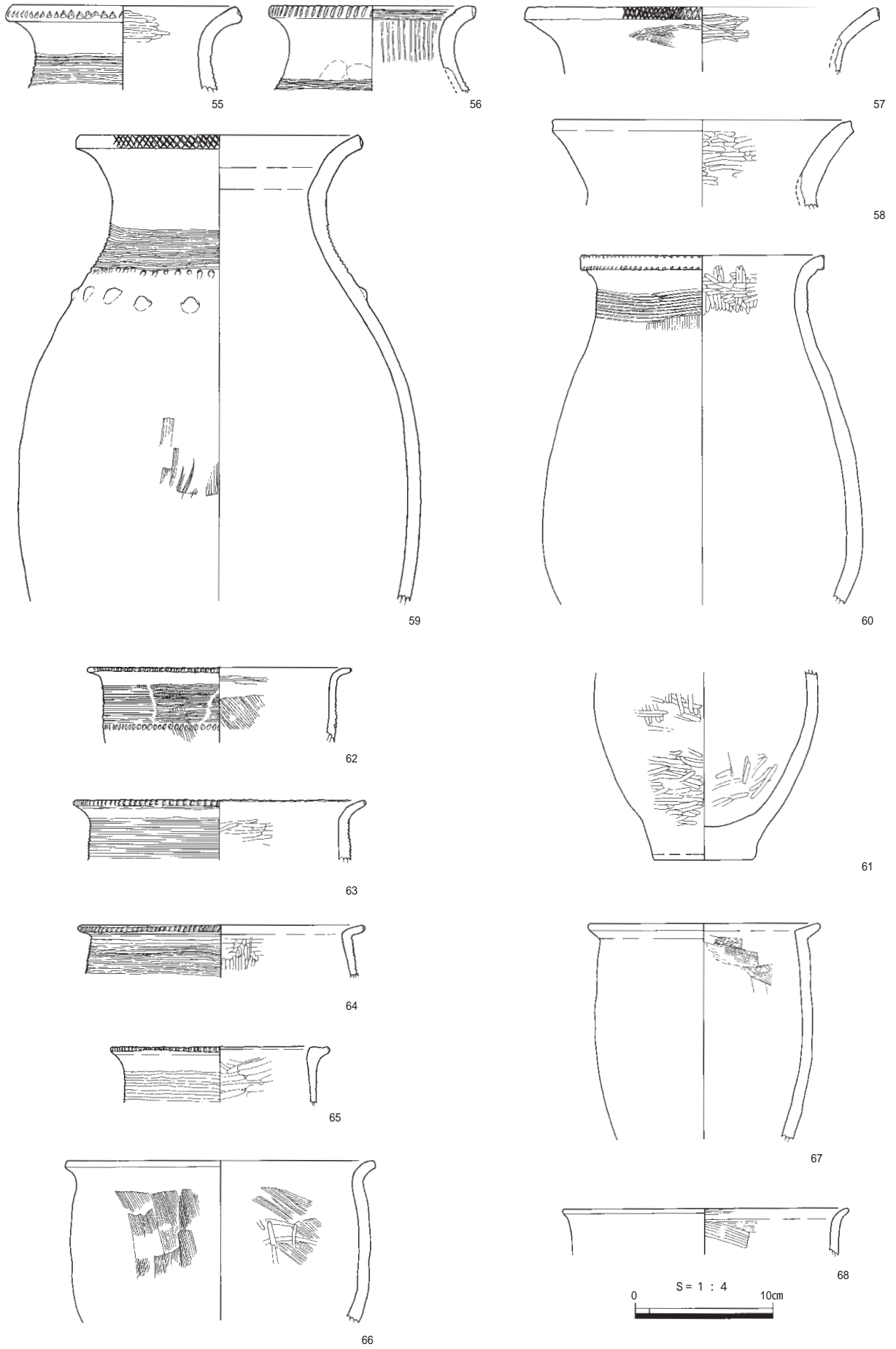
第32図 SK12

には櫛状工具による多条沈線文を巡らせる。体部の張り、頸部の屈曲ともに弱いため、外形は口縁部から体部へ緩やかに移行する。61は小型の壺の体部下半から底部。

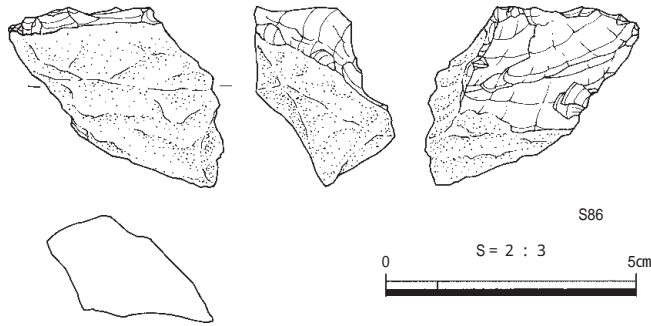
62から68は甕である。65までは口縁端部にキザミを、体部上半に櫛状工具による多条沈線文を施す。64、65、67は逆L字状口縁となる。

S86は硬質緑色凝灰岩製の管玉関連資料である。表面は自然面で、裏面は不規則な割れ方をしているが、1枚の剥離面である。自然面が多くを占めることや、打面の一部に濃緑色のさらに良質な部分を残すことから、粗割りした直方体素材ではなく、質の悪い部分を剥ぎとったものと考えられる。器面に研磨痕や施溝は認められない。こうした資料の存在は、管玉素材としての緑色凝灰岩が良質な部分のみ製作地に持ち込まれるわけではなかったことを示しているのだろう。製作地においては自然面等の使えない部分を剥ぎとる作業も行われていたと思われる。これ以外の石器は、黒曜石製の剥片と碎片が1点ずつあるのみである。

第3章 調査の成果



第33図 SK12出土遺物(1)



第34図 SK12出土遺物(2)

SK12は出土した土器がすべて弥生時代中期前葉のものであり、この時期の土坑と考えられる。南原千軒遺跡の土壌は基本的に砂質であるためか、土器表面の残り具合が非常に良く、ハケメやミガキといった調整がよく観察できるものがほとんどである。それに対して、このSK12から出土した土器は大きな破片がありながら土器の表面が荒れたものが多い。確認できた壁面の立ち上がりはしっかりしており、異なる時代の土器が混在するわけではないので、人為的な遺構と判断しているが、水の影響等により遺物が二次的に集積した可能性もまったくないとはいえない。

SK27(第35～37図、表20・21、PL.13～16・18・19)

G4グリッドの調査区南壁に接して検出された。調査開始当初、調査区壁際に土層観察と排水をかねたトレンチを掘ったところ土器破片が集中していたので、遺構の存在は予測できていた。

検出した範囲で長軸2.2mを測る。調査区外へどのような形で続くのか不明だが、検出できた平面形態から推測すると短軸1.7m程度の楕円形か、2.0m程度の不整形円形が考えられる。

壁面と底面の境が不明瞭な部分もあるが、壁面の立ち上がりはしっかりしており、深さは0.55mから0.9mを測る。

埋土は地山との区別が付きにくいものであった。わずかに含まれる炭化物や黄色粘土粒を手がかりに、検出、掘り下げを行った。長軸方向の土層断面では埋土は2枚しか認められなかったが、短軸方向を見るとブロック状に存在する土層が確認できた。

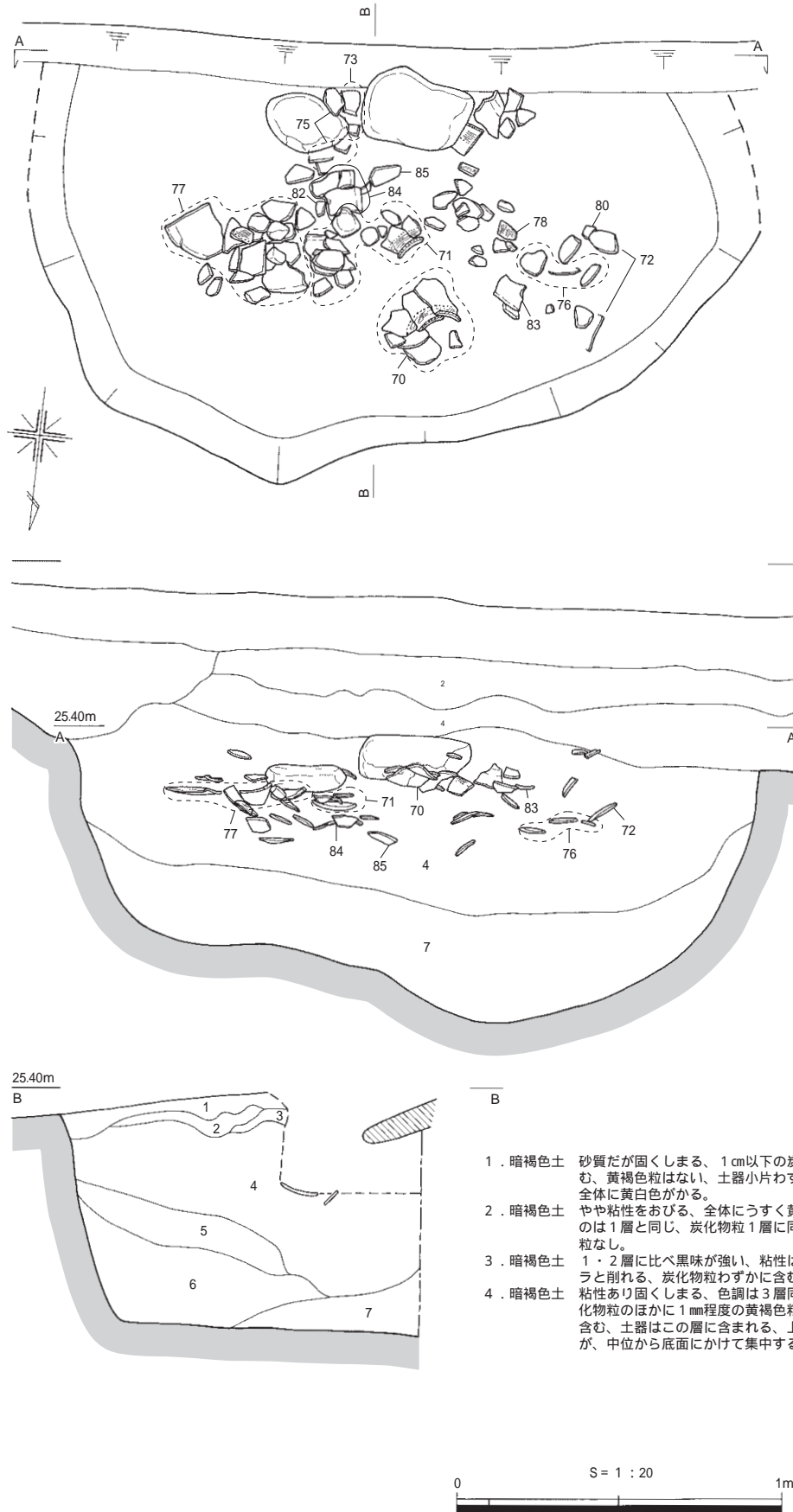
遺物は4層から、土器を主体にまとまって出土した。大型の破片も多く、接合した割合も高い。完形とまではいかないが、図上で全形を復元できたものも少なくない。出土レベルは埋土の上位から中位で、底面からはかなり浮いている。

表18 SK12出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
55	SK12埋土	弥生土器壺	16.0 6.0	口縁-頸部破片	外面:口縁部三角刺突文・頸部櫛描平行線 内面:口縁部ミガキ半・頸部ナデ	径4mm以下の砂粒	明褐色 内面:暗灰黄色	良好		761
56	SK12埋土	弥生土器壺	12.8 5.9	口縁-頸部破片	外面:口縁部刻目・頸部ナデ・櫛描平行線 内面:口縁部横位平行線・頸部縦位平行線	径3mm以下の砂粒	外面:褐色 内面:褐色	良好		754
57	SK12埋土	弥生土器壺	25.2 4.6	口縁-頸部破片	外面:口縁部X字状の刻目・頸部ハケ 内面:口縁部ミガキ	径5mm以下の砂粒	外面:浅黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		927
58	SK12埋土	弥生土器壺	21.0 6.1	口縁部破片	外面:口縁部ナデ 内面:口縁部ミガキ	径3mm以下の砂粒	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色-褐灰色	良好		824・892・893
59	SK12埋土	弥生土器壺	20.2 33.7	口縁-体部1/2	外面:口縁部X字状の刻目・肩部櫛描平行線・刺突文・突縁・体部ハケ 内面:口縁-頸部ナデ・体部風化のため調整不明	径5mm以下の砂粒	外面:黄褐色-暗褐色 内面:黄褐色	良好		751・753・756・759・769・770・805・820・821・827・871・875・876・883・885・890・902・904・918
60	SK12埋土	弥生土器壺	17.0 25.1	口縁-体部1/4	外面:口縁部刻目・頸部櫛描平行線・体部風化のため調整不明 内面:口縁-頸部ミガキ・体部ハケ ナデ	径5mm以下の砂粒	外面:黄褐色-暗褐色 内面:黄褐色	良好		748・760・827・891・895・896・900・903・946
61	SK12埋土	弥生土器壺	7.0(底) 13.5	体-底部1/3	外面:体部ミガキ 内面:体部-底部ナデ 部分的なミガキ	径3mm以下の砂粒	外面:黄褐色 内面:褐色	良好		752・778
62	SK12埋土	弥生土器壺	18.3 5.5	口縁-体部破片	外面:口縁部刻目・頸部櫛描平行線・刺突文・体部ハケ 内面:口縁-頸部ミガキ・体部ハケ	径5mm以下の砂粒	外面:褐色 内面:褐色	良好		922
63	SK12埋土	弥生土器壺	21.0 4.3	口縁-頸部破片	外面:口縁部刻目・頸部櫛描平行線 内面:口縁部ハケ・頸部ミガキ	径3mm以下の白色砂粒	外面:黄褐色-褐灰色 内面:にぶい褐色	良好		775
64	SK12埋土	弥生土器壺	21.0 3.6	口縁-頸部破片	外面:口縁部刻目・頸部櫛描平行線 内面:口縁部ナデ	径2mm以下の砂粒	外面:灰-にぶい黄褐色 内面:褐色	良好		899
65	SK12埋土	弥生土器壺	15.9 4.0	口縁-頸部破片	外面:口縁部刻目・頸部櫛描平行線 内面:口縁部ナデ・頸部ミガキ	径2mm以下の砂粒	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	良好		1162
66	SK12埋土	弥生土器壺	21.5 11.5	口縁-体部破片	外面:口縁部ヨコナデ・頸部-体部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ・体部ハケ ミガキ	径2mm以下の砂粒	外面:にぶい褐色 内面:明黄褐色-にぶい褐色	良好		773・827
67	SK12埋土	弥生土器壺	16.3 15.5	口縁-体部1/4	外面:口縁部ナデ・体部風化のため調整不明 内面:口縁部ナデ・頸部ハケ・体部ナデ	径5mm以下の砂粒	外面:にぶい褐色 内面:褐色	良好		827・880・882
68	SK12埋土	弥生土器壺	21.0 3.3	口縁-頸部破片	外面:口縁-頸部ナデ 内面:口縁部ハケ ナデ・頸部ハケ	径3mm以下の砂粒	外面:褐色 内面:褐色	良好		807

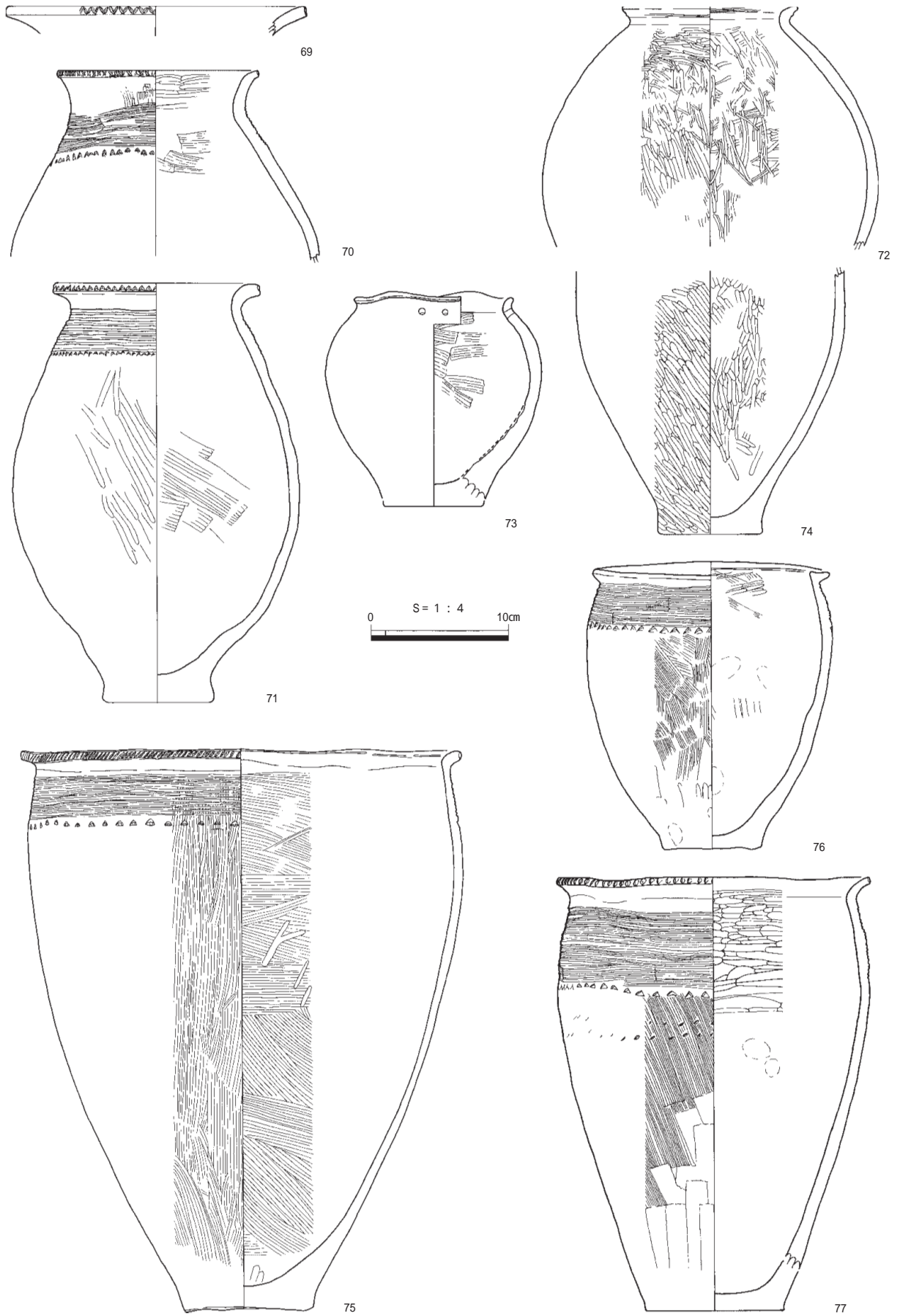
表19 SK12出土土器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S86	第34図 PL.19	SK12	直方体素材	碧玉	3.48	4.39	1.9	24.7	936



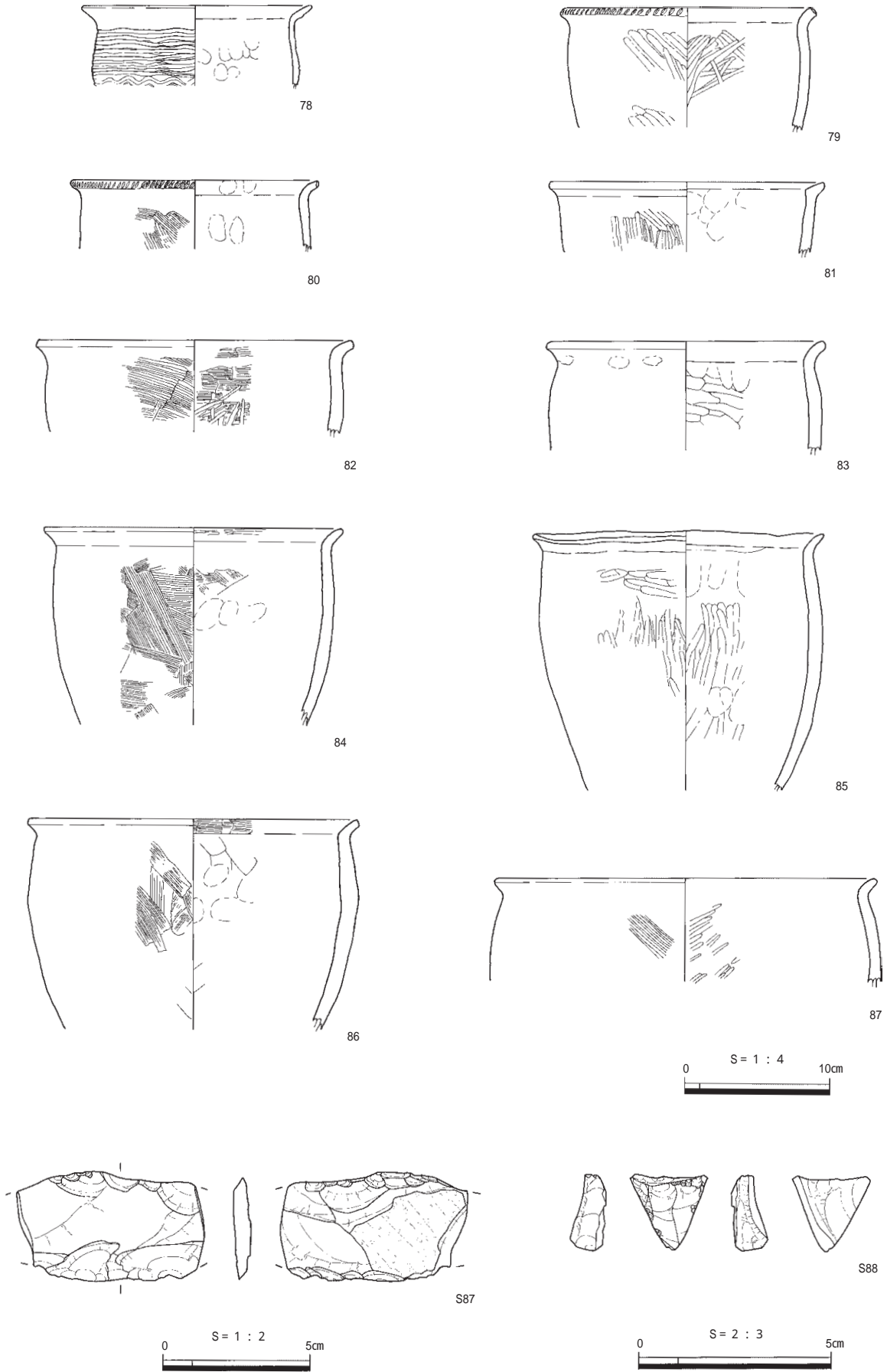
第35図 SK27

第36・37図に出土遺物を掲げた。69から74は壺である。69は広く開く口縁部で、端部には斜格子文が認められる。70は短く開く口縁部をもち、口縁端部には斜格子文、頸部外面から肩部にかけて櫛状工具による多条沈線文と三角形の刺突文を施す。71は短く開く口縁から続く体部上半は緩やかに張るが、体部下半のすぼまりは大きい。口縁端部には三角形の刺突文を加え、頸部が短いためほとんど肩とっていい位置に櫛状工具による多条沈線文と三角形の刺突文を施す。72は球胴状の体部をもち、内外面ともに細かなヘラミガキ調整が行われている。73は有蓋の無頸壺である。口縁部は短く立ち上がり、屈曲部に穿孔を施す。器高は低いが器壁は厚い。74は体部下半から底部。内外面の細かなヘラミガキ調整により壺とわかる。



第36図 SK27出土遺物(1)

第3章 調査の成果



第37図 SK27出土遺物(2)

75から87は甕。75は比較的大型のもので、口縁端部にキザミ、体部上半に櫛状工具による多条沈線文と三角形の刺突文を施す。76、77も体部上半に多条沈線文等を施す甕であるが、76は小型で逆L字状の口縁端部にキザミはない。77は多条沈線文と三角形の刺突文を施した下に、ヘラ状工具を軽く押し当てたような刺突文が認められる。文様と理解していいのか判断に迷うほど弱いものであるが、部分的に二段にわたり観察できる。78も体部上半に多条沈線文を施すが、他の甕に比べ器壁が薄く、口縁部もシャープで大きく外反する。79から87は体部が無文の甕である。

石器の出土数は少ない。S87は板状に割れる石材を用い、上下の側縁に加工を加えたものである。分割された素材の剥離面(素材面)を大きく残し、裏面には節理面も見られる。両端を欠損しており、明確に湾曲を認めたわけではないが、石鎌と考えられる。S88は硬質緑色凝灰岩製の管玉関連資料である。各面ともネガティブな剥離面で構成されている。研磨痕や分割のための施溝は見られない。整った形の素材というわけではなく、分割段階で生じた残片か。SK12の管玉関連資料とともに、南原千軒遺跡では弥生時代中期前葉には管玉製作が行われていたことが分かる。わずか2点でしかも具体的な製作工程が読み取れない資料であるが、両者ともに分割のための施溝は確認されていない。平成16年度調査ではSK20から石鋸が出土している。SK20は伴出した土器から、弥生時代中期中葉の土坑で、少なくともこの段階には管玉製作工程において施溝分割が行われていたといえる。

図示した以外の石器は、黒曜石製の碎片、台石、器種不明の礫石器が、それぞれ1点ずつあったに過ぎない。

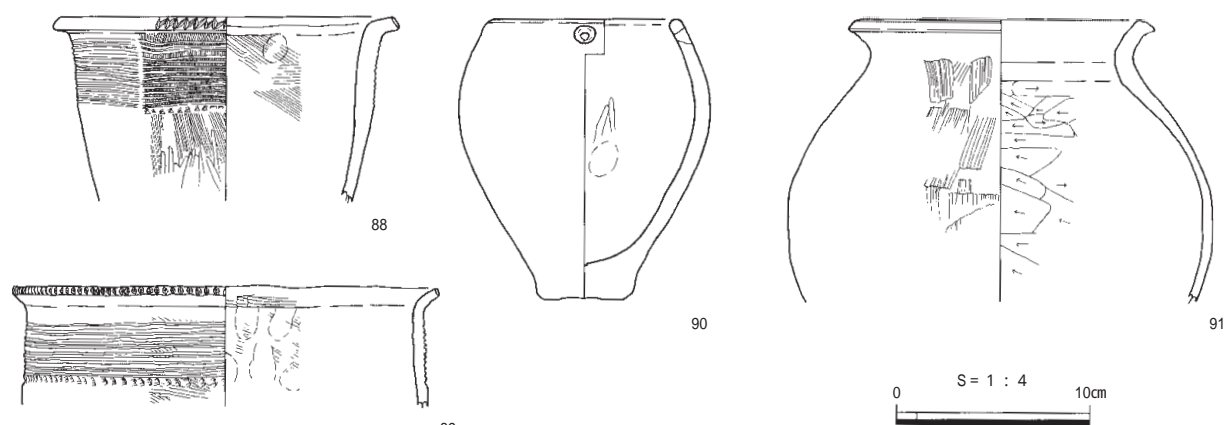
SK27は出土土器から弥生時代中期前葉の土坑と考えられるが、77の体部に施されたヘラ状工具を

表20 SK27出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
69	SK27 埋土	弥生土器 壺	22.0 2.1	口縁-頸部 破片	外面：口縁部刻目、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		5023
70	SK27 埋土	弥生土器 壺	14.4 13.2	口縁-体部 1/6	外面：口縁部刻目、頸部ハケ 櫛描平行線・三角刺 突文 内面：口縁部ミガキ、頸部-体部ハケ ナデ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	良好		4941・4942・4943・4977・ 4978
71	SK27 埋土	弥生土器 壺	12.8 30.3	口縁-体部 1/1	外面：口縁部三角刺突文、頸部櫛描平行線・三角刺 突文、体部ミガキ 内面：口縁部-頸部ヨコナデ、体部ハケ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：灰黄褐-明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		4946・4950・4951・4980・ 4981・4983・4984・4989・ 4990・4991・4992・4993・ 4995・5032・5061
72	SK27 埋土	弥生土器 壺	12.6 17.2	口縁-体部 1/4	外面：口縁部ミガキ、体部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、体部ミガキ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		4956・4962・5009・5020・ 5061・5062・5294
73	SK27 埋土	弥生土器 壺	11.0 15.3	口縁-体部 1/2	外面：口縁部ナデ、体部風化のため調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径5mm以下の 砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐-黄褐色	良好	頸部2単 位の焼成 前穿孔	4943・4945・5014・5015・ 5038
74	SK27 埋土	弥生土器 壺	18.8 7.1(底)	体-底部 1/3	外面：体部ナデ、ミガキ、底面ナデ 内面：体部ミガキ、底部ナデ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄褐-褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	内面炭化 物付着	4944・4986・4987・4988・ 5013・5016・5024・5041・ 5043・5044・5046・5047・ 5048・5049・5052・5053・ 5054
75	SK27 埋土	弥生土器 甕	31.6 40.5	口縁-頸部 1/1	外面：口縁部刻目、頸部櫛描平行線、三角刺突文、 体部ハケ 内面：口縁部ミガキ、体部ハケ・ミガキ	径7mm以下の 砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好	外面スス 付着	4944・4986・4987・4988・ 5013・5016・5024・5041・ 5043・5044・5046・5047・ 5048・5049・5052・5053・ 5054
76	SK27 埋土	弥生土器 甕	16.8 20.9	口縁-底部 1/1	外面：口縁部刻目、頸部櫛描平行線、三角刺突文、 体部ハケ 内面：口縁部ハケ ミガキ、体部ミガキ・ナデ・指 オサエ	径5mm以下の 砂粒	外面：淡褐-褐色 内面：淡褐-褐色	良好	外面スス 付着	4959・4960・4963・4970・ 5010・5019・5022・5061・ 5283・5287・5290・5293・ 5308・5330
77	SK27 埋土	弥生土器 甕	22.3 31.0	口縁-体部 2/3	外面：口縁部刻目、頸部5系1単位の櫛描平行線、三 角刺突文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ミガキ、体部ナデ・指オサ エ	径5mm以下の 砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好	内面炭化 物付着	4953・4997・4998・4999・ 5008・5012・5058・5061
78	SK27 埋土	弥生土器 甕	15.4 5.4	口縁-頸部 破片	外面：口縁部ナデ、頸部櫛描平行線・波状突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指オサエ	径3mm以下の 砂粒	外面：明褐色 内面：明褐色	良好		4966・5061
79	SK27 埋土	弥生土器 甕	17.0 8.0	口縁-体部 1/8	外面：口縁部刻目、頸部ヨコナデ、体部ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：褐色 内面：明赤褐-にぶい黄 褐色	良好	外面スス 付着	5330・5286
80	SK27 埋土	弥生土器 甕	17.2 4.7	口縁-体部 破片	外面：口縁部刻目、頸部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・指オサエ、体部ナデ・指オ サエ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：褐色 内面：明褐色	良好		4957
81	SK27 埋土	弥生土器 甕	19.0 4.8	口縁-体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指オサエ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：褐-明赤褐色 内面：褐色	良好		5307
82	SK27 埋土	弥生土器 甕	21.0 6.3	口縁-体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ、体部ハケ 内面：口縁部ハケ、体部ハケ ミガキ	径3mm以下の 砂粒	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	良好		4985・5029
83	SK27 埋土	弥生土器 甕	18.8 7.5	口縁-体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指オサエ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指オサエ、体部ミガキ	径3mm以下の 白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好	外面スス 付着	4969
84	SK27 埋土	弥生土器 甕	20.0 13.5	口縁-体部 1/4	外面：口縁部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ミガキ、頸部-体部ハケ・ナデ・指オ サエ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：赤褐-褐色 内面：赤褐色	良好		4947・4948・4949・4982・ 5045・5061
85	SK27 埋土	弥生土器 甕	20.0 17.6	口縁-体部 破片	外面：口縁部ナデ、体部ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部指オサエ、体部ミガキ・指 オサエ	径5mm以下の 砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	外面スス 付着	4952・5025・5033・5036・ 5040・5059・5061・5294
86	SK27 埋土	弥生土器 甕	22.6 14.4	口縁-体部 1/6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部指オサエ、体部風化 のため調整不明	径5mm以下の 白色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	外面炭化 物付着	5034・5037・5039
87	SK27 埋土	弥生土器 甕	25.6 7.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ミガキ	径2.5mm以下 の白色砂粒	外面：褐色 内面：明褐色	良好	外面スス 付着	5291

表21 SK27出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S87	第37図 PL.18	SK27	石鎌	碧玉	6.45	3.3	0.6	18.4	5057
S88	第37図 PL.19	SK27	素材剥片	碧玉	1.95	2.0	0.8	2.6	5000



第38図 遺構外出土遺物（1）

軽く押し当てたような刺突文や、78のような薄い器壁の作りには中期中葉的な要素を感じる。中期前葉段階が細分できるとすれば、その後半に位置づけられるのではなかろうか。

（4）遺構外出土遺物（第38～40図、表22・23、PL. 16～20）

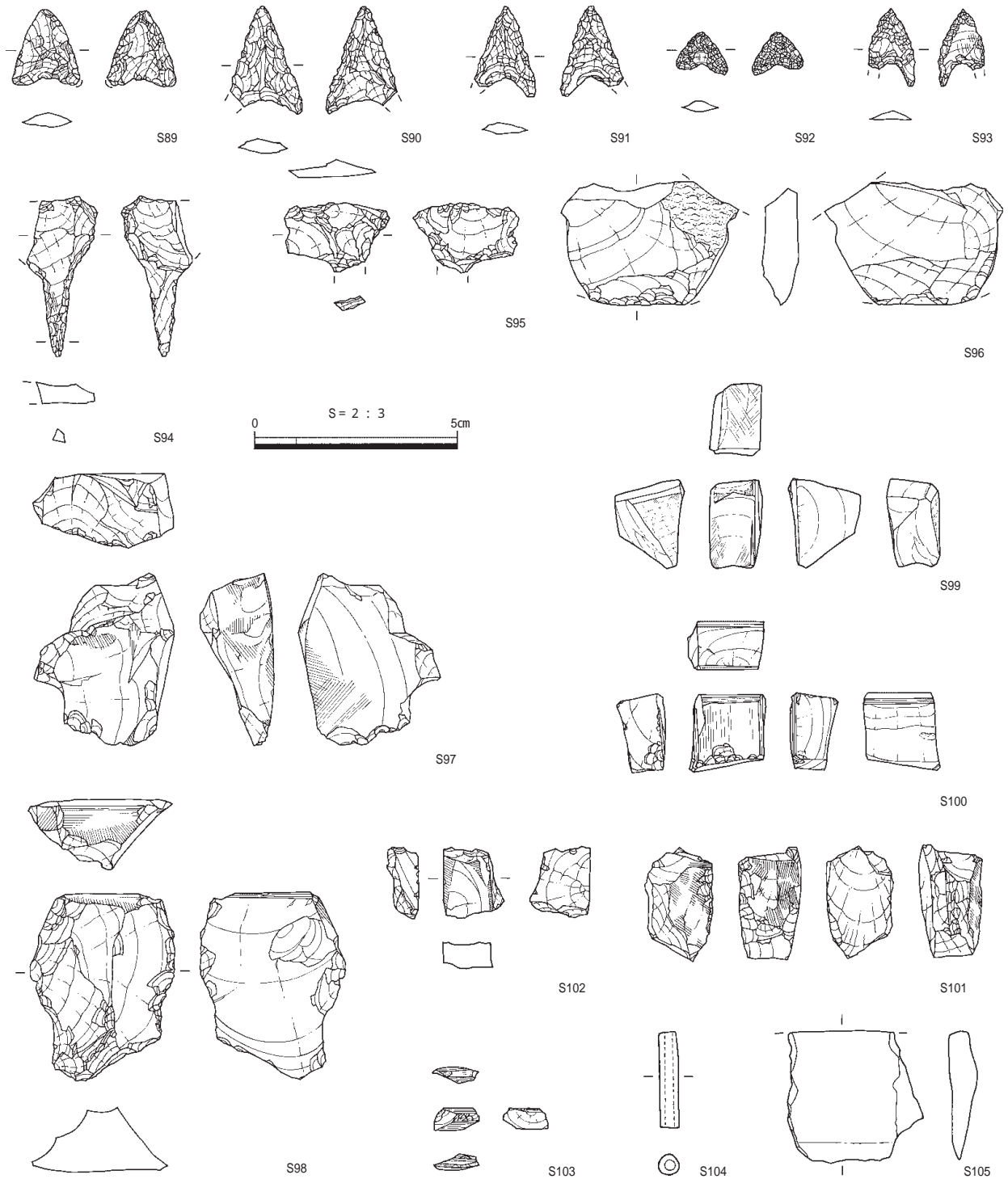
遺構に伴わない遺物について記述する。土器、石器ともに多数出土しているが、南原千軒遺跡の特徴的な弥生土器については、まとめて出土した溝や土坑のものでほぼ網羅できるので、ここでは石器を中心に記述する。

第38図は土器である。88と89は弥生時代中期前葉の甕。いずれも口縁端部にキザミをもち、体部上半に櫛状工具による多条沈線文と刺突文を施す。90は有蓋の無頸壺。口縁端部に浅い沈線が巡る。粗い砂粒を含む胎土から弥生時代中期前葉のものと思われる。91は壺で、体部の張りは大きい。短く外反する口縁端部には弱い凹線文が見られる。体部内面は頸部直下までケズリが及ぶことから、弥生時代後期初頭に位置づけておく。

石器は剥片石器、礫石器ともに見られる。注意すべきは、鉄床石など中世の鍛冶関連資料を除いたものすべてを対象としているため、弥生時代以外、とくに縄文時代のものを含んでいる可能性がある点だが、具体的な数字で示せないが、土器全体に占める縄文土器の割合は極めて低いので、基本的には弥生時代の石器組成を表していると考えている。

剥片石器は158点確認した。石鏃や石錐などの定型的な器種は少なく、剥片や碎片が大部分を占める。石材別に見るとサヌカイト製88点（55.7%）、黒曜石製57点（36.1%）、瑪瑙・玉髓製13点（8.2%）である。大量の石器が出土した溝SD4・5・6では、いずれもサヌカイト製が80数%、黒曜石製は10から15%という数字を示していたが、遺構に伴わないものは黒曜石製の割合が高くなっている。調査で確認できた弥生時代の遺構は、土坑5基と自然流路等6条のみであり、この時代の集落本体は調査区外に存在したと考えられることが背景だろうか。

S89から91はサヌカイト製の石鏃。遺跡全体で見れば素材面を残した凹基式が主体だが、ここに示した3点は周縁からの加工が器体中央に及び、脚部をしっかりと作り出している。S92、93は黒曜石製の石鏃。S94、95はサヌカイト製の石錐である。ともに欠損しているが、つまみ部を作り出すタイプである。S96は素材面を残し、縁辺に加工が加えられたサヌカイト製の資料である。かつて筆者は、青谷上寺地遺跡（鳥取市）におけるサヌカイト搬入形態のひとつとして、瀬戸内地域で作られた打製石庖丁が分割または再加工されたものが素材として入っている可能性を述べたことがある。また別の搬入形態として大型板状剥片も確認された（註4）。南原千軒遺跡の北西約1.5kmの丘陵上にある梅

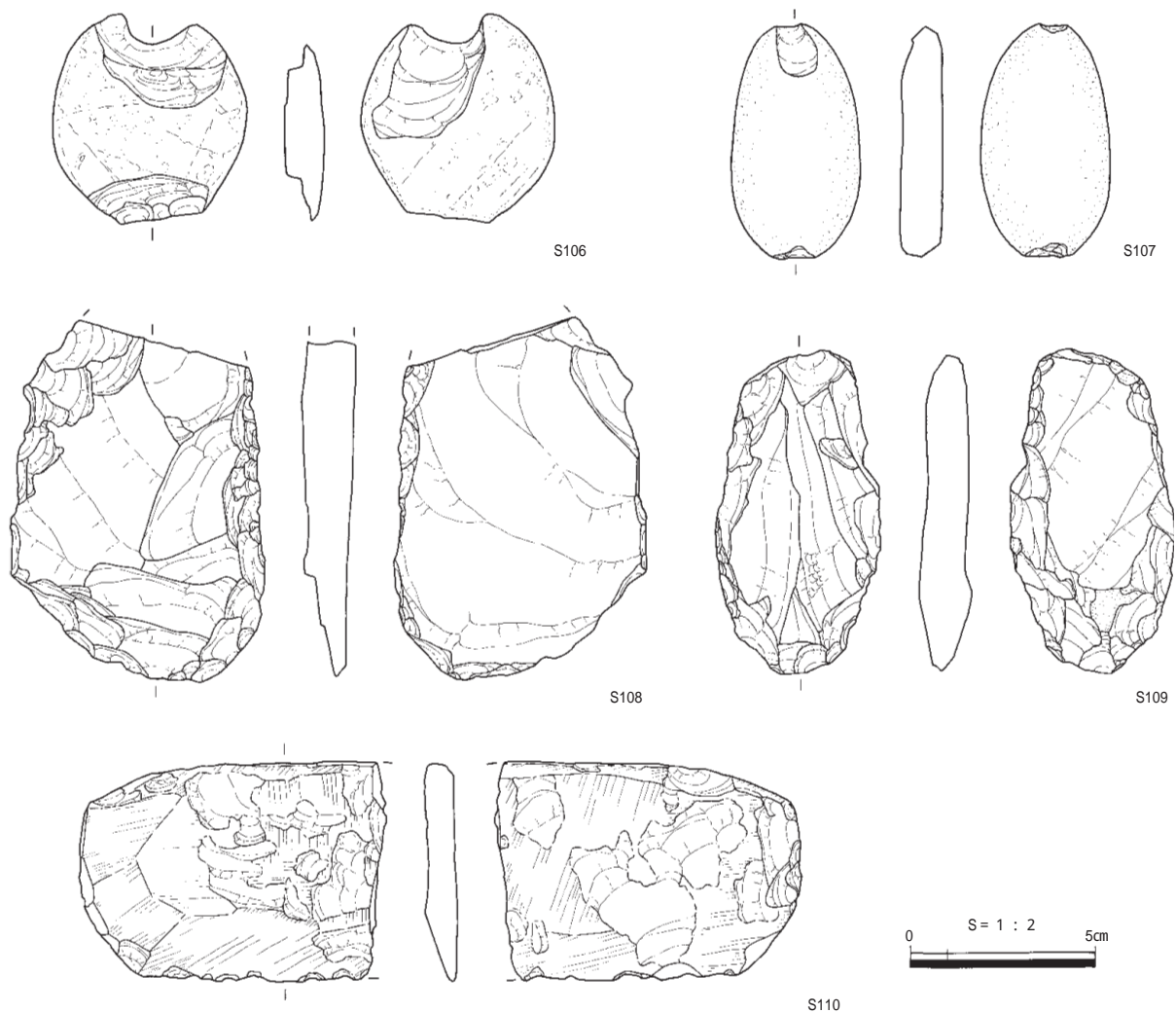


第39図 遺構外出土遺物(2)

田萱峯遺跡でも素材として搬入されたとみられるサヌカイト製の剥片が出土している(註5)。S96は欠損しているため、前述の二者に該当するか断定はできないが、遺跡内から多量のサヌカイト製資料が出土しており、未製品や碎片の存在から石器製作が行われていたことは明らかなので、素材として搬入された姿を垣間見せてくれるものとして注目しておきたい。

管玉関連資料としては、硬質緑色凝灰岩製の角柱状素材などが11点、軟質緑色凝灰岩製の剥片が1点、片岩製の石鋸が2点出土している。

硬質緑色凝灰岩製の一連の資料は、打ち欠きや研磨、施溝分割により形を整えた直方体素材をさ



第40図 遺構外出土遺物（3）

らに施溝分割した角柱状素材から管玉を生産する過程を示している。S97は打ち欠きと研磨で整形された直方体素材。被熱による変色が見られる。S98は施溝分割により割りとられた剥片。これ自体は質が悪く、主剥離面に良質なところが一部見られるので、使えない部分を除去したものだろう。S99からS101は角柱状素材を生産する段階のものだろう。施溝のために設けられた溝の位置を見ると、同一面を後退するように分割したわけではなく、分割面を転位しながら作業が進んでいたことがわかる。S103はそうした作業時のアクシデントを示す。S104は粗い研磨痕を残しているので、完成品の一歩手前といったところか。S105は石鋸である。

礫石器、その他は26点出土した。内訳は敲石17点、石鋤4点、砥石と石錘が2点ずつ、石庖丁が1点である。S106とS107は打ち欠き石錘とした。S108は石鋤。偏刃となっているのは刃部再生されたためだろう。S109は小型の石鋤かと思われるが、器面が摩滅していない。別器種の可能性もある。S110は石庖丁の未製品。打ち欠きにより形を整え、研磨を加えている。研磨は完全でなく穿孔も痕跡的に見られる程度である。製作途中で破損したものである。

最後に南原千軒遺跡から出土した石器について、全体の様子を見てみたい。中世の鍛冶関連遺物を除き1,264点の石器が出土した。弥生時代以外の遺構から出土したものもあり、前述したように弥生時代以外のものを含んでいる可能性は否定できないが、土器の出土量から考えて、ほぼ弥生時代の様

相を示していると思われる。内訳は剥片石器1,020点、管玉関連資料132点、礫石器その他112点である。

剥片石器はサヌカイト製747点（73.2%）、黒曜石製217点（21.3%）、瑪瑙・玉髓製56点（5.5%）であった。定型的な石器は石鏃、石錐、石匙で、圧倒的に剥片や碎片が多い。未製品や両極剥離を示す石器（いわゆる楔形石器）が見られることから、石器製作を行っていたことが分かる。瑪瑙・玉髓製のものは管玉製作時のドリル（石針）を作るためのものとも考えられ、管玉関連資料に含めるべきかもしれない。

定型的な石器で目立つのは石鏃である。未製品と思われるものを含めて58点出土した。サヌカイト製が49点、黒曜石製が9点である。平成16年度調査の報告でもサヌカイト製10点、黒曜石製6点の計16点が図示されている。

管玉関連資料は硬質緑色凝灰岩製が82点、軟質緑色凝灰岩製が19点、片岩製石鋸が31点出土している。緑色凝灰岩の質の違いは製作技法の違いと結びついている。硬質緑色凝灰岩を用いるものは、打ち欠きや研磨により形を整え、さらにそれを分割した直方体素材から細長い角柱状素材を分割していく。分割には施溝分割が採用されている。角柱状素材は角を打ち欠き、さらに研磨によって円柱状に整えられ、穿孔される。軟質緑色凝灰岩を用いるものは、打撃により分割された剥片を研磨し板状素材を作り、施溝分割によって角柱状素材を生産する。角柱状素材はS70のように長めであり、それを裏付ける資料はないが、角柱状素材を輪切りにする工程が存在した可能性がある。こうした管玉生産技術は、西川津技法として整理されている（註6）。南原千軒遺跡で確認された二者の管玉生産技術は、青谷上寺地遺跡や西川津遺跡（松江市）でも確認されており、相互に何らかの接点があったであろうことはすでに指摘されている（註7）。

これら管玉関連資料の細かな所属時期については明らかにできないが、SK12、SK27出土品から、本遺跡においては弥生時代中期前葉には管玉生産が始まっていたことが分かる。緑色凝灰岩の産地分析は行っていないが、平成16年度出土資料については、「菩提・女代南B遺物群」と判定されている（註

表22 遺構外出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
88	F7層	弥生土器 甕	17.6 9.6	口縁-体部 破片	外面：口縁刻目、頸部櫛描平行線・三角刺突文、体部八ヶ、ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部八ヶ ナデ・指オサエ	径5mm以下の白・灰色砂粒	外面：明褐色 内面：橙色	良好		500・650
89	E5層	弥生土器 甕	22.3 6.3	口縁-体部 破片	外面：口縁刻目、頸部櫛描平行線・刺突文、体部八ヶ 内面：口縁部八ヶ、頸部-体部八ヶ 指オサエ・ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		262
90	F3層	弥生土器 無頸壺	9.6 14.9	口縁-体部 1/2	外面：口縁部ナデ、体部風化により調整不明 内面：口縁-体部ナデ・ミガキ・指オサエ	径5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：明赤褐色	やや不良	口縁部1単位焼成前穿孔	3058
91	E4層	弥生土器 壺	14.4 14.8	口縁-体部 1/4	外面：口縁-頸部ナデ、体部八ヶ 内面：口縁-頸部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙-浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好	外面スス付着	4666

表23 遺構外出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S89	第39図 PL.20	遺構外	石鏃	サヌカイト	1.9	1.25	0.36	0.9	840
S90	第39図 PL.20	遺構外	石鏃	サヌカイト	2.69	1.7	0.4	1.1	3097
S91	第39図 PL.20	遺構外	石鏃	サヌカイト	2.2	1.56	0.3	0.9	3100
S92	第39図 PL.20	遺構外	石鏃	黒曜石	1.1	1.29	0.29	0.3	3786
S93	第40図 PL.20	遺構外	石鏃	黒曜石	1.9	1.09	0.2	0.4	354
S94	第39図 PL.20	遺構外	石錐	サヌカイト	3.92	1.49	0.5	2.7	405
S95	第39図 PL.20	遺構外	石錐	サヌカイト	1.7	2.62	0.41	1.9	241
S96	第39図 PL.19	遺構外	素材剥片	サヌカイト	3.01	4.4	0.88	17.7	2215
S97	第39図 PL.19	遺構外	直方体素材	碧玉	4.26	3.3	1.85	24.5	475
S98	第39図 PL.19	遺構外	管玉製作時の剥片	碧玉	4.6	3.6	1.55	27.7	3111
S99	第39図 PL.19	遺構外	角柱状素材	碧玉	2.2	1.3	1.75	6.0	5272
S100	第39図 PL.19	遺構外	角柱状素材	碧玉	1.85	1.88	1.19	6.7	3942
S101	第39図 PL.19	遺構外	角柱状素材	碧玉	2.8	1.56	1.61	8.5	1090
S102	第39図 PL.19	遺構外	角柱状素材	碧玉	1.74	1.5	0.6	2.4	3
S103	第39図 PL.19	遺構外	管玉製作時の剥片	碧玉	0.52	1.12	0.39	0.2	720
S104	第39図 PL.19	遺構外	管玉	碧玉	2.35	0.5	0.5	0.9	5187
S105	第39図 PL.19	遺構外	石鋸	結晶片岩	3.3	3.25	0.7	11.2	1038
S106	第40図 PL.16	遺構外	石錘	安山岩	5.6	5.3	1.1	44.8	5174
S107	第40図 PL.16	遺構外	石錘	安山岩	6.3	3.5	1.2	42.4	728
S108	第40図 PL.18	遺構外	石鏃	安山岩	9.8	6.9	1.4	120.0	4317
S109	第40図 PL.18	遺構外	石鏃	無斑晶安山岩	8.75	4.5	1.45	62.0	3975
S110	第40図 PL.18	遺構外	石庖丁	無斑晶安山岩	8.4	6.0	0.9	79.5	861

第3章 調査の成果

8)

礫石器その他の内訳は、敲石 55 点、砥石 14 点、石鋤 12 点、台石 11 点、石錘 8 点、石庖丁 3 点、伐採石斧と磨石が 2 点ずつ、石鎌・石皿・柱状片刃石斧・大型石庖丁・不明製品がそれぞれ 1 点ずつである。

註1 石器石材については全点について産地分析を行っているわけではない。ここでサヌカイトと呼んでいるものは、山陰地方における縄文時代から弥生時代の石鎌に一般的に用いられるガラス質の安山岩を指している。

註2 管玉製作関連資料の呼称は下記文献に準拠している。

湯村 功編2002『青谷上寺地遺跡4』財団法人鳥取県教育文化財団

なお管玉に用いられる硬質で質のよい緑色凝灰岩を「碧玉」と呼ぶことが多いが、ここでは「緑色凝灰岩」と記述し、質の違いは「硬質」、「軟質」を付すことにより表現する。

註3 あくまで破片数であり、個体数ではない。ただ接合作業が進行した段階でカウントしているため、個体数に近い数字は出ていると思われる。SD5・6についても同様である。

註4 湯村 功2002「石器」『青谷上寺地遺跡4』財団法人鳥取県教育文化財団。大型板状剥片は、最大幅31.3cm、重さ1,012g。

註5 平成17年度に鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った、梅田萱峯遺跡1区SI5の資料。最大幅14.5cm、重さ260gを測る。青谷上寺地遺跡、梅田萱峯遺跡ともに弥生時代中期後葉の例。南原千軒遺跡では中期後葉の土器は基本的に認められないため、その前後の時期におけるサヌカイトの搬入形態としてこのような大型剥片が存在したのかは、類例を待って再検討する必要がある。

註6 丹羽野裕2004「松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討」『古代出雲における玉作の研究』鳥根県教育委員会・鳥根県古代文化センター

註7 註6前掲文献

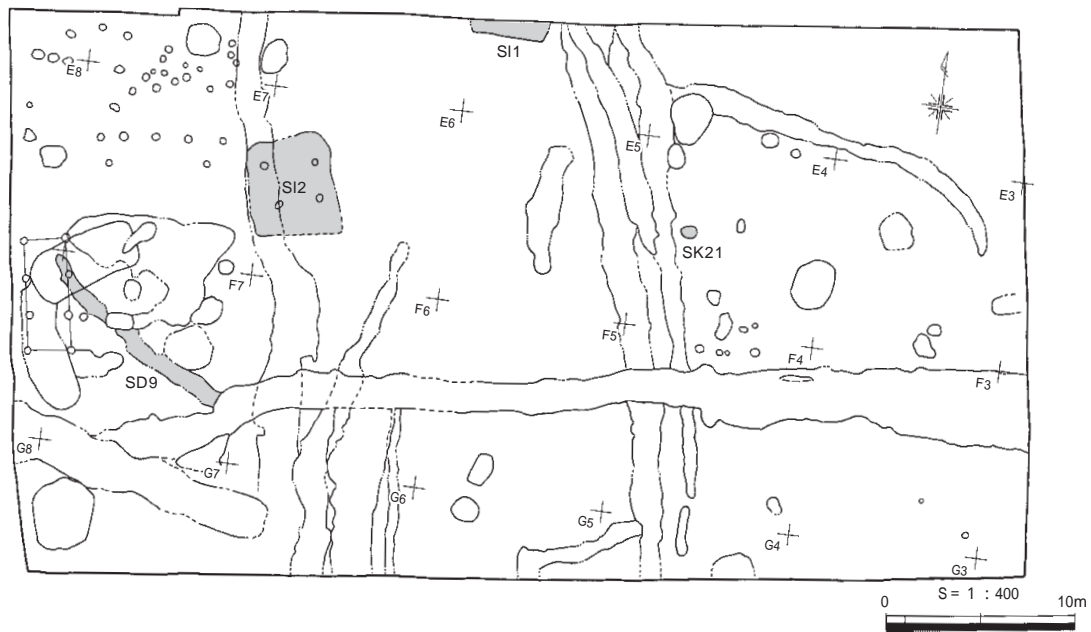
註8 藁科哲男2005「南原千軒遺跡出土碧玉・ヒスイ製玉材の産地分析」『南原千軒遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

第4節 古墳時代の調査成果

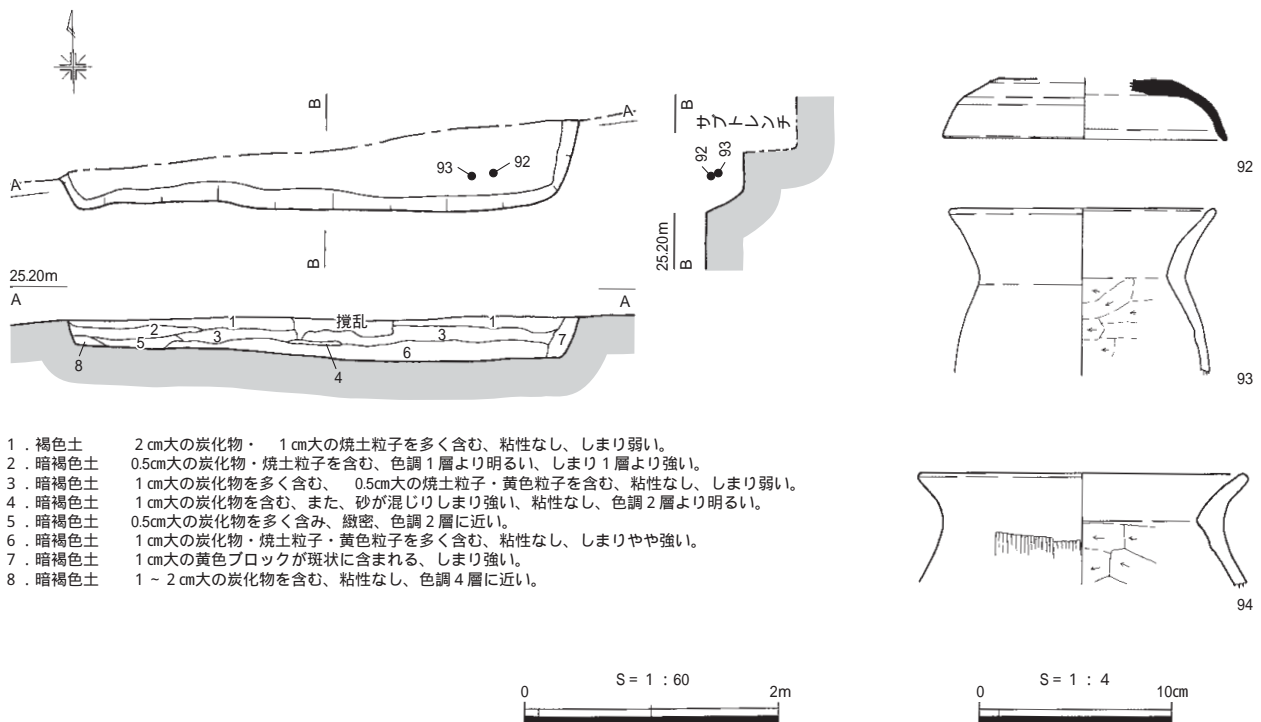
(1) 概要

古墳時代の遺構は竪穴住居跡2棟、溝1条、土坑1基を検出した。

平成16年度調査のSI1の南端部分を検出したほか、新たに住居跡を1棟確認したが、この時代の遺構・遺物は少ない。



第41図 古墳時代遺構配置図



- | | |
|---------|---|
| 1. 褐色土 | 2 cm大の炭化物・ 1 cm大の焼土粒子を多く含む、粘性なし、しまり弱い。 |
| 2. 暗褐色土 | 0.5 cm大の炭化物・ 焼土粒子を含む、色調1層より明るい、しまり1層より強い。 |
| 3. 暗褐色土 | 1 cm大の炭化物を多く含む、 0.5 cm大の焼土粒子・ 黄色粒子を含む、粘性なし、しまり弱い。 |
| 4. 暗褐色土 | 1 cm大の炭化物を含む、また、砂が混じりしまり強い、粘性なし、色調2層より明るい。 |
| 5. 暗褐色土 | 0.5 cm大の炭化物を多く含む、緻密、色調2層に近い。 |
| 6. 暗褐色土 | 1 cm大の炭化物・ 焼土粒子・ 黄色粒子を多く含む、粘性なし、しまりやや強い。 |
| 7. 暗褐色土 | 1 cm大の黄色ブロックが斑状に含まれる、しまり強い。 |
| 8. 暗褐色土 | 1 ~ 2 cm大の炭化物を含む、粘性なし、色調4層に近い。 |

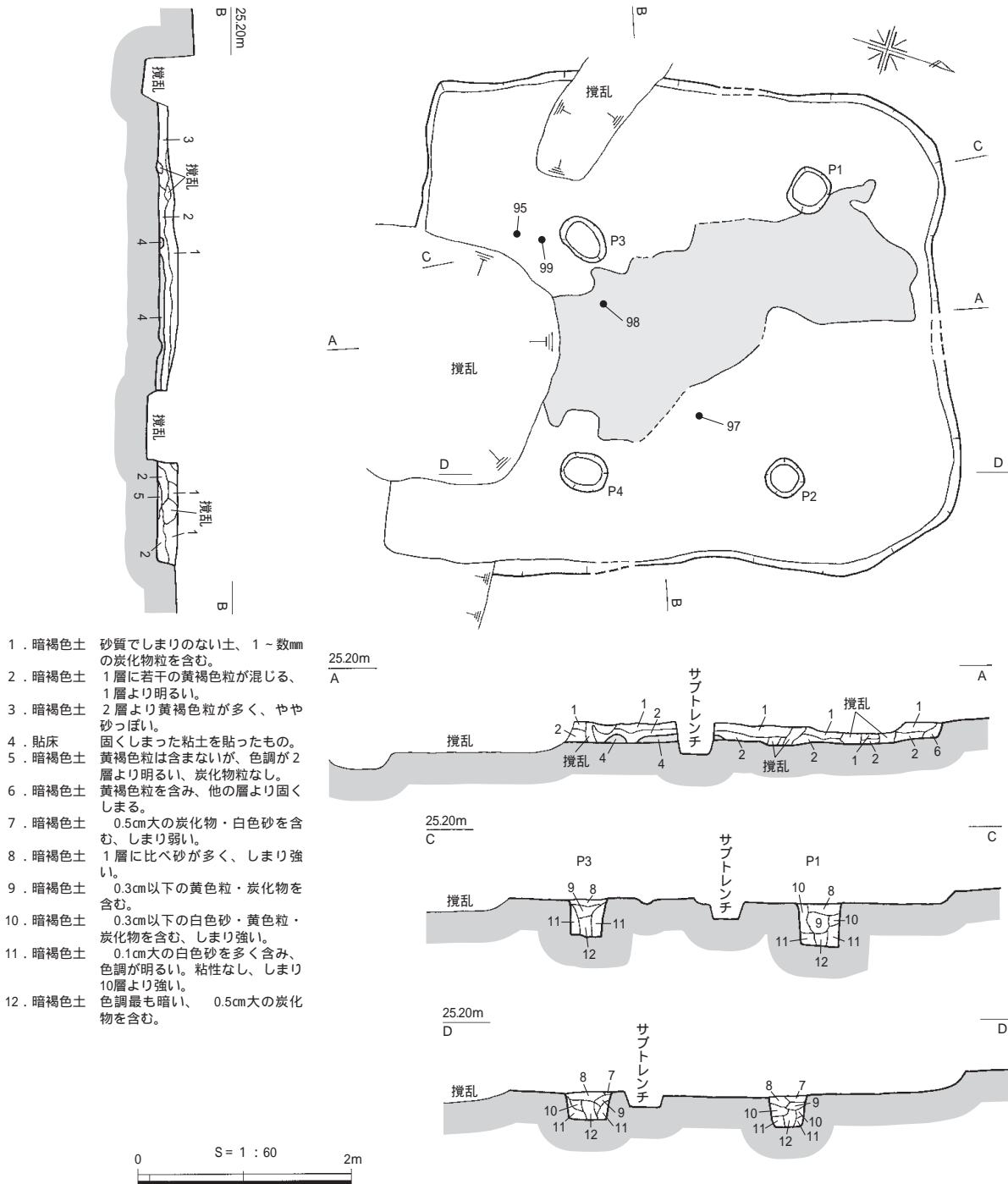
第42図 SI1

第43図 SI1出土遺物

第3章 調査の成果

表24 SI1出土遺物観察表

遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
92	SI1 埋土	須恵器 坏蓋	14.6 3.2	口縁部 1/5	外面：口縁回転ナデ、頂部ケズリ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		1661
93	SI1 埋土	土師器 甕	13.6 8.6	口縁-体部 1/8	外面：口縁-体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径5mm以下の砂粒	外面：橙-灰黄褐色 内面：橙色	良好		1653
94	SI1 埋土	土師器 甕	16.6 5.7	口縁-体部 破片	外面：口縁-頸部ヨコナデ、体部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径7mm以下の白色砂粒	外面：にぶい橙色 内面：黄橙色	良好	外面スス付着	1652

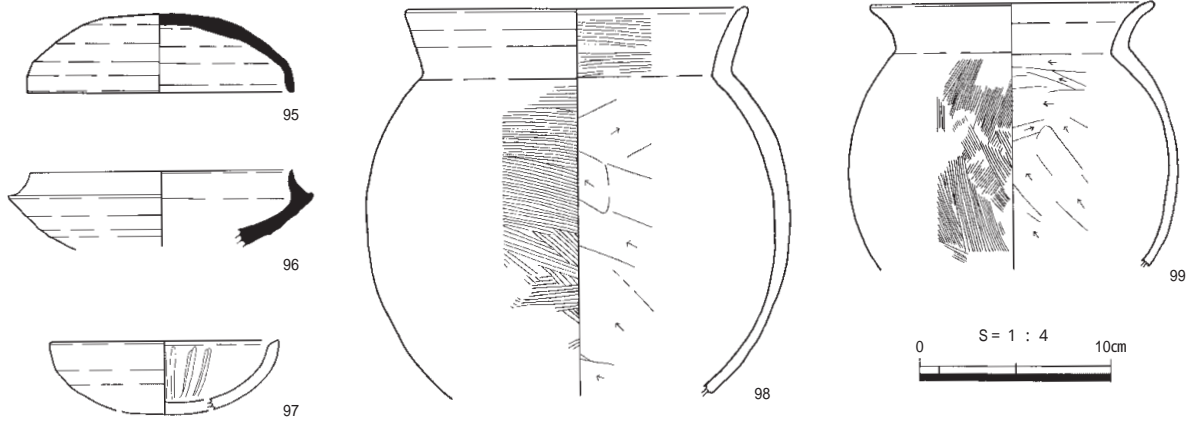


1. 暗褐色土 砂質でしまりのない土、1～数mmの炭化物粒を含む。
2. 暗褐色土 1層に若干の黄褐色粒が混じる、1層より明るい。
3. 暗褐色土 2層より黄褐色粒が多く、やや砂っぽい。
4. 貼床 固くしまった粘土を貼ったもの。
5. 暗褐色土 黄褐色粒は含まないが、色調が2層より明るい、炭化物粒なし。
6. 暗褐色土 黄褐色粒を含み、他の層より固くしまる。
7. 暗褐色土 0.5cm大の炭化物・白色砂を含む、しまり弱い。
8. 暗褐色土 1層に比べ砂が多く、しまり強い。
9. 暗褐色土 0.3cm以下の黄色粒・炭化物を含む。
10. 暗褐色土 0.3cm以下の白色砂・黄色粒・炭化物を含む、しまり強い。
11. 暗褐色土 0.1cm大の白色砂を多く含み、色調が明るい。粘性なし、しまり10層より強い。
12. 暗褐色土 色調最も暗い、0.5cm大の炭化物を含む。

第44図 SI2

(2) 竪穴住居跡

SI1 (第42・43図、表24、PL. 21・22)



第45図 SI 2 出土遺物

表25 SI 2 出土遺物観察表

遺物No.	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
95	SI2	埋土	須恵器 坏蓋	13.8 4.1	口縁部 1/3	外面：口縁部回転ナデ、頂部ケズリ 内面：回転ナデ	径4mm以下の 白色砂粒	外面：灰色 内面：浅黄色	堅緻		3344
96	SI2	埋土	須恵器 坏身	13.9 4.0	口縁～底部 1/6	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ケズリ 内面：回転ナデ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		3316
97	SI2	埋土	土師器 坏身	12.2 3.8	口縁～底部 破片	外面：口縁～体部ナデ、底部ケズリ 内面：口縁～底部ナデ 縦方向のミガキ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		3337
98	SI2	埋土	土師器 甕	18.0 20.3	口縁～体部 2/3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ・ナデ 内面：口縁部ハケ・ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 灰色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	良好		1484・1495・1496・3316・3317・3319・3323・ 3326・3327・3328・3330・3331・3338・3955・ 3956・3962
99	SI2	埋土	土師器 甕	15.0 14.9	口縁～体部 2/3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白・黒色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：明黄褐色	良好		3315・3318・3324・3326・3329・3334・3341・ 3963

調査区北側のほぼ中央、平成16年度調査区に接する位置で検出した。平成16年度調査のSI 1の続きであり、東西4.1m、南北0.7mを確認した。貼床や焼土範囲は見られなかった。

埋土は地山とよく似た暗褐色土であるが、炭化物や黄色粘土粒を顕著に含むため検出は比較的容易であった。

92は須恵器坏蓋である。肩部の稜は不明瞭で、器体を浅く窪ませることにより表現している。93と94はくの字状に屈曲する頸部から外反する口縁部をもつ甕である。いずれも体部は球胴形と思われる。こうした遺物は八橋 期の特徴を示し、平成16年度調査時の出土遺物と矛盾しない。したがって本遺構は古墳時代後期に位置づけられる。

SI 2 (第44・45図、表25、PL. 21・22)

SI 1の南西約15mの位置で検出した。SI 1に比べ埋土に炭化物等を顕著に含まないため、検出は非常に難しく、サブトレンチに引っかかった貼床で住居跡の存在を認めたほどである。

平面形状はおおむね5m四方の方形を呈する。床面中央から北側にかけて貼床が残っていた。柱穴は4基検出した。P4の位置がややずれているが、方形の主柱配置となっている。柱穴内の土層観察により柱痕跡が確認された。

95は須恵器坏蓋で、肩部の稜は浅く窪ませることにより表現している。96は須恵器坏身。口縁部は内傾して立ち上げる。土師器は壺と甕が出土した。掲載した2点に見られるように、甕は球胴形の体部となる。

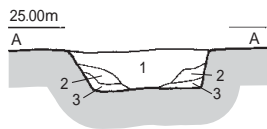
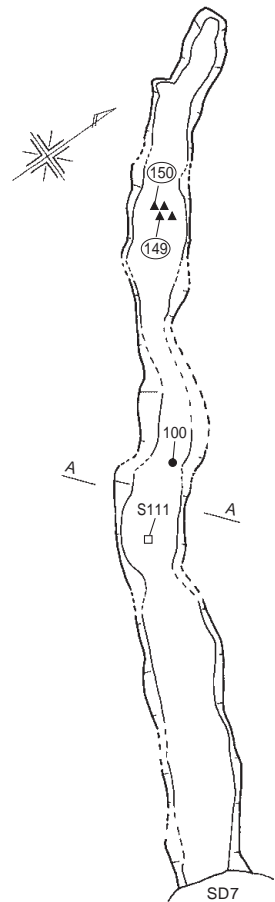
出土遺物からSI 2は八橋 期、古墳時代後期に位置づけられる。

(3) 溝

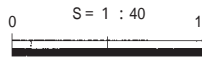
SD 9 (第46・47図、表26・27、PL. 6・19・33)

F7グリッドで検出した。北西から南東に向けて延びる溝である。中世の溝であるSD 7に切れ、それより東では確認できなかった。検出した長さは約10mである。幅は0.8m、深さは0.2mを測る。

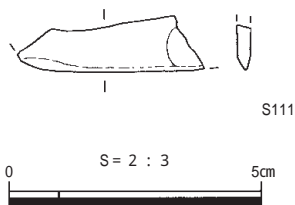
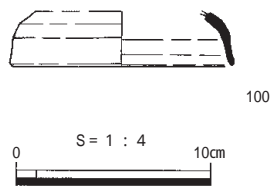
第3章 調査の成果



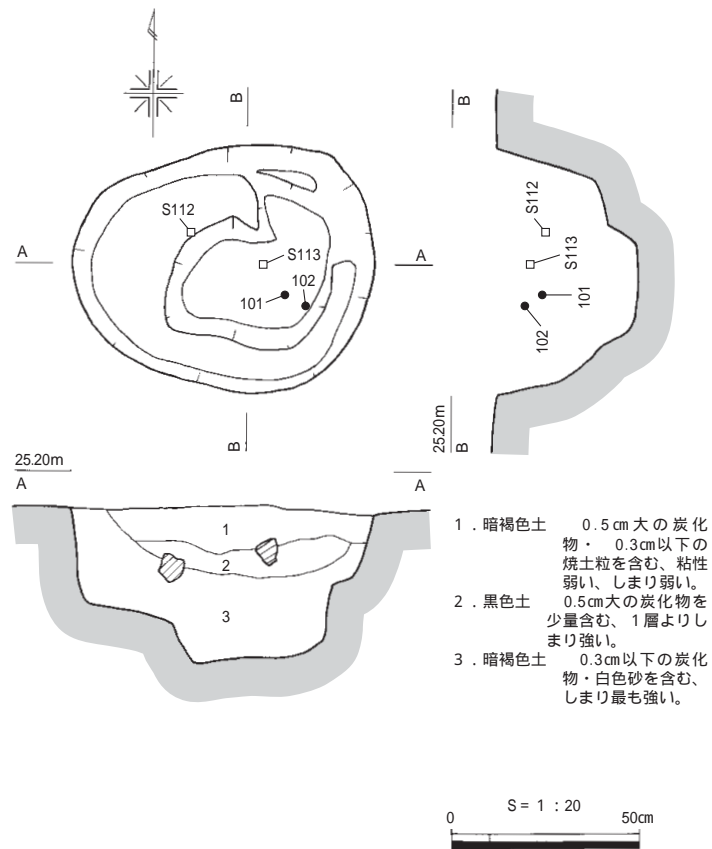
- 1. 暗褐色土 黄色粒をわずかに含む、しまりがあるが粘性は弱い。
- 2. 暗褐色土 1層よりしまりに欠ける。
- 3. 暗褐色土 2層に似るが、色調がより黒い。



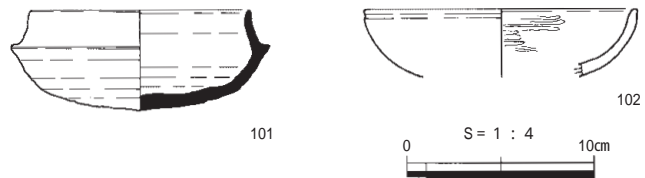
第46図 SD9



第47図 SD9 出土遺物



第48図 SK21



第49図 SK21出土遺物(1)

底面のレベルは東端、西端ともに約24.6mで、埋土の状況をあわせ顕著な水の流れは指摘できない。

SD9が位置するあたりは弥生時代から中世の遺構が密に見られた。S111の石鋸のように弥生時代のものが埋土中に混入しているが、八橋期の特徴を示す100の須恵器坏蓋から、本遺構は古墳時代後期のものと思われる。

(4) 土坑

SK21 (第48～50図、表28・29、PL. 22・23)

E4グリッドに位置する。長軸0.8m、短軸0.65mの円形で、掘り込みは二段掘りとなっている。検出面から最下面までの深さは0.4mを測る。埋土は3枚に別れ炭化物や焼土粒を含む。

遺物は掘り込みの上位から中位にかけて出土した。101の須恵器坏身はカエリが高く、やや内傾する。102は土師器碗。S112とS113は砥石で、必ずしも全体の形状を残していないが、いずれもよく使い込まれたもの

表26 SD9出土土器観察表

遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
100	SD9 埋土	須恵器 坏蓋	11.6 2.8	口縁部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		2772

表27 SD9出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S111	第47図 PL.19	SD9	石鋸	結晶片岩	3.7	1.1	0.3	1.7	2770

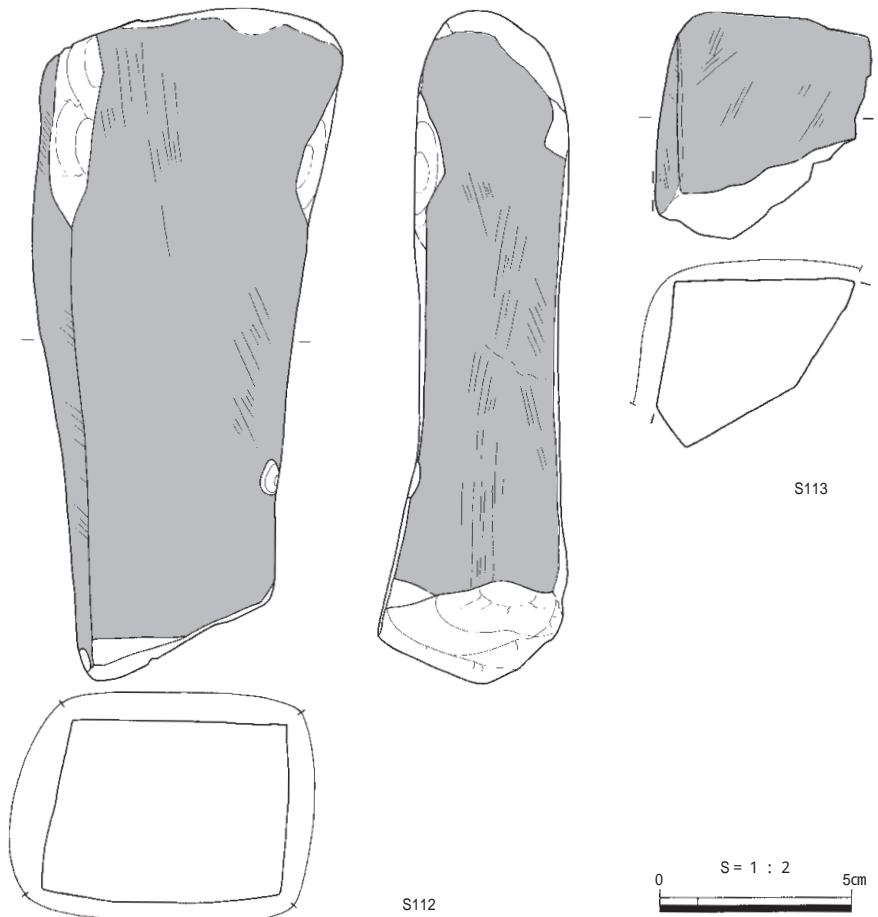
と思われる。

これらの遺物はSK21が埋没する過程で残されたものであり、厳密に遺構の時期を示さないことも考えられるが、須恵器坏身が示す八橋期、古墳時代後期の土坑として位置づけておく。

(5) 遺構外出土遺物 (第51図、表30、PL. 17・23・42)

103は須恵器坏身で、カエリが高くやや内傾する。八橋期と考えられる。104から106は須恵器坏蓋。いずれも八橋期前後に位置づけられる。

南原千軒遺跡では弥生時代終末から古墳時代中期の遺物が少ないが、107から113に掲げたものが出土している。



第50図 SK21出土遺物(2)

表28 SK21出土土器観察表

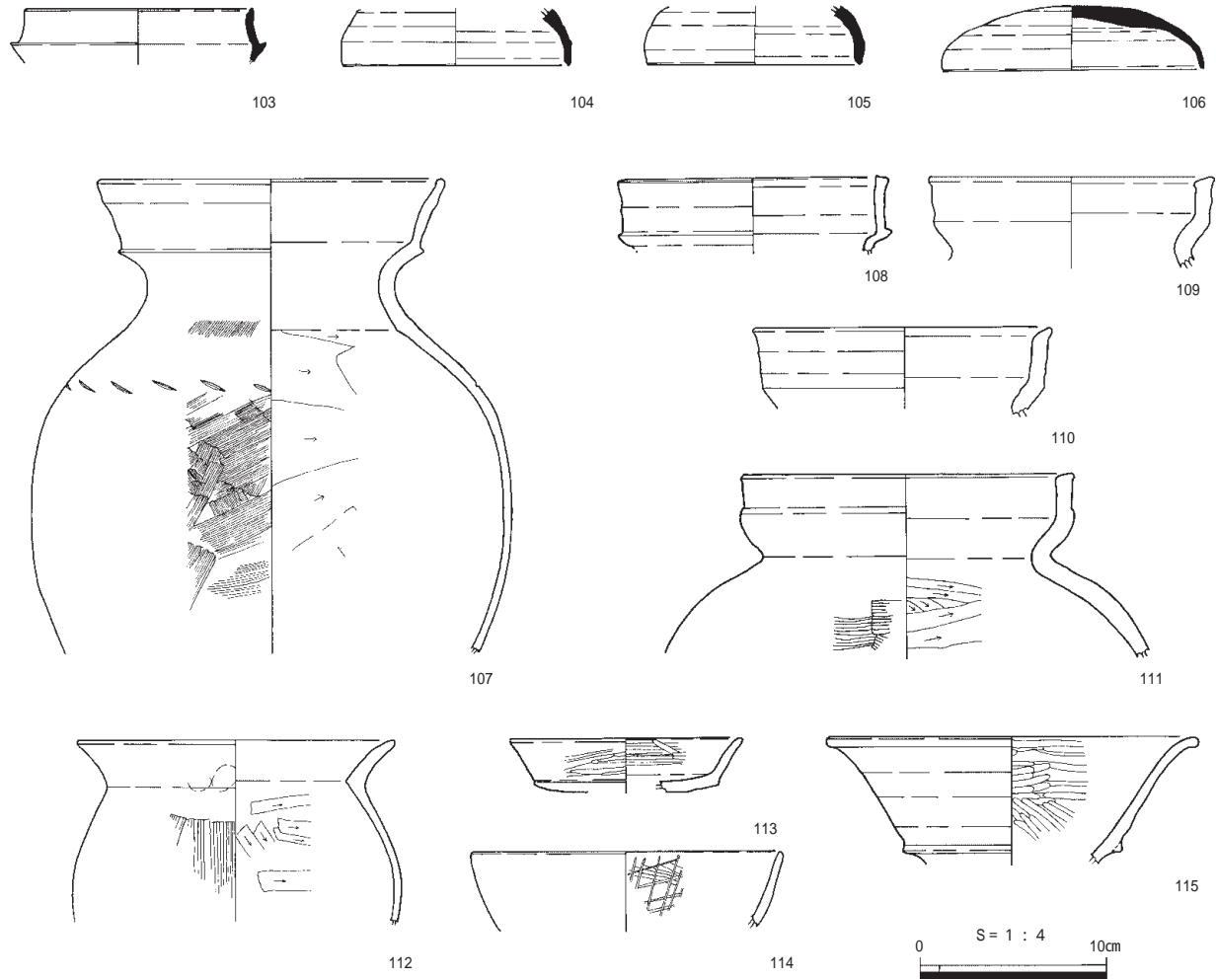
遺物No.	遺層 構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
101	SK21 埋土	須恵器 坏身	11.4 5.25	口縁~底部 1/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：褐灰色 内面：褐灰色	堅緻		4649・ 4650
102	SK21 埋土	土師器 坏身	14.2 3.5	口縁~体部 破片	外面：ナデ 内面：ナデ ミガキ	径5mm以下の黄・白砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		4554

表29 SK21出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げ
S112	第50図 PL.23	SK21	砥石	アブライト	17.8	7.9	4.7	1030.0	4647
S113	第50図	SK21	砥石	赤色頁岩	6.0	5.7	4.5	160.0	4648

107は口縁部が外反して開く壺。108は甕の口縁部で下端の突出は甘く、口縁端部はやや内面に肥厚して平坦となる。112は鼓形器台の、113は小型器台のそれぞれ器受部である。これらは古墳時代前期に位置づけられる。109から111は退化した複合口縁をもつ甕で、古墳時代中期後半と思われる。

第3章 調査の成果



第51図 遺構外出土遺物

表30 遺構外出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
103	F3層	須恵器 環身	12.0 2.8	口縁部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：灰黄色 内面：灰黄色	堅緻		1412
104	F8層	須恵器 環蓋	12.2 3.0	口縁部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm大の 白色砂粒	外面：暗青灰～灰オリーブ色 内面：灰色	堅緻		2624
105	F8層	須恵器 環蓋	11.6 3.1	口縁部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm大の 白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		2625
106	F7層	須恵器 環蓋	14.0 3.4	口縁部 2/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径3mm以下の 白・黒色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		863
107	G4層	土師器 甕	18.0 25.2	口縁～体部 1/2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部刻目、頸部～体部ハケ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、体部ハケ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰黄色	良好		5190・ 5191・ 5195・5196
108	E8層	土師器 甕	13.2 3.7	口縁部 破片	外面：口縁部ナデ 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面ス ス付着	77
109	F2層	土師器 甕	14.6 4.4	口縁部 破片	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	径2mm以下の 白・赤色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：橙色	良好	外面ス ス付着	57
110	一表土	土師器 甕	17.0 9.4	口縁～体部 1/8	外面：口縁～頸部ナデ、体部ハケ・ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、体部ケズリ	径2mm以下の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		2
111	F4層	土師器 甕	16.0 4.3	口縁部 破片	外面：口縁部ナデ 内面：口縁部ナデ	径5mm以下の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		3076
112	F7層	土師器 甕	16.2 9.7	口縁～体部 1/6	外面：口縁部ヨコナデ、頸部指オサエ、体部ハケ・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の 白色砂粒	外面：にぶい褐～灰褐色 内面：黄褐～黒褐色	良好	外面ス ス付着	644
113	E8層	土師器 環身	12.0 3.0	口縁～底部 1/4	外面：口縁～体部ミガキ、底部ナデ 内面：口縁～底部ミガキ	径1.5mm以 下の 白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		3932
114	F3層	土師器 環	16.4 4.1	口縁部 破片	外面：口縁部ヨコナデ 放射状暗文 内面：口縁部ヨコナデ	径0.5mm以 下の 白色砂粒	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内面暗 文有り	1413
115	F7層	弥生土器 鼓形器台	19.0 6.8	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ミガキ	径1mm以下の 赤色砂粒	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	良好		488

第5節 古代・中世の調査成果

(1) 概要

古代の遺構は、溝1条(SD7)を検出した。本遺構は、幅約2m、深さ約2m、断面V字状を呈し、一部南へ張り出しながらも東西方向へ直線的に延びている。第1次調査のSD6に該当し、総延長約80mにのぼる。溝の埋没時期は、8世紀末～9世紀代と考えられる。

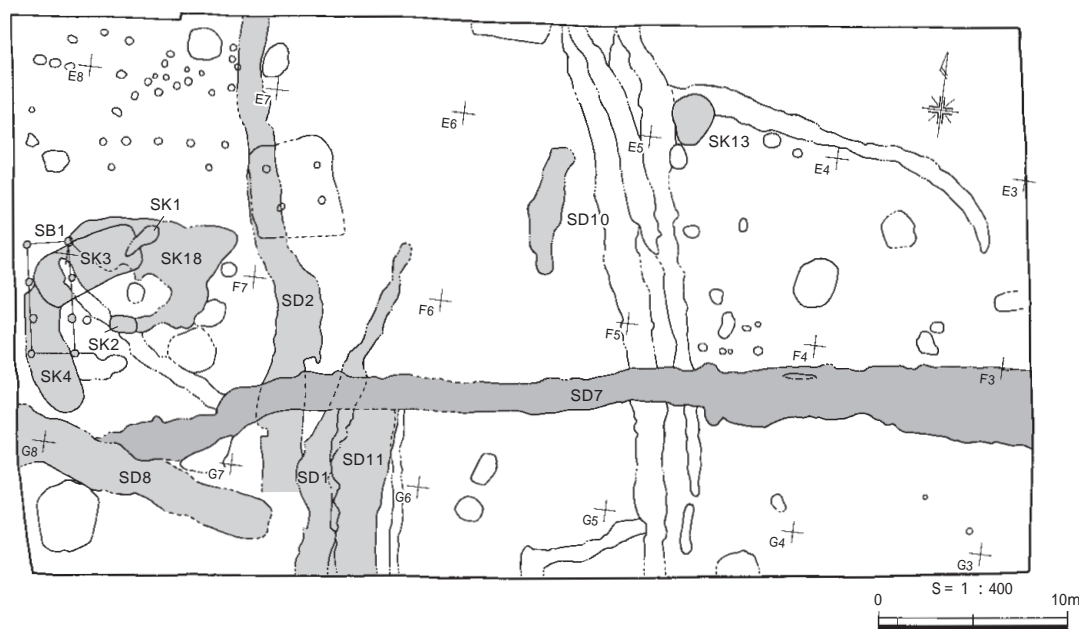
中世の遺構は、鍛冶関連遺構を除き、溝5条(SD1・2・8・10・11)、掘立柱建物跡1棟(SB1)、土坑8基(SK1・2・3・4・13・16・17・18)が確認された。このなかで、SD8は第1次調査SD7の続きであり、南東方向へ20m延びて途切れることが判明した。幅約3m、深さ1.9m、断面逆台形をした、幅広の掘り方である。埋土中から、鍛冶関連遺物が多量に出土している。SK18はS字状の不整形な土坑であり、底面には鉄分沈着層が貼り付いていることから、滞水していたものと思われる。その他の遺構は概ね小型の土坑であり、SD8より北側、調査区西半に点在する。概ね、これらの遺構は12世紀代に位置づけられる。

(2) 掘立柱建物跡

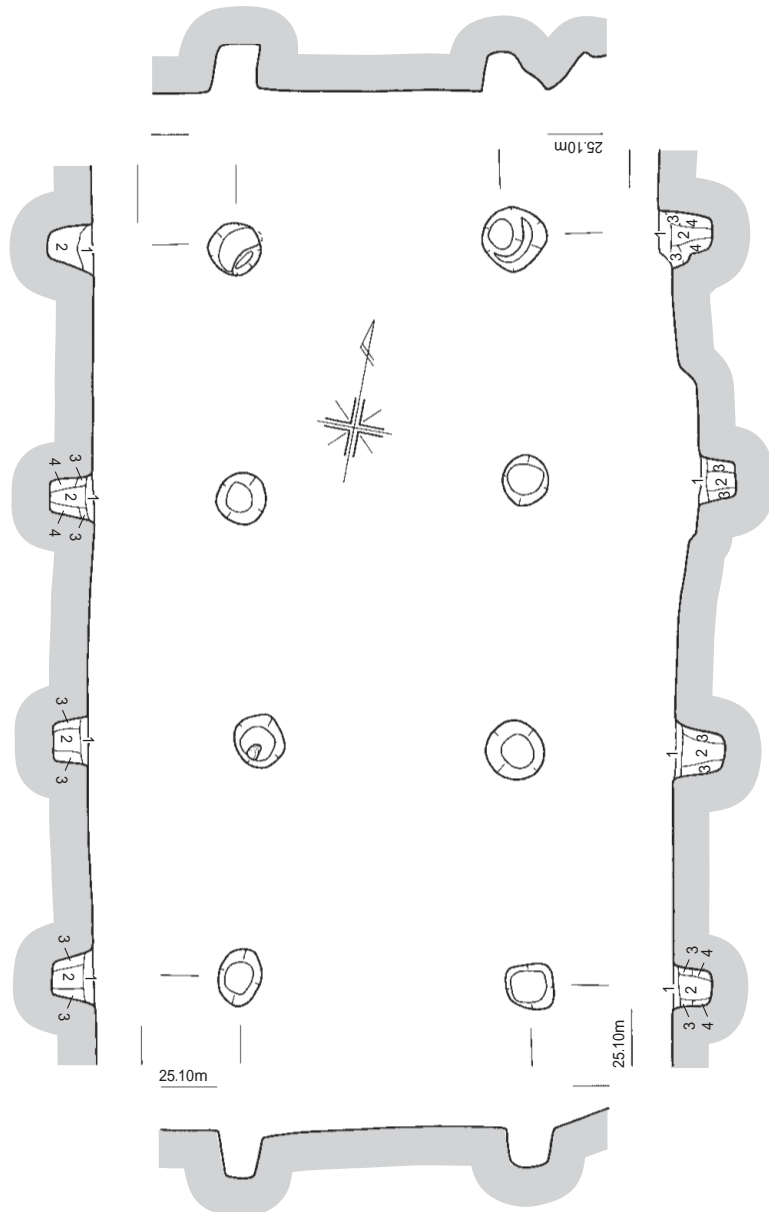
SB1(第53図、PL.42)

F7・F8グリッド、調査区西隅に位置し、SD9を切っている。平面形態は桁行3間(5.9m)、梁行1間(2.3m)の掘立柱建物跡である。主軸はN-5°-E、桁梁に囲まれた面積は約13.6㎡を測る。柱間距離は、1.9m(P1-2)、2.2m(P2-3)、1.8m(P3-4)、2.3m(P4-5)、1.9m(P5-6)、1.9m(P6-7)、2.0m(P7-8)、2.15m(P8-9)と梁行・桁行ほぼ等距離である。柱掘り方は直径35～50cmの不整円形を呈し、柱底面の標高は24.3～24.6mを測る。柱痕跡が残るものが多かったが、礎盤石は確認されていない。

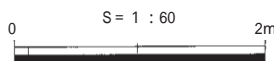
本遺構は、梁行1間と狭く、本来はもう1間存在していた可能性が高い。1次調査で検出されたSB2は南北棟の掘立柱建物跡として復元されているが、仮に南北が別棟とした場合、桁行3軒、梁



第52図 古代・中世遺構配置図



- 1. 黒色土 0.5cm以下の炭化物・黄色粒を含む、粘性、しまり弱い。
- 2. 黒色土 1層よりも炭化物多い、しまり弱い。
- 3. 暗褐色土 0.5cm大の黄色粒を含む。
- 4. 暗褐色土 3層より色調暗く、しまり強い。



第53図 SB1

行2軒、柱間距離が約2.1mであり、主軸は異なるがSB1とほぼ同規格となる。東側には多くの遺構が重複しているため残りのピットは確認できなかったが、主軸をほぼ北とする桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡であった可能性も考えられよう。

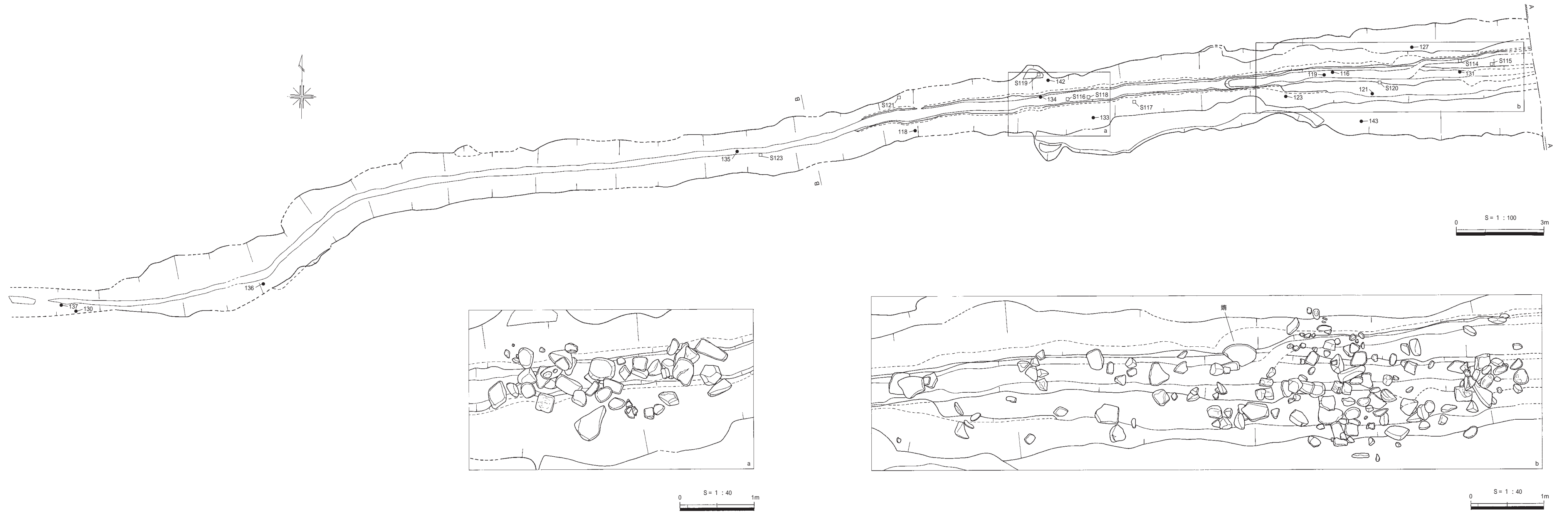
ピット内から遺物は出土しなかったが、埋土の特徴が鍛冶関連ピットと近似するため、帰属時期は12世紀代と想定される。

(3) 溝

SD7 (第54～59図、表31・32、巻頭図版4、PL. 24～27)

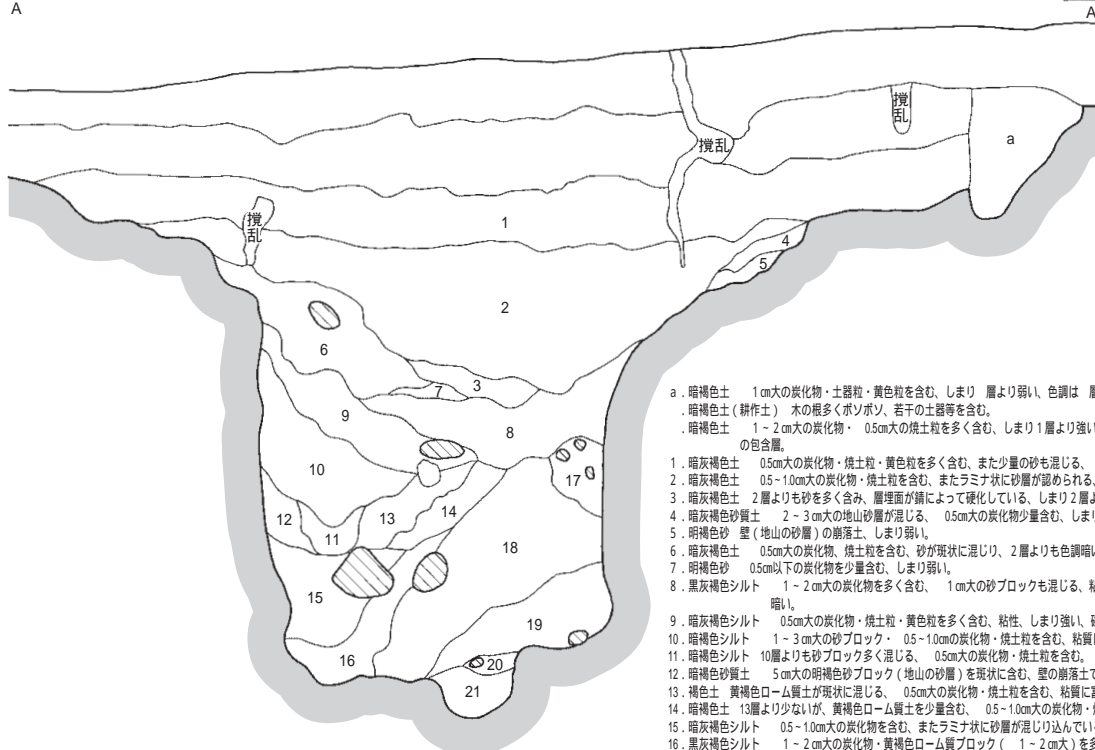
F3～8グリッドに位置する。F7・8グリッドでSD1・2・8に、F4グリッドでSK31に切られている。また、F4グリッドでSD5・6、F7グリッドでSD9を切っている。検出した長さは約53m、1次調査分を合わせると総延長約86mとなり、概ね東西方向に主軸をとるが、F7～10グリッド間は南へ約3m張り出している。肩部の幅は東端で最大4m、平均1.5～2.0m、検出面からの深さは約2mを測り、基本層序 層まで掘り込んでいる。底面の幅は0.28～0.3mと細く、したがって掘り込み面からの断面形状は基本的にV字状となっている。ただしF3・4グリッド付近は、肩部・底面とも幅が広く、断面形状はU字状である。これは、その範囲において溝の南壁が崩落し、再度溝を付け替えているためであり、底面の落ち込みと土層断面からその状況が確認できた(A-A)。溝底面の標高は、東端で23.18m、中心部で23.15m、西端で23.19mを測り、ほぼ変化はない。ただし、1区を挟んで東隣には勝田川に面する断崖があることから、この周辺から取水していた可能性が指摘できる。

埋土は最上層が砂層であり、これが検出面となっている。本層は、調査区の東寄りに顕著に認められ、西ほど希薄であった。以下の層はシルトと砂質土が互層をなした状況であり、最下層は砂礫を多く含んでいる。このことから、SD7は流水と滞水を繰り返していたことがわかる。



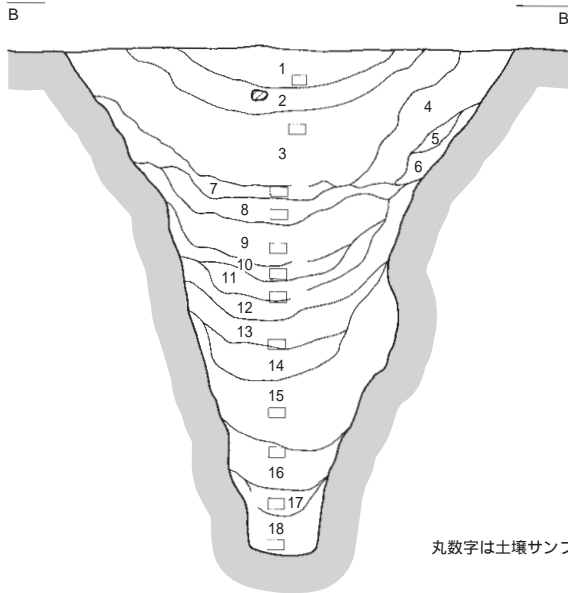
第54図 SD7

26.00m
A



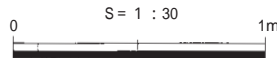
- a. 暗褐色土 1cm次の炭化物・土器粒・黄色粒を含む、しまり 層より弱い、色調は 層より暗い、ピット埋土であろう。
- 暗褐色土(耕作土) 木の根多くボロボロ、若干の土器等を含む。
- 暗褐色土 1~2cm次の炭化物・0.5cm次の焼土粒を多く含む、しまり1層より強い、調査全体に堆積する弥生-中世の包含層。
- 1. 暗灰褐色土 0.5cm次の炭化物・焼土粒・黄色粒を多く含む、また少量の砂も混じる、 層よりしまり強い。
- 2. 暗灰褐色土 0.5~1.0cm次の炭化物・焼土粒を含む、またラミナ状に砂層が認められる、しまり強い。
- 3. 暗灰褐色土 2層よりも砂を多く含む、層埋面が錆によって硬化している、しまり2層より強い。
- 4. 暗灰褐色砂質土 2~3cm次の地山砂層が混じる、0.5cm次の炭化物少量含む、しまり弱い。
- 5. 明褐色砂 壁(地山の砂層)の崩落土、しまり弱い。
- 6. 暗灰褐色土 0.5cm次の炭化物・焼土粒を含む、砂が斑状に混じり、2層よりも色調暗い、しまり強い。
- 7. 明褐色砂 0.5cm以下の炭化物を少量含む、しまり弱い。
- 8. 黒灰褐色シルト 1~2cm次の炭化物を多く含む、1cm次の砂ブロックも混じる、粘性、しまりともに強い、色調最も暗い。
- 9. 暗灰褐色シルト 0.5cm次の炭化物・焼土粒・黄色粒を多く含む、粘性、しまり強い、礫・土器も含まれる。
- 10. 暗褐色シルト 1~3cm次の砂ブロック・0.5~1.0cmの炭化物・焼土粒を含む、粘質に富む。
- 11. 暗褐色シルト 10層よりも砂ブロック多く混じる、0.5cm次の炭化物・焼土粒を含む。
- 12. 暗褐色砂質土 5cm次の明褐色砂ブロック(地山の砂層)を斑状に含む、壁の崩落土であろう、しまり強い。
- 13. 褐色土 黄褐色ローム質土が斑状に混じる、0.5cm次の炭化物・焼土粒を含む、粘質に富む。
- 14. 暗褐色土 13層より少ないが、黄褐色ローム質土を少量含む、0.5~1.0cm次の炭化物・焼土粒を含む。
- 15. 暗灰褐色シルト 0.5~1.0cm次の炭化物を含む、またラミナ状に砂層が混じり込んでいる、しまり強く、粘性強い。
- 16. 黒灰褐色シルト 1~2cm次の炭化物・黄褐色ローム質ブロック(1~2cm次)を多く含む、粘質に富む。
- 17. 黒色砂礫 5~10cm次の安山岩の円礫を多く含む砂質土、しまり強い、地山の崩落土と考えられる。
- 18. 黄褐色砂質土 壁体の崩落土、溝の側壁(約1m)であり、地山の砂層である、しまり強い。
- 19. 暗褐色シルト 5cm以下の地山の黄褐色砂ブロック・0.5~1.0cm次の炭化物・黄色ロームブロック・砂を含む、粘質に富む。
- 20. 暗灰褐色砂質土 0.5cm次の炭化物・1cm次の砂ブロックを含む、しまり弱い。
- 21. 暗灰褐色シルト 1cm次の明褐色ロームブロック・炭化物・3~5cm次の円礫・砂を含む、粘質に富む。

25.30m
B



丸数字は土壌サンプル番号

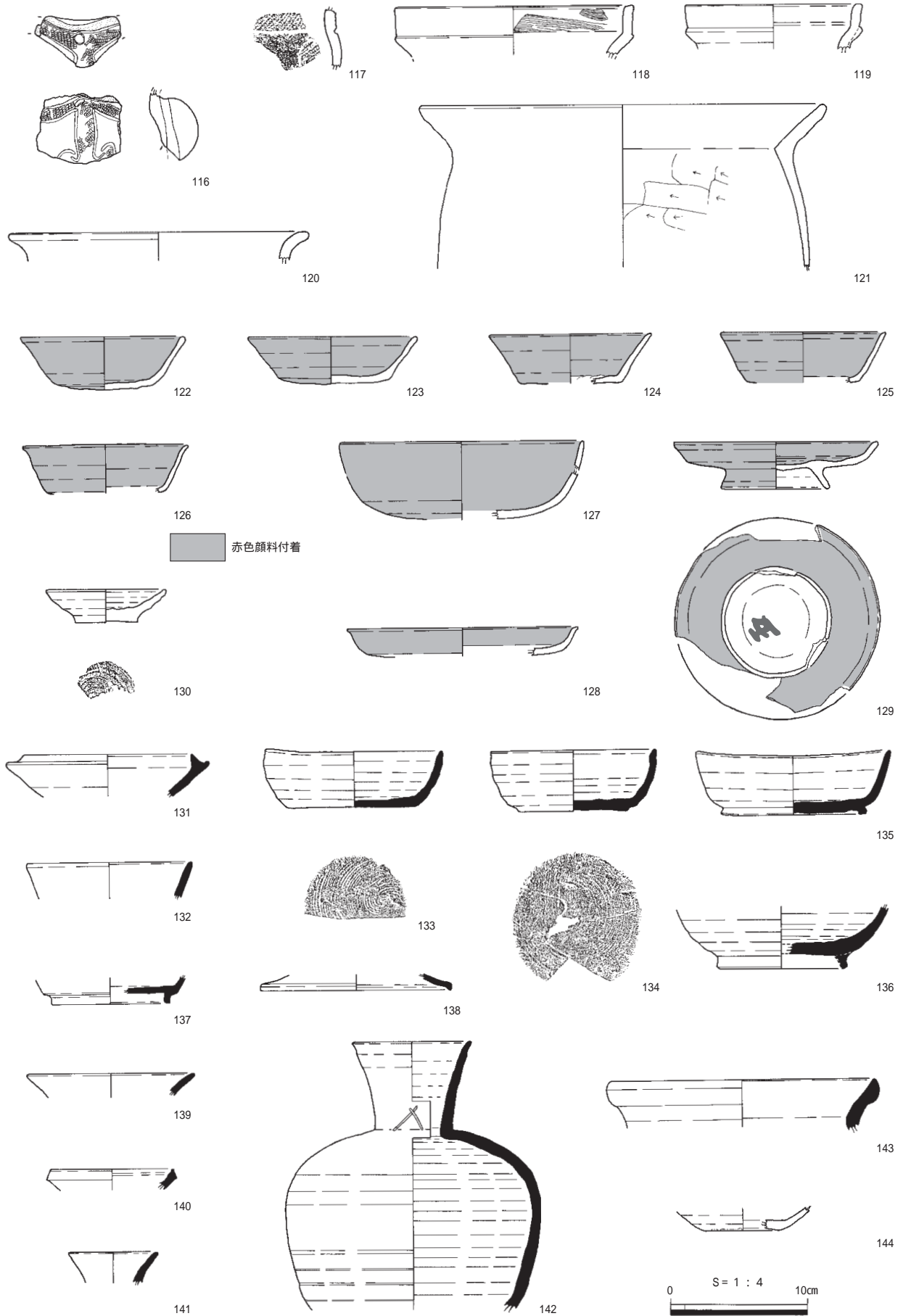
- 1. 黄褐色砂層 2~3cmの円礫を若干含む、ほぼ純粋な砂層、しまり強いが粘性なし。
- 2. 暗灰褐色シルト層 2~mmの炭化物・焼土粒を含む、また若干砂が混入している、しまり、粘性強い。
- 3. 暗褐色土層 1cm次の黄色ブロック・0.5cm以下の炭化物を含む、植物混により乱れが大きく、また幅1~2mmのすじ状の鉄錆が目立つ、しまり強い、粘性中、砂が混じる。
- 4. 暗褐色土層 1cm以下の灰色ブロック・黄色ブロック・炭化物を含む、色調は3層より明るい、しまり、粘性ともに3層より弱い。
- 5. 暗灰褐色砂質土 0.3cm次の焼土粒・炭化物を含む、砂を多く含むが、1層の様な純粋な砂層ではない、粘性弱い、しまり弱い。
- 6. 褐色砂層 1cm次の炭化物を多く含む、しまり弱い、粘性なし。
- 7. 暗灰褐色シルト層 0.5cm次の黄色粒子・炭化物・鉄錆(植物根か?)を含む、しまり3層より弱く、砂をより多く含む。
- 8. 黒色砂質土 0.5cm以下の炭化物・黄色粒子・砂礫を多く含む、粘性、しまり弱い。
- 9. 暗褐色土 1~2cm次の黄色砂ブロック・0.5cm以下の炭化物を含む、粘性に富む、しまり強い。
- 10. 暗灰褐色シルト層 0.3cm次の炭化物少量含む、しまり強く、粘性に富む。
- 11. 褐色砂層 0.3cm次の炭化物・砂礫を含む、しまり弱い。
- 12. 暗灰褐色シルト層 0.5cm次の焼土粒・黄色粒・炭化物を含む、また砂も混じる、しまり強く、粘質に富む。
- 13. 暗褐色シルト層 0.5cm以下の炭化物・黄色粒を含む、粘性低く、ブロック状にはがれてしまう。
- 14. 暗褐色シルト層 0.5~1.0cm次の褐色ブロック・炭化物を含む、13層に比べ粘質に富む、砂も若干混じる、色調13層よりも明るい。
- 15. 暗褐色シルト層 0.5~1.0cm次の黄色ブロック・炭化物を含む、しまり強い、粘質に富む。
- 16. 暗褐色シルト層 土質は15層にほぼ同じ、若干砂が多く混じり、色調が明るい、粘質に富む。
- 17. 暗褐色シルト層 16層より多く砂が混じる、しまり強く粘質に富む、色調16より明るい。
- 18. 暗褐色砂礫層 2~5cm次の円礫や砂を多く含む、0.5cm次の炭化物・黄色粒も認められる、しまり弱い。



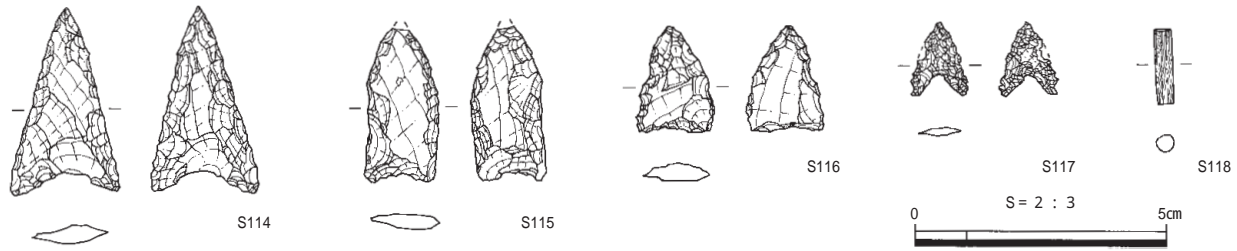
第55図 SD7土層断面図

F3・4グリッドを中心として3mほどの範囲で人頭大の礫が多量に廃棄されており、水量調節などの行うために投げ捨てられた可能性もある。さらにF3グリッド周辺では、埋土中に弥生土器(中期前葉)の小片が多く含まれていたことから、この近辺に当該期の遺構が存在していたものと推定される。F7グリッドはSD8と重複する部分であるが、SD7底面が15~20cmほど深く、その形状を良好に留めていた。

第3章 調査の成果



第56図 SD7 出土遺物(1)



第57図 SD 7 出土遺物 (2)

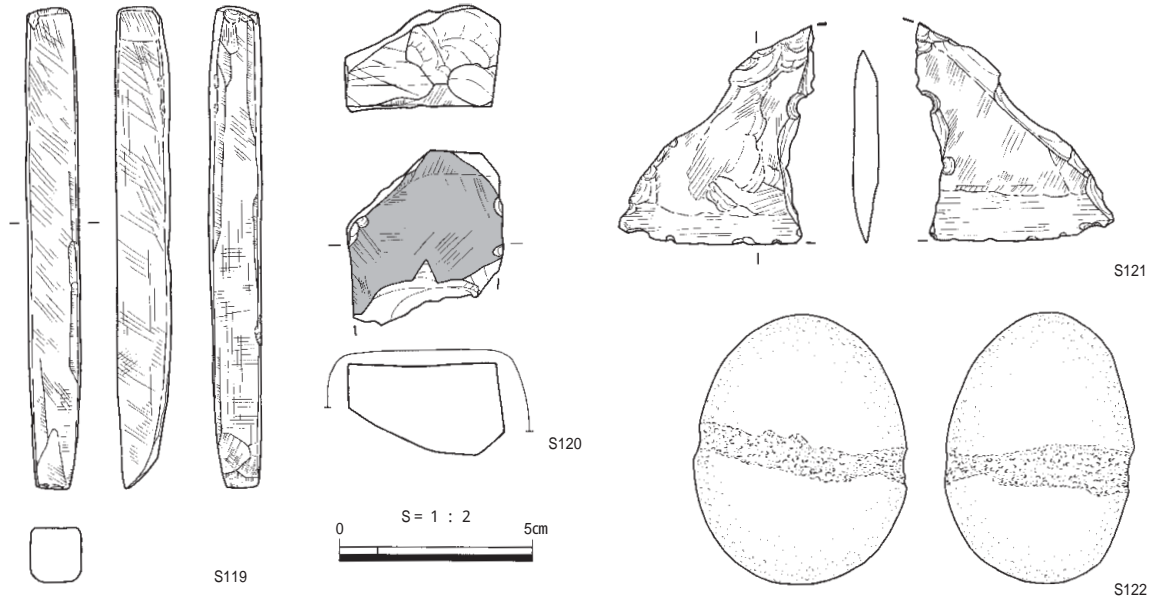
昨年度の調査分も含め、東西方向に約80m延びる本遺構は、西に向かってさらに続くものと思われる。このように2mもの深度を持ち、流水・滞水状況が埋土から確認できることから、条理制地割の区画溝（君嶋2005）として、さらに灌漑水路としての機能を有していた可能性がある。

遺物は、古代を中心として数多く出土している。116は溝底面から出土した縄文後期前葉の双耳壺の耳部であり、上下方向に貫通孔が穿たれている。平行沈線間にRL縄文が充填され、沈線外はミガキ調整である。第1次調査におけるSI 5 出土No. 6 と同一固体と考えられる。117は鉢の胴部破片であり、横走る沈線間にLR縄文が充填される。1・2とも後期前葉中津式に比定されよう。118・119は有段口縁甕であり、口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、その下部で「く」の字状に屈曲している。前者はハケメ調整が、後者はナデ調整がそれぞれ施される。いずれも八橋編年・V期に比定される（北島・小口2004）。120・121は素口縁甕であり、後者は頸部で「く」字状に屈曲し、口縁が大きく開いていることから、八橋編年 期以降に相当しよう。122～129は赤色塗彩がなされた坏・碗・皿である。122～126は坏であり、口縁端部が直線的に立ち上がり、底部が丸みを帯びる122・123と平底の124・125、さらに口縁端部が外反する126に分かれる。底部外面はヘラ切り後、粗いナデ調整が施されている。127は碗であり、底面はヘラによる粗いナデ調整である。128は皿であり、口縁端部が外反している。129は高台付皿の墨書土器である。口径14.7cm、底径3.4cm、器高3.4cmで、底面に「五」の字が墨書されている。以上の赤彩土師器は伯耆国庁編年第2様式に比定され、帰属時期は9世紀と考えられる。130は小型の皿であり、底部が厚く口縁が直線的に立ち上がる。12世紀代に比定される。

131～143は須恵器である。131は坏身であり、八橋編年 期に相当しよう。132・133は坏身の口縁部破片である。134は器壁の薄い坏蓋であり、緩やかに下がり端部が直線的に屈曲する。135～136は坏身である。135・136はやや膨らみをもつ体部であり、底面は回転糸切痕を残している。137は外向きにわずかに張り出す高台が付けられ、底面は粗いナデ調整である。132～133は8世紀末から9世紀代に位置づけられよう。139は体部が丸みを帯びた高台坏であり、器壁が肉厚である。やや後出的か。142は口縁端部が細身を帯び、肩部から体部にかけて丸みをもつ壺である。頸部にメ状のヘラ記号が認められる。同型の須恵器壺は琴浦町三林遺跡SX 1・2 から赤色塗彩の土師器坏と共伴して出土していることから、9世紀に帰属しよう。141・143は壺の口縁部と考えられる。143は口縁端部が丸く肥厚し、肩部に向かってわずかに広がりを見せる。144は白磁碗 類である。底面は削り出し高台で、胎土が露出している。

S114～116はサヌカイト製、S117は黒曜石製の石鏃である。S114は両側辺がほぼ等しく調整加工された凹基式の石鏃である。S115は砲弾形で、挟りが小さい凹基式。S116は基部にわずかに調整加工がみられるため凹基式の石鏃未成品であろう。S117は挟入部が深く、小型の凹基式石鏃である。S118は硬質緑色凝灰岩製の管玉であり、長軸2.35cm、径0.5cm、孔径は0.2cmを測る。S119は珪質頁

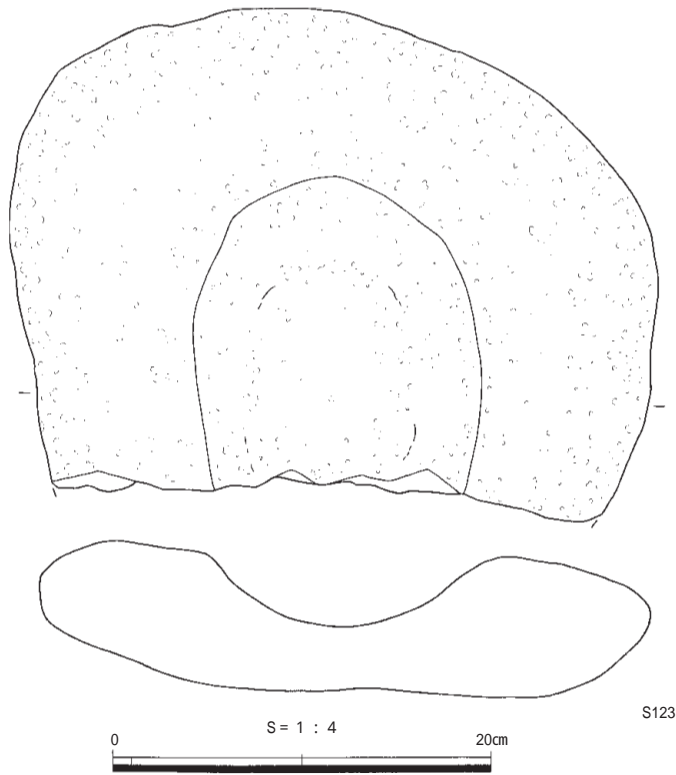
第3章 調査の成果



第58図 SD7出土遺物(3)

表31 SD7出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
116	SD7埋土	縄文土器鉢	— 5.0	体部破片	外面：沈線間RL縄文充填、ミガキ 内面：ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	突起部穿孔	2038
117	SD7埋土	縄文土器鉢	— 4.3	体部破片	外面：沈線間LR縄文充填、ミガキ 内面：ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		1674
118	SD7埋土	土師器甕	17.0 3.6	口縁-頸部破片	外面：口縁-頸部ヨコナデ 内面：口縁-頸部八ケナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：明黄褐色	良好		1717
119	SD7埋土	土師器甕	12.0 3.2	口縁-頸部破片	外面：口縁-頸部ヨコナデ 内面：口縁-頸部ヨコナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		1866
120	SD7埋土	土師器甕	20.4 2.1	口縁部破片	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好	外面スス付着	1534
121	SD7埋土	土師器甕	29.0 11.8	口縁-体部1/6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径5mm以下の灰・白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面スス付着	1533・1538・1672・1818・1840・1921・2002・2505
122	SD7埋土	土師器環身	12.0 3.8	口縁-底部1/2	外面：口縁-体部回転ナデ、底面ヘラ切ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1520・1533
123	SD7埋土	土師器環身	12.2 3.5	口縁-底部1/1	外面：口縁-体部ナデ、底面ヘラ切粗いナデ 内面：口縁-体部ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙-明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1000
124	SD7埋土	土師器環身	11.8 3.6	口縁-底部1/2	外面：口縁-体部回転ナデ、底面ヘラ切ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1533・1697・2302
125	SD7埋土	土師器環身	12.0 3.7	口縁-底部1/3	外面：口縁-体部回転ナデ、底面ヘラ切ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1833・1520・1533
126	SD7埋土	土師器環身	12.3 3.5	口縁-体部1/4	外面：口縁-体部回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1533・1534
127	SD7埋土	土師器椀	17.8 5.7	体-底部1/8	外面：口縁部-体部回転ナデ 内面：口縁部-体部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明赤褐-橙色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1884
128	SD7埋土	土師器皿	17.0 2.1	口縁-底部1/8	外面：口縁-底部ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：赤褐色 内面：赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	1571・1539
129	SD7埋土	土師器高台皿	14.7 3.4	口縁-底部3/4	外面：口縁-体部回転ナデ、底面墨書有り 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	墨書「五」、内外面赤色塗彩	3819
130	SD7埋土	土師器環身	8.5 2.4	口縁-底部1/2	外面：口縁-体部回転ナデ、底面回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径8mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	堅緻		3005
131	SD7埋土	須恵器環身	12.2 2.9	口縁-体部1/5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		2617
132	SD7埋土	須恵器環身	12.2 2.5	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰白色	堅緻		1506
133	SD7埋土	須恵器環身	12.9 4.5	口縁-底部3/4	外面：口縁-体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：青灰-黄褐色 内面：青灰色	堅緻		1761
134	SD7埋土	須恵器環身	12.0 4.4	口縁-底部1/2	外面：口縁-体部回転ナデ、底面回転系切 内面：口縁-底部回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		3577
135	SD7埋土	須恵器高台環	14.2 4.6	口縁-底部1/2	外面：口縁-体部回転ナデ、底面粗いナデ 内面：口縁-底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：黄灰色	堅緻		2284
136	SD7埋土	須恵器高台碗	8.8(底) 4.5	体-底部1/5	外面：体部回転ナデ、底面ナデ 内面：体-底部回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		3730
137	SD7埋土	須恵器高台環	8.6(底) 1.9	底部1/6	外面：体部回転ナデ、底面ナデ 内面：体-底部回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ	堅緻		3004
138	SD7埋土	須恵器環蓋	14.0 1.2	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：灰オリーブ色 内面：灰オリーブ色	堅緻		1678
139	SD7埋土	須恵器環身	12.4 1.7	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		2494
140	SD7埋土	須恵器壺?	9.0 1.5	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：暗緑灰色 内面：暗青灰色	堅緻	外面自然釉	1572
141	SD7埋土	須恵器壺	6.2 2.2	口縁部破片	外面：口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：オリーブ褐色-黒褐色 内面：オリーブ褐色	堅緻	自然釉	1505
142	SD7埋土	須恵器壺	8.6 19.4	口縁-体部2/3	外面：口縁-体部回転ナデ 内面：口縁-体部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗青灰-灰オリーブ色 内面：暗青灰-浅黄褐色	堅緻	頸部ヘラ記号	1753・1754・1762・1780
143	SD7埋土	須恵器甕?	19.4 3.5	口縁部破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰オリーブ色 内面：淡黄褐色	堅緻		1838
144	SD7埋土	白磁碗	4.4(底) 1.6	体-底部破片	外面：底面は無釉 内面：内面見込みに1条の圓線	密	外面：灰オリーブ色 内面：灰オリーブ色	堅緻		1693



第59図 SD 7 出土遺物 (4)

岩製の柱状片刃石斧であり、全面丁寧な研磨が施されている。断面は方形で抉りはない。S120は砥石であり、砥面は3面である。S121は直線刃半月形の磨製石庖丁破片で、体部に紐孔を、端辺に抉りをもつ。S122は安山岩製の石錘で、円礫中心部に敲打による窪みをめぐらす。S123は箕形で幅広の縁をもち、中央が弓状に窪んだ多孔質安山岩製の石皿である。第1次調査では、S15から石皿とその破片が出土しているが、本例と形態は異なり、楕円形で上面が浅く窪んだものである。縄文後期以外の資料は少ないので、おそらく後期前葉に帰属する石皿と考えられる。第127図は、残存長46.1cm、幅33.4cm、厚さ17.7cmのほぼ原形が窺える鉄床石である。大型楕円礫の中心部に径7.5cmの鍛打痕があり、滓

が付着している。F3グリッド埋土中から出土しているが、この周辺は中世以降の土坑が切っている状況や部分的な攪乱を受けていること、SK14と比較的距離が近いことなどからも混入したものと思われる。

出土土器の様相から、溝の埋没年代を平安時代前期（9世紀代）と考えたい。



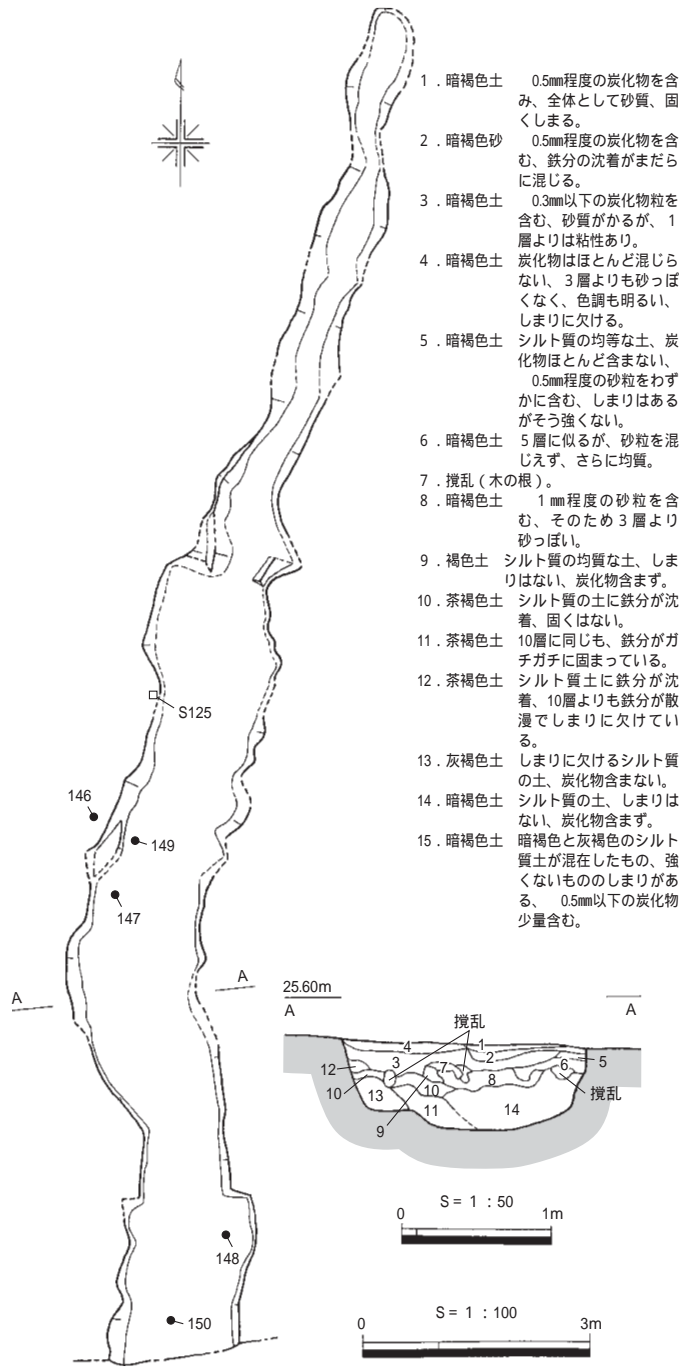
写真4 環境考古学分析現地指導



写真5 SD 7 掘り下げ状況

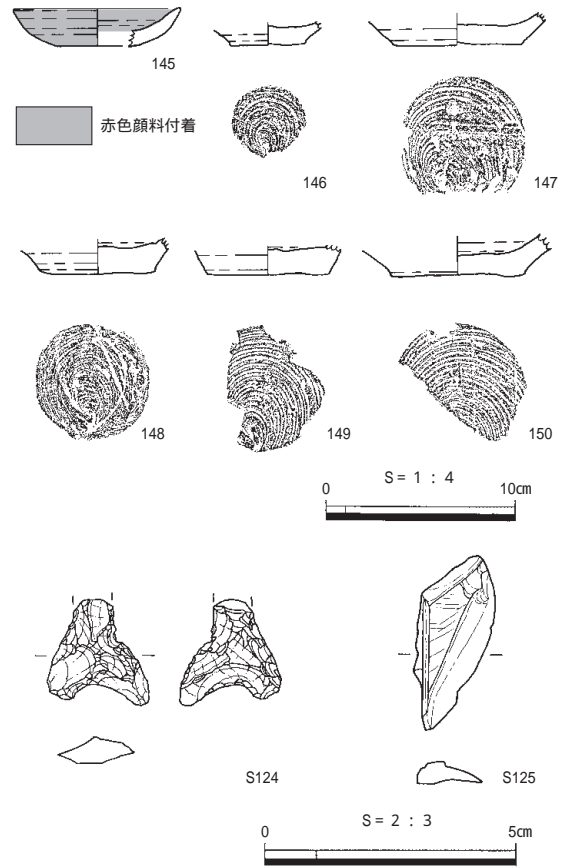
表32 SD 7 出土石器観察表

	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げ
S114	第57図 PL.20	SD 7	石鏃	サヌカイト	3.7	2.16	0.4	2.1	1978
S115	第57図 PL.20	SD 7	石鏃	サヌカイト	3.08	1.55	0.3	1.8	1979
S116	第57図 PL.20	SD 7	石鏃	サヌカイト	2.08	1.55	0.35	1.2	2571
S117	第57図 PL.20	SD 7	石鏃	黒曜石	1.46	1.12	0.18	0.2	1513
S118	第57図 PL.19	SD 7	管玉未製品	碧玉	1.5	0.36	0.32	0.3	2440
S119	第58図 PL.16	SD 7	柱状片刃石斧	珪質頁岩	12.55	1.4	1.45	56.5	1637
S120	第58図 PL.23	SD 7	砥石	無斑晶安山岩	4.6	4.1	2.45	48.2	2058
S121	第58図 PL.18	SD 7	石庖丁	無斑晶安山岩	5.2	5.7	0.7	20.4	1738
S122	第58図 PL.16	SD 7	石錘	安山岩	7.15	5.6	5.0	270.0	2282
S123	第59図 PL.42	SD 7	石皿	安山岩	26.45	34.3	7.7		4577



第60図 SD 1

1. 暗褐色土 0.5mm程度の炭化物を含み、全体として砂質、固くしる。
2. 暗褐色砂 0.5mm程度の炭化物を含む、鉄分の沈着がまだらに混じる。
3. 暗褐色土 0.3mm以下の炭化物粒を含む、砂質がかるが、1層よりは粘性あり。
4. 暗褐色土 炭化物はほとんど混じらない、3層よりも砂っぽくなく、色調も明るい、しまりに欠ける。
5. 暗褐色土 シルト質の均等な土、炭化物ほとんど含まない、0.5mm程度の砂粒をわずかに含む、しまりはあるがそう強くない。
6. 暗褐色土 5層に似るが、砂粒を混じえず、さらに均質。
7. 攪乱(木の根)。
8. 暗褐色土 1mm程度の砂粒を含む、そのため3層より砂っぽい。
9. 褐色土 シルト質の均等な土、しまりはなく、炭化物含まず。
10. 茶褐色土 シルト質の土に鉄分が沈着、固くはない。
11. 茶褐色土 10層に同じも、鉄分がガチガチに固まっている。
12. 茶褐色土 シルト質土に鉄分が沈着、10層よりも鉄分が散漫でしまりに欠けている。
13. 灰褐色土 しまりに欠けるシルト質の土、炭化物含まない。
14. 暗褐色土 シルト質の土、しまりはなく、炭化物含まず。
15. 暗褐色土 暗褐色と灰褐色のシルト質土が混在したもの、強くないものしまりがある、0.5mm以下の炭化物少量含む。



第61図 SD 1 出土遺物

SD 1 (第60・61図、表33・34、PL. 19・28・29)

E・F・G6グリッドに位置し、南北に縦走する。検出した長さは約17.8m、F5グリッド内で途切れている。肩部の幅は、最大1.8m、北側ほど細くなり0.6～0.9mである。底面は、最大幅が1.3m、北側は0.3～0.5mを測り、断面が逆台形である。深さは最深部で0.6mを超えない。掘り込み面は、基本層序 - 4層を切り込んでい

る。埋土は、砂層とシルト質の暗褐色土から構成されるが、砂層は南ほど顕著である。溝底面の標高は南端で25.0m、北端で24.8mであり、南から北に流水があったことを示している。

遺物は、中世土師器145～150と石鏃S124、軟質緑色凝灰岩製の素材剥片S125が出土している。145・146は小皿であり、前者は体部が緩やかに湾曲しながら立ち上がり、表面には赤色塗彩がなされている。当該期の小皿で、同じく赤色顔料が塗彩されたものとして倉吉市大日寺遺跡整地層出土土器を挙げるができる。後者は底部破片であり、回転系切痕が認められる。147～150は坏の底部であり、いずれも器壁が厚く回転系切成形である。S124はサヌカイト製の石鏃未成品。管玉関連資料であるS125は軟質緑色凝灰岩製の板状素材剥片で、表面左端部に1条の磨り切り溝が確認できる。

表33 SD1出土土器観察表

遺物	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
145	SD1埋土	土師器皿	8.8 1.9	口縁～底部 1/6	外面：口縁～体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径2mm以下の赤色砂粒	外面：橙～浅黄橙色 内面：浅黄橙色	良好	内外面赤色塗彩	715
146	SD1埋土	土師器皿	3.9(底) 1.2	体～底部 1/2	外面：口縁～体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径2mm以下の白・赤色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好		187
147	SD1埋土	土師器坏	6.8(底) 1.8	体～底部 1/8	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：ナデ	径1mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		711
148	SD1埋土	土師器坏	6.1(底) 1.8	底部 破片	外面：回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		177
149	SD1埋土	土師器坏	6.5(底) 1.6	底部 破片	外面：回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		188
150	SD1埋土	土師器坏	7.1(底) 2.2	底部 破片	外面：回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の白・赤色砂粒	外面：にぶい褐～橙色 内面：橙色	良好		172

表34 SD1出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げ No.
S124	第61図 PL.20	SD1	石鏃未成品	サヌカイト	2.16	2.0	0.51	1.5	844
S125	第61図 PL.19	SD1	板状素材	碧玉	3.45	1.5	0.4	3.0	843

基本層序 - 4層を掘り込んでいること、出土土器が中世 期3・4段階に該当することから、溝の埋没年代は12～13世紀と考えられる。

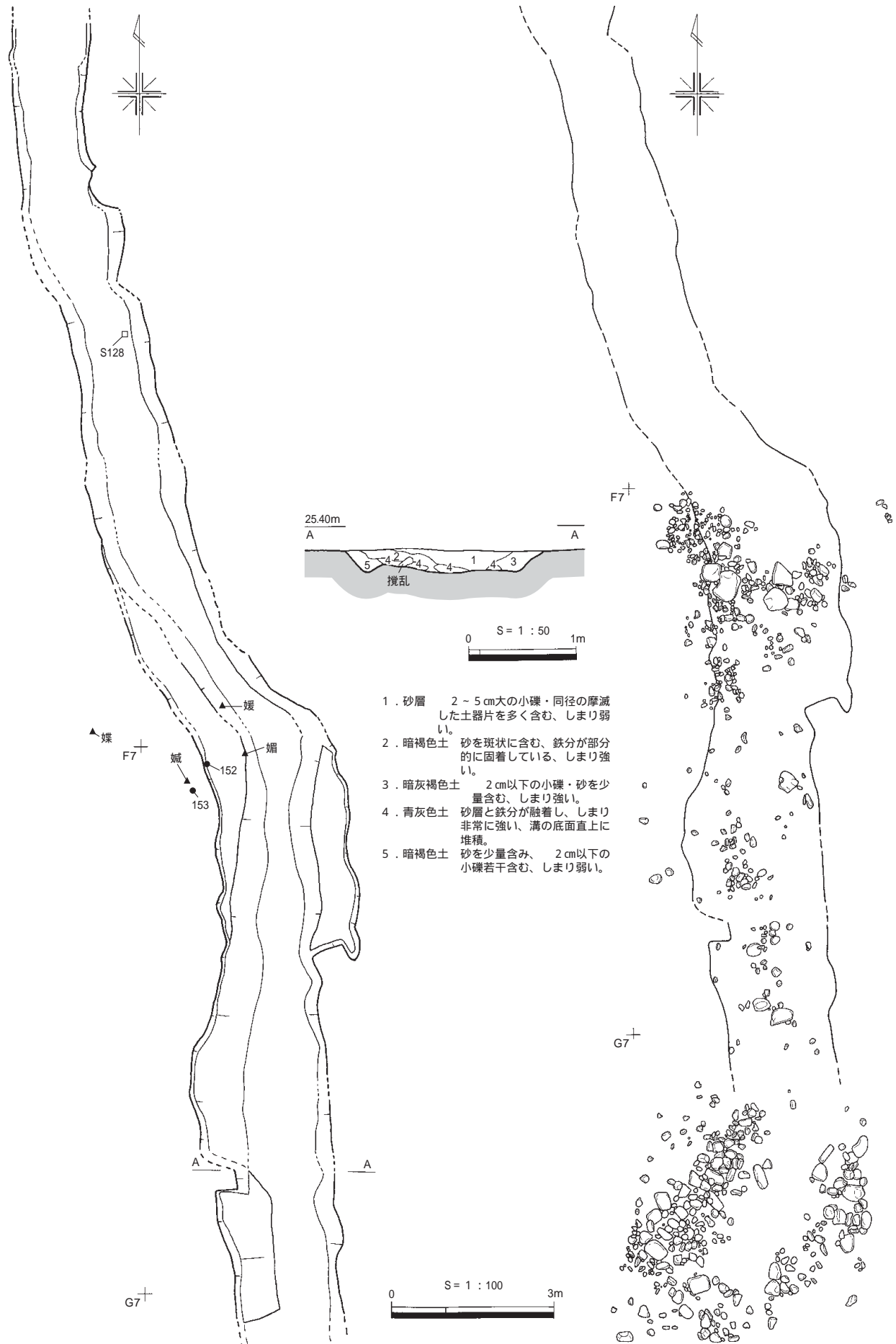
SD2 (第62・63・125図、表35・36、PL.16・18・20・28・29)

D・E7、F・G6グリッドに位置する南北溝である。第1次調査のSD4に該当する。S12、SD1・7を切り、北西-南東方向に主軸をとり、F6グリッドで若干蛇行する。溝幅は1.4～2.5m、検出面からの深さは約0.15～0.2mで、断面形はU字状を呈する。F6・7グリッドではほぼ南北方向に人頭大～拳大の礫が拡がり、礫の間隙には砂が混在している状況が確認されたため、溝と判断した。最上層の砂礫層中には、磨耗した土器小片が多く含まれており、流水していた状況が推測された。この砂礫層は南半に偏り、北半は希薄となる。埋土の底面付近は青灰色層や鉄分沈着層が堆積している。溝底面の標高は、南端で25.1m、中間点で24.7m、北端で24.6mであり、北へ向かって水の流れがあった状況が推測される。

遺物は、古代～中世の土師器・須恵器と鉄関連遺物、弥生時代の石器がある。151は赤色塗彩された高台付坏である。底面に墨書の痕跡があるが、記された文字は不明である。その特徴から、伯耆国庁編年第2様式に比定される。152・153は小皿であり、いずれも底部に回転系切痕が認められる。154は外面格子タタキ、内面カキメをもつことから勝間田系須恵器と考えられる。嬬～媛は鍛冶滓であり、嬬は上面に工具痕を残している。嬬～媛は鉄製品で、嬬は刀子、媛は釘に該当する。S126は安山岩製の石鏃であり、短冊形を呈する。裏面は自然面を残し、刃部側には使用に伴う擦痕が認められる。S127は九州型石錘の欠損品である。長卵型の礫に十字状の溝が刻まれている。S128はサヌカイト製の凹基式石鏃である。

出土した土器が主に中世 期3・4段階に比定されることから、12世紀の時期を示すものと思われる。

第3章 調査の成果

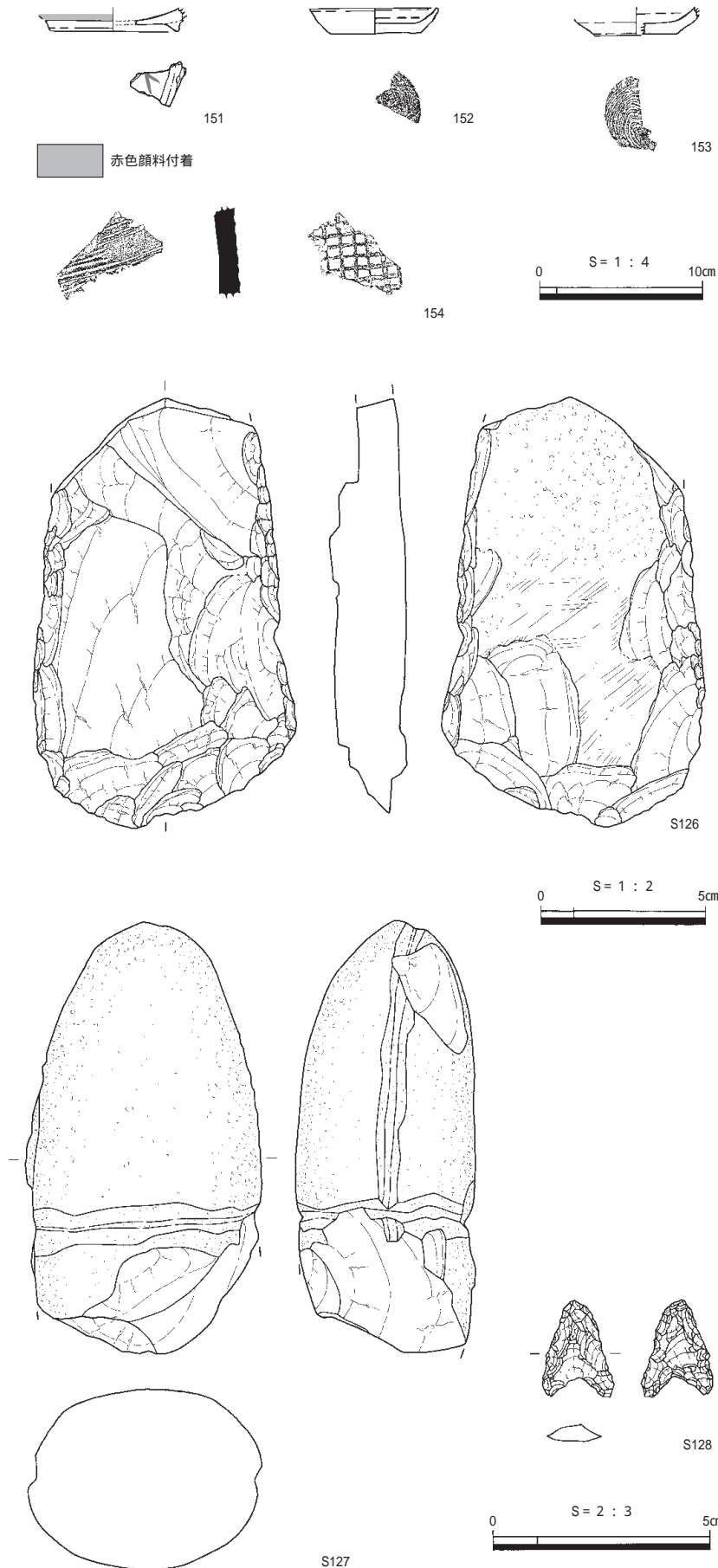


第62図 SD 2

SD 8 (第64 ~ 67、表37・38、
巻頭図版4、PL. 19・20・29 ~
33・44・55 ~ 60・63・66・67)

G 6・7・8グリッドに位置し、SD 7を切っている。検出した長さは約14.5m、1次調査分を合わせると総延長約46.5mとなり、G 6グリッドで収束する。北西 - 南東方向に主軸をとり、肩部の幅は1.8 ~ 2.7m、底面の幅は約0.8 ~ 1.4m、検出面からの深さは約1.75mを測る。掘り方は基本層序 層まで掘り込み、断面形は基本的に逆台形となっている。また、溝底面には地山を箱形に深く掘り下げた箇所が2箇所みられ、この付近はSD 7との重複地点でもある。SD 7の底面が15 ~ 20cmほど深く、その形状を良好に留めていた(A - A)。掘り込み東側は長さ1.35m、幅0.7m、溝底面からの深さ約0.25m、西側は長さ0.5m、幅0.6m、溝底面からの深さ約0.45mを測る。溝底面の標高は、東端で23.4m、中心部で23.4m、西端で23.37mを測り、ほぼ変化はない。ただし、第1次調査での調査区東西端部の底面標高が23.1mとなっていることから、西側がやや低い。

埋土は、暗褐色粘質土をベースに砂層、砂質土、シルト層などが互層となって堆積している状況が土層断面から確かめられ、粘質土中には拳大の礫が混じり、遺物も多く含まれてい



第63図 SD 2 出土遺物

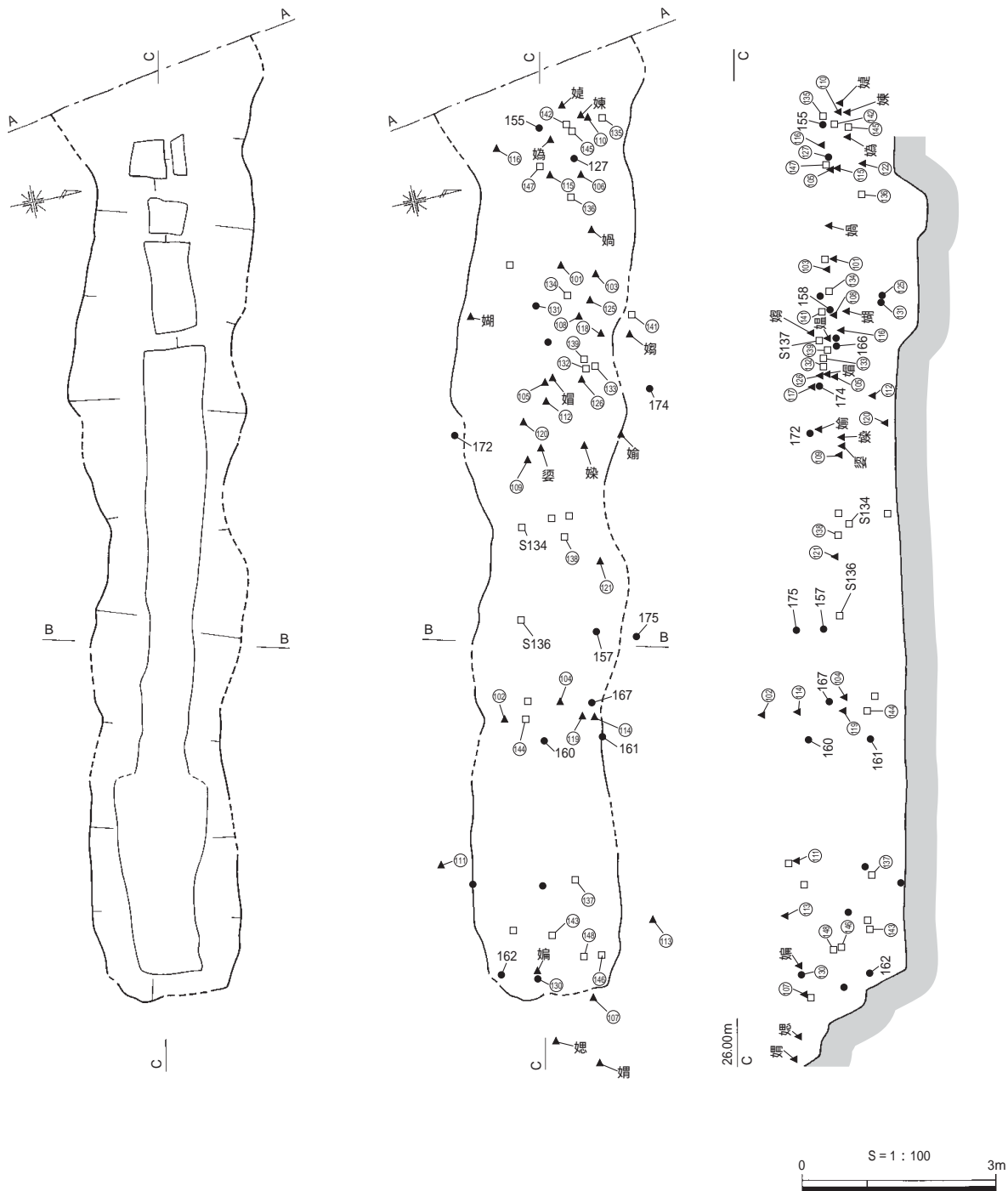
第3章 調査の成果

表35 SD 2 出土石器観察表

遺物	遺層	構位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
151	SD2	埋土	土師器 高台環	8.1 (底) 1.4	底部 破片	外面：回転ナデ、底面墨書有り 内面：回転ナデ	径 1mm以下の白・赤色 砂粒	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好	底面に墨書、内外面赤色 塗彩	1555
152	SD2	埋土	土師器 皿	8.0 1.5	口縁～底部 1/5	外面：口縁～体部回転ナデ、底 部回転糸切 内面：回転ナデ	径 1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		679
153	SD2	埋土	土師器 皿	5.0 (底) 1.6	体～底部 1/6	外面：体部回転ナデ、底面回転 糸切 内面：回転ナデ	径 1mm以下の白・赤色 砂粒	外面：明赤褐色 内面：橙色	良好		687
154	SD2	埋土	須恵器 甕	5.2	体部 破片	外面：格子タタキ 内面：カキメ	径 1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：橙色	堅緻		1497

表36 SD 2 出土石器観察表

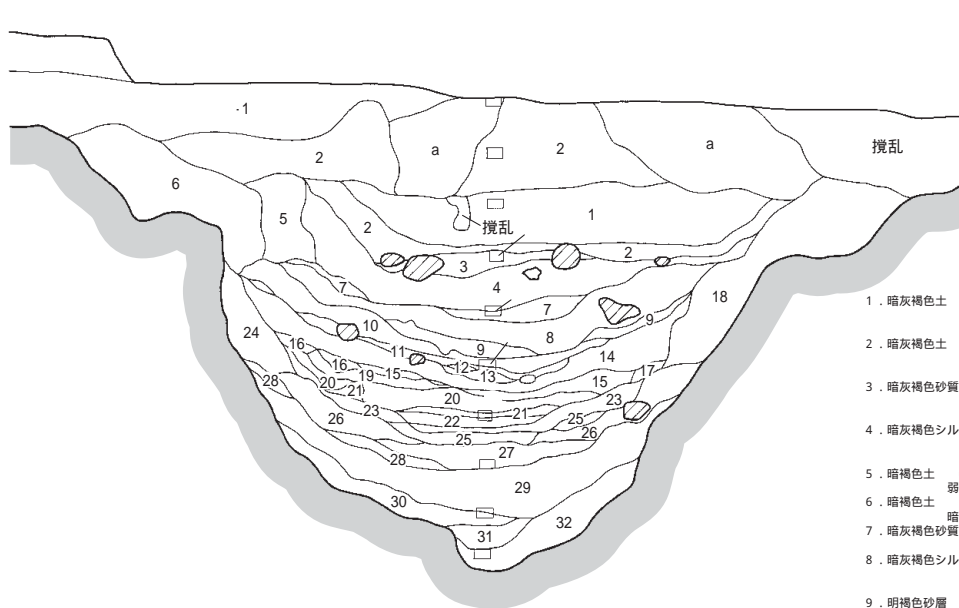
No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S126	第63図 PL.18	SD2	石鋤	安山岩	13.1	8.0	2.2	320.0	975
S127	第63図 PL.16	SD2	石錘	安山岩	13.1	7.2	5.5	640.0	1461
S128	第63図 PL.20	SD2	石鏃	サヌカイト	2.2	1.68	0.41	1.1	1543



第64図 SD 8

26.00m

A

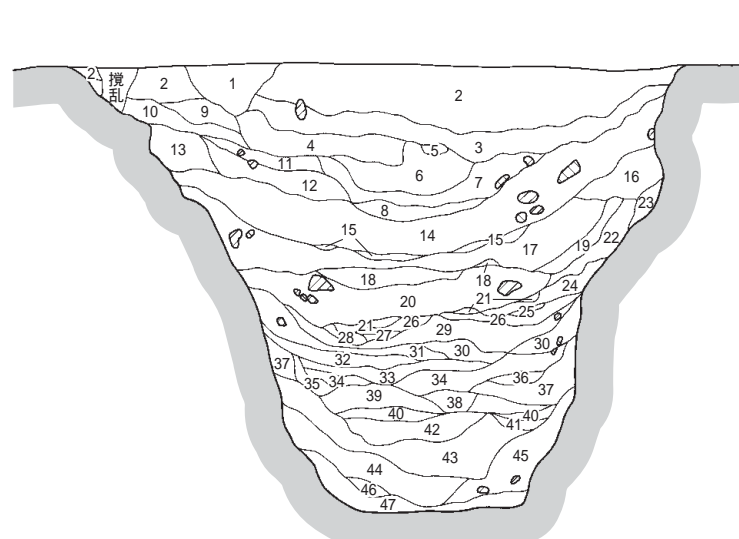


丸文字は土壌サンプル番号

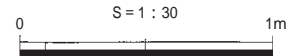
1. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒・黄色粒を含む、また砂も少量含んでいる。しまり・層より強い、SD8最上層に該当し、確認面である。
2. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒・黄色粒を1層より多く含む、また砂も混じる、しまり・粘性とも1層より強い。
3. 暗灰褐色砂質土 10～20cm大の礫や1cm以下の砂礫を多く含む、また1cm大の炭化物も見られる、しまり弱い。
4. 暗灰褐色シルト 1cm以下の炭化物・0.2～0.5cmの焼土粒を含む、粘性強い、しまり3・7層に比べ強い、鉄屑など鉄関連遺物を含む。
5. 暗褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、しまり4・6層より弱い。
6. 暗褐色土 1.0～1.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、色調5層より暗い。
7. 暗灰褐色砂質土 4層と母体は近いがより多く砂礫が混じる、6層よりしまり弱い。
8. 暗灰褐色シルト 1cm以下の炭化物・焼土粒・黄色粒を多く含む、若干砂も混じっている、粘性に富み、しまり強い。
9. 明褐色砂層 1～2cm大の木礫や砂から成る、1cm大の炭化物や磨耗した土器片なども認められる、しまり弱い。
10. 暗灰褐色シルト 0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、土質は4層に類似、粘性に富み、しまり強い。
11. 暗灰褐色砂質土 10層を母体としながらも砂を多く含む、しまり弱い。
12. 暗灰褐色シルト 0.5cm以下の炭化物を含む、粘性に富み、しまり強い。
13. 明褐色砂層 0.5cm以下の炭化物少量含む、しまり弱い。
14. 暗灰褐色シルト 8層とほぼ同じ土質、砂を若干含む。
15. 明褐色砂層 1cm以下の砂礫から成る、しまり弱い。
16. 暗灰褐色シルト 0.5cm以下の炭化物・焼土粒少量含む、粘性に富み、しまり強い。
17. 明褐色砂層 0.2～0.5cm大の炭化物・焼土粒を少量含む、しまり弱い。
18. 暗褐色土 1cm大の炭化物・黄色ブロック・焼土粒を多く含む。
19. 暗灰褐色シルト 1～2cm大の炭化物・0.5cm以下の焼土粒・黄色粒を多く含む、粘性に富み、しまり強い。
20. 明褐色砂層 0.5cm以下の炭化物を含む、しまり弱い。
21. 暗灰褐色シルト 0.5cm以下の炭化物を多く含む、粘性に富み、しまり強い。
22. 明褐色砂層 0.5cm以下の炭化物・焼土粒を含む、しまり弱い。
23. 暗灰褐色シルト 21層とほぼ類似。
24. 暗灰褐色シルト 1cm大の炭化物・0.5cm大の砂ブロックを含む、しまり強い。
25. 暗灰褐色砂質土 1～2cm大の炭化物を含む、しまり弱い。
26. 暗灰褐色シルト 0.5cm以下の炭化物・1cm大の砂ブロックを含む、粘性に富み、しまり強い。
27. 暗灰褐色砂質土 0.5～1.0cm大の炭化物・0.5cm以下の焼土粒・小礫を多く含む、砂は25層より少ない、しまり25層より強い。
28. 暗灰褐色粘土層 土質が緻密で1cm大の砂ブロックを含む、粘性に富み、しまり強い。
29. 暗褐色粘土層 土質が緻密で1cm大の炭化物を含む、粘性に富み、しまり強い。
30. 暗灰褐色砂質土 1cm大の炭化物・黄色ブロックを含む、また砂も多量含んでいる、粘性に富み、しまり29より弱い。
31. 暗灰褐色粘土層 土質が緻密で1cm大の炭化物や砂ブロック(恐らく地山砂層か)を含む、しまり強く、粘性に富み、しまり強い。
32. 暗灰褐色シルト 1cm大の炭化物・砂ブロックを密に含む、粘性に富み、しまり強い。

26.00m

B

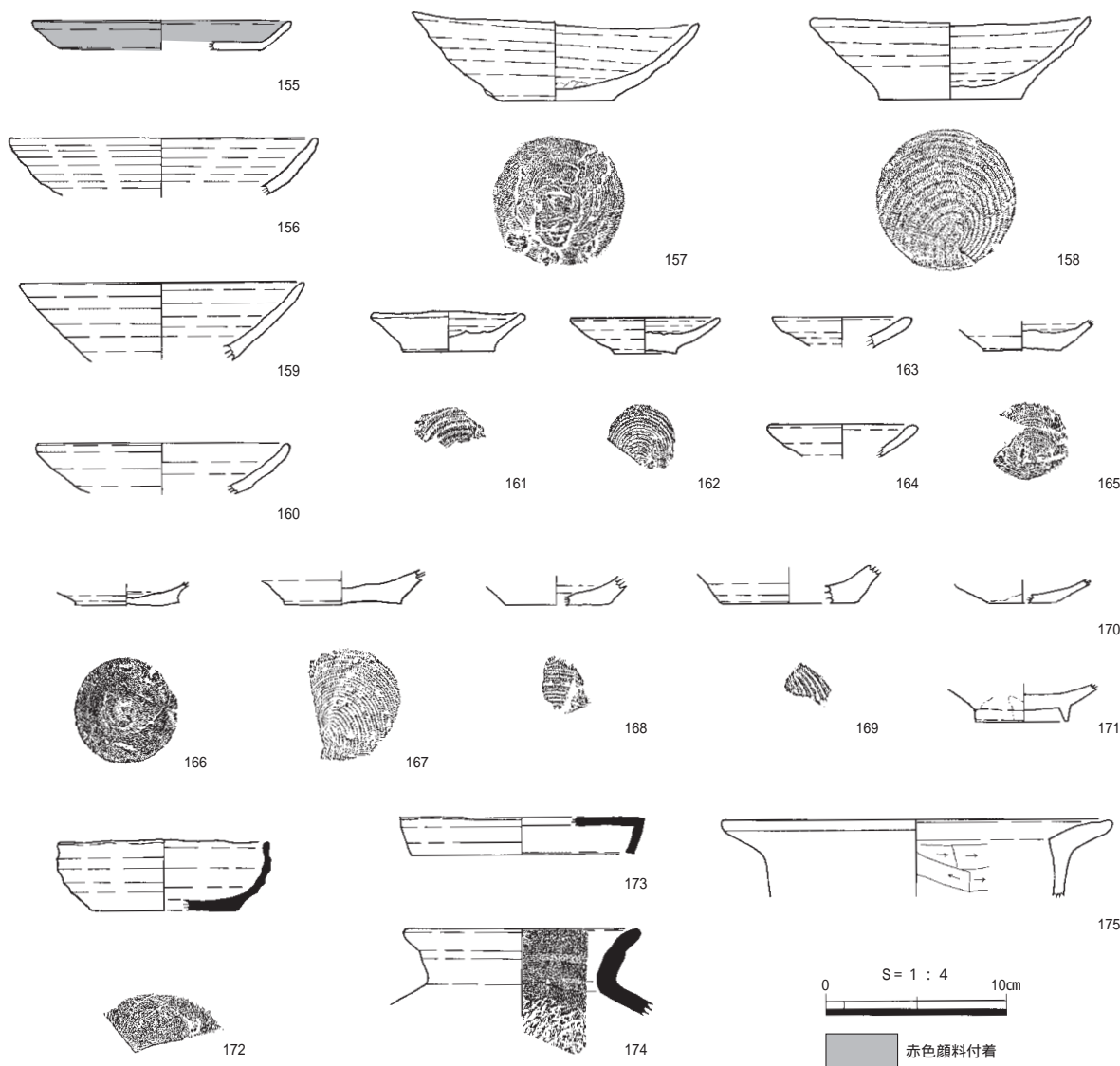


1. 暗褐色砂質土 1cm大の炭化物を含む砂層、大形礫を含む層が落ち込んでいる、粘性、しまりなし。
2. 暗褐色泥砂土 母体は1層と基本的に同じであるが、砂が少ない、大形礫を含む層であり、SD8の最上層に該当する、粘性なし、しまり1層より強い。
3. 暗褐色土 1cm大の炭化物・0.3cm以下の焼土粒・黄色粒を含む、また砂が斑状に混入する、粘性なし、しまり2層と同じ。
4. 暗褐色砂質土 1cm大の炭化物・0.5cmの黄色粒・1～2cm大の小礫を多く含む、母体は砂である、粘性、しまりなし。
5. 暗褐色砂質土 0.5cm大の炭化物少量含む、母体は砂である、粘質、しまりなし。
6. 暗灰褐色土 1cm大の炭化物・0.5cm大の焼土粒を含む、また0.5cm大の錆状の粒子を多く含む、砂が斑状に混入、しまり強い、粘性なし。
7. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物を含む、土質は6層と基本的に類似しているが砂を含まない点で異なる、しまり6層より強い。
8. 暗灰褐色砂質土 1～2cm大の小礫を密に含む、0.5cm以下の炭化物・焼土粒少量混入、しまり弱い、粘性なし。
9. 褐色砂質土 0.5cm大の炭化物・黄色粒を含む、粘性なし、しまり弱くボロボロ(砂質のため)。
10. 暗褐色土 0.3cm以下の炭化物・砂を含む、粘性なし、しまり9層より強い。
11. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・黄色粒を含み、少量砂も混じる、粘性弱い。
12. 暗灰褐色砂質土 0.5cm大の炭化物・黄色粒・錆状粒子を含む、しまり11層に近く粘性はなし。
13. 暗褐色土 0.3cm大の炭化物・白色粒・錆状粒子を含む、しまり強い。
14. 暗灰褐色土 1～2cmの炭化物・焼土粒・0.3cm以下の錆状粒子を多く含む、また砂がラミナ状に混入、10～20cm大の円礫も含む、しまり強く、粘性ややあり。
15. 暗灰褐色砂質土 0.3cm以下の炭化物少量含む、母体は砂であり、しまり、粘性なし。
16. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物・焼土粒・砂を少量含む、粘性弱い、しまり弱い。
17. 暗灰褐色土 1cm以下の炭化物・焼土粒・黄色粒を密に含む、しまり強く、粘性ややあり、14層に類似。
18. 褐色砂質土 1～2cmの炭化物・小礫・0.3cmの焼土粒・黄色粒を含む、しまり弱く、粘性なし。
19. 暗褐色土 0.3cm大の炭化物・黄色粒・砂を少量含む、17層の土質に類似。
20. 暗灰褐色土 1cm大の炭化物・焼土粒・黄色粒・0.5cm以下の錆状粒子を多く含む、また砂がラミナ上に混入、10～20cm大の礫を含む、しまり強く、粘性ややあり。
21. 暗褐色砂質土 0.5cm以下の炭化物を少量含む、しまり弱い。
22. 暗褐色土 1～2cm大の黄色粒(地山)をブロック状に含む、しまり23層より弱い。
23. 暗褐色土 0.5cm大の黄色粒・炭化物を含む、しまり22層より強い。
24. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・0.3cm以下の焼土粒を含む、しまり強く、粘性ややあり。
25. 暗灰褐色土 0.3cm大の炭化物・黄色粒を少量含む、しまり強い。
26. 暗灰褐色土 1cm大の炭化物・0.3cm以下の焼土粒を含む、しまり強く、粘性ややあり、24層に類似。
27. 暗褐色砂質土 0.3cm大の炭化物少量含む、粘性なし、しまり弱い。
28. 暗灰褐色土 0.3cm以下の炭化物・黄色粒・錆状粒子を含む、しまり強く、粘性ややあり。
29. 暗灰褐色土 1cm大の炭化物・0.5cm大の焼土粒少量含む、しまり弱い。
30. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、しまり強い、砂を少量含む。
31. 暗灰褐色土 0.5～1.0cm大の炭化物・錆上粒子を密に含む、粘性ややあり、しまり強い。
32. 暗灰褐色土 31層より砂を多く含む、しまりが弱い。
33. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、しまり弱い。
34. 暗灰褐色土 0.5～1.0cm大の炭化物・焼土粒・黄色粒・錆状粒子を密に含む、粘性ややあり、しまり強い。
35. 褐色砂質土 1cm大の小礫混入、しまり弱い。
36. 暗灰褐色土 0.5cm以下の炭化物少量含む。
37. 暗灰褐色土 34層と類似、やや粘性強い。
38. 褐色砂質土 0.5cm以下の小礫と砂から成る、土器小片も含む、しまり弱い。
39. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・錆上粒子を含む、しまり強く、粘性ややあり。
40. 暗褐色砂質土 0.3cm大の炭化物少量含む、しまり弱い。
41. 暗灰褐色土 40層に母体は同じであるが、炭化物をより多く含む。
42. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物・錆状粒子を多く含む、砂もラミナ状に混入、しまり強く、粘性あり。
43. 暗灰褐色土 42層と母体は同じであるが砂が少ない、しまり強く、粘性あり。
44. 暗灰褐色土 0.5～1.0cmの炭化物・0.3cm以下の焼土粒を含む、鉄の沈着が著しい、しまり強く、粘性に富む。
45. 暗灰褐色土 44層と類似するが、砂がより多く混入、また地山の砂層がブロック状(1cm大)に含む。
46. 暗灰褐色土 0.5cm大の炭化物を含む、粘性、しまり強い。
47. 褐色砂質土 1～2cm大の黄色砂ブロック(地山)を多く含む、粘性、しまり強い。



第65図 SD8土層断面図

第3章 調査の成果



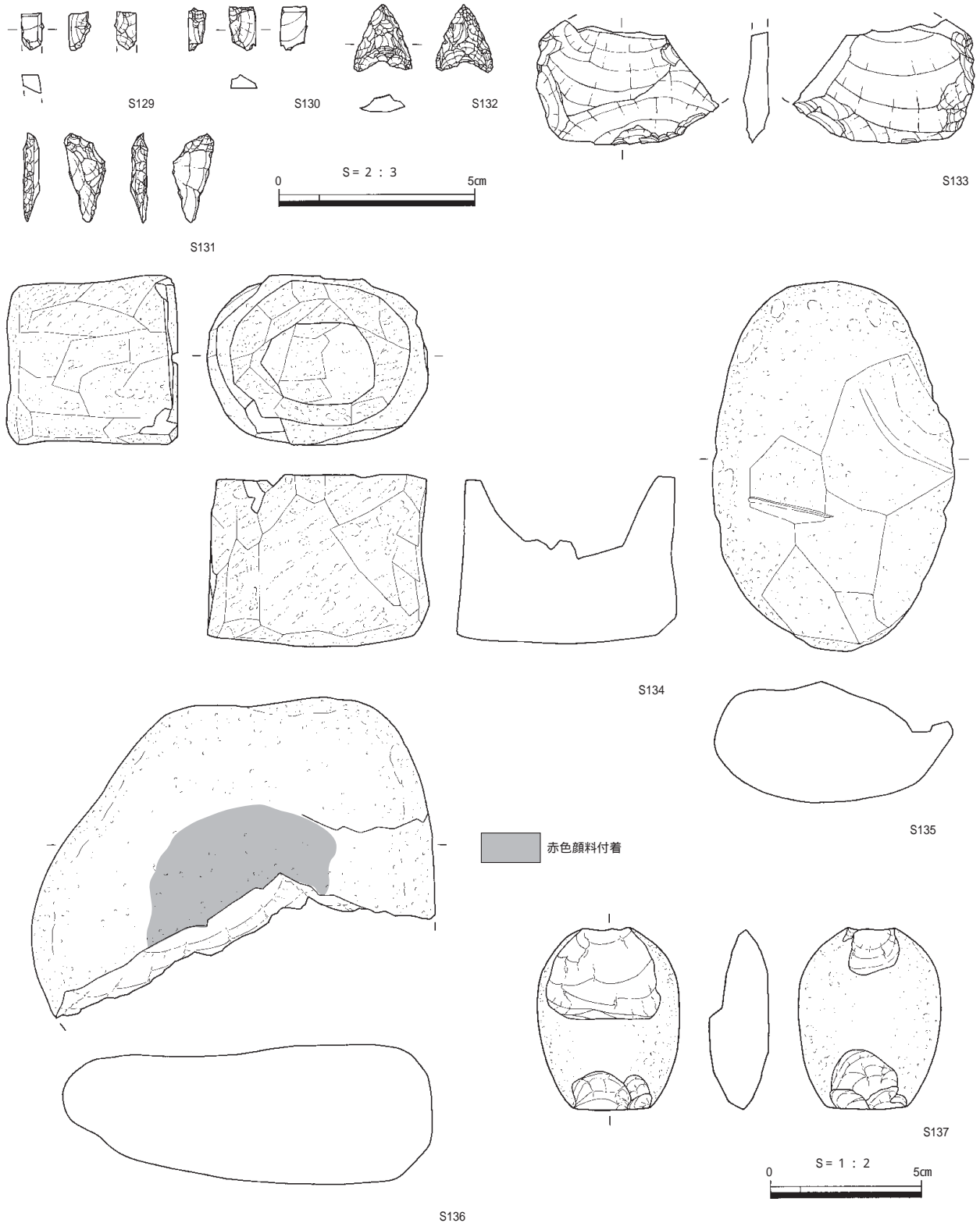
第66図 SD 8 出土遺物 (1)

た。また、底面や壁の一部には鉄分の沈着がみられた。このことから、SD 8 は滞水と流水を交互に繰り返していた状況が推測される。埋土を覆っていた砂礫層は、SD 8 より南側にほぼ拡がり、溝の埋没後勝田川の氾濫などにより形成されたものと考えられる。

G 7 グリッド西半やや北寄りに遺物は密集し、鉄関連遺物、土器、石器などが多数出土している。なかでも鉄関連遺物は、大型の椀形鍛冶滓や羽口が目立って出土することから、近郊に鍛冶関連遺構の存在が予測された(君嶋2005)。これらの遺物は、上層から下層にかけて出土していることから、溝と鍛冶関連遺構が同時に存在し、溝内から出土した土器の特徴から12世紀代に埋没したものと考えられる。

このように、断面逆台形状を呈した溝が、次年度の調査結果にもよるが、西側へどこまで続くのか、また、滞水していた状況から、どこから導水されたかという問題が残る。さらに、一旦途切れた溝が調査区外でさらに東へ伸びる可能性も否定できない。いずれにしても、少なくとも区画溝であった可能性は高いものと思われる(君嶋2004)。

遺物は、中世前期に該当するものが主体を占めるが、他の時期のものもわずかに混入する。155は赤彩された土師器皿であり、底部が欠損している。伯耆国庁編年第2様式に比定されよう。156～



第67図 SD 8 出土遺物 (2)

160、166 ~ 169は土師器坏である。やや内湾気味に体部が立ち上がり、160を除き口縁端部が細身を帯びている。161 ~ 165は土師器皿である。体部が直線的に立ち上がる161とやや内湾する162 ~ 164があり、口縁端部が細くなる162と厚みを増す164と細かな点で違いが目立つ。これらの一群は底部が欠損した163・164と回転ヘラ切技法の166を除き回転糸切成形である。いずれも中世 期3 ~ 4段階(12世紀代)に比定されよう。170・171は白磁碗で、前者が白磁碗 類、171は高台付碗で 類に該当

第3章 調査の成果

する。172～174は須恵器をまとめている。172はやや内湾気味の体部と口縁端部が外反する坏であり、回転系切痕が認められる。173は自然釉がかかった蓋で、体部が外反してほぼ直角に天井部に繋がる。天井部中心は欠損してしまっているため、つまみの有無は不明。174は甕口縁～体部破片である。174



写真6 SD8土層断面（東から）



写真7 SD8鍛冶関連遺物出土状況（北から）

表37 SD8出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
155	SD8埋土	土師器皿	14.5 1.6	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁～底部回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	2718
156	SD8埋土	土師器坏	17.2 3.3	口縁～体部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径3mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2361・2488
157	SD8埋土	土師器坏	16.2 4.9	口縁～底部 1/1	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁～底部回転ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：浅黄橙色	良好		3365
158	SD8埋土	土師器坏	15.8 4.5	口縁～底部 1/1	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁～底部回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2708・2800
159	SD8埋土	土師器坏	15.9 4.4	口縁～体部 1/6	外面：口縁～体部回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2352・2489
160	SD8埋土	土師器坏	14.0 2.8	口縁～体部 1/6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径2mm以下の赤色砂粒	外面：黄褐色 内面：浅黄橙～褐灰色	良好		2164・2320
161	SD8埋土	土師器皿	8.2 2.2	口縁～体部 1/3	外面：口縁～体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2306
162	SD8埋土	土師器皿	8.2 2.0	口縁～底部 1/2	外面：口縁～体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径2mm以下の白・赤色砂粒	外面：灰褐～黒褐色 内面：にぶい橙～灰褐色	良好		2382
163	SD8埋土	土師器皿	7.8 1.7	口縁～体部 1/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径2mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2019
164	SD8埋土	土師器皿	7.8 1.6	口縁～体部 1/8	外面：口縁～体部回転ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2487・2644
165	SD8埋土	土師器皿	4.4(底) 1.6	体～底部 1/5	外面：体部回転ナデ、底部回転系切 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2709・3098
166	SD8埋土	土師器坏	5.9(底) 1.2	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転ヘラ切 内面：回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2854
167	SD8埋土	土師器坏	6.6(底) 1.9	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底部回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2329
168	SD8埋土	土師器坏	5.6(底) 5.6	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径2mm以下の赤色砂粒	外面：黄褐色 内面：灰黄褐色	良好		2177
169	SD8埋土	土師器坏	7.5(底) 2.1	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径3mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1554(一括)
170	SD8埋土	白磁碗	3.8(底) 1.3	体～底部 破片	外面：体部下～底部露胎 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1554(一括)
171	SD8埋土	白磁碗	5.2 2.1	体～底部 1/6	外面：体部施釉、体部下～底面露胎 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1566
172	SD8埋土	須恵器坏身	11.8 3.9	口縁～底部 1/4	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切 内面：口縁～底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙 内面：灰オリブ色	堅緻		2154
173	SD8埋土	須恵器蓋	12.4 2.2	口縁部 1/6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：黄灰色 内面：灰白色	堅緻		2712
174	SD8埋土	須恵器甕	13.0 4.8	口縁～体部 破片	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部同心円状当て具痕	径1mm以下の白色砂粒	外面：暗青灰～赤褐色 内面：暗青灰～暗紫灰色	堅緻		3529
175	SD8埋土	土師器甕	21.0 4.3	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：橙～黄褐色	良好	外面炭化物附着	3348

表38 SD8出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S129	第67図 PL.19	SD8	角柱状素材	碧玉	0.95	0.55	0.49	0.3	1561
S130	第67図 PL.19	SD8	角柱状素材	碧玉	1.1	0.64	0.37	0.4	2349
S131	第67図 PL.20	SD8	石錘	玉髓	2.24	1.09	0.4	1.0	1562
S132	第67図 PL.20	SD8	石鏃	サヌカイト	1.7	1.48	0.4	0.7	2147
S133	第67図 PL.20	SD8	素材剥片	サヌカイト	3.14	4.66	0.63	12.5	2387
S134	第67図 PL.33	SD8	軽石製品	軽石	5.8	7.55	5.7	46.8	2370
S135	第67図	SD8	軽石製品	軽石	12.5	8.15	3.6	102.0	1687
S136	第67図 PL.44	SD8	赤色顔料付着礫	安山岩	10.8	13.65	4.75	770.0	2399・3366
S137	第67図 PL.16	SD8	石錘	安山岩	6.15	4.85	2.0	83.5	2720

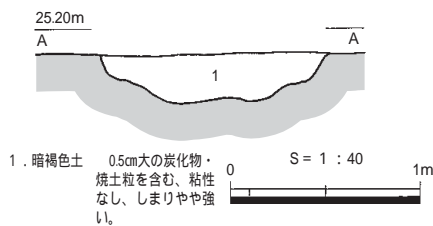
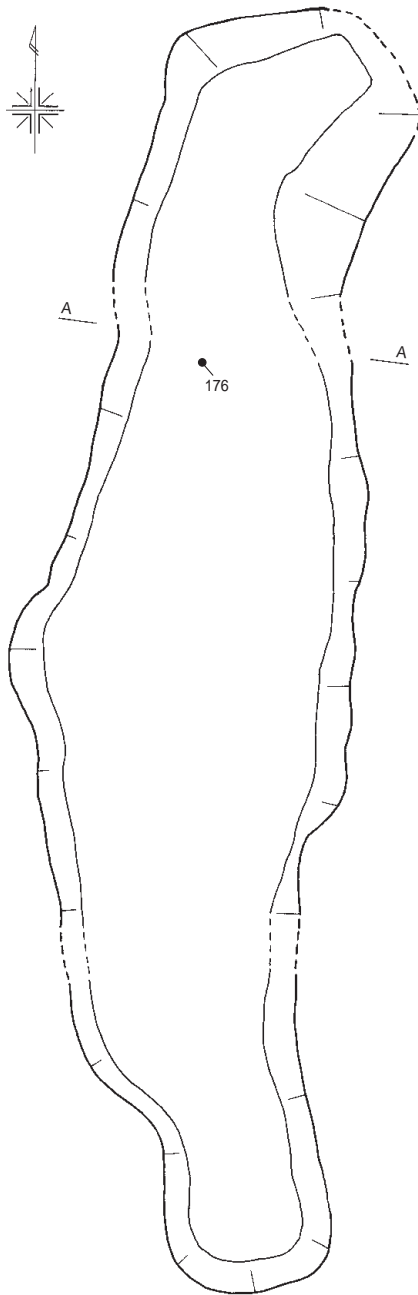
は内面に青海波文がみられ、口縁部が「く」の字状に大きく外反した土師器甕である。172～174はいずれも8世紀末～9世紀代に帰属するものと思われる。

S129～130は管玉製作関連資料の角柱状素材で下部が欠損している。S131はサヌカイト製の石錐。S133はサヌカイト製の素材剥片であり、上部が折損している。S134・135は用途不明な軽石製品で、S134はコップ形を呈し、表面には面取りの痕跡が残っている。S135は楕円形の軽石右半部の表面を切削したものである。表面には線状痕がみられる。S136は赤色顔料付着礫で、SK18とSD8の埋土中から出土したものが接合した。S137は小型扁平礫の両端を打ち欠いた安山岩製の石錘である。

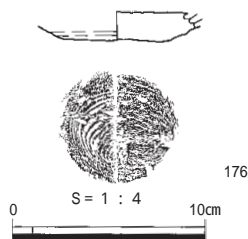
SD10 (第68・69、表39、PL. 6・33)

調査区中央北寄り、E5グリッドに位置する。長さは約6.7m、幅0.8～1.85m、底面の幅0.45～1.5m、検出面からの深さは約0.25mを測る。ほぼ真北に主軸をとり、断面形はU字形となっている。溝底面の標高は北端で24.89m、南端で24.88mを測り、ほぼ変化はない。埋土は暗褐色土の1層である。

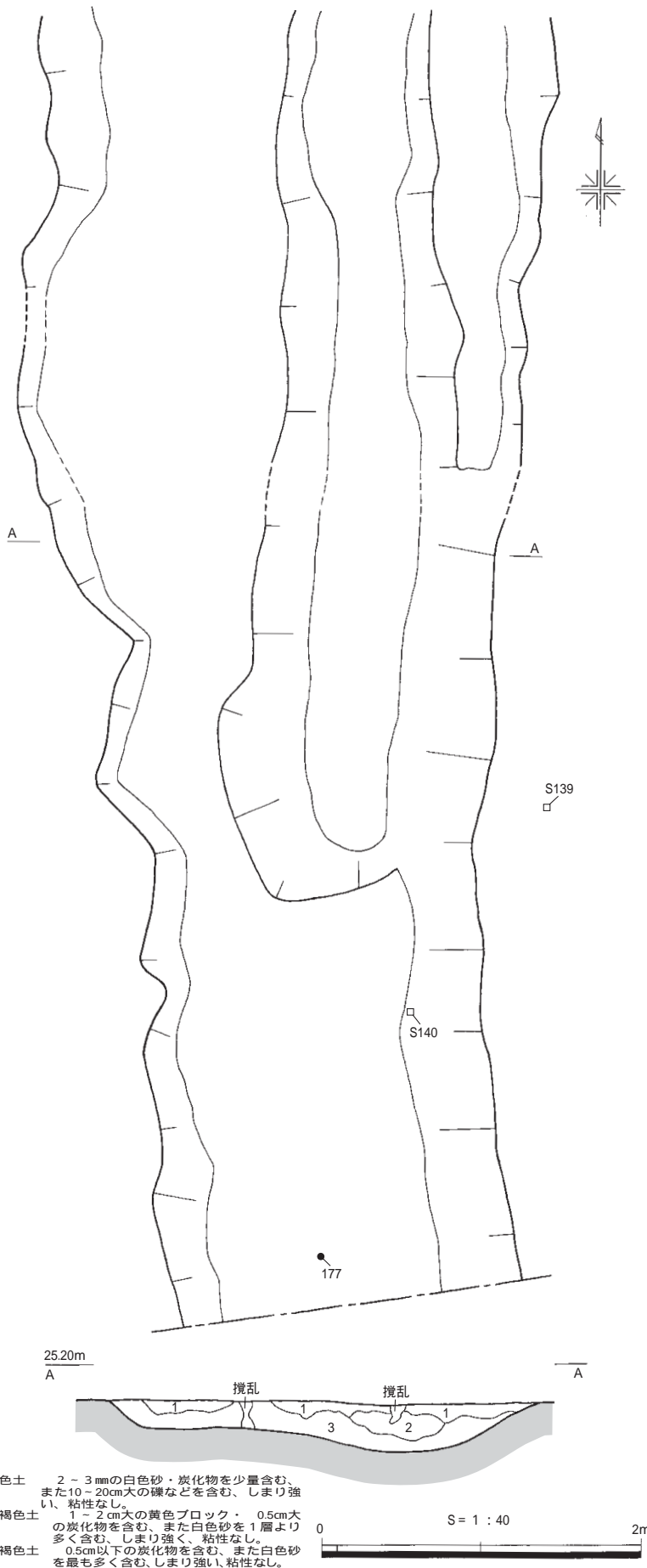
遺物は、中世土師器の坏底部176が1点出土した。底面には回転糸切痕が認められる。出土土器の特徴から、12世紀以降と考えられる。



第68図 SD10



第69図 SD10出土遺物



第70図 SD11

SD11 (第70・71、表40・41、PL. 6・18・19・34)

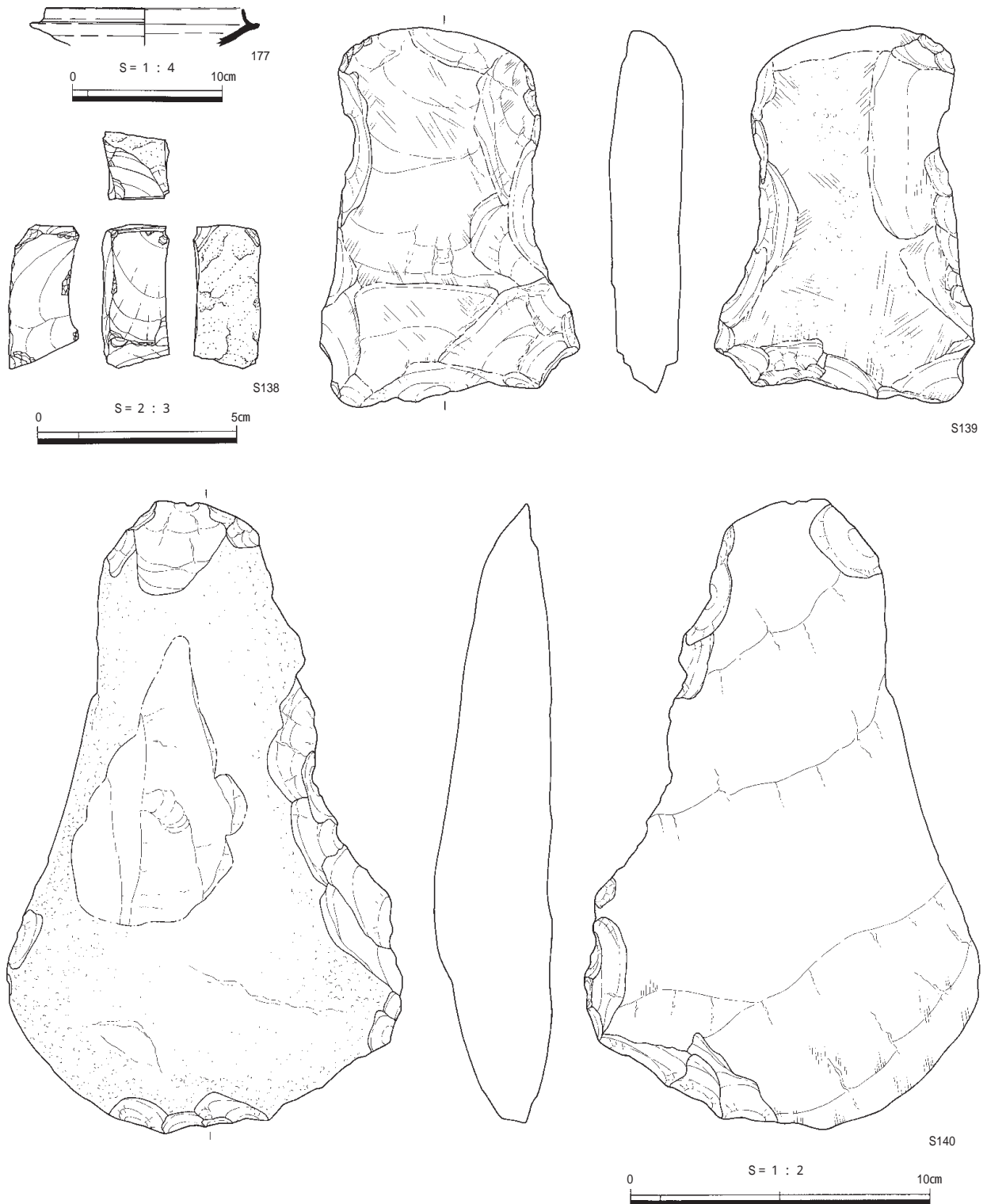
調査区西南、F6、G6グリッドに位置する。検出した長さは約8.15m、幅2.15～3.15m、検出面からの深さは最大0.3mを測る。SD7以北は、確認できなかった。主軸をほぼ真北にとる。断面形は皿状を呈し、北半では底面が一段低くなっている。埋土は3層に分層可能で、1層の褐色土中から遺物が多く出土している。

出土遺物は、須恵器や石鍬などであるが、多くが外部から混入したものと考えられる。177は体部が大きく開き、口縁がやや内傾する須恵器坏身である。八橋 期の特徴を示すことから古墳時代後期と考えられる。S138は管玉の角柱状素材である。S139は撥形の石鍬であり、側縁に調整加工を施し、袂りを作り出している。S140は表面は自然面、裏面は主剥離面をほとんど残した状況であることから、石鍬未成品と考えた。

(4) 土杭

SK1 (第72・73図、表42、PL. 34・35)

調査区西、E7グリッドに位置する。SK3・18を切っている。平面形は、歪な楕円形を呈する。規模は、長軸2.35m、短軸5.5m、検出面からの深さ0.15mを測る。断面形は、逆台形状で埋土は2層に分層できた。出土遺物は、断面方形を呈し、4



第71図 SD11出土遺物

面に溝を持つ砥石が出土している。上部幅は約0.4 ~ 1.8cm、下部幅は約0.4cmである。帰属時期は、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

SK 2 (第72図、PL. 34)

調査区西、F7グリッドに位置する。SD 9、SK18を切っている。平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸1.52m、短軸0.92m、検出面からの深さ0.3mを測る。断面形は、桶形で、埋土は3層に分層できた。出土遺物は、鍛冶滓（非掲載）が出土している。帰属時期は、埋土の特徴から中世以降と考えられる。

第3章 調査の成果

表39 SD10出土土器観察表

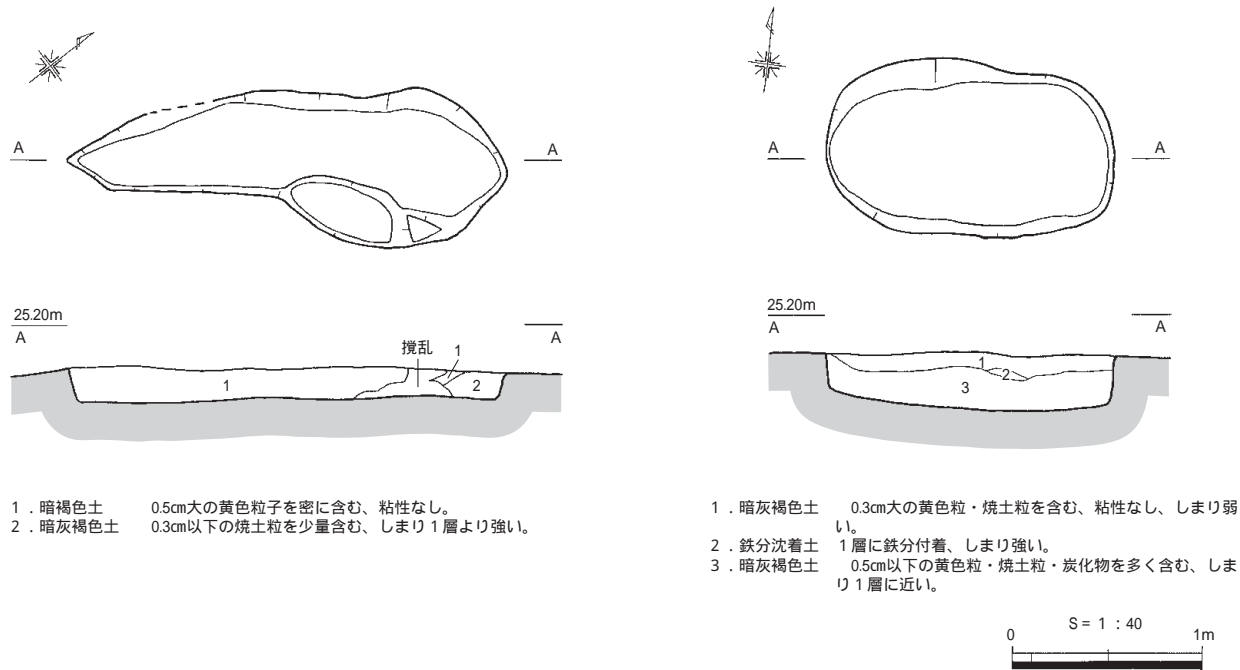
遺物No.	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
176	SD10	埋土	土師器 坏	5.6(底) 1.6	底部 破片	外面：底面回転糸切 内面：ナデ	径4mm以下の赤色砂粒	外面：橙～灰褐色 内面：橙～灰褐色	良好		3189

表40 SD11出土土器観察表

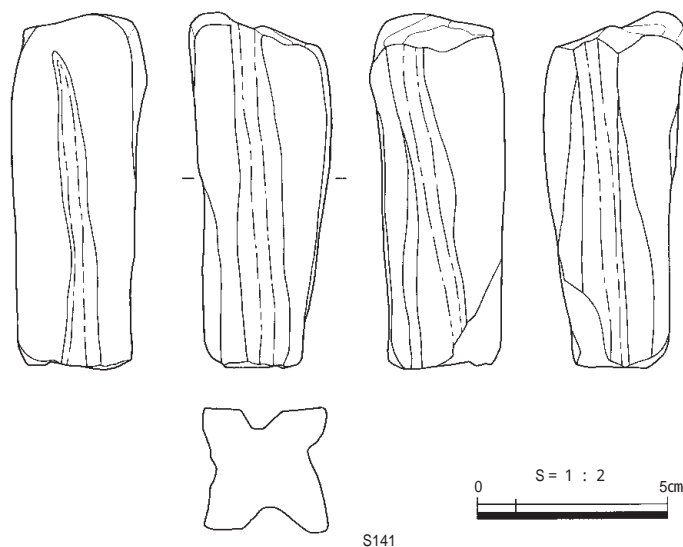
遺物No.	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
177	SD11	埋土	須恵器 坏身	13.2 2.5	口縁～体部 1/6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：青灰色 内面：青灰色	堅緻		3914

表41 SD11出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S138	第71図 PL.19	SD11	角柱状素材	碧玉	3.6	2.7	1.64	14.6	3910
S139	第71図 PL.18	SD11	石鎌	安山岩	12.6	8.7	2.4	340.0	3907
S140	第71図 PL.18	SD11	石鎌	安山岩	21.0	13.2	4.0	1060.0	3912



第72図 SK1・2



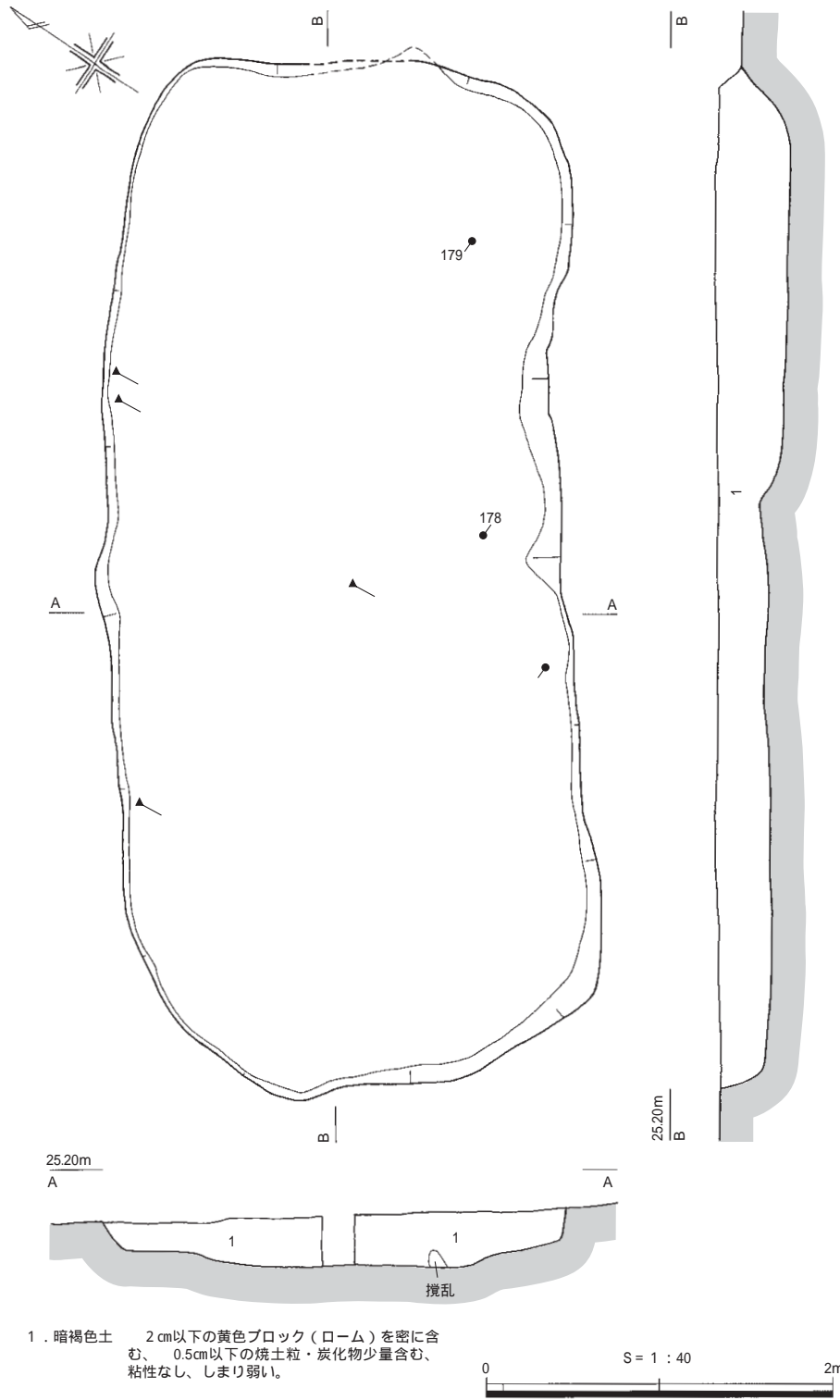
第73図 SK1出土遺物

SK3 (第74・75図、表43、PL.34・41)

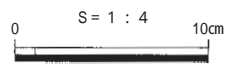
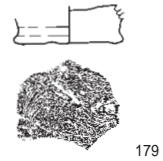
調査区西端F7・8グリッドに位置する。SD9、SK4・18を切っている。平面形は、楕円形を呈する。規模は、長軸5.9m、短軸2.68m、検出面からの深さ0.4mを測る。断面形は、皿状で埋土は黄色ブロックを含んだ暗褐色土のみである。出土遺物は、須恵器坏身178と中世土師器179、鉄製品、鍛冶滓、羽口がある。178は体部が大きく開き、口縁部がやや内傾する特徴を持つことから、八橋期に比定される。178は柱状高台皿の

表42 SK1出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S141	第73図 PL.35	SK1	砥石	アブライト	9.3	3.8	3.3	160.0	451



第74図 SK3



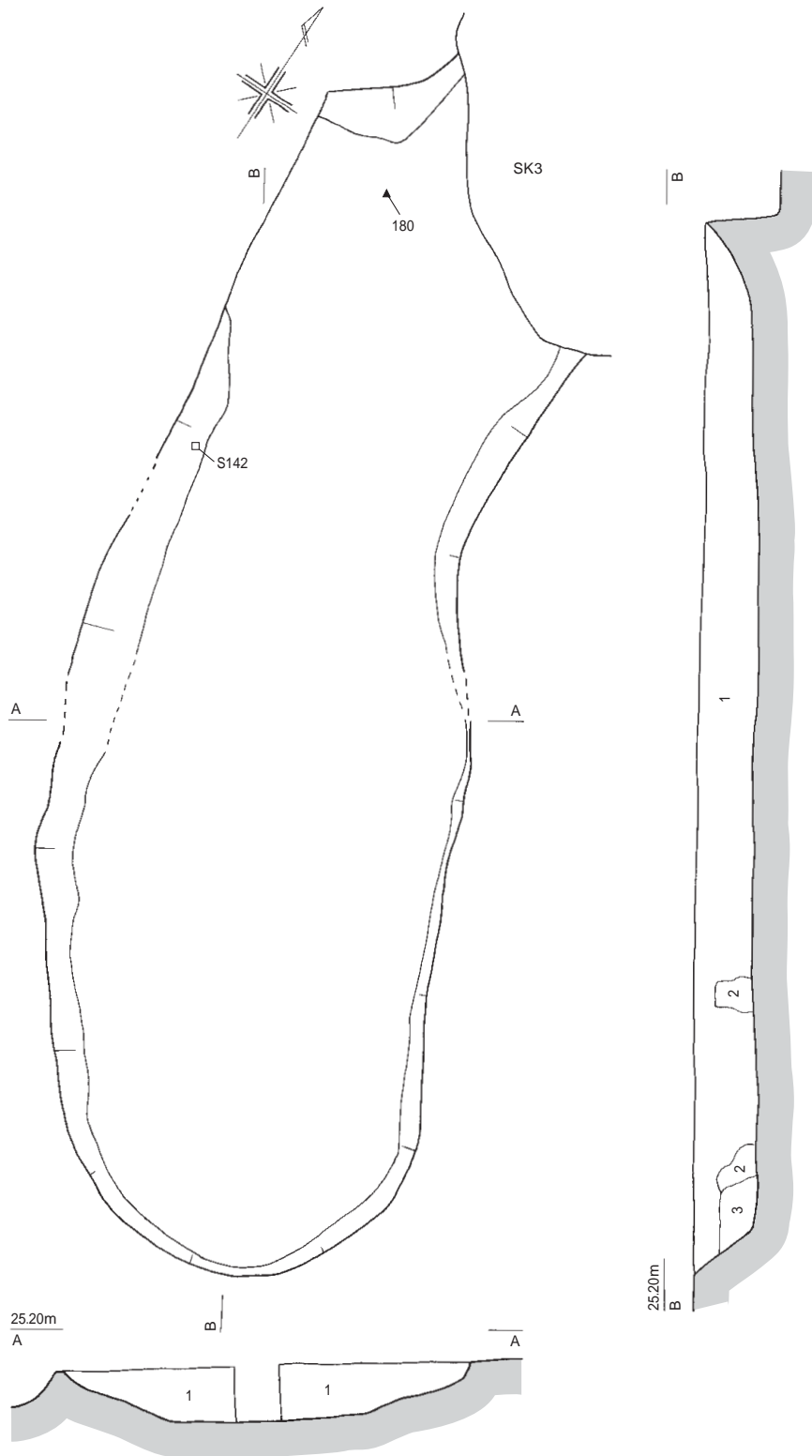
第75図 SK3出土遺物
 台部であり、底面には回転糸切痕が残る。遺構の重複関係や出土遺物から、本遺構の帰属時期は12世紀頃と考えられる。

SK4 (第76・77図、表44・45、PL.23・35)

調査区西端F7・8グリッドに位置する。SK9を切っている。平面形は、楕円形を呈する。規模は、現況で長軸6.15m、短軸2.35m、検出面からの深さ0.3mを測る。断面形は皿形で、埋土は黄色ブロックを含んだ暗褐色土を主体としている。SK3の埋土に近似するため、両者は时期的に近いものと考えられる。出土遺物は、体部がやや丸みを帯びる須恵器坏180と砥石S142である。遺構の重複関係や出

表43 SK3出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
178	SK3埋土	須恵器 坏身	12.8 3.6	口縁-体部 1/6	外面：回転ナデ、 内面：回転ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：青灰-灰色 内面：青灰色	堅緻		563
179	SK3埋土	土師器 柱状高台皿	5.4(底) 2.0	高台部 破片	外面：側面回転ナデ、底面回転糸切 内面：ナデ	径3mm以下の白・赤色砂粒	外面：明褐色 内面：黄灰色	良好		537



- 1. 暗褐色土 2cm大の黄色ブロックを密に含む、0.5cm以下の焼土粒・炭化物少量含む、粘性なし、しまり弱い。
- 2. 暗褐色土 0.5cm以下の焼土粒・炭化物を含む、粘性なし、しまり弱い。
- 3. 暗褐色土 0.5~1.0cm大の黄色ブロックを多く含む、色調1層より明るい。

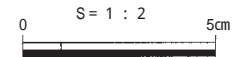
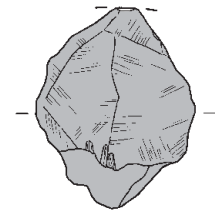
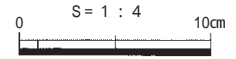
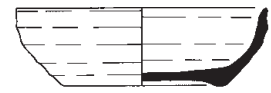
第76図 SK4

表44 SK4 出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
180	SK4埋土	須恵器 坏身	13.0 4.0	口縁~体部 1/1	外面:回転ナデ、 内面:回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面:灰白~灰色 内面:灰白色	堅緻		639

表45 SK4 出土石器観察表

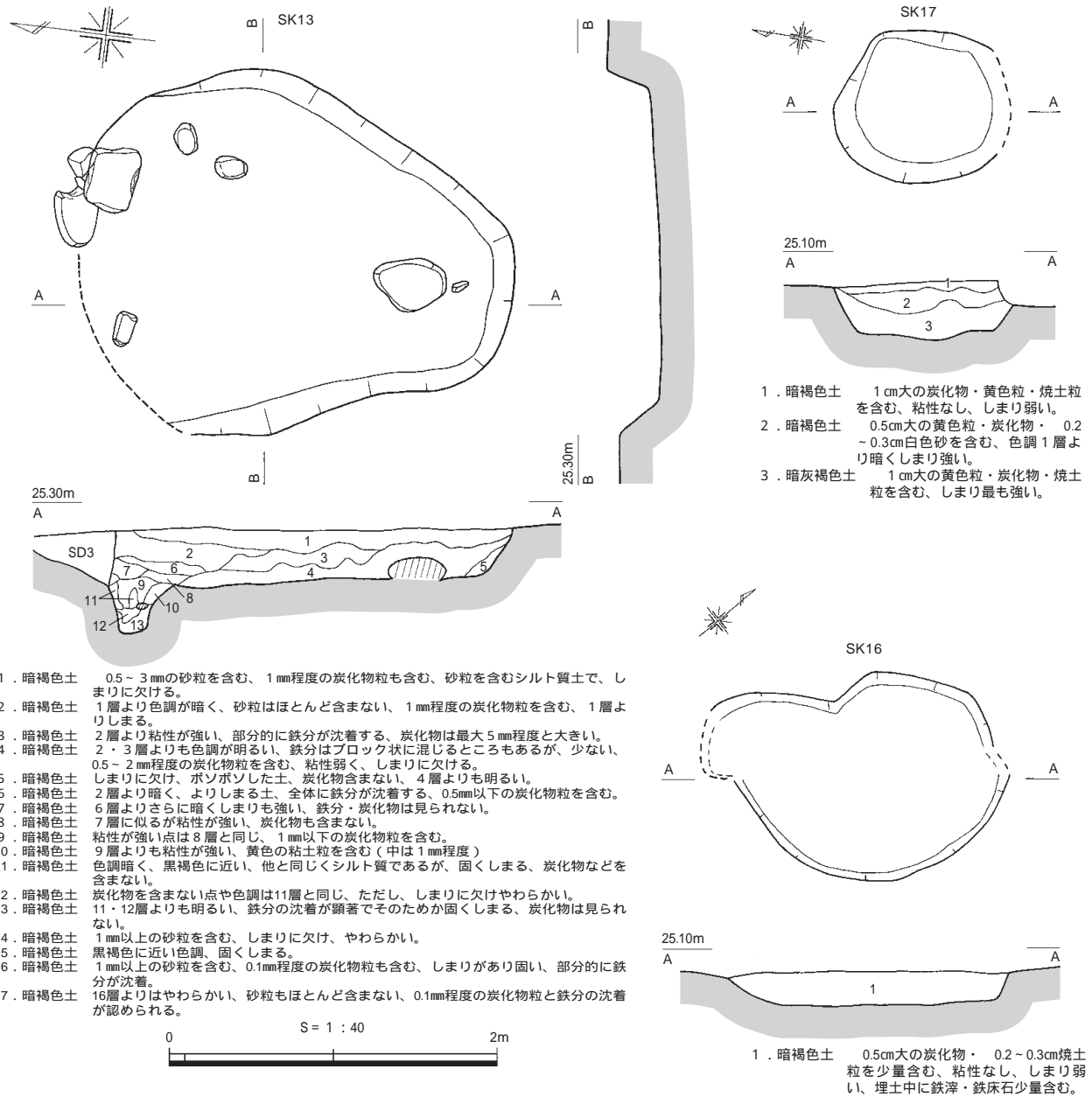
No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S142	第77図 PL.23	SK4	砥石	アブライト	5.3	4.2	2.5	38.0	602



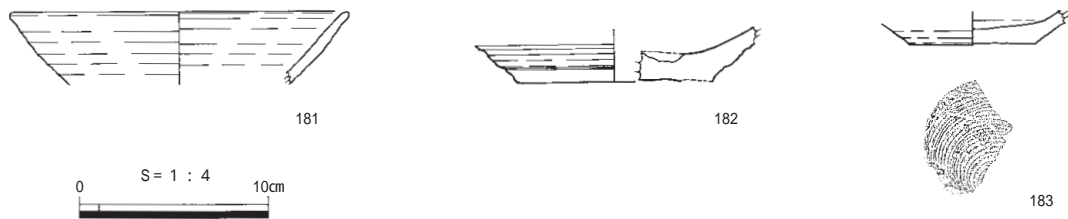
第77図 SK4 出土遺物
土遺物から、本遺構の帰
属時期は12世紀以降と考
えられる。

SK13 (第78図、表46、
PL. 36・41)

調査区北東D4グリッド
に位置する。SD3・
6を切っている。平面形
は不整楕円形を呈する。
規模は、長軸2.65m、短
軸2.2m、検出面からの
深さ0.3mを測る。北側
に径0.38mのピット状の
窪みを検出した。断面形
は皿状で、埋土は砂粒や



第78図 SK13・16・17

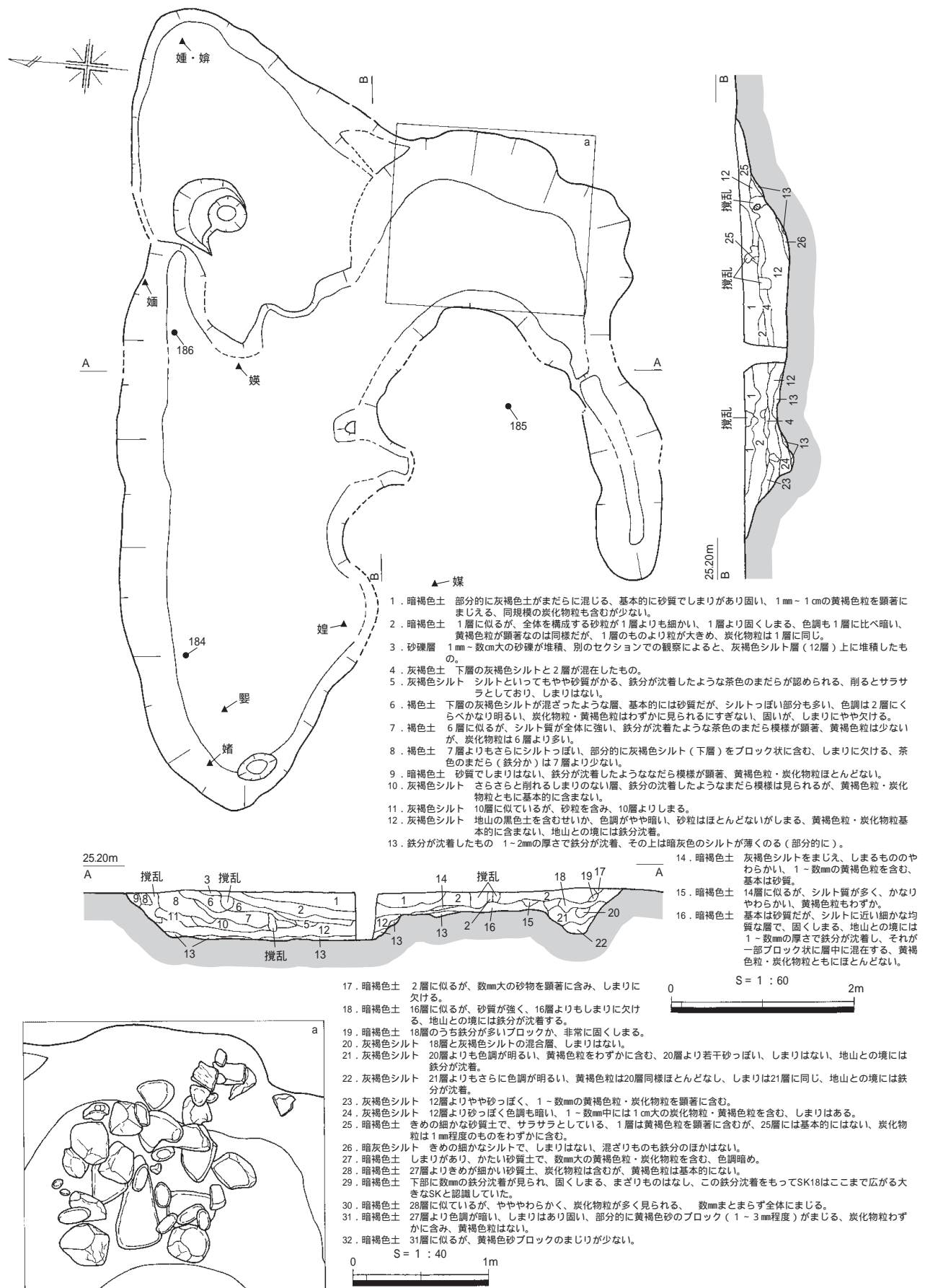


第79図 SK13出土遺物

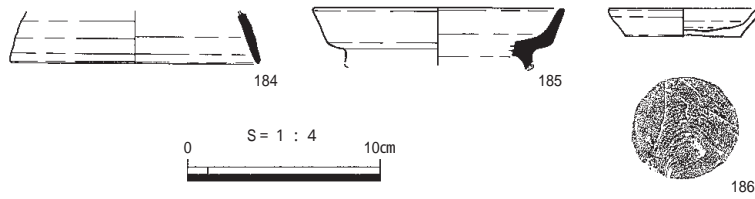
表46 SK13出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No
181	SK13埋土	土師器 環	16.6 3.9	口縁-体部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切 内面：回転ナデ	径20mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1399
182	SK13埋土	土師器 環	10.4 2.7	体-底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切、高台貼付痕 内面：回転ナデ	径2mm以下の赤色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	底面高台貼付痕	1397
183	SK13埋土	土師器 環	6.6(底) 2.9	体-底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切 内面：回転ナデ	径1.5mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1174

第3章 調査の成果



第80図 SK18

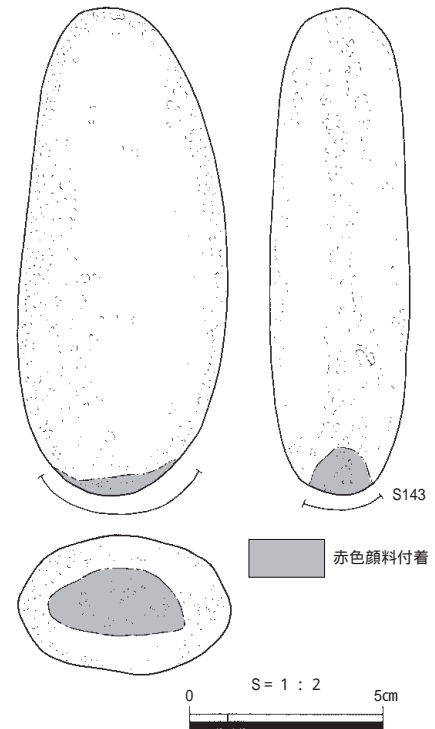


第81図 SK18出土遺物(1)

鉄分を含んだ暗褐色土1～4層を中心に堆積している。底面直上と北壁に沿うように大形の礫が置かれていた。出土した土器は、土師器坏181、坏底部182・183である。これらの土器の特徴は中世期3・4段階に相当することから、遺構の時期は12世紀頃と考えられる。

SK16 (第78図、PL. 37)

調査区西F7グリッドに位置する。西側でSK18を切っている。平面形は不整楕円形を呈する。規模は、長軸1.8m、短軸1.25m、検出面からの深さ0.2mを測る。断面形は皿状で、暗褐色土が堆積している。埋土中には、鍛冶滓や鉄床石破片(非掲載)など少量含んでいる。埋土の特徴と鉄関連遺物が出土していることから、遺構の時期は12世紀以降と考えられる。



第82図 SK18出土遺物(2)

SK17 (第78図、PL. 37)

調査区西F7グリッドに位置する。南側をピットに切られている。平面形は楕円形で、規模は長軸1.1m、短軸0.9m、検出面からの深さ0.35mを測る。断面形は桶形で、埋土は暗褐色土を主体とした3層に分かれる。埋土の特徴と遺構の重複関係から、遺構の時期は12世紀以降と考えられる。

SK18 (第80～82図、PL. 38・39・41・44)

E7グリッドからF7グリッドにかけて位置する。長楕円形の土坑に溝状の掘り込みが加わったような不整形土坑である。遺構全体の規模は、長軸9.0m、短軸6.0mを測る。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは緩やかながらしっかりとしている。深さは最大でおよそ0.5mである。

平面検出を行った際に、土坑の輪郭に沿って鉄分の沈着が見られ、サブトレンチを入れたところ、壁から底面全体に数ミリの厚さで鉄分が沈着していることが判明した。このため鉄分が顕著に見られなかった東側部分を除き、全体としては遺構検出は容易であった。

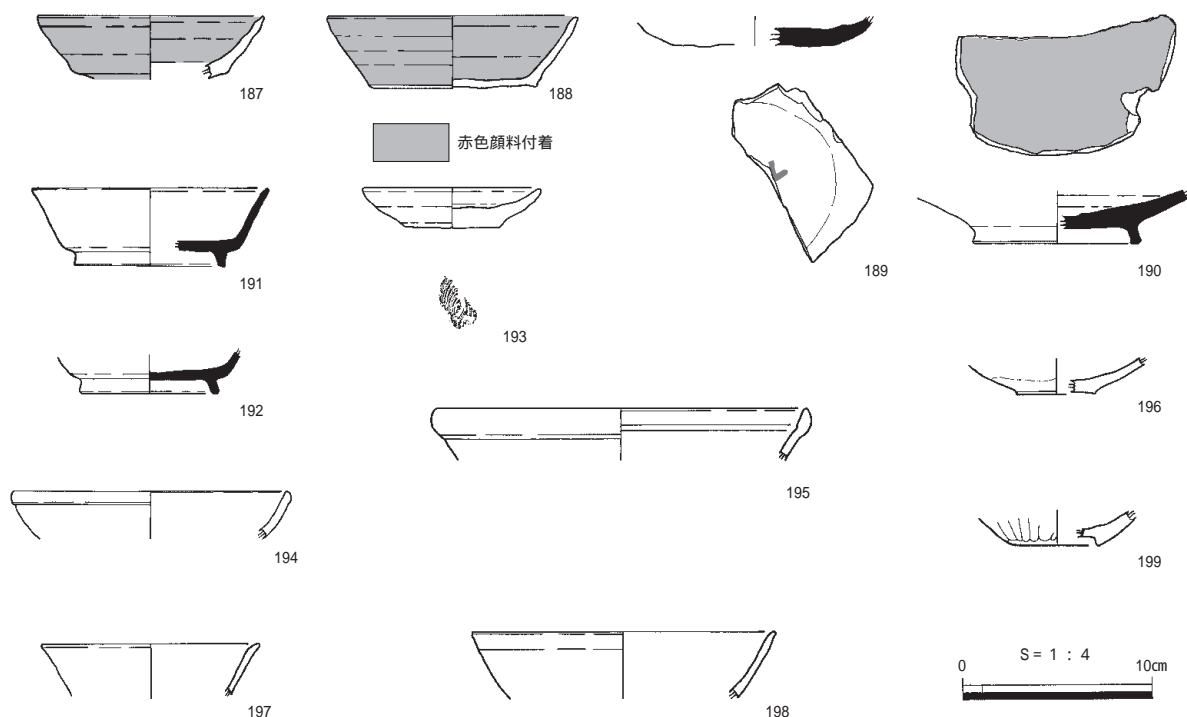
表47 SK18出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo
184	SK18埋土	須恵器 坏蓋	13.0 2.7	口縁部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		2898
185	SK18埋土	須恵器 高台坏	12.8 2.7	口縁～高台部 破片	外面：体部回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰色	堅緻		2955
186	SK18埋土	土師器 皿	7.8 1.5	口縁～底部 3/4	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切 内面：回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	良好		2907・2862・3359

表48 SK18出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S143	第82図 PL.44	SK18	赤色顔料付着礫	安山岩	12.8	5.6	3.7	390.0	2897

第3章 調査の成果



第83図 遺構外出土遺物

表49 遺構外出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ No.
187	G6層	土師器 坏身	12.0 3.3	口縁~底部 1/8	外面：口縁~体部回転ナデ、底面粗いナデ 内面：口縁~底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	良好	内外面赤色塗彩	141
188	E6層	土師器 坏身	13.2 3.8	口縁~底部 1/6	外面：口縁~体部回転ナデ、底面粗いナデ 内面：口縁~底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	内外面赤色塗彩	1119
189	F7層	須恵器 坏身?	1.5	底部 1/5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm大の白色砂粒	外面：オリーブ灰色 内面：オリーブ灰色	堅緻	墨書有り	4935
190	F5層	須恵器 高台皿	8.8(底) 2.8	体~底部 1/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：灰色	堅緻	転用碗	4891
191	一 廃土	須恵器 高台坏	12.5 4.1	口縁~底部 1/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm大の白色砂粒	外面：青灰~灰白色 内面：灰~明オリーブ色	堅緻		4558
192	F7層	須恵器 高台坏	7.2(底) 2.2	体~底部 1/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm大の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		2643
193	F5層	土師器 皿	9.2 2.2	口縁~底部 1/4	外面：口縁~体部回転ナデ、底面回転糸切 内面：口縁~底部回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好		94
194	E6層	白磁 碗	14.4 2.6	口縁~体部 破片	外面：施釉、玉縁状口縁 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		316
195	G7 埋土	白磁 碗	19.8 2.8	口縁部 破片	外面：施釉、口縁部の折り返しによる玉縁 内面：施釉、口縁部よりやや下がった位置に凹線	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1160
196	D7層	白磁 碗	4.2(底) 1.9	体~底部 破片	外面：体部下半~底部露胎、体部削り出し高台 内面：圏線1条	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		733
197	D4層	白磁 碗	11.4 2.7	口縁~体部 破片	外面：施釉 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		10
198	E7層	白磁 碗	16.0 3.5	口縁~体部 破片	外面：施釉、口縁部凹線 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		125
199	G8層	白磁 合子身	4.2(底) 1.8	体~底部 破片	外面：施釉、体部下半釉掻き消し、削り出し高台、底面施釉 内面：施釉	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻	外面連弁	74

土層は上位（1、2層）と、下位に大きく二分できる。下位はきめの細かなシルト層が互層状に堆積しており、上位は砂質土である。断面図では読み取りにくいですが、シルト層の直上には砂礫層（3層）の堆積が認められた。したがってSK18の埋没状況は、はじめ帯水状態で徐々に埋もれていったものが、最終的には水流の影響で埋没したものである。

遺構の南側で、人頭大あるいはそれ以上の大きさを中心とした礫が集中していた。特に加工した痕跡は認められず、出土状況からも、この場に意図的に据え置かれたものとは思えず、廃棄されたものと考えられる。

埋土中から出土した遺物を第81、82図に掲げた。184や185のような須恵器もあるが、186のような土師器皿も出土しており、遺構の時期は12世紀代と考えられる。またS143に示した赤色顔料が付着

した礫も認められた。棒状の垂円礫の一端に付着が見られ、顔料をすりつぶしたかのようなのである。付着している赤色顔料については、分析は行っていない。

遺構の性格は不明であるが、滞水状態であったことが想定され、溝のような施設も付随するため、水をためておく機能があったかもしれない。

(5) 遺構外出土遺物 (第83図、PL. 17・42・46)

古代・中世の出土遺物をまとめている。187・188は内外面が赤彩された土師器坏身である。底部は粗いナデ調整が施される。189は須恵器坏身底部破片で、底面に墨書がなされている。書かれた字は不明である。190は高台付坏の底部破片であり、硯に転用している。高台部はやや外側に張り出す。191・192は高台付坏である。187・188は伯耆国庁編年第2様式に該当し、その他の須恵器も含め8世紀末～9世紀代に位置付けられよう。193は中世土師器の小皿であり、底面に回転系切痕を残す。底部は肉厚で体部がやや内湾する。12世紀代に帰属するものと思われる。194～199は白磁碗と合子である。口縁に玉縁が付く194・195は白磁碗 類、口縁端部がやや外反する197・198は白磁碗 類に該当しよう。199は体部に連弁の意匠をもつ合子であり、底部は削り出し高台となっている。釉は黄色味を帯びる。いずれも11世紀後半～12世紀前半に比定されよう。

第6節 時期不明遺構の調査成果

(1) 概要

遺物を伴わないか、あっても時期が確定できない土坑が16基認められた。

(2) 土坑

SK6 (第84・85図、PL. 16・18・35)

D7グリッドの南東隅に位置する。長軸2.0m、短軸1.3mの不整楕円形を呈する。埋土中から石鍬S144と伐採石斧S145が出土した。このほか中世と思われる土器片がある。

SK7 (第84図、PL. 19・35)

G5グリッドの北側に位置する。長軸1.4m、短軸1.0mの不整楕円形を呈し、深さは0.4mを測る。壁面は直立し、しっかりと掘り込みとなっている。埋土中から硬質緑色凝灰岩製の角柱状素材S146が出土した。このほか弥生土器片も見られたが、弥生時代の遺構とする確証はない。

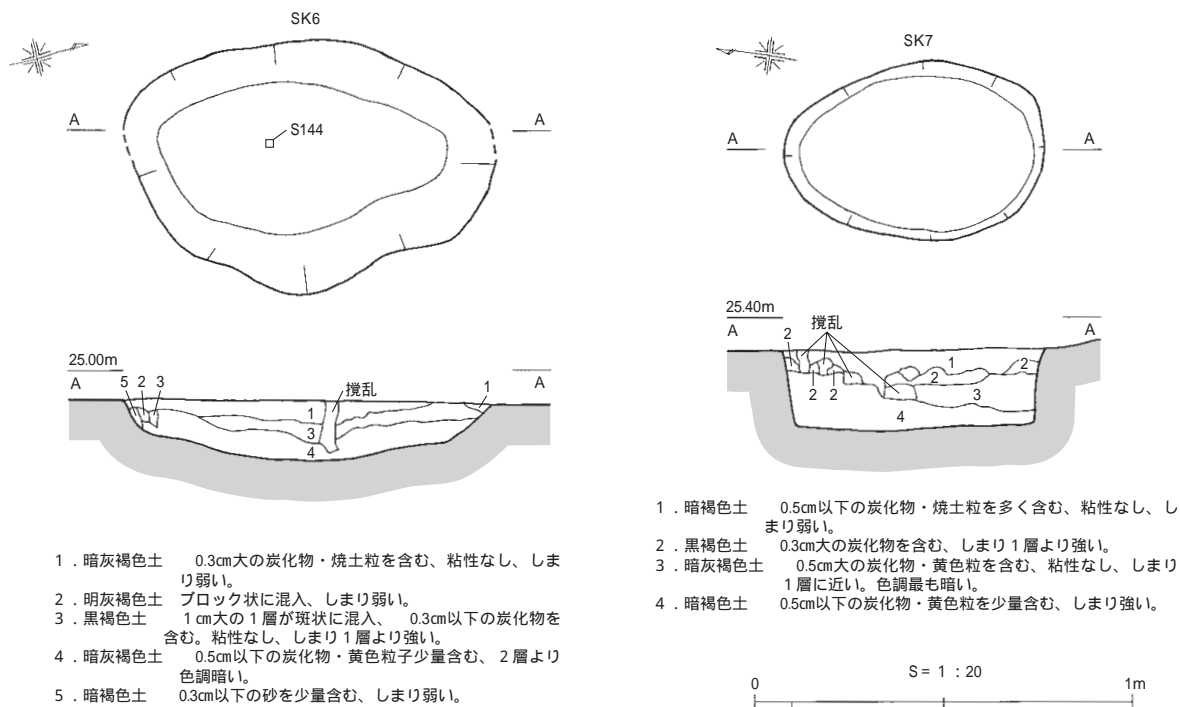
SK10 (第86図、PL. 36)

D4グリッドの南側にあり、SD3に近接する。径約0.9mの円形を呈し、深さは0.25mを測る。埋土は、炭化物を含む暗褐色土のみであり、時期は不明である。

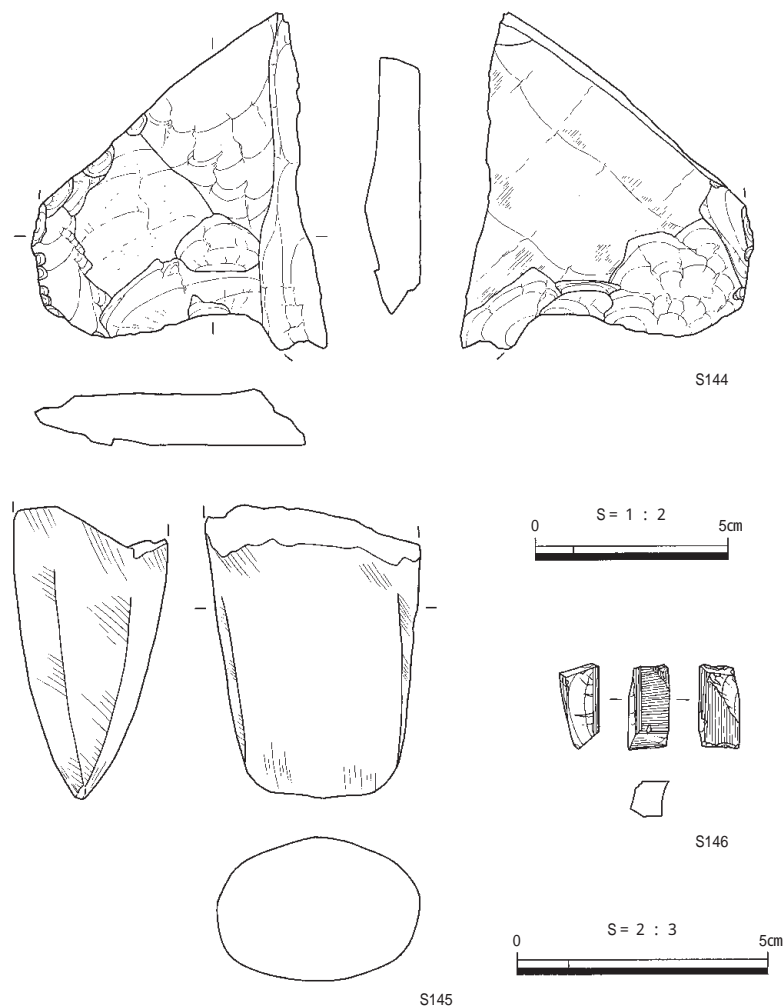
SK15 (第87図、PL. 37)

平成17年度調査区の南西隅に位置する。このあたりは包含層掘り下げ段階から礫が多数見られた

第3章 調査の成果



第84図 SK6・7



第85図 SK6・7 出土遺物

が、人頭程度の礫がL字状に並ぶのを確認し、トレンチなどにより遺構検出を試みたところ、径3.5mから4.0m程度の、円形の掘り込みを有する土坑であることが判明した。深さは約0.3mで、壁面の立ち上がりはきつくないが、しっかりと掘り込まれている。

配置された礫の大きさは一定ではないが、扁平なものを選んでるように思える。また検出した限りでは、礫を積み重ねていたわけではないようだ。

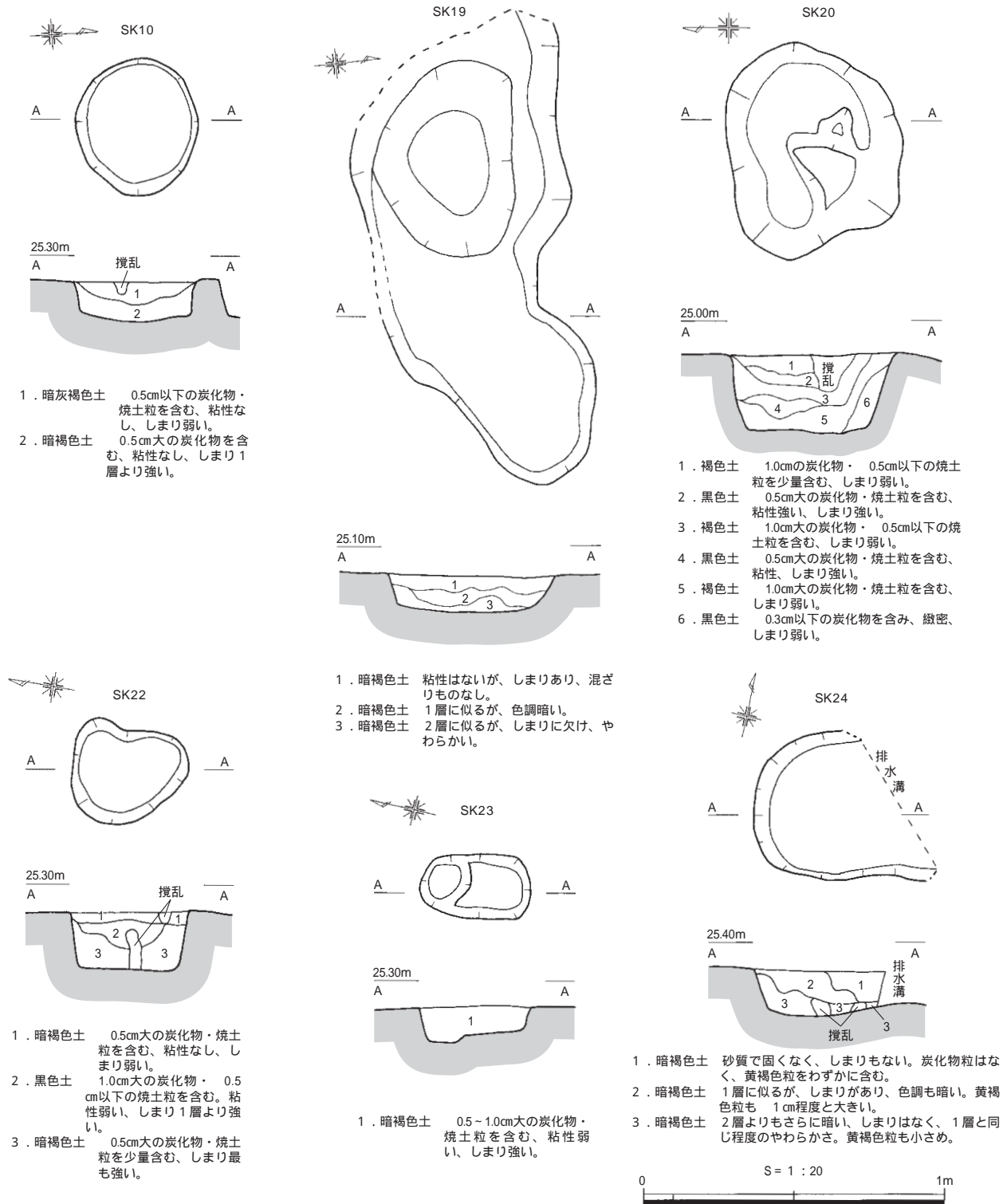
埋土中から須恵器をはじめ土器片が出土したが、遺構の時期を決定できるものはない。

SK19 (第86図、PL. 39)

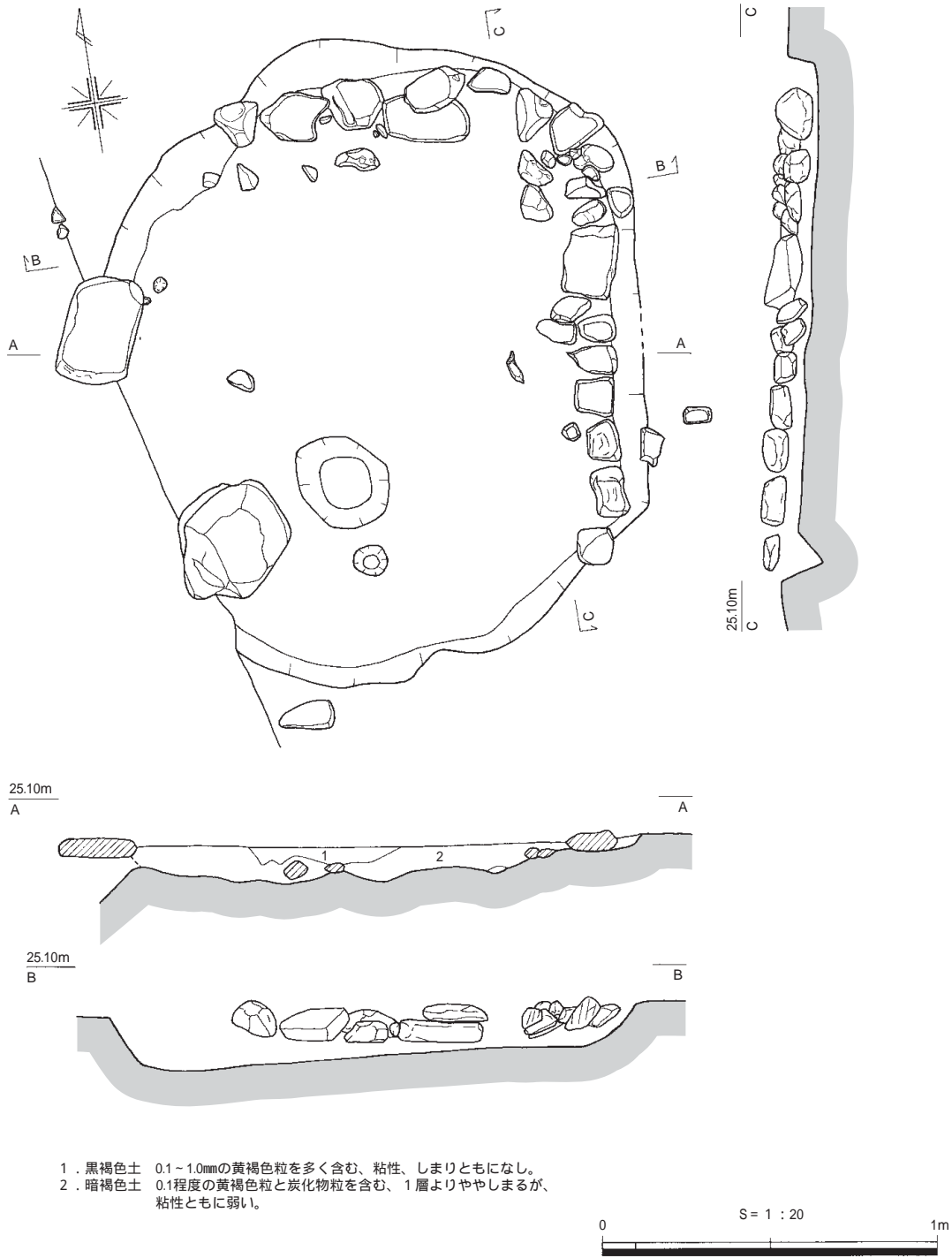
F7グリッドにある。検出した範囲で長軸3.0m、短軸1.5mを測る不整形土坑である。一部が二段掘りとなる。古代から中世のSK

表50 SK6・7出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取り上げNo.
S144	第85図 PL.18	SK6	石鎌	安山岩	8.9	7.8	1.5	100.0	5303
S145	第85図 PL.16	SK6	石斧	混成花崗岩	7.7	5.7	4.1	240.0	997
S146	第85図 PL.19	SK7	角柱状素材	碧玉	1.68	0.8	0.6	1.5	1249



第86図 SK10・19・20・22・23・24



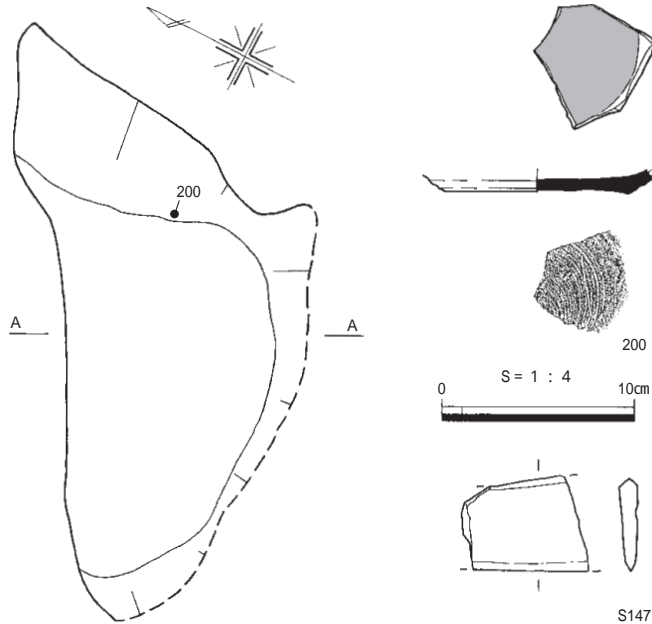
第87図 SK15

4に切られており、それ以前に位置づけられる。

SK20 (第86図、PL. 39)

調査区の西端、E8グリッドに位置する。径1.4mから1.2mの不整形円で、底面に凹凸が見られるが、0.5mほどの深さをもち、壁面の立ち上がりもしっかりしている。

周辺には中世の鍛冶炉などの鍛冶関連遺構があり、埋土中にも炭化物や焼土粒が認められるものの、しまりが弱いなど異なる部分もあり、鍛冶関連遺構とはしがたく時期も不明である。

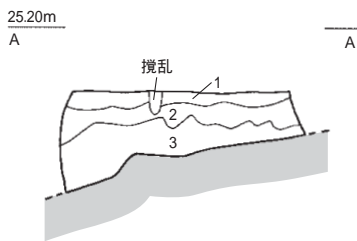


SK22 (第86図、PL. 39)

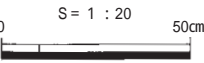
E4グリッドに位置する。径0.8mほどの不整形円形である。深さは0.4mで、壁面はしっかりと立ち上がる。

SK23 (第86図、PL. 39)

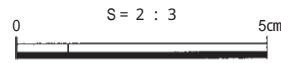
SK22の北側4mに位置する。長軸0.75m、短軸0.45mの楕円形を呈する。北側がやや深くなっており、この部分で約0.2mを測る。



- 1. 暗褐色土 砂質だが、ボソボソとした感じ、黄褐色粒多く含む。
- 2. 暗褐色土 砂っぽくやわらかい、黄褐色粒多く含む。
- 3. 砂礫層 1-10cm大の礫を含む、ブロック上に砂もあり。



第88図 SK28



第89図SK28出土遺物

SK24 (第86図、PL. 39)

調査区の東端で検出された。排水溝を掘削したことにより、全体の規模等を確認できていない。検出した範囲で長軸1.2m、短軸1.0mを測る。深さは最大で0.3m程で、排水溝で切られた東側に向かい緩やかに浅くなっている。

SK25 (第90図、PL. 39)

SK24の南西に近接する。径0.7mの円形で、検出した深さは0.15mと浅い。出土遺物はなく、時期は不明である。

SK26 (第90図、PL. 39)

SK25に隣接して検出された。長軸1.3m、短軸0.9mの不整形土坑である。最大で約0.4mの深さをもつ。北側と南東側に平坦面を有し、二段掘りとなっている。平坦面部分の深さは0.2mである。埋土は地山と区別がつかない暗褐色土で、細かく分層できず2層を認識したに過ぎない。

SK28 (第88・89図、PL. 19・40・41)

G7杭に近接して位置する。SD7を完掘した際に、壁面に現れた鉄分の沈着を追った結果検出された土坑である。検出した範囲で長軸3.2m、短軸1.3mを測る。鉄分の沈着はSK28の壁と底に貼り付くように見られ、帯水状態にあったものと思われる。同様に鉄分の沈着が認められたSK18と関連があ

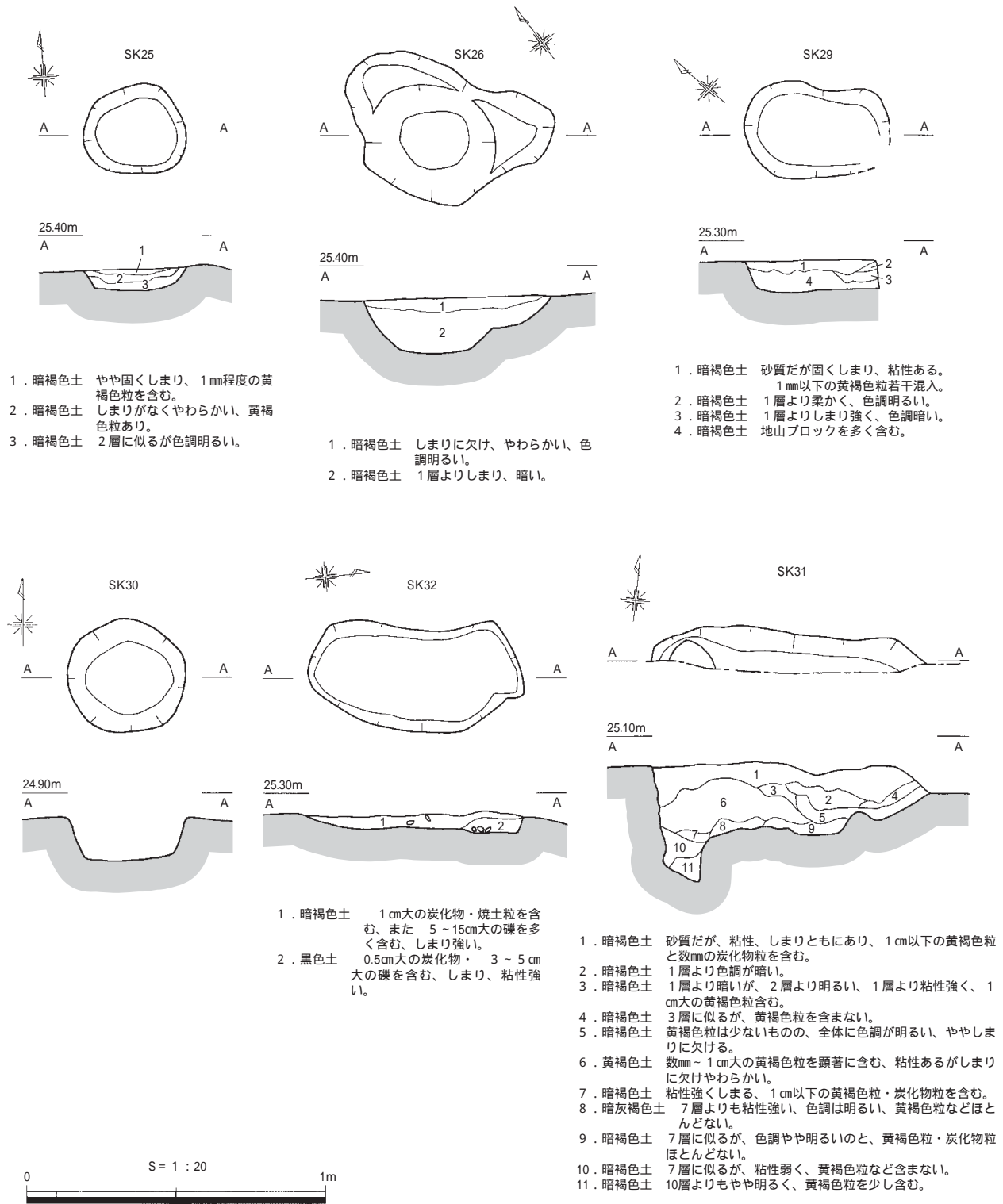
表51 SK28出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
200	SK28埋土	須恵器 坏身	9.8(底) 1.2	体~底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転糸切 内面：回転ナデ	径0.5mmの白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	堅緻	内面磨り面(転用硯)	5021

表52 SK28出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	取り上げNo.
S147	第89図 PL.19	SK28	石鋸	結晶片岩	2.55	0.9	0.4	3.2	5315

第3章 調査の成果



第90図 SK25・26・29・30・31・32

るのかもしれない。

埋土中から出土した須恵器の転用硯200と石鋸を掲げた。このほかにも弥生土器や須恵器の小片が出土している。

SD7を完掘して見つけた遺構なので、遺構配置図でもSD7に切られているかのような表現になっているが、切り合い関係は不明である。SD7を掘った際も、このあたりは拳大の礫が多かったよう

に思う。SK28と同じ中世の遺構である可能性がある。

SK29（第90図、PL. 40）

F4グリッドの南東隅に位置する。長軸1.0m、短軸0.7mの楕円形を呈する。壁面はしっかりと立ち上がり、底面も平坦である。

SK30（第90図、PL. 40）

E7グリッドの南東隅にある。径およそ0.8mの円形土坑である。壁面の立ち上がりはしっかりとしており、深さは約0.25mを測る。

SK31（第90図、PL. 40）

F4グリッドに位置する。SD7を掘り下げた際に壁面に現れたものである。東西方向に1.8mほどを検出した。南北方向については本来の規模を想定できない。底面は平坦ではなく、西側は一部ピット状に落ち込む。

埋土は複雑な堆積を示しているが、全体的に黄褐色粘土粒を顕著に含む明るめの土が主体である。SD7との関係から古代以前と考えられるが、遺物が伴っておらず時期が特定できない。

SK32（第90図、PL. 40）

E4グリッドの南側に位置する。長軸1.4m、短軸0.75mの不整楕円形を呈し、深さも0.1m程度と浅い。埋土には炭化物や焼土粒のほかに、小礫が多数含まれていた。



写真8 鍛冶工房域土壌サンプリング実施状況

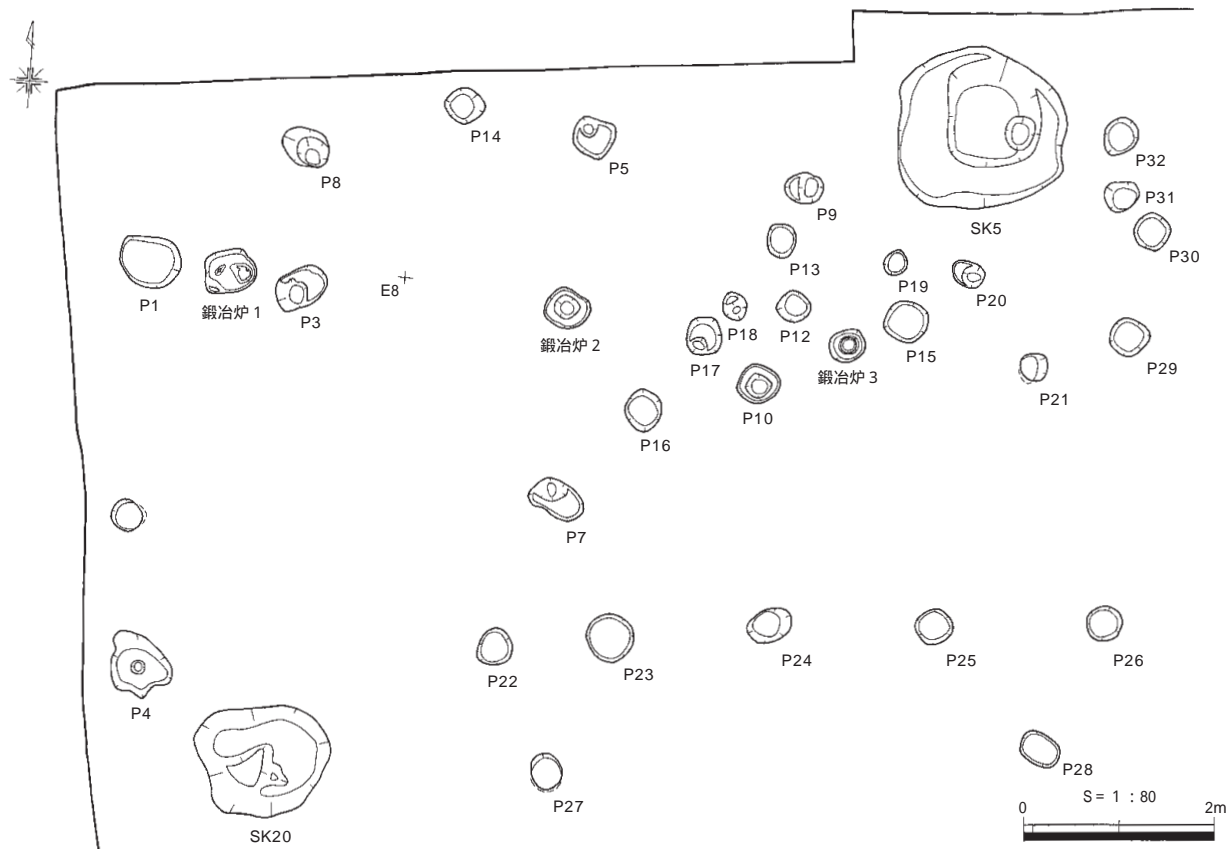
第7節 鍛冶関連遺構の調査成果

(1) 概要

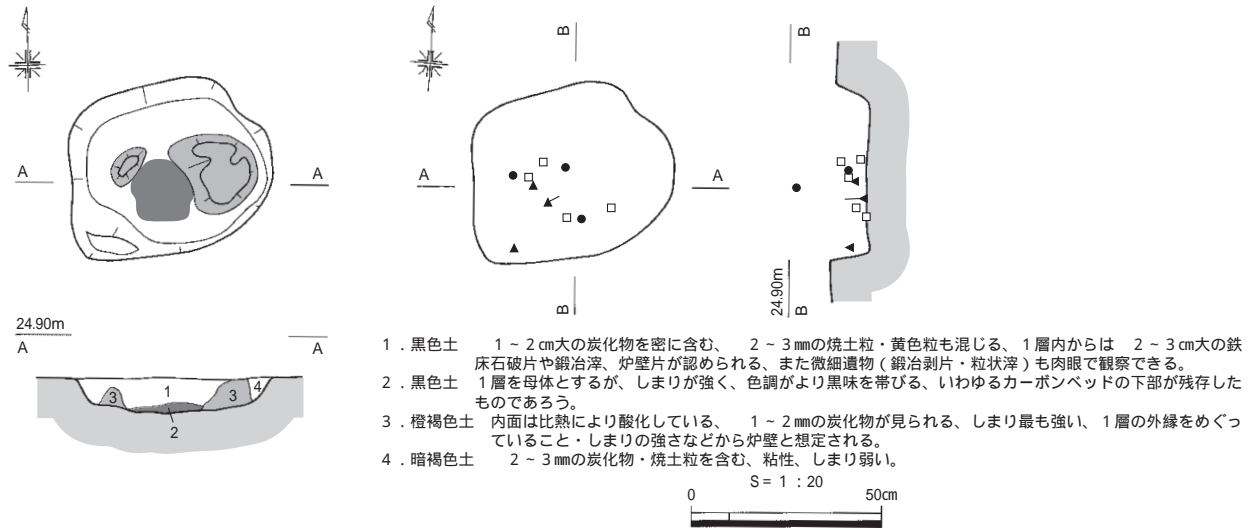
鍛冶関連遺構は、概ね標高24.9～25.0mの調査区北西隅に位置する。鍛冶炉3基、廃棄土坑1基、鍛冶関連ピット（柱穴も含む）32基である。これらの関連遺構のまとまりを鍛冶工房域として捉えたい。鍛冶炉は軸を北西-南東に向け3～3.5m間隔でほぼ直線的に並列し、合わせて鍛冶炉周辺には、微細遺物を多量に包含した関連ピットが点在している。工房域の北東隅にはSK5があり、鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状滓・鍛造剥片・石鎚・鉄床石・砥石などが多量に廃棄されていた。鍛冶関連ピットは、足入れ穴や鉄床石設置穴など操業に直接関連すると思われるものと、工房施設に伴う柱穴などを一括している。結果的に、いくつかの柱穴と考えられるピットは確認されたが、建物などを復元するに至らなかった。工房域から離れて、調査区西南隅には、SD8が北西-南東方向を主軸として延びているが、溝内部から多量の鉄滓を中心とした鉄関連遺物が出土している。いわば排滓場としての役割を担っていたものと考えられる。さらに工房域から南東へ約30mの地点に廃棄土坑SK14が位置する。本遺構からは、数こそ少ないが鍛冶滓・羽口・鉄床石などが出土した。土壌サンプリングの選別結果では微細遺物が微量回収された。

(2) 調査の経過と方法

まず、遺構検出作業の段階でSK5とSK14が確認された。SK5は大形礫の上部が露出し、須恵器大甕の破片がそれを取り囲むように出土しはじめたため、精査を行った。その結果、鍛冶滓が集積した状況や大形礫が鉄床石であることが判明したため、鉄滓や鍛冶具などは原位置を記録するよう努め、周辺土壌のサンプリングを実施した。SK14は当初通常の廃棄土坑として捉えていたが、大形礫が鉄



第91図 鍛冶関連遺構配置図



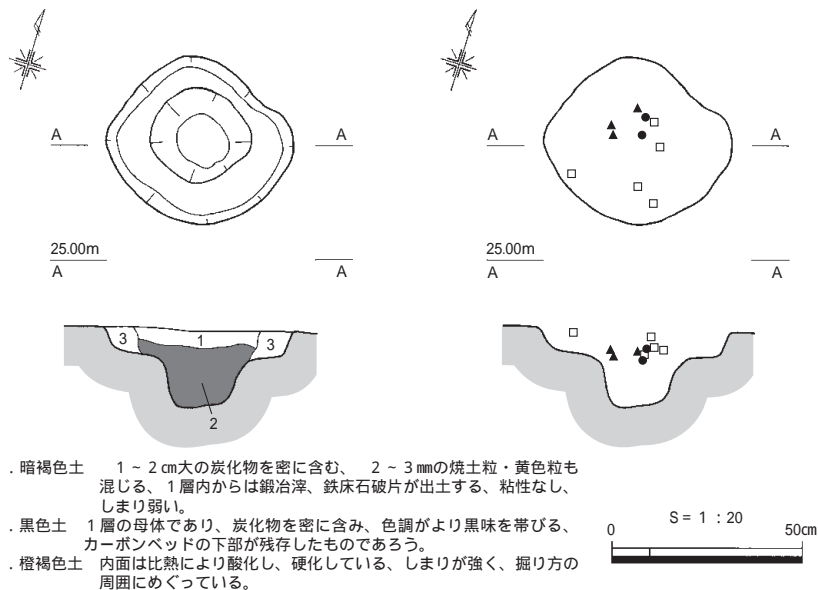
第92図 鍛冶炉 1

床石であることが判り、25cmメッシュを組んで底面直上の土壌サンプリングを行った。鍛冶工房域は、遺構検出作業の段階で微細な炭化物密集範囲が点々と確認され、小形の鍛冶滓などもみられたことから、テストサンプルを実施した結果、粒状滓・鍛造剥片が回収された。その後、ピットの精査を行ったところ3基の鍛冶炉が確認され、周囲のピット群も含めて鍛冶関連遺構として判断した。この過程で、たたら研究会委員の穴澤義功氏に現地指導を賜り、鍛冶関連遺構の調査法などについてご教示いただいている。遺構の調査・記録が終了した後、工房域の4×8m範囲を1×1mに分割し、東西ラインにアラビア数字1～8、南北ラインにアルファベットZ・A～Cを付し、さらに1m区画内を25cmの小区画（ ）に分割して土壌サンプルを採取・水洗し微細遺物を回収した。

(3) 鍛冶炉

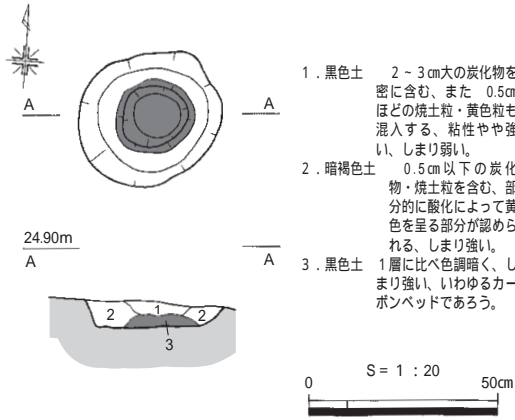
鍛冶炉 1（第92図、巻頭図版2、PL. 48）

E 8 グリッド、最も西隅に位置する鍛冶炉である。長軸53cm、短軸45cm、検出面からの深さ 8 cm



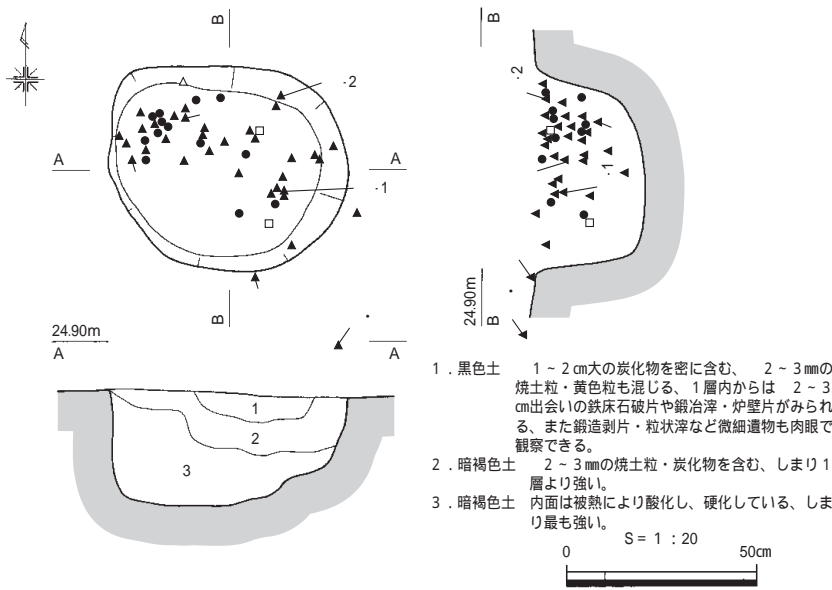
第93図 鍛冶炉 2

第3章 調査の成果



第94図 鍛冶炉3

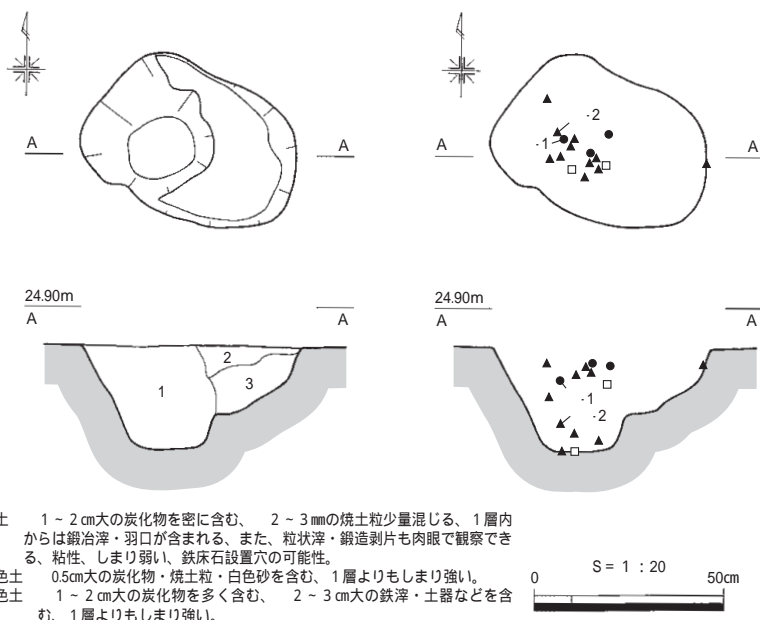
の不整円形を呈している。断面形態は、浅い掘り鉢状であり、中心部に2層炭炭層が、東西の周縁部に固くしまった3層粘質土（炉壁）が堆積していた。掘り方底面は、ほぼ平坦であり標高24.7mを測る。1層黒色土は径1～2cm大の炭化物を密に含み、鉄床石破片や炉壁を含んでいた。2層は1層よりも色調が暗く、よりしまりが強い。18×15cmの楕円形で、厚さは約2cmである。いわゆるカーボンベッドであろう。3層は橙褐色土で、被熱により内面は酸化し、しまりが最も強いことから、炉壁と考えた。炉壁は東西に島状に残っていたが、本来は全周していた可能性がある。



第95図 P1

鍛冶炉2（第93図、PL. 48）

E7グリッド、鍛冶炉1・3の中間に位置する。長軸50cm、短軸44cm、検出面からの深さ20cmの不整円形を呈している。断面形態は、段状となり中心部は径26×24cm、テラス部からの深さが10cmである。1層は径1～2cm大の炭化物を密に含み、3mm以下の焼土粒・黄色粒がみられた。また、鍛冶滓や鉄床石破片なども出土している。2層黒色土はより多くの炭化物を含んでいることから、カーボンベッドの可能性もある。3層橙褐色土は、被熱により酸化・硬化している。2段状の深度のある鍛冶炉は、他の鍛冶炉の構造と異なるが、本遺跡からは大形の鍛冶滓や二段椀形鍛冶滓などがみられることから、それらはこのような炉から形成されたのかもしれない。



第96図 P3

鍛冶炉3（第94図、PL. 48・49）

E7グリッド、鍛冶炉2から東約3mの地点に位置する。長軸39cm、短軸35cm、検出面からの深さ7cmの不整円形を呈してい

る。断面形態は掘り鉢状であり、ほぼ中心部に円盤状の粉炭層が認められる。埋土は3層に分かれ、1層黒色土は径1～2cm大の炭化物を密に含み、3mm以下の焼土粒・黄色粒を含んでいる。2層黒色土は1層よりも炭化物が密に入りしまりが強い。カーボンベッドであろう。3層暗褐色土は5mm以下の炭化物や焼土粒が混入し、部分的に黄色を呈している。鍛冶炉3からは、ほとんど遺物が出土せず、土壌サンプルからもわずかな量の微細遺物しか回収されなかった。

(4) 鍛冶関連ピット

P1 (第95図、表57、PL. 49)

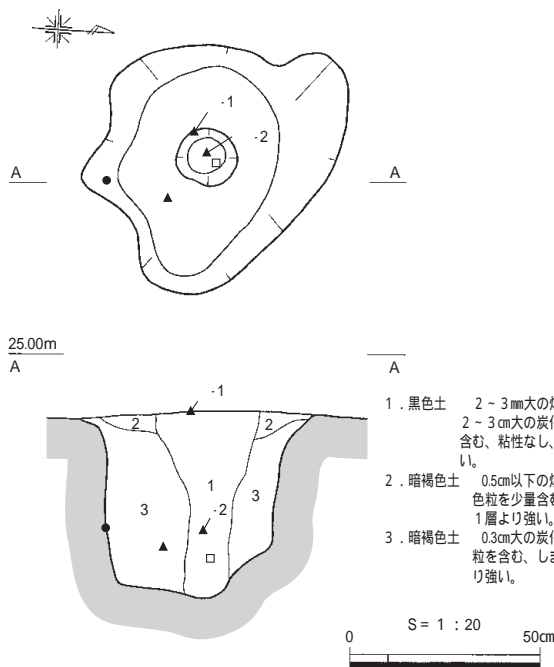
E8グリッド、鍛冶炉1西隣に位置する。長軸63cm、短軸54cm、検出面からの深さ30cmの不整楕円形を呈している。断面形態は桶状であり、埋土は3層に分かれる。1層黒色土は、径2cm以下の炭化物、径3mm以下の焼土粒・黄色粒を密に含んでいる。1・2層中から鍛冶滓、再結合滓、鉄製品、鉄床石破片などの多くの鍛冶関連遺物が出土している。とくに粒状滓・鍛造剥片の量は鍛冶工房域で最も多く、わずか25cmほどしか離れていない鍛冶炉1とP3も含めてセットとして考えるべきであろう。

P3 (第96図、表57、PL. 49)

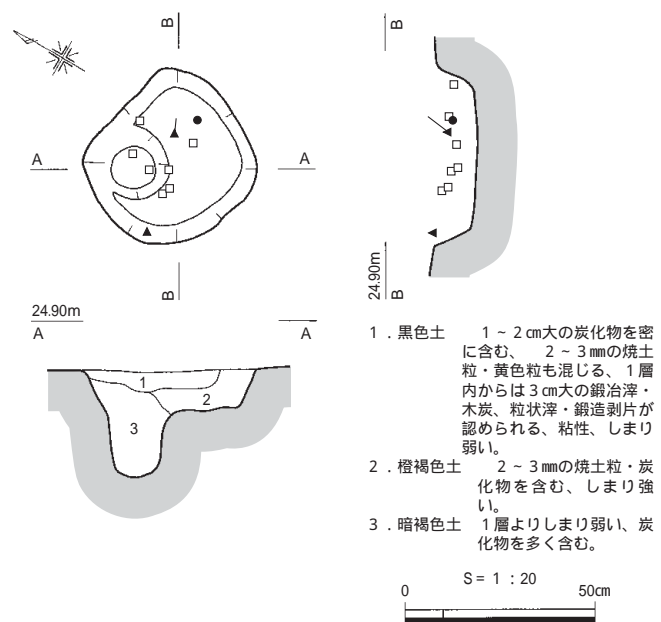
E8グリッド、鍛冶炉1の東約23cmに位置する。長軸56cm、短軸43cm、検出面からの深さ27cmの不整楕円形である。断面形態は段状であり、径17×15cmの小ピット状の底面とテラスをもつ。埋土は1層黒色土と2・3層暗褐色土に分かれ、主に1層中から鉄製品、鍛冶滓、鉄床石破片、羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。また、粒状滓・鍛造剥片などの微細遺物も多く回収された。鍛冶炉との位置関係や形態などから鉄床石設置穴の可能性が想定される。

P4 (第97図、表57)

E8グリッド、調査区西端に位置する。平面形は、長軸70cm、短軸65cm、深さ49cmの不整円形である。底面中心部がわずかに窪んでいること(柱当たり)、土層断面から柱痕が確認されたことなどから柱穴と考えられる。埋土中から、椀形鍛冶滓1・鍛冶滓2や鉄床石破片なども出土している。

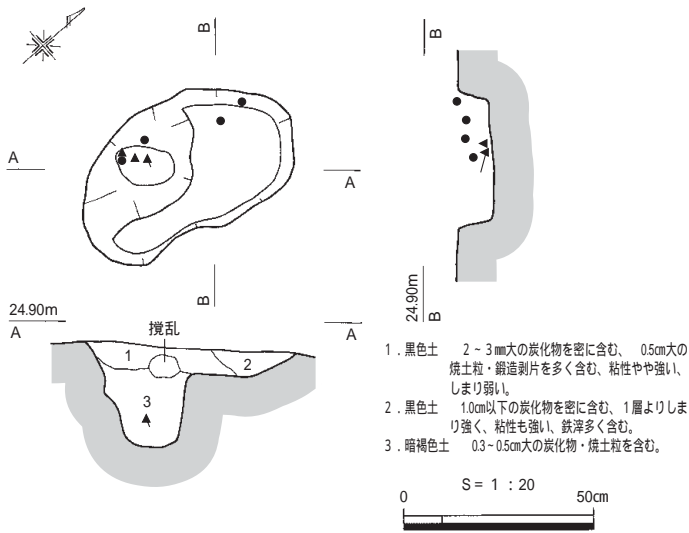


第97図 P4



第98図 P5

第3章 調査の成果



第99図 P7

1. 黒色土 2~3mm大の炭化物を密に含む、0.5cm大の焼土粒・鍛造剥片を多く含む、粘性やや強い、しまり弱い。
2. 黒色土 1.0cm以下の炭化物を密に含む、1層よりしまり強く、粘性も強い、鉄滓多く含む。
3. 暗褐色土 0.3~0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む。

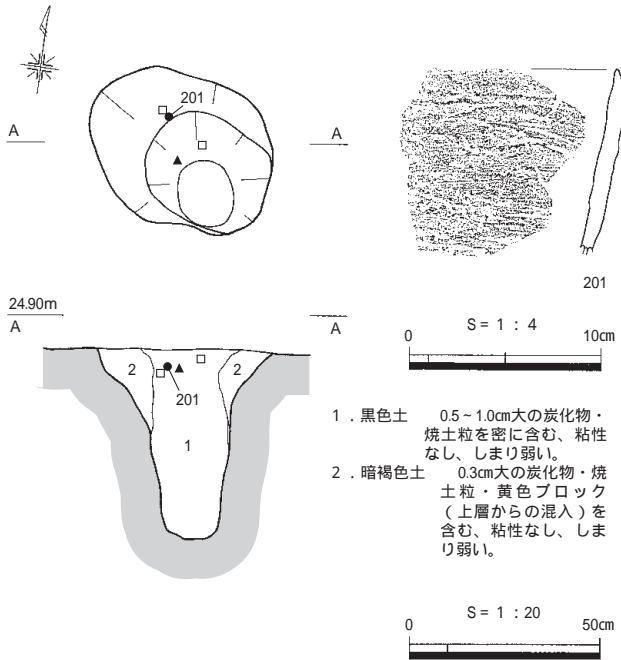
P5 (第98図、表57、PL. 49)

D7グリッド、鍛冶炉2から北1.4mに位置する。長軸47cm、短軸46cm、深さ27cmの不整形円形を呈する。断面形は段状で、西側に径12cmほどの小ピットを有している。1・2層中から椀形鍛冶滓や釘、さらに鉄床石破片が多く出土している。

P7 (第99図、表53・54、PL. 49)

E7グリッド、鍛冶炉2から南約1.5mの地点に位置する。平面形は、長軸62cm、短軸37cm、深さ27cmの不整形楕円形を呈している。断面形は段状で、西側に径15×10cmの小ピットが認められる。埋土は3層に分かれ、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄塊系遺物などが出土している。また、土壌サンプルからは890gもの粒状滓や鍛造剥片などの微細遺物が回収された。

P8 (第100図、表57)



第100図 P8

1. 黒色土 0.5~1.0cm大の炭化物・焼土粒を密に含む、粘性なし、しまり弱い。
2. 暗褐色土 0.3cm大の炭化物・焼土粒・黄色ブロック(上層からの混入)を含む、粘性なし、しまり弱い。

P8 (第100図、表57)

D8グリッド、P3から北約1mの地点に位置する。平面形は、不整形楕円形を呈し、長軸53cm、短軸40cm、深さ48cmを測る。底径は27×14cmであり、その形状から柱穴と想定される。埋土上層から、鍛冶滓や鉄床石破片が若干出土している。

P9 (第101図、表53・54、PL. 49)

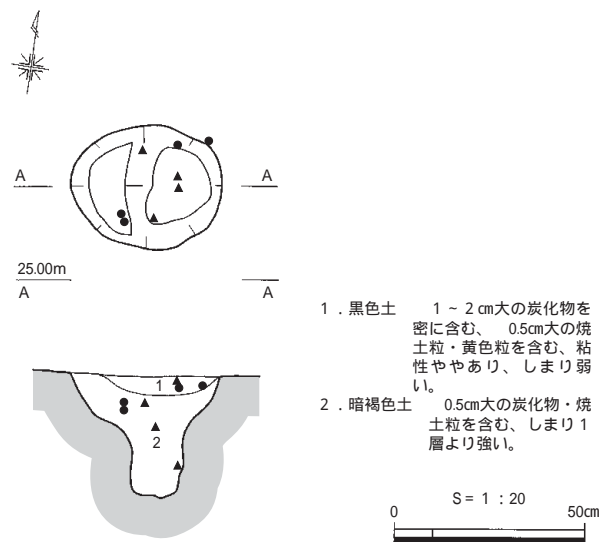
D7グリッド、SK5から西約0.8mの地点に位置する。平面形は、長軸40cm、短軸34cm、深さ39cmの楕円形を呈している。断面形は段状で、底面径は19×14cmを測る。埋土は1層黒色土と2層暗褐色土に分かれ、埋土中からは鍛冶滓4点が出土している。

P10 (第102図、表57、PL. 50)

E7グリッド、鍛冶炉3から南西約0.5mの地点に位置する。平面形は円形を呈し、長軸46cm、短軸40cm、深さ45cm、底面径は19×16cmを測る。1層黒色土から鍛冶滓-1、再結合滓-2、鉄床石片などが出土している。

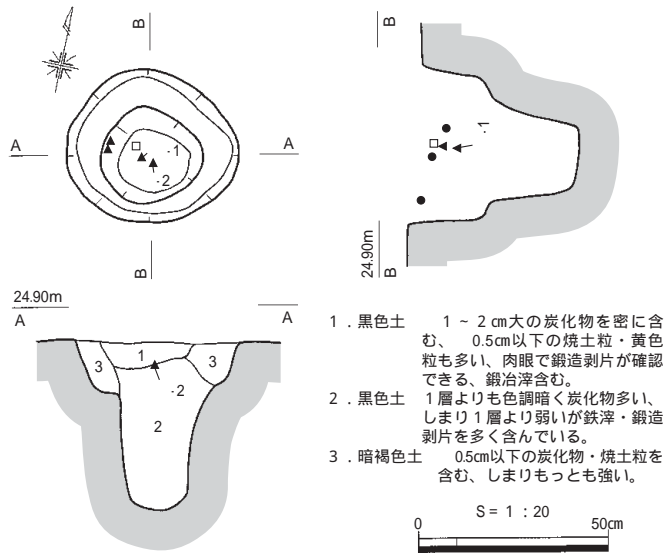
P12 (第103図、表57、PL. 50)

E7グリッド、鍛冶炉3から北西約0.35mの地点に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸35cm、短軸32cm、深さ22cmを測る。ピット中心



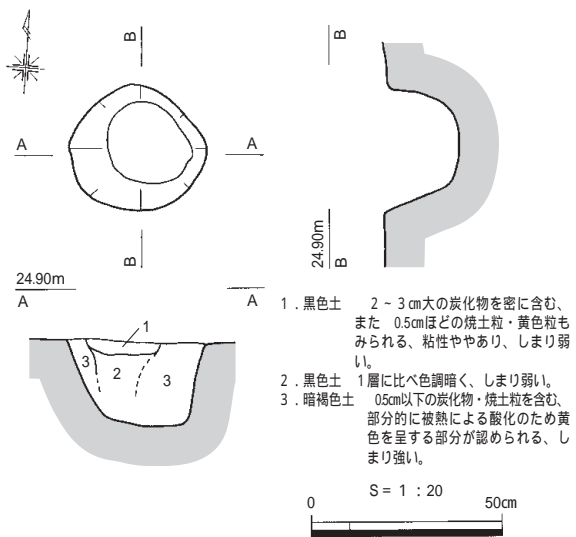
第101図 P9

1. 黒色土 1~2cm大の炭化物を密に含む、0.5cm大の焼土粒・黄色粒を含む、粘性ややあり、しまり弱い。
2. 暗褐色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を含む、しまり1層より強い。



第102図 P10

1. 黒色土 1 ~ 2 cm大の炭化物を密に含む、0.5cm以下の焼土粒・黄色粒も多い、肉眼で鍛造剥片が確認できる、鍛冶滓含む。
2. 黒色土 1層より褐色調暗く炭化物多い、しまり1層より弱い鍛冶滓・鍛造剥片を多く含んでいる。
3. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物・焼土粒を含む、しまりもっとも強い。



第103図 P12

1. 黒色土 2 ~ 3 cm大の炭化物を密に含む、また 0.5cmほどの焼土粒・黄色粒もみられる、粘性ややあり、しまり弱い。
2. 黒色土 1層に比べ褐色調暗く、しまり弱い。
3. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物・焼土粒を含む、部分的に被熱による酸化のため黄色を呈する部分が認められる、しまり強い。

部に堆積する黒色土中に炭化物を多く含んでいたが、鍛冶関連遺物はほとんど回収されていない。

P13 (第104図、表57、PL. 50)

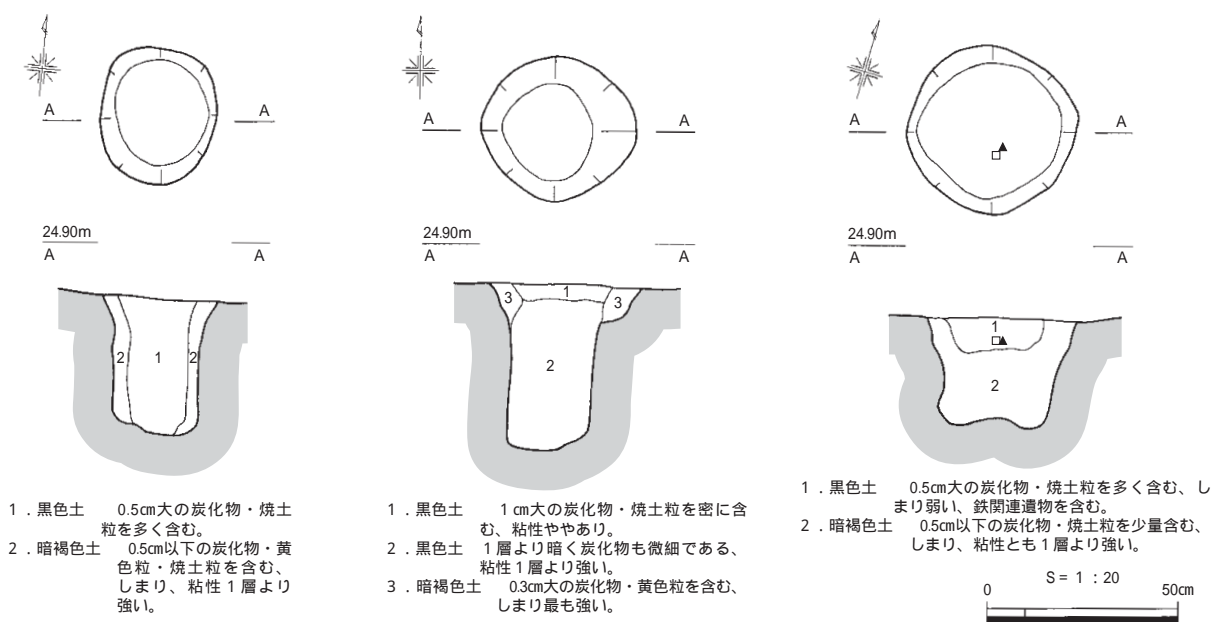
D7グリッド、鍛冶炉3から北西約1mの地点に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸35cm、短軸31cm、深さ36cmを測る。ピット内から鍛冶関連遺物はほとんど回収されていない。

P14 (第104図、表57、PL. 50)

D7グリッド、鍛冶炉2から北西約2mの地点に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸42cm、短軸38cm、深さ44cmを測る。ピット内から鍛冶関連遺物はほとんど回収されていない。

P15 (第104図、表57、PL. 50)

D7グリッド、鍛冶炉3から東約0.25mの地点に位置する。平面形は円形を呈し、長軸45cm、短軸43cm、深さ29cmを測る。断面形はタライ形で、埋土中から鍛冶滓(非掲載)や鉄床石が少量出土し



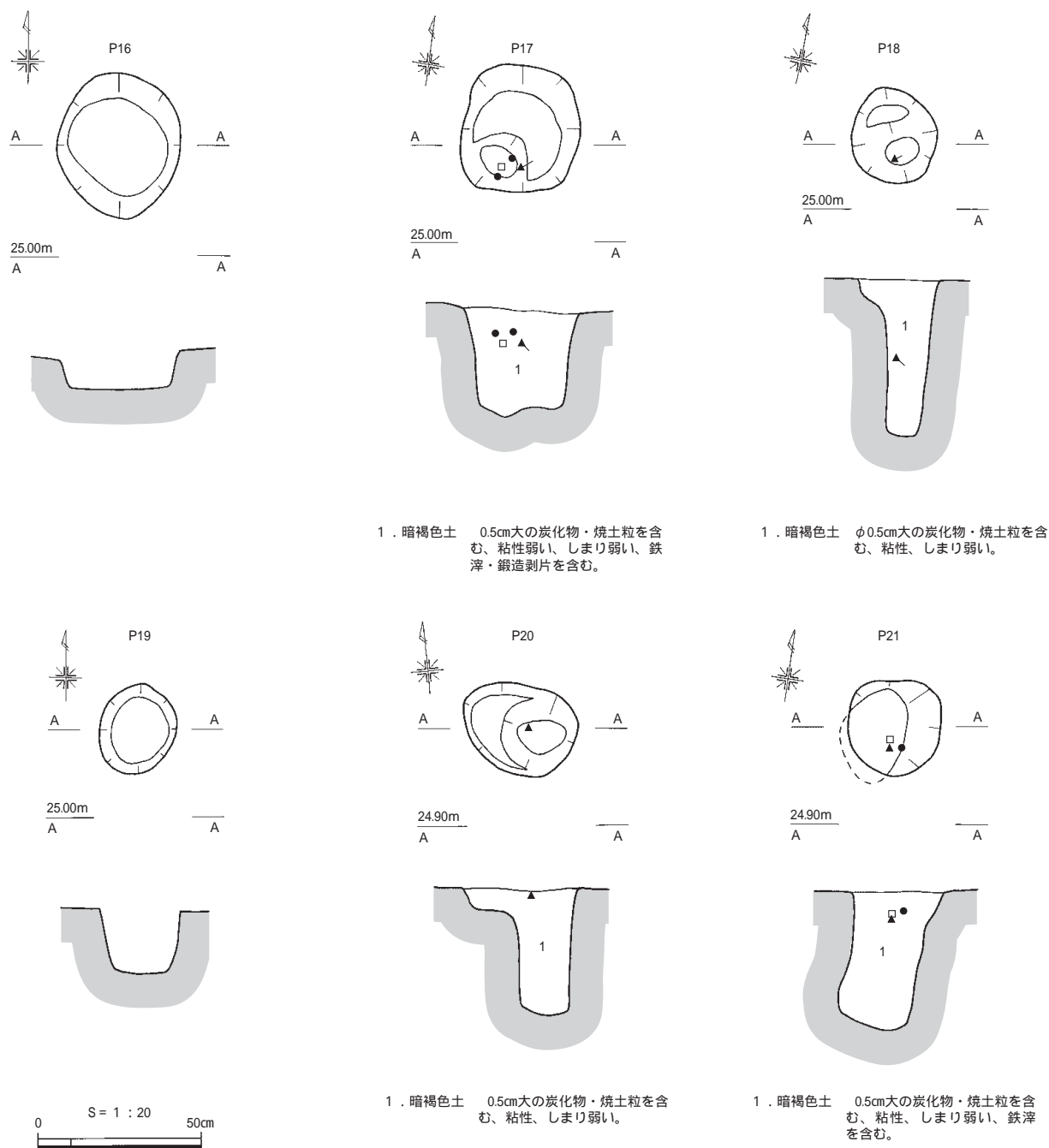
1. 黒色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を多く含む。
2. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物・黄色粒・焼土粒を含む、しまり、粘性1層より強い。

1. 黒色土 1 cm大の炭化物・焼土粒を密に含む、粘性ややあり。
2. 黒色土 1層より暗く炭化物も微細である、粘性1層より強い。
3. 暗褐色土 0.3cm大の炭化物・黄色粒を含む、しまり最も強い。

1. 黒色土 0.5cm大の炭化物・焼土粒を多く含む、しまり弱い、鉄関連遺物を含む。
2. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物・焼土粒を少量含む、しまり、粘性とも1層より強い。

第104図 P13・14・15

第3章 調査の成果



第105図 P16・17・18・19・20・21

ている。

P16 (第105図、表53・54、PL. 50)

E7グリッド、鍛冶炉2から南東約0.9mの地点に位置する。平面形は円形を呈し、長軸45cm、短軸38cm、深さ11cmを測る。断面形はタライ形である。鍛冶関連遺物は、ほとんど出土していない。

P17 (第105図、表53・54)

E7グリッド、鍛冶炉2・3の中間に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸39cm、短軸37cm、深さ33cmを測る。断面形はタライ形で、埋土は1層である。埋土中から鍛冶滓が出土している。

P18 (第105図、表53・54)

E7グリッド、鍛冶炉2・3のほぼ中間に位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸29cm、短軸

25cm、深さ48cmを測る。埋土中位から楕円形鍛冶滓 が出土している。

P19 (第105図、表53・54)

D7グリッド、鍛冶炉3から北東約0.65mの地点に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸28cm、短軸23cm、深さ19cmを測る。鍛冶関連遺物は、ほとんど出土していない。

P20 (第105図、表53・54)

D7グリッド、SK5から南約0.55mの地点に位置する。平面形は楕円形、断面形は段状となっている。長軸37cm、短軸27cm、深さ38cmを測る。検出面から鍛冶滓(非掲載)が出土している。

P21 (第105図、表53・54、PL.50)

E7グリッド、鍛冶炉3から東約0.45mの地点に位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸29cm、短軸28cm、深さ43cmを測る。埋土中から鍛冶滓や鉄床石が出土している。

P22 (第106図)

E7グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸39cm、短軸38cm、深さ32cmを測る。

P23 (第106図)

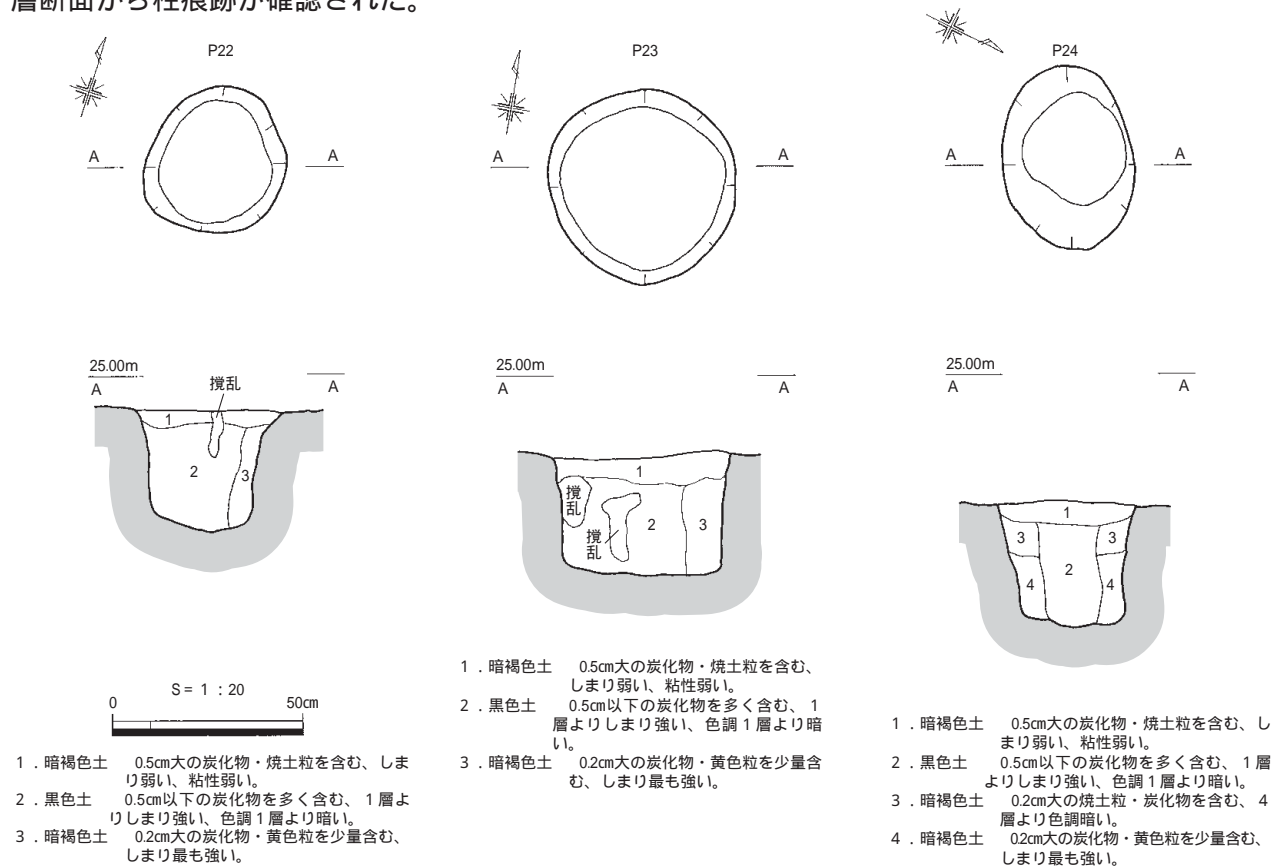
E7グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸52cm、短軸50cm、深さ30cmを測る。

P24 (第106図)

E7グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸49cm、短軸34cm、深さ33cmを測る。土層断面から柱痕跡が確認された。

P25 (第107図)

E7グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長軸39cm、短軸38cm、深さ33cmを測る。土層断面から柱痕跡が確認された。



第106図 P22・23・24

第3章 調査の成果

P26 (第107図)

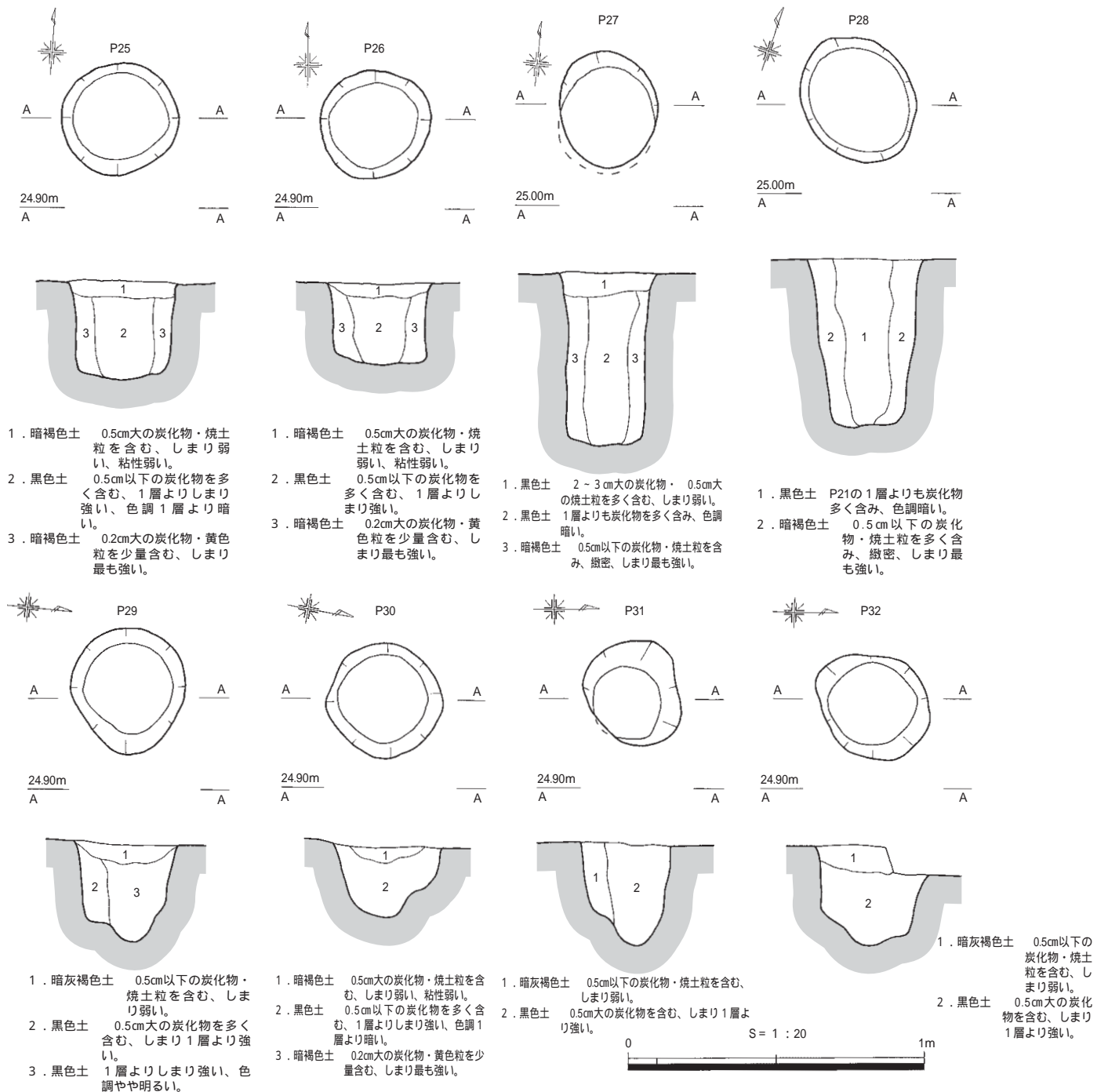
E7グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸37cm、短軸36cm、深さ27cmを測る。土層断面から柱痕跡が確認された。

P27 (第107図)

E7グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸39cm、短軸33cm、深さ58cmを測る。土層断面から柱痕跡が確認された。

P28 (第107図)

E7グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸45cm、短軸37cm、深さ57cmを測る。土層断面から柱痕跡が確認された。



第107図 P25・26・27・28・29・30・31・32

P29 (第107図)

E7グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸42cm、短軸39cm、深さ33cmを測る。底面に柱当たりが確認されている。

P30 (第107図)

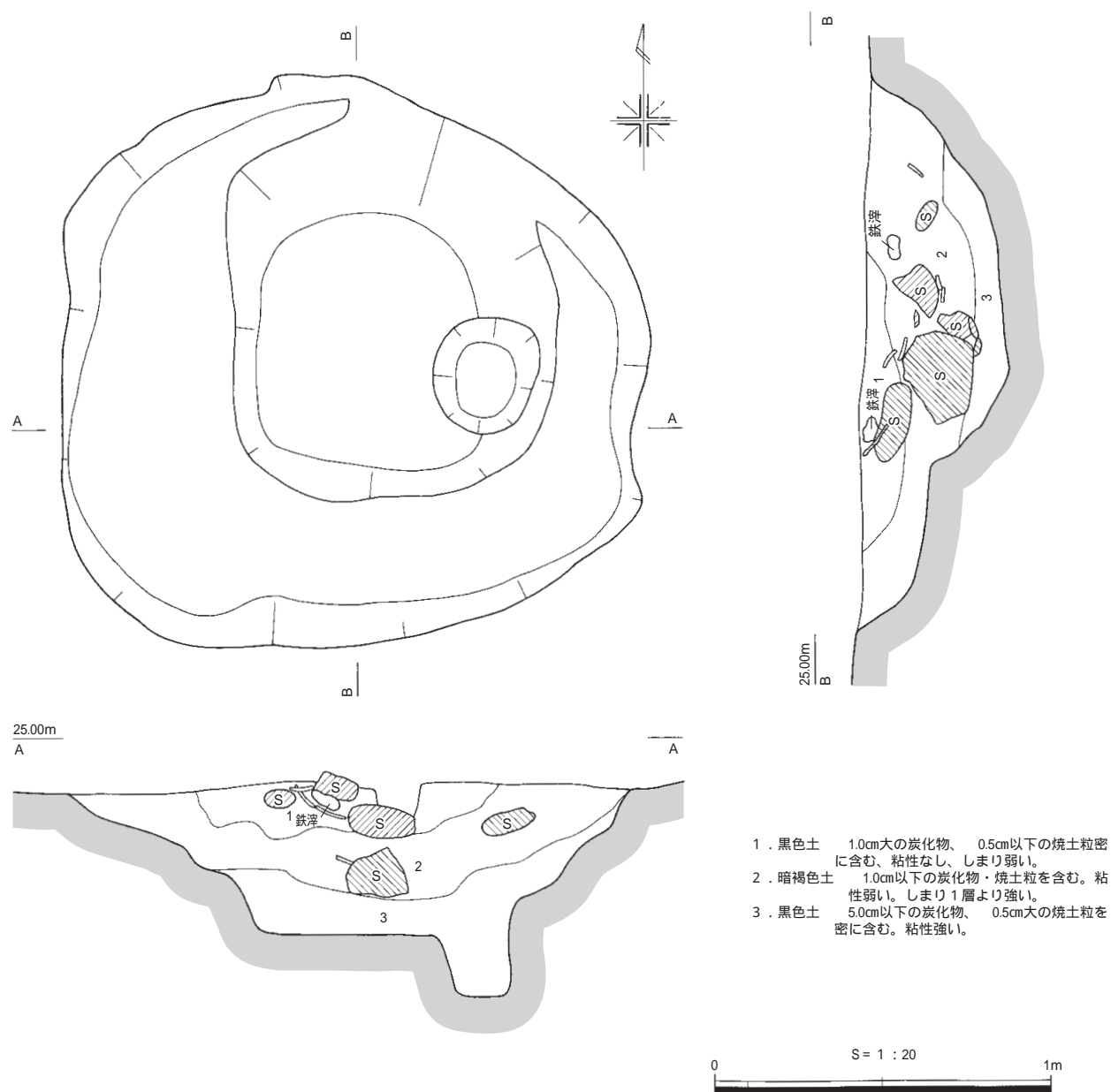
D7グリッド、SK5から南東約1mに位置する。平面形は円形を呈し、径39×39cm、深さ23cmを測る。

P31 (第107図)

D7グリッド、SK5から南東約0.5mに位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸36cm、短軸31cm、深さ34cmを測る。底面に柱当たりが確認された。

P32 (第107図)

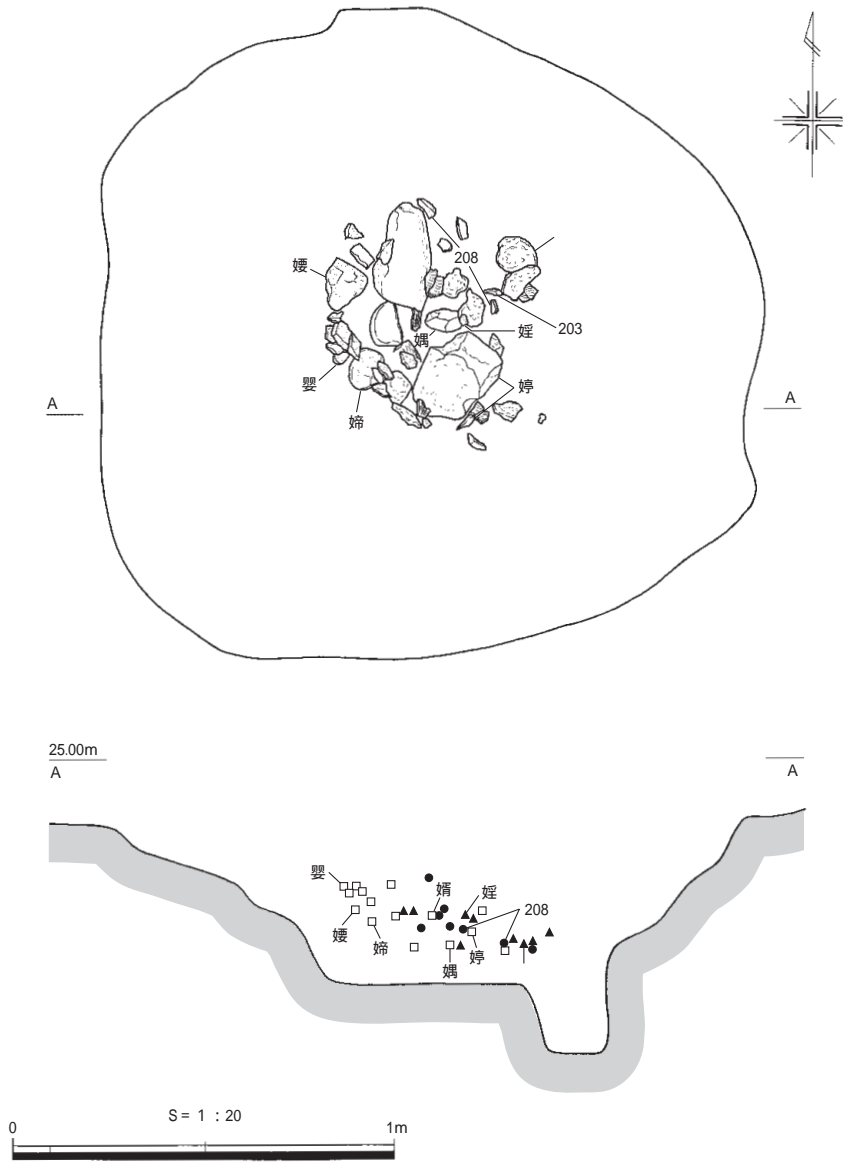
D7グリッド、SK5から東約0.3mに位置する。平面形は不整形円形を呈し、長軸36cm、短軸34cmを測る。



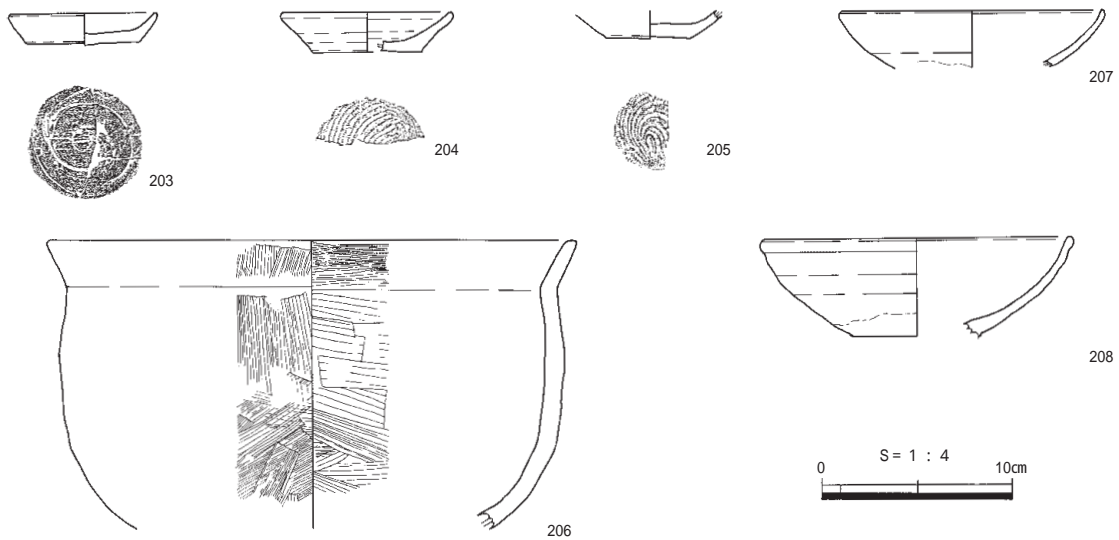
第108図 SK5

状況が伺える。

遺物は、1・2層中から多量の鍛冶関連遺物が出土した。隅丸方形の掘り方に沿っていくつかに分割した須恵器大甕体部破片202を置き、その内部に鉄床石や被熱石、石鎚、砥石、椀形鍛冶滓、鉄塊系遺物など鍛冶関連遺物を廃棄している状況が確認された。202は表面が平行叩き、内面は同心円状当て具の甕体部下半～底部であり、部分的に被熱している箇所が認められ、表面が剥落してしまう破片が多い。また大形礫を素材とする鉄床石や被熱石などは、原形を留めるものではなく、表面にはクラックなどがみられ脆弱であった。その他、生活用具として土師器小皿203・204・205や甕206、白磁碗207・208なども出土している。203は体部が直線的に開き、底部径が5.9cmと比較的大きい。また、底部は回



第111図 SK5 遺物出土状況(2)



第112図 SK5 出土遺物(2)

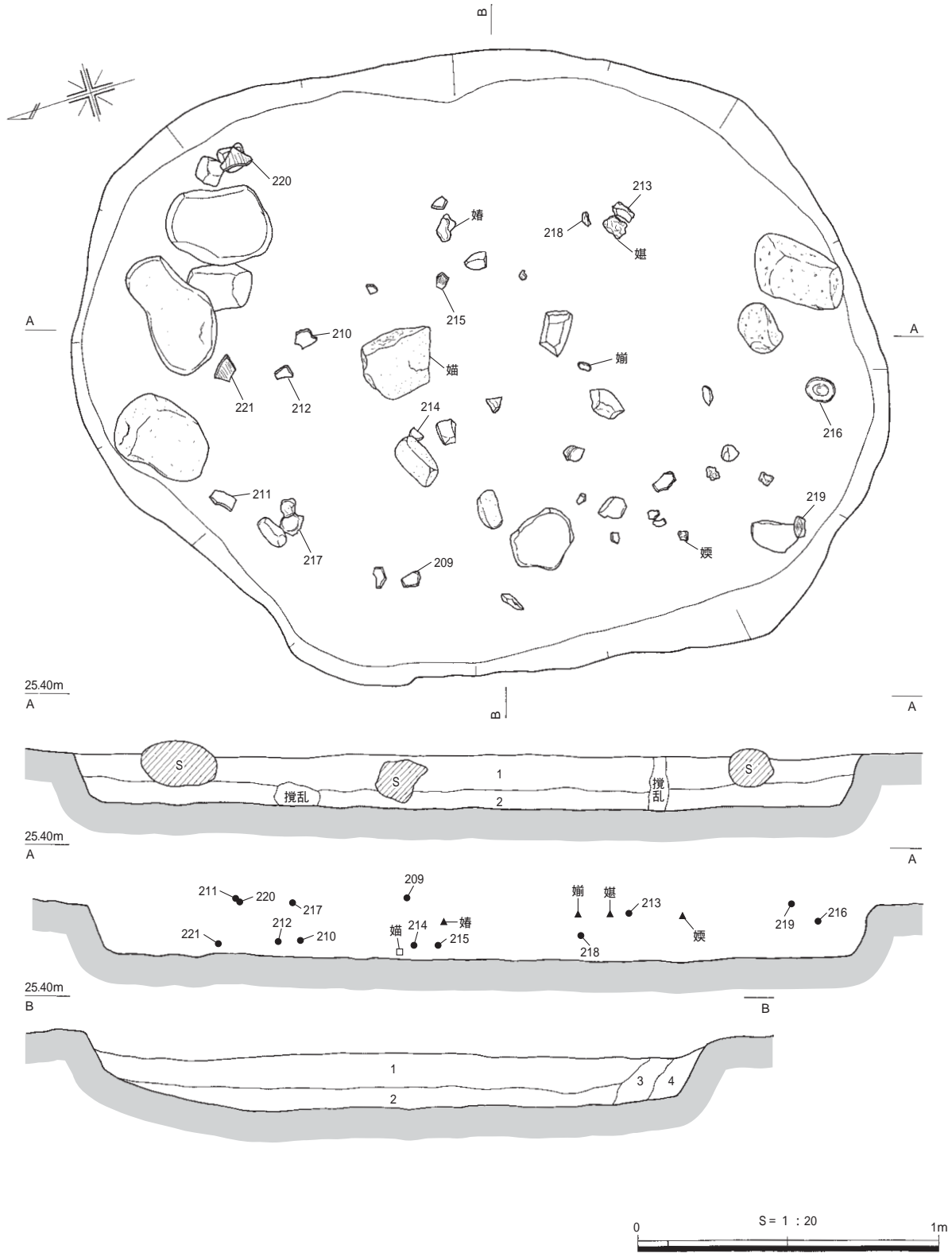
第3章 調査の成果

表53 SK5 鍛冶関連微細遺物地点別一覧表

出土位置	粒状滓 (g)		鍛造剥片 (g)				粒状滓・鍛造剥片合計 (g)	鉄床石 (g)	炭化物 (g)	炭化材 (g)	羽口 (g)	その他の微細遺物合計 (g)	微細遺物合計 (g)
	~ 0.8mm	合計	~ 0.8mm	0.8 ~ 2.0mm	2.0mm ~	合計							
メッシュ No.12	0.1	0.1	0.6	0.1	0.0	0.7	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8
メッシュ No.20	0.2	0.2	8.8	5.2	6.9	20.9	21.1	0.4	0.0	0.2	0.0	0.6	21.7
メッシュ No.21	0.2	0.2	1.6	0.7	3.0	5.3	5.5	0.2	0.2	0.4	0.0	0.8	6.3
メッシュ No.26	0.1	0.1	1.7	0.5	0.4	2.6	2.7	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	2.9
メッシュ No.27	0.3	0.3	1.7	1.1	0.8	3.6	3.9	3.2	0.1	0.6	0.0	3.9	7.8
メッシュ No.28	0.3	0.3	4.2	2.2	11.3	17.7	18.0	12.4	0.2	0.6	0.3	13.5	31.5
メッシュ No.29	1.5	1.5	9.9	9.0	13.5	32.4	33.9	8.5	0.8	1.3	2.1	12.7	46.6
メッシュ No.30	0.2	0.2	1.9	1.6	1.0	4.5	4.7	0.9	0.2	0.4	0.0	1.5	6.2
メッシュ No.33	0.1	0.1	0.7	0.1	0.0	0.8	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9
メッシュ No.34	0.1	0.1	1.4	0.1	0.0	1.5	1.6	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.7
メッシュ No.35	0.3	0.3	4.6	1.6	1.7	7.9	8.2	9.5	0.1	0.2	1.6	11.4	19.6
メッシュ No.36	0.6	0.6	8.0	8.1	21.4	37.5	38.1	100.5	0.3	0.7	2.4	103.9	142.0
メッシュ No.37	0.2	0.2	21.9	3.5	8.1	33.5	33.7	40.2	0.3	1.3	0.6	42.4	76.1
メッシュ No.38	0.2	0.2	14.6	3.5	8.3	26.4	26.6	9.1	0.1	1.0	11.7	21.9	48.5
メッシュ No.39	0.1	0.1	2.9	0.9	1.1	4.9	5.0	1.3	0.1	0.2	0.0	1.6	6.6
メッシュ No.41	0.1	0.1	0.3	0.1	0.2	0.6	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
メッシュ No.42	0.1	0.1	1.7	0.2	0.5	2.4	2.5	0.2	0.0	0.0	0.0	0.2	2.7
メッシュ No.43	0.1	0.1	2.0	0.9	4.1	7.0	7.1	1.0	0.0	0.1	0.0	1.1	8.2
メッシュ No.44	0.2	0.2	7.4	5.9	33.8	47.1	47.3	7.3	0.1	0.4	1.2	9.0	56.3
メッシュ No.45	0.2	0.2	5.8	3.8	9.6	19.2	19.4	2.3	0.2	0.5	0.0	3.0	22.4
メッシュ No.46	0.1	0.1	6.8	4.0	3.0	13.8	13.9	2.3	0.1	0.8	0.0	3.2	17.1
メッシュ No.52	0.1	0.1	0.7	0.1	0.1	0.9	1.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.1
メッシュ No.53	0.1	0.1	0.2	0.1	0.0	0.3	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4
メッシュ No.55	0.1	0.1	0.6	0.2	0.3	1.1	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
一括	0.9	0.9	59.1	23.9	89.3	172.3	173.2	11.7	0.2	1.8	5.2	18.9	192.1
グリッド合計	6.5	6.5	169.1	77.4	218.4	464.9	471.4	211.0	3.1	10.8	25.1	250.0	721.4

表54 SK5 出土土器観察表

遺物 No.	遺構層位	器種	口径 (cm) 器高 (cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo.
202	SK5埋土	須恵器 甕	33.8	体部~底部 1/4	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具	径5mm以下の砂粒	外面：橙~明赤褐色 内面：明赤褐色	堅緻	被熱痕	
203	SK5埋土	土師器 皿	7.7 1.6	口縁~底部 4/5	外面：口縁~体部回転ナデ、底部回転ヘラ切 内面：口縁~底部回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：黄橙色	良好		4208・4621
204	SK5埋土	土師器 皿	8.9 2.1	口縁~底部 1/3	外面：口縁~体部回転ナデ、底部回転糸切 内面：口縁~底部回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：明黄褐色	良好		3392・4206
205	SK5埋土	土師器 皿	4.4(底) 1.4	体部~底部 1/3	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 内面：回転ナデ	径1mm以下の灰色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	良好	外面ス ス付着	1001
206	SK5埋土	土師器 甕	27.2 15.2	口縁~体部 1/5	外面：口縁~体部ハケ 内面：口縁~体部ハケ・指オサエ	径3mm以下の白色砂粒	外面：灰黄色 内面：にぶい黄色	良好		3159・3160・3398・ 3401・3403・3407・4225
207	SK5埋土	白磁 碗	13.9 3.0	口縁~体部 破片	外面：口縁~体部軸、体部下半露胎 内面：口縁~体部軸	砂粒なし	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		5314
208	SK5埋土	白磁 碗	16.2 5.3	口縁~底部 1/5	外面：口縁部玉縁、体部下半~高台部露胎 内面：口縁~底部軸	砂粒なし	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		4222・4620・4644・4645



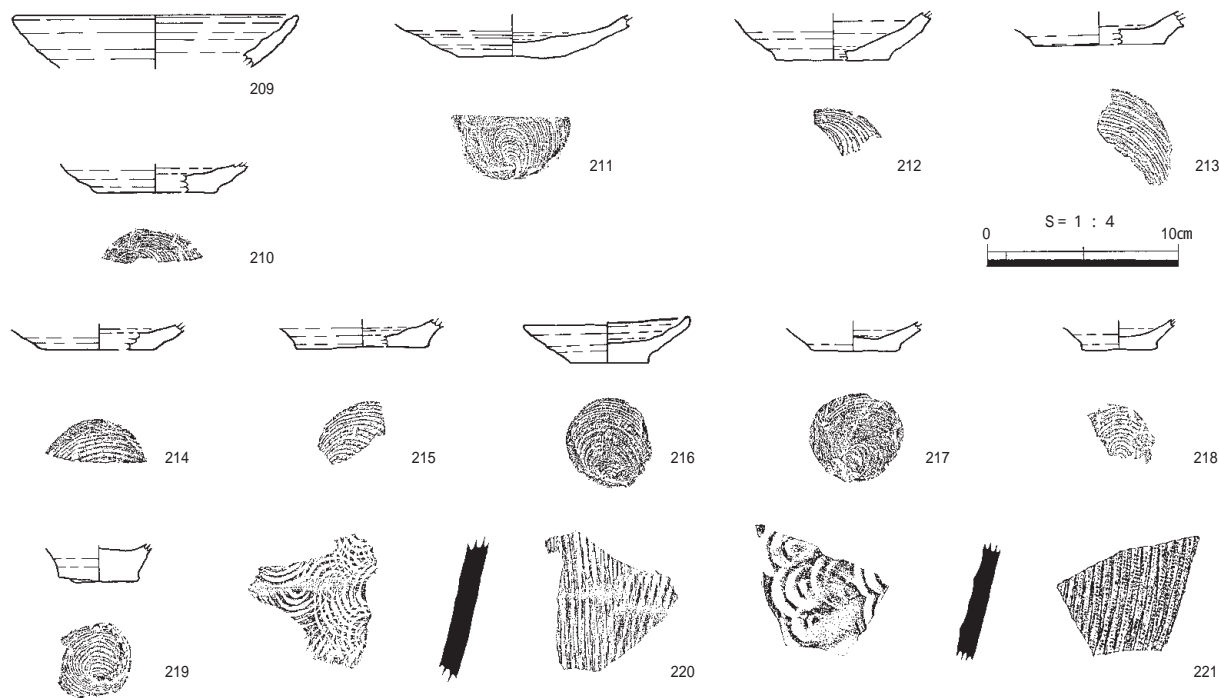
1. 暗褐色土 1cm大の炭化物・0.3cm以下の白色砂粒・赤色粒子を多く含む、粘性なし、しまり弱い。
2. 暗褐色土 0.5cm以下の炭化物を含み、白色砂粒を多く混入している、粘性なし、しまり1層より強い。
3. 暗褐色土 1・2層より色調明るく、緻密、0.3cm以下の炭化物を含み、粘性なし、しまり2層より強い。
4. 暗褐色土 色調最も明るい、0.1cm大の白色砂を多く含む、しまり最も強い、粘性なし。

第113図 SK14

第3章 調査の成果

表55 SK14鍛冶関連微細遺物地点別重量一覧表

出土位置	粒状滓 (g)		鍛造剥片 (g)				粒状滓・鍛造剥片合計 (g)	鉄床石 (g)	炭化物 (g)	炭化材 (g)	羽口 (g)	その他の微細遺物合計 (g)	微細遺物合計 (g)
	~ 0.8mm	合計	~ 0.8mm	0.8 ~ 2.0mm	2.0mm ~	合計							
メッシュ 19	0.0	0.0	0.3	0.1	0.0	0.4	0.4	0.5	0.0	0.0	0.0	0.5	0.9
メッシュ 20	0.0	0.0	1.5	0.1	0.0	1.6	1.6	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	1.7
メッシュ 21	0.0	0.0	0.5	0.1	0.0	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6
メッシュ 30	0.0	0.0	1.1	0.1	0.0	1.2	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
メッシュ 31	0.1	0.0	5.4	0.5	0.0	5.9	5.9	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	6.1
メッシュ 32	0.0	0.0	7.2	0.5	0.2	7.9	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.9
メッシュ 33	0.0	0.0	2.6	0.2	0.0	2.8	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8
メッシュ 34	0.0	0.0	2.4	0.2	0.0	2.6	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6
メッシュ 40	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
メッシュ 41	0.0	0.0	1.3	0.1	0.0	1.4	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4
メッシュ 42	0.1	0.1	2.7	0.4	0.1	3.2	3.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3	3.6
メッシュ 43	0.1	0.0	1.6	0.1	0.0	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
メッシュ 44	0.0	0.0	3.0	0.2	0.1	3.3	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
メッシュ 45	0.1	0.1	11.8	1.2	0.0	13.0	13.1	0.0	0.1	0.2	0.0	0.3	13.4
メッシュ 46	0.1	0.1	6.6	0.7	0.1	7.4	7.5	0.0	0.1	0.2	0.0	0.3	7.8
メッシュ 47	0.0	0.0	0.8	0.1	0.1	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
メッシュ 52	0.1	0.0	0.4	0.1	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
メッシュ 53	0.0	0.0	0.6	0.1	0.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
メッシュ 54	0.0	0.0	0.7	0.1	0.0	0.8	0.8	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.9
メッシュ 55	0.0	0.0	1.0	0.1	0.9	2.0	2.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	2.1
メッシュ 56	0.1	0.0	1.9	0.1	0.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0
メッシュ 57	0.0	0.0	2.3	0.1	0.0	2.4	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4
メッシュ 58	0.1	0.1	2.5	0.1	0.0	2.6	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7
メッシュ 59	0.0	0.0	2.0	0.1	0.0	2.1	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1
メッシュ 63	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.2	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.3
メッシュ 64	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0		0.0	0.0	0.5
メッシュ 65	0.0	0.0	0.3	0.1	0.1	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
メッシュ 66	0.1	0.1	7.7	1.4	0.1	9.2	9.3	0.0	0.1	0.5	0.0	0.6	9.9
メッシュ 67	0.1	0.1	1.9	0.2	0.0	1.9	2.0	0.3	0.1	0.1	0.0	0.5	2.5
メッシュ 68	0.0	0.0	2.0	0.2	0.0	2.2	2.2	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	2.5
メッシュ 69	0.0	0.0	1.5	0.1	0.0	1.6	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6
メッシュ 70	0.0	0.0	2.6	0.2	0.0	2.8	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8
メッシュ 71	0.1	0.1	3.3	0.2	0.0	3.5	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6
メッシュ 75	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
メッシュ 76	0.1	0.1	2.2	0.5	0.2	2.9	3.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	3.2
メッシュ 77	0.1	0.1	9.0	2.0	0.2	11.2	11.3	0.0	0.1	0.6	0.4	1.1	12.4
メッシュ 78	0.1	0.1	1.3	0.2	0.0	1.5	1.6	0.1	0.0	0.1	0.0	0.2	1.8
メッシュ 79	0.1	0.1	1.8	0.2	0.0	2.0	2.1	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	2.3
メッシュ 80	0.0	0.0	1.4	0.2	0.0	1.6	1.6	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	1.8
メッシュ 81	0.1	0.0	2.0	0.2	0.1	2.3	2.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.3	2.6
メッシュ 82	0.0	0.0	2.5	0.1	0.0	2.6	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6
メッシュ 83	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	1.3	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3
メッシュ 87	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
メッシュ 88	0.1	0.0	2.6	0.3	0.2	3.1	3.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	3.6
メッシュ 89	0.1	0.1	2.9	0.5	2.3	5.7	5.8	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	6.0
メッシュ 90	0.0	0.0	2.0	0.3	0.2	2.5	2.5	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	2.6
メッシュ 91	0.1	0.1	0.9	0.1	0.1	1.1	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
メッシュ 92	0.1	0.1	0.9	0.1	0.3	1.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4
メッシュ 93	0.0	0.0	1.2	0.1	0.0	1.3	1.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	1.5
メッシュ 94	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
メッシュ 95	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4
メッシュ 99	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	0.5
メッシュ 100	0.0	0.0	0.9	0.2	0.1	1.2	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
メッシュ 101	0.0	0.0	0.9	0.1	0.7	1.7	1.7	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	1.9
メッシュ 102	0.1	0.1	1.2	0.2	0.3	1.7	1.8	0.0	0.0	0.2	0.0	0.2	2.0
メッシュ 103	0.1	0.1	1.4	0.2	1.3	2.9	3.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0
メッシュ 104	0.1	0.1	0.9	0.1	0.0	1.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1
メッシュ 105	0.1	0.1	1.5	0.2	0.0	1.7	1.8	0.0	0.1	0.2	0.0	0.3	2.1
メッシュ 106	0.1	0.1	1.2	0.1	0.0	1.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4
メッシュ 107	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
メッシュ 111	0.1	0.1	1.4	0.2	0.0	1.6	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
メッシュ 112	0.1	0.1	3.7	0.5	0.0	4.2	4.3	0.6	0.0	0.2	0.0	0.8	5.1
メッシュ 113	0.1	0.1	3.1	0.3	0.8	4.2	4.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	4.4
メッシュ 114	0.1	0.1	1.7	0.2	0.1	2.0	2.1	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	2.2
メッシュ 115	0.0	0.0	1.4	0.1	0.0	1.5	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5
メッシュ 116	0.0	0.0	1.4	0.1	0.0	1.5	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5
メッシュ 117	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	1.3	1.3	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.4
メッシュ 118	0.0	0.0	1.1	0.2	0.1	1.4	1.4	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.5
メッシュ 124	0.0	0.0	1.8	0.2	0.1	2.1	2.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	2.2
メッシュ 125	0.0	0.0	1.5	0.1	0.0	1.6	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6
メッシュ 126	0.0	0.0	1.0	0.1	0.0	1.1	1.1	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.2
メッシュ 127	0.1	0.1	1.8	0.2	0.0	2.0	2.1	0.9	0.1	0.3	0.3	1.6	3.7
メッシュ 128	0.1	0.1	0.9	0.1	0.0	1.0	1.1	0.2	0.0	0.1	0.0	0.3	1.4
メッシュ 129	0.0	0.0	1.9	0.1	0.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0
メッシュ 137	0.0	0.0	1.5	0.2	0.0	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
メッシュ 138	0.1	0.1	1.2	0.1	0.0	1.3	1.4	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.5
メッシュ 139	0.0	0.0	0.9	0.1	0.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	1.1
メッシュ 140	0.0	0.0	1.6	0.1	0.0	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
土壌サンプル	0.0	0.0	2.8	0.1	0.5	3.4	3.4	1.6	0.0	1.7	1.8	5.1	8.5
埋土一括	0.1	0.1	3.4	0.2	0.0	3.6	3.7	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	3.8
グリッド合計	2.7	2.7	158.6	17.0	9.3	184.9	187.6	4.3	1.3	7.8	2.8	16.2	203.8



第114図 SK14出土遺物

表56 SK14出土土器観察表

遺物 No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げ
209	SK14埋土	土師器 坏	15.0 2.7	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部回転ナデ 内面：口縁～底部回転ナデ	径4mm以下の白・赤色砂粒	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	良好		1590
210	SK14埋土	土師器 坏	6.6(底) 1.6	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径5mm以下の赤色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	良好		1575
211	SK14埋土	土師器 坏	5.8(底) 2.3	体～底部 破片	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1593
212	SK14埋土	土師器 坏	6.1(底) 2.5	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径2mm以下の白・赤色砂粒	外面：褐色 内面：にぶい褐色	良好		1587
213	SK14埋土	土師器 坏	7.0(底) 1.7	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径4mm以下の白・赤色砂粒	外面：橙色 内面：褐色	良好		1583
214	SK14埋土	土師器 坏	6.0(底) 1.4	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径3mm以下の赤色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		1577
215	SK14埋土	土師器 坏	7.0(底) 1.5	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径4mm以下の白・赤色砂粒	外面：黒褐色 内面：褐色	良好		1586
216	SK14埋土	土師器 皿	8.8 2.4	口縁～底部 1/1	外面：口縁～体部回転ナデ、底面回転系切 内面：口縁～底部回転ナデ、底面回転系切	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		1600
217	SK14埋土	土師器 皿	4.8(底) 1.6	体～底部 1/2	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径5mm以下の赤色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		1592
218	SK14埋土	土師器 皿	4.0(底) 1.6	体～底部 破片	外面：体部回転ナデ、底面回転系切 内面：体部～底部回転ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1584
219	SK14埋土	土師器 柱状高台皿	4.3(底) 2.0	柱状高台部 1/2	外面：台部回転ナデ、底面回転系切 内面：回転ナデ	径1mm以下の赤色砂粒	外面：褐色 内面：褐色	良好		1595
220	SK14埋土	須恵器 甕	- 6.8	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状当て具痕	径1mm以下の白色砂粒	外面：オリーブ灰色 内面：灰オリーブ色	堅緻		1596
221	SK14埋土	須恵器 甕	- 6.0	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：青灰色	堅緻		1594

転ヘラ切りである。204は回転系切痕を残す小皿であり、203に比べ若干器高が高い。205は底部回転系切の小皿であり、体部には油煙が付着する。206は土師器甕で、口縁部が外反し、内外面ハケメ調整を施している。207はやや内湾気味の白磁碗であり、底部は欠損する。208は玉縁の白磁碗であり、体部下半は露胎である。いずれも白磁碗 類に比定される。これらは、比較的短期間に一括廃棄されたものとして捉えることが可能である。

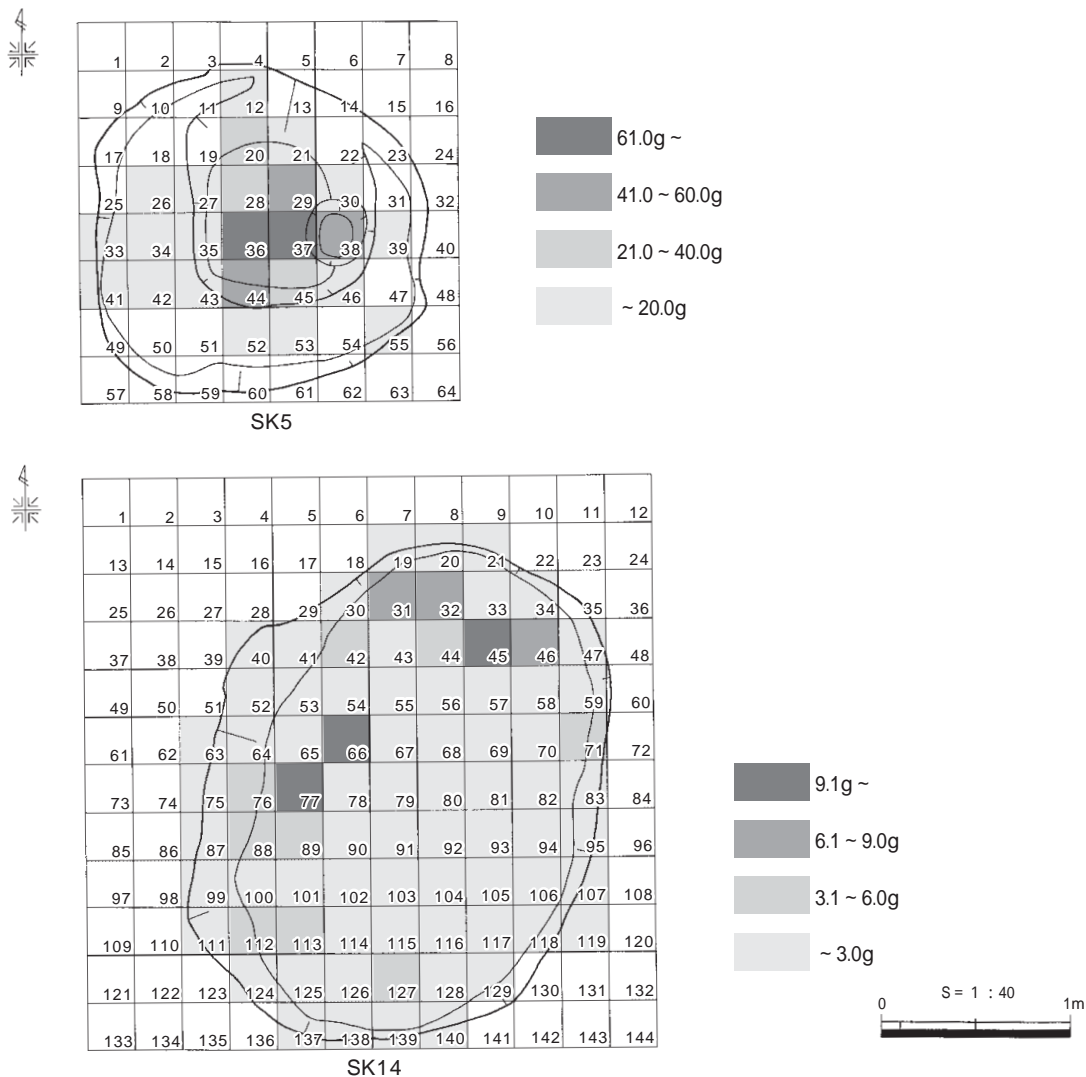
SK14 (第113・114図、表56、PL. 45・46)

調査区東寄り、E3・4グリッドに位置する。南北2.73m、東西2.1m、深さ0.18mの楕円形を呈している。埋土は4層に分かれるが、ほぼ全面に堆積する1・2層暗褐色土は、径1cm以下の炭化物と3mm以下の白色砂粒を多く含み、遺物の多くは1層中から出土している。

第3章 調査の成果

SK14埋土は25cmメッシュ単位で回収し、その解析結果を表55に示している。このなかで、粒状滓・鍛造剥片の総重量は184.9g、鉄床石破片・炭化物などの滓以外の微細遺物を含めると203.8gであり、SK5と比べて著しく低い。このことは、本遺構が鍛冶工房域から離れていること、仮に本遺構付近で鍛冶を行っていたとしてもその操業は小規模であることを示している。出土遺物のなかにおける鍛冶関連遺物の希薄な状況もこのことを裏付けていよう。

鍛冶関連遺物以外の出土遺物を概観する。209～215は土師器坏であり、209以外はいずれも底部破片である。回転口クロ手法を用い、底面に回転系切痕を残している。216～218は土師器小皿であり、216は体部がやや内湾気味である。219は柱状高台皿の高台部破片であり、これら皿類はいずれも回転系切痕が認められる。220・221は須恵器体部破片である。表面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が観察される。



第115図 SK5・14土壌サンプリングメッシュ模式図